

Title	文の意味に関する基礎的研究 : 認識と表現の関連性をめぐって
Author(s)	河上, 誓作
Citation	大阪大学文学部紀要. 1984, 24, p. i-286
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9271
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

文の意味に関する基礎的研究

——認識と表現の関連性をめぐって——

河 上 誓 作

目 次

序 論	ix
1. 後期 Wittgenstein の言語観と Chomsky 理論	ix
2. 本論文の目的と構成	xiii
第一部 意味論的研究	1
第一章 動詞と動作目的語の関係	3
1. 序	3
2. A型文とB型文の対応関係	3
3. 意味の側面	6
4. 変形理論での取り扱い	7
5. 「もの」に見たてられた表現	8
6. 表現機能の分担	8
7. 'v ₁ ' の性質	9
8. 'v ₁ ' の潤色	10
第二章 枠構造動詞とその修飾語の関係	13
1. 序	13
2. 単一動詞の心理構造とその Direct Object との関係	13
3. "S+v+Nv" 構文：B型文	14
4. 潤色された基本的動作語	18
5. Nv とその Adnominal Modifier との関係	23
6. 結論	27
第三章 運動の動詞と Path の表現	31
1. 序	31
2. Stratton (1971) の考察	31
3.1. 考察の順序	35
3.2. 二つのタイプの Path の表現	35
3.3. 運動の動詞と Path の表現	39
3.4. Path の表現と Place の表現	44
4. 結論	45

第四章 「形容詞 + 名詞」構造における内包的特殊化の機能	47
1. 序	47
2. S(X)-N 構造の分析	48
3. 議論の順序	51
4. ‘Red-haired’ に類する複合形容詞	52
4.1. 意味上の制約	52
4.2. 統語規則	56
4.3. 結論	59
5. S(I)の機能	59
5.1. 抽象的な要素における全体と部分	60
5.2. 臨時的複合形容詞とS(I)	61
6. 二種の概念体系	62
6.1. 認識的意味の概念体系	62
6.2. 表現的意味の概念体系	63
6.3. 偶有性の測定	64
7. 結論	65
第五章 “Non-restrictive adjunct” における非制限性について	67
1.1. 序	67
1.2. 二つの前提	68
2.1. 意味の二側面	68
2.2. 認識的意味	69
2.3. 表現的意味	71
2.4. 「内包」の定義	72
2.5. Carnap の「内包」	72
3.1. 分析性	74
3.2. S(I) _n の非制限性	74
3.3. 非制限性と context	75
4. 結論	75
第二部 語用論的研究	77
第一章 否定表現における婉曲と強調	79
1. 序	79
2.1. 基本的事項の概観	79

2.2.	反対と矛盾	79
2.3.	否定辞と発話文の論理構造	82
3.	婉曲の効果をもたらす否定表現	86
4.	強調の効果をもたらす否定表現	91
第二章	いわゆる 'NEG-Raising' の現象について	95
1.	序	95
2.	NEG-Raising 現象の取り扱い	95
3.	主観性の標識としての "I think"	98
4.	婉曲性の根拠	103
5.	挿入句としての "I think"	107
6.	表現間における意味上の距離の問題	109
7.	結論	111
第三章	否定文と Discourse Context	115
1.	否定文の意味論的分析	115
2.	否定と否定文	117
3.	否定文と Discourse Context	119
4.	Katz による否定文の分析	123
5.	結論	125
第四章	'Locative+Verb+Subject' 型文の考察	127
1.	序	127
2.1.	意味論的・語用論的考察	127
2.2.	運動の動詞 (verbs of motion) を伴う場合	127
2.3.	存在の動詞 (verbs of existence) を伴う場合	136
2.4.	2節のまとめ	138
3.1.	統語論上の制約	139
3.2.	Kuno(1976) の指摘	139
3.3.	Presentational Sentence と関係代名詞化	140
3.4.	Figure と Background	141
3.5.	When 節の場合	142
3.6.	3節のまとめ	143
4.1.	There-V-S 型文の考察	144
4.2.	会話文における There-V-S 型文	144
4.3.	記述文における There-V-S 型文	146

4.4.	4 節のまとめ	149
5.1.	Sが一人称か二人称である L-V-S 型文	150
5.2.	一人称のSを伴う L-V-S 型文	151
5.3.	二人称のSを伴う L-V-S 型文	153
第五章 間接的行為指示型発言文とコンテキスト		157
1.	序	157
2.	‘You’ utterance の考察	157
2.1.	asking と stating	157
2.2.	‘You’ utterance とコンテキスト	159
3.	Why don’t you ～? 型文の考察	163
3.1.	話者の側の言語心理	163
3.2.	聴者の側の言語心理	164
3.3.	間接的命令・指示・提案以外の発話の力	166
3.4.	慣用性とコンテキスト	167
4.	おわりに	168
第三部 アイロニーの構造 —認識と言語の接点—		171
第一章 アイロニーの言語学的研究		173
1.1.	第一章の序	173
1.2.	アイロニーの言語学的研究	175
1.3.	アイロニーの理論が取り扱うべき問題点	188
第二章 アイロニーの構造		191
2.1.	第二章の序	191
2.2.	丁寧さに係わる偽善型アイロニー	191
2.3.	アイロニーと反対概念	195
2.4.	複合心理構造図による分析	201
2.5.	複合心理構造図の応用 (1)	207
2.6.	複合心理構造図の応用 (2)	210
2.7.	単一心理構造図による分析	215
2.8.	アイロニーの心理構造モデル	217
第三章 アイロニーの表現の分析		225
3.01.	第三章の序	225
3.02.	外観と実体の対立	225

3.03. 装備（予想）と天候（現実）の対立	227
3.04. 期待と結果の対立	228
3.05. 理想／期待と現実／結果の対立	229
3.06. 逸脱型の「理想と現実」の対立	231
3.07. 主張内容（外観）と事実内容（現実）との対立	234
3.08. 対照型の「表現とコンテキスト」の対立	235
3.09. 会話におけるアイロニーの表現	238
3.10. 疑問文によるアイロニー	239
3.11. 謝礼文によるアイロニー	241
3.12. 語義の曖昧性によるアイロニー	242
3.13. <i>always</i> （「いつも」）を伴うアイロニー	244
第四章 アイロニー的要素の分析	249
4.1. 第四章の序	249
4.2. 世辞表現とアイロニー	250
4.3. 謙遜表現とアイロニー	257
4.4. ひがみ表現とアイロニー	264
4.5. 偽装—「よそよそしさ」と「なれなれしさ」	266
4.6. 運命の皮肉	267
4.7. 間接発話とアイロニーの違い	269
第五章 結論	271
参考文献	275
欧文参考文献	275
和文参考文献	278
あとがき	279
Résumé	283

序 論

1. 後期 Wittgenstein の言語観と Chomsky 理論

Ludwig Wittgenstein (1889—1951) はその生涯において趣の異なる二冊の哲学上の大著をものしたが、その各々がそのまま彼の前期 (1911—21) と後期 (1929—1951) の哲学的思索の集大成となっていることはよく知られているとおりである。即ち前期 Wittgenstein の考え方は Russell や Frege の影響のもとに書かれた *Tractatus Logico-Philosophicus* (1922) (以下 T と略す) に集成されていて、その言語観は言語の「写像理論」が中心となっている。一方後期 Wittgenstein の考え方は彼の死後二年して出版・英訳された *Philosophical Investigations* (1953) (以下 P) の中に集成されており、そこでは「言語ゲーム」理論が言語論の中核となっている。

前期、後期 Wittgenstein は共に哲学上の問題に対して次のような一致した見解をとっている。即ち「哲学的な事柄について書かれてきた命題や問いの多くは誤りではなくナンセンスである。……哲学者のかかげる問いや命題の多くは、われわれが自分たちの言語の論理を理解していないことにもとづくのだ (T4.003)」という見解である^①。しかしこうした問題にどう対処するかとなると前期 Wittgenstein は、「かくしてきわめて基本的な混乱が容易に生じることになる (T3.324)」ので「この誤謬を回避するためにはそれが入りこむ余地のない記号言語が採用されなければならぬ (T3.325)」という判断をとる。これに対し後期の彼がとった態度は、日常言語の考察こそ重視すべきだという前期とは全く正反対のものであった。

しかし前期 Wittgenstein は日常言語を否定していたのでは決してなかった。ただ「言語の論理を日常の言語から直接引きだすことは人間の能力をもってしては不可能 (T4.002)」だし、また「日常の言語を理解するための暗黙の協定は錯綜をきわめている (T4.002)」ために日常言語から離れ「論理学の透明な純粋性」を求めたのであった。しかし逆に後期 Wittgenstein は、この錯綜をきわめた暗黙の協定は実は完全な秩序ある全体であり、その秩序の在り方を知るためには日常の言語を厳密に考察しなければならないという立場にたったのである。

後期 Wittgenstein における言語の考察は「言語ゲーム」という角度からなされる。「言語ゲーム」というコトバはここでは、言語を話すことが一つの活動あるいは一つの生活様式の一部である、ということを強調するのではなくてはならない (P23)」ということから分かります。即ち、「言語ゲーム」とはわれわれの具体的な生活の中で行なわれる基本的な言語活動あるいは

は一つ一つの具体的な communication の行為を意味する。従って「言語ゲーム」の多様性はそのまますべての道具とその適用の仕方の多様性、語の種類と命題の種類が多様性に通じるものである。言語を学ぶということはこうした多様性に富んだ「言語ゲーム」即ち communication の在り方を学ぶことであって、言語を知っているということはこうした「言語ゲーム」ができることである。従って言葉の意味を知っているとは言語ゲームの中でその言葉を具体的に適用するその仕方を知っているということになる。こうした背景から次の有名な定義が生まれる。

43. For a *large* class of cases—though not for all—in which we employ the word “meaning” it can be defined thus : the meaning of a word is its use in the language.(P)

このようにして後期 Wittgenstein は日常言語の使われ方の中に完全な秩序があるのを見てとり、言語ゲームにおける言語形式のありのままの使用法に注目しようとする。

前期 Wittgenstein が記号言語による論理的モデルを理想として求めたのに対し、このように後期の彼は無数の言語ゲームを成立させている日常言語の完全なる秩序にこそ考察の目を移すべきだとしたのであった。ここで後期 Wittgenstein の言語観を四つの点からごく大まかにまとめておきたい。

まず第一点は言語ゲーム即ち具体的な communication の場で用いられるわれわれの言語にはそのままで秩序があるとした点である。われわれの言語活動をなりたたせているものは全てこの秩序である。第二点は言語が生活様式と切り離すことのできないもの、社会的・文化的背景の中に溶けこんだ生活そのものの一部として理解されている点である。生活そのものから切り離されたとき言語は空転し何ら意味をもたないものになってしまう。第三点は surface grammar と depth grammar との区別 (P664) についてである。実際に発話される言葉には、表面的な辞書の解釈ではとうてい計ることのできない心の奥の内的なもの、つまり意図や意味あいや感覚が隠されている。しかしそうした隠された内的なものも実はやはり言語ゲームの中で重要な役割を果たして言語生活の秩序の中に溶けこんでいるのである。第四点は「個々の言葉が何をいかに指示しているかを全く知らないでも、あらゆる意味を表現しうる言語を構成する能力が人間にはそなわっている (T4.002)」という解釈である。注目すべきはここにいう「言語能力」が言語ゲームにおける「言語能力」であり、秩序ある linguistic performance を獲得することができる能力を指していることである。

次に Chomsky 理論の内容を簡単に概観しておこう。言語学史的には Chomsky 理論は 17, 18 世紀の普遍文法の伝統にさかのぼることができるが、この伝統は 19 世紀になって比較言語学の華やかな発展の陰で没落の一途をたどる。やがてアメリカ構造主義言語学

の開幕を迎えると、Sapir の *mentalism* にその伝統の回復を僅かに感ずることができるが、Bloomfield(1933) *Language* 以後は全く影をひそめ、普遍文法の伝統の復活をみるのは Chomsky (1957) *Syntactic Structures* を待たなければならなかった。

さて Chomsky (1966) によると、アメリカ構造主義言語学の貢献は Jakobson の “universal phonetics” を除けば実質的なものは何もなく、辛うじて方法論の上で次の二点が重要であるとされる。即ち、(1)言語の研究方法における *precision* の基準を高めた点、および(2)言語は “formal system” として研究されうるという概念を定着させた点である。Chomsky の偉大な点は、こうしたアメリカ構造主義言語学の方法論上の成果と先に述べた普遍文法の伝統とを創造的に綜合することに成功したことにあった。

ところで Chomsky 理論の前提および方向性は次のようにまとめることができよう。言語に関する深層的・生得的原理は人間の *intellectual organization* の一部分であって、全ての人間に備わる *universal properties* である。そして人間には有限のルールを使って無限の文を創りだす生得的な生成文法が備えつけられている。それ故言語学の仕事とは、言語に関するこうした深層的・生得的原理や生成文法のルールを明らかにし、さらには人間の認識に関する法則性をも探ることである。具体的なアプローチとしては観察可能な *linguistic data* を手掛りとして、内に隠されたこうした言語能力のメカニズムを演繹的に明らかにしていく方法をとる。

ここで一つの疑問が起こる。Chomsky 理論がこうした厳密な方法論で認識心理学の一部門としての言語学を体系づけようとする場合、その研究対象となる言語はわれわれの日常言語の全ての側面であるのか、それとも限定された一部分にすぎないものなのかという点である。次にこの点について三つの角度から調べてみたい。まず *syntax* の領域では、第一義的には具体的脈絡から切り離された文が対象であり、それが深層構造から表層構造へと変形される際の形式的特性またはルールを明らかにすることが主な目的となる。次いで *semantics* の角度から見てみよう。かつて Bloomfield(1933) は、‘meaning’ を社会的・文化的・個人的背景の中で定義し理解しようとしたがために、彼は ‘meaning’ を言語学から排除せざるを得なかった。ところが Chomsky (1965) や Katz-Fodor(1964) は、“linguistic knowledge” は客観的な形でそれ以外の *knowledge* から分離され得るという立場から、言語学的に客観化可能な範囲で *semantics* をモデル化してこれまでの理論の枠組の中に統合し、これを *syntax* 部門と解釈関係にたつものとした。最後に *performance-competence* の角度から言うなら、Chomsky 理論では理想的な話者の “linguistic competence” をモデル化することを目的とするが故に、具体的な *communication* の場における *performance* については直接考察の対象にならない。以上三つの点から明らかになることは、Chomsky 理論においては「具体的脈絡から独立した文についてその生成文法上の形式的特性またはルールを明ら

かにし、意味解釈に関しては言語学的な意味に限定して取り扱う」という方法が取られていることである。つまり最初の問いに戻ると、研究対象となっている言語はわれわれの生活の中で働いている言葉ではなくて、現実の生活から意図的に隔離されたいわば言語の標本の部分なのであり、その意味ではわれわれの言語のごく限られた部分にすぎない。

Chomsky 理論と言語ゲーム理論を対比させて考える場合、まず指摘すべきは、両者の「言語能力」「linguistic competence」という概念に対する解釈の違いである。即ち Chomsky 理論においてはそれは第一義的には文を produce し understand する能力を意味するのに対し、Wittgenstein では文を produce し、understand し、かつ‘perform’する能力を意味している。言い換えれば、Chomsky 理論では具体的な言語使用の状況から切り離された文章を produce し understand する理想的な話者の言語能力を意味するのに対し、Wittgenstein では実際の言語ゲーム、即ち具体的な communication の場において話者が用いる全ての言語能力を指し示している。つまり Wittgenstein においては言語と communication との本質的な関係を言語ゲームとして把握し考察の対象としているのに対し、Chomsky 理論においてはそれらの関係は見落され、文は communication における役割とは独立して生成され理解される抽象的なものだとしている点が大きな違いである。例えば、ある具体的な状況の中で何かを言い何かを意味するという speech acts (または言語ゲーム) においては、一般には聴き手に何らかの効果を作り出す意図をもってそうするのであり、従って話者の‘intention’が当然重要な役割を果すのであるが、その場合でも Chomsky 理論においてはその文が形式的にどのような rules によって生成されるかということが第一に重要であって、文が発話された具体的な脈絡は考察の外におかれる。こうしたことから両者の本質的な言語観の違いは、Chomsky 理論では、言語とは communication と何ら本質的な関係をもたないもので人間精神の内在的特性により作られた“an abstract formal system”であるという言語観であるのに対し、Wittgenstein の場合は、言語とは具体的な communication の中で働く言語ゲームそのものであるというようにまとめられよう。

言語観の違いからいうと Chomsky 理論と言語ゲーム理論には大きな開きがある。また一方はすこぶる体系的で他方は非体系的である。それ故体系的な立場から非体系的な立場を批判することは容易に想像できる。しかしながら実際の言語生活において本質的と思われる部分のうち、Chomsky 理論が説明し得ないものが実に多い。また非体系的と思われる要素が実際の言語ゲームの中でスムーズに働いていることも事実である。体系を求めてそれに閉じこもるのが伝統的に言語学者の好むところであり、他方現実をありのまま見つめようとするのが哲学者の伝統的な方法なのかもしれない。

Wittgenstein の言語ゲーム理論がわれわれに示しているものが少なくとも二つある。一

つは実際の言語の在りのままの姿をわれわれにみせてくれていることであり、いま一つは現代の言語研究の在るべき方向をわれわれに暗示してくれていることである。Chomsky 理論は syntax を中心として客観化の可能な範囲で厳密な言語理論を構成することに成功してきた。しかし「言語ゲーム」理論が暗示するものは、syntax, semantics, pragmatics の全領域を包含する言語体系の探求への可能性である。

2. 本論文の目的と構成

序論の冒頭で後期 Wittgenstein の言語観と Chomsky 理論をこのような対照的な形で取りあげた理由は、これらの言語観がそのまま現代における言語の共時的研究の二つの方向を具体的に説明しているからに他ならない。その後、後期 Wittgenstein の言語観は、分析哲学における日常言語学派の言語観にうけつがれ、さらに Austin, Grice, Searle などの言語分析につながっていく。一方、言語の生成理論としての Chomsky 理論は、その後一層その抽象性の度合を強め、言語の使用理論との距離をますます広げているかに見える。しかしこの両者は、本質的には互いに対立するものではなく、言語の生成と使用という互いに方向を異にする言語の二側面のアプローチの違いにすぎない。その意味において両者は互いに相補的な関係にあると言ふべきである。言語の生成のメカニズムを探る生成理論は、本質的に context-free の性格をもち、今後も抽象性の度合を高めていくであろう。他方、言語の使用のメカニズムを探る使用理論は、本質的に context-dependent な性格をもち、それ故表現とそれを取りまく contextual な変数値との関数的関係の研究がますます求められていくように思われる。

本論文「文の意味に関する基礎的研究——認識と表現の関連性をめぐって——」は、言語表現とコンテキストとの関連性、特に表現と認識との関連性に着目しながら、主として英語における文または発話文の意味に関する諸現象を考察する基礎的研究である。本論文の研究対象となった言語事象は、細かい文法事象からアイロニーに至るまで多岐にわたるが、論文全体を通じて一貫している観点は、次の三点に要約できる。まず、いずれの考察も文または発話文の意味がどのようにして決定されるかという問題と密接な関係があること。第二に、筆者の言語観が Wittgenstein のそれに近いこと、それぞれの考察においては言語の使用理論または語用論からの視点が支配的であること。第三に、いずれの考察も認識と表現との関係を重視する観点をとっていること。以上の三点である。以下それぞれの観点について簡潔に説明を加えておきたい。

まず第一に、本論における考察はいずれも文または発話文の意味の問題と密接に関係す

る。まず本論文の標題「文の意味に関する基礎的研究」に用いられている「文」という用語は広義の意味で用いられており、厳密に言えば、これは次の二つの意味で曖昧である。一つは Chomsky 理論における sentence に相当する意味で、発話のコンテキストから独立した理論的構成物としての「文」の意味である。もう一つは、後期 Wittgenstein 的な意味での「文」に相当し、具体的な発話のコンテキストを伴った「発話文」の意味である。前者の場合の「文」の意味は、文の「字句通りの意味」に対応し、後者の場合は、「字句通りの意味」に加えてコンテキストに依存して生ずるいわゆる「言外の意味」に対応する。こうした点を考慮して本論文が取り扱う範囲を規定すると、本論文は文または発話文の「字句通りの意味」および「言外の意味」にかかわる諸現象を広範囲に取り扱う基礎的研究であるということになる。

ところで文の字句通りの意味は、Katz-Fodor(1964)によれば、次のような関数的関係として表わされる。ここで、Fは関数記号、Sは文、GSは文法記述、ISは意味解釈、Cは言語的コンテキストを表わす。

$$F(S, GS, IS, C)$$

この理論によると、複数のGSがある場合、それぞれに対してISが与えられ、さらにそれぞれの読みに対してCが言語的コンテキストに合わない読みを排除するという関係になっている。大部分の文の字句通りの意味は、この合成的意味論の手順に従って文の意味を算定できると思われる。しかしメタファーの表現のように、選択制限の操作を大幅に考え直さなければならぬような場合があることは見落してはならない。

一方発話文の意味の算定は、合成的意味論だけでは不可能である。しかしこれは文の字句通りの意味の算定が不要であるということではない。筆者の考えでは、発話文の意味は、文の字句通りの意味と与えられたコンテキストとの間の一定の関数的な関係の中で決定されるように思われるからである。この関係は、合成的意味論の関数Fに、言語外コンテキストCxが変項として係わる次のような関数Fxで表わされるであろう。

$$F_x\{F(S, GS, IS, C), C_x\}$$

FとCxとの関係は、発話文のタイプによって異なる。例えば間接的要請文の場合は、文の字句通りの意味にスピーチアクトの理論を適用することにより意味が算定できることはよく知られる通りである。しかし、このスピーチアクトの理論がアイロニーの場合にも適用できるかという点、筆者の考えでは否定的である。本論の第三部で詳しく論ずるように、アイロニーの場合はスピーチアクトの理論とは全く異なった原則が働いているように思われるからである。Cxには様々な異質の変数が含まれる。これらの変数の性質を十分見極めた上

でなければ、Cx と F の関係を正しく把握することはむづかしい。こうしたことから、発話文の意味の算定の理論は、F と Cx との関係の理論であると言いかえてもよいであろう。

本論文の考察のうち、第一部の考察は主として字句通りの意味を算定する関数 F に関係し、第二部、第三部の考察は主として発話文の意味を算定する関数 Fx に関係している。特に第三部のアイロニーの研究においては、アイロニーの表現における F と Cx の関係、特に表現と認識との関係が細部にわたって議論される。

本論文を通じて一貫している観点の第二は、後期 Wittgenstein の言語観を背景とする言語の使用理論（あるいは語用論）の視点が支配的であることである。前節でも触れた通り、日常言語は一見誠に非体系的に見えながら、実はその使われ方には完全な秩序があり、コミュニケーションの目的に従って複雑なルールが巧みにあやつられているものと予想される。当然のことながら、そこには話者や聴者の言語運用の能力が関係してくるが、筆者が特に関心をもつのは、こうした日常言語のうらで無意識的に作用する運用のルールを、できるだけ簡潔な形で意識の世界にひき出すことである。第二部の語用論的研究、および第三部のアイロニーの構造に関する研究は、いずれもこのような言語運用のルールを明らかにしようとする方向性をもつものである。

本論文の考察に一貫している観点の第三は、いずれの考察も認識と表現との関係を重視する立場をとっていることである。ここで認識とは、知識体系のごとき無意識的な認識から特定の情報などの意識的な認識に至る広範囲のものを意味する。まず知識体系のごとき無意識的な認識は、語彙の意味の問題と深く関連するために、おのずから文の字句通りの意味の算定とかかわりをもつ。第一部で取り扱われる考察は主としてこの種の認識である。一方、特定の情報などの意識的な認識は、上で述べた言語外コンテキスト Cx の要素と一致するため、発話文の意味の算定に重要な役割を果す確率が高い。第二部で取り扱われた考察は主としてこの種の認識である。特に第三部の「アイロニーの構造」においては、その副題「認識と言語の接点」が示す通り、認識と表現の関係そのものが研究テーマとなっている。

筆者は常々認識と表現との関連性について、「(知覚を含めて) 認識の在り方そのものが言語表現または言語構造に反映される」という考え方をとってきた。第一部の第一章、第二章の枠構造動詞表現や第二部の第一章から第三章までの否定表現及び第四章の L-V-S 構文などは、知覚による認識の在り方が言語構造に直接反映されている好例であろう。これに対し、第三部で取り扱うアイロニーの場合は、表現と認識との関係が、「アイロニーの表現は、アイロニーの認識の、言語における再現または上演である」という関係であり、その関係が質的に異なっている。本論文で考察される認識と表現との関連性は、これらの例を含めて多

岐にわたるが、本論文の考察が、認識と言語の密接な関連性と規則性の一部分を明らかにすることができたとすれば、筆者の目的は達せられたことになる。

以上、本論文全体を通じて一貫している観点について、三つの点から簡潔に説明を試みたが、最後に本論文の構成ならびに本論文が「基礎的研究」であることについて簡単に触れておきたい。

本論文は3部にわたり、合計15章から成る。第一部は5章から成り、主として文の字句通りの意味に関するテーマを取り扱うので、「意味論的研究」とした。第一章、第二章が枠構造動詞の考察、第三章が運動の動詞と経路表現の考察、第四章と第五章が「形容詞＋名詞」構造の考察である。第二部も5章から成るが、主として発話文の意味に関するテーマを取り扱うので、「語用論的研究」とした。第一章から第三章までは否定表現に関する考察、第四章はL-V-S構文の考察、第五章は間接的行為指示型発言文の考察である。第三部「アイロニーの構造」も5章から成るが、第一部、第二部と異なり、第三部全体で一つのまとまった研究をなす。それ故第三部の章の構成および[注]のつけ方は、第一部、第二部と異なるところがある。

第一部と第二部の各章は、それぞれ独立した内容と構成から成るため、各章がそれぞれ結論をもっている。それ故、第一部と第二部に共通する結論はない。共通しているのは、上に述べた本論文全体を通じて一貫している三つの観点である。第一部と第二部の10章の考察は、文または発話文の意味を決定する際の様々な条件を、主として話者、聴者の認識の世界との関連性において提示しているといえる。これらの考察は、一見互いに無関係な言語事象のように見えるかもしれないが、いずれの考察も、より高度の意味理論のための「基礎的研究」であるといってよいであろう。例えば、これらの考察のいくつかは、「知覚のシステムと言語構造」とか「否定の語用論」、さらには「言語における間接性の研究」とかいった、より高度の研究プログラムに十分役立つデータを提供しているように思われる。

第三部「アイロニーの構造」は、第一部、第二部のレベルの考察をもう一段高めて、より高度の基礎的研究をねらったものであり、その目的とするところは、アイロニーの表現を分析することによって、その発話と理解のメカニズムを明らかにし、言語の使用理論の一部分としてのアイロニーの理論を提案することである。日頃なにげなく述べているアイロニーの表現は、実は対象に対するアイロニカルな認識の投影であるということが、モデル構造により明示的に説明される。この第三部は、本論文全体に一貫している三つの観点が最も調和された形で生かされている部分である。

〔注〕

① 序論の *Tractatus* および *Philosophical Investigations* からの和訳引用については、藤本隆志・坂井秀寿訳『論理哲学論考』（法政大学出版局、1968.）を参照または引用したことをお断りしておく。

第 一 部

意 味 論 的 研 究

第一章

動詞と動作目的語の関係

1. 序

ここにいう「動作目的語」とは“make an examination”, “give a sigh”における‘examination’や‘sigh’の如き目的語をさし、また「動詞」とはこの種の目的語に対応する‘make’や‘give’の如き動詞のことである。この種の動詞と動作目的語との関係は“read a book”などにおける関係とは違った独特のものであるが、本章ではこの種の構文の動詞と目的語の関係における意味的・統語的特徴のいくつかを取りあげ、それらについて私観を述べてみたいと思う。このテーマは随分昔から議論されてきたものであるから別段目新しくはないが、これまでかなり議論されておりながら未だに明らかでない点が残っていることを考えると、ここでこうして取りあげるのもあながち不適當ではないように思われる。

いま便宜上(1)に代表される単一動詞による文をA型文、(2)に代表されるような動作目的語を伴う文をB型文とよぶことにする。

(1) John sighed (deeply).

(2) John gave a (deep) sigh.

またA型文の動詞を単一動詞とよび、‘V’で表わす。一方B型文の「動詞+動作目的語」全体を枠構造動詞とよび、動詞の部分を‘v₁’、動作目的語の部分を‘Nv’で表わすことにする。

2. A型文とB型文の対応関係

さてA型文とB型文は統語的・形態的に規則的な対応関係をなしているということが古くから言われてきた。すなわち、まず第一に多くのA型文の単一動詞‘V’に対してB型文の枠構造動詞“v₁-Nv”が対応すること。しかもこの場合‘V’と‘Nv’は語源が共通していることが普通である。例えば、

(3) V v₁-Nv

analyse : make an analysis

step : take a step

push : give a push

第二に 枠構造動詞の 'v₁' の選択は 'Nv' の意味上の性質に依存すること。すなわち 'v₁' と 'Nv' との間には一定の選択制限が存在していて 'v₁' が何であってもよいというわけにはゆかない。

(4) analyse : *take an analysis

step : *give a step

push : *have a push

第三に B型文の 'v₁' として選ばれる動詞は, 'give', 'make', 'take', 'have', 'get' その他の基本的動作を表わす動詞に限られていること。H. Poutsma はこの種の動詞を “a verb with a vague meaning” あるいは “a connective” とよんでいる (Poutsma (1904-26) Part II, Section II, Chapter LIV., 9.)。本章ではこの種の動詞を以後「基本的動作語」とよぶことにする。基本的動作語は, それらが単一動詞として用いられた場合と異なった意味機能を持つのが普通であるが, この点に関しては後述する。第四に [+stative] の特徴をもつ 'V' (すなわち “stative verbs”) に対応する 枠構造動詞 “v₁-Nv” においては, 次の (5) から (10) までの例文が示す通り, 'v₁' として 'have' が用いられるのが普通である。

(5) a. I know it.

b. I have knowledge of it.

(6) a. I like it.

b. I have a liking for it.

(7) a. John desires more money.

b. John has a desire for more money.

(8) a. Betty loves the dog.

b. Betty has a love for the dog.

(9) a. John believes that it is true.

b. John has a belief that it is true.

(10) a. I feel that Arch will show up.

b. I have a feeling that Arch will show up.

ただし次の二例における 'taste', 'appear' は “non-stative verbs” であることに注意しなければならない。

(11) a. She tasted the wine.

- b. She had a taste of the wine.
- (12) a. Betty appeared in the afternoon.
b. Betty made an appearance in the afternoon.

第五に A 型文の表現 “V-Adv” に対して形容詞を伴った B 型文の表現 “v₁-Adj-Nv” が対応すること。例えばすでにあげた(1), (2)をはじめ次の諸例がそうである。

- (13) a. John looked at it briefly.
b. John took a brief look at it.
- (14) a. Ann examined it closely.
b. Ann made a close examination of it.
- (15) a. She smiled sweetly.
b. She gave a sweet smile.

第六の点は, “V-Adv” の A 型文には場合によっては三つまたはそれ以上の B 型文が対応することができるということである。次の例は ‘V’ が ‘sigh’, ‘smile’ の場合である。

- (16) a. She sighed deeply. (V-Adv)
b. She gave a deep sigh. (v₁-Adj-Nv)
c. She sighed a deep sigh. (V-Adj-Nv)
d. She heaved a deep sigh. (v₂-Adj-Nv)
- (17) a. She smiled sweetly.
b. She gave a sweet smile.
c. She smiled a sweet smile.
d. She broached a sweet smile.

(16c) と (17c) は枠構造動詞 ‘v₁’ の位置に単一動詞が用いられた例である。また (16d) と (17d) においても ‘v₁’ が ‘v₂’ に取ってかわっている。ここで ‘v₂’ とは, ‘v₁’ に様態を表わす意味特徴が付加されて語彙化 (lexicalize) されたものことで, ‘v₁’ が潤色された表現と考えるとよい。(16c) と (17c) の場合も同様に考えられ, ‘v₁’ が潤色された結果たまたま形態が ‘V’ と一致した場合であって, これを以後 ‘v₄’ となづける。

第七の点は, stative verbs における対応関係がそのまま stative adjectives についても言えるということである。Ross (1966) の考えに従って, 今仮に ‘Vx’ を動詞と形容詞をカバーするより上位の概念の動詞と考えれば, stative verbs と stative adjectives の各々における A 型文・B 型文の対応関係は (19), (20) の例からわかる通り本質的には同質のもの

であり、次の(18)のように表わすことができる。なおここで‘Nvx’とは‘Vx’が名詞化された要素のことである。

- (18) Vx : have-Nvx
 (19) a. Taro is honest.
 b. Taro has honesty.
 (20) a. It is long.
 b. It has length. (例文は Givón (1970) から借用)

そして次の(21a), (22a)のような表現は(21c), (22c)のような *stative adjectives* の表現が潤色されたものと考えられるが、(21a)と(21b)の関係および(22a)と(22b)の関係は(すなわち“V-Adj”と“have-Adj-Nv”の関係は)、先にみた“V-Adv”と“v₁-Adj-Nv”の関係と本質的に一致している。

- (21) a. Betty looks pale today.
 b. Betty has a pale look today.
 c. Betty is pale today.
 (22) a. I felt sad.
 b. I had a sad feeling.
 c. I was sad.

以上A型文とB型文との間に存在すると考えられる統語的・形態的に規則的な対応関係について、七つの観点から述べてきた。

3. 意味の側面

ところで以上の如き統語的・形態的な対応関係の規則性がいずれも両型間の密接な関係を示す証拠であると判断する点では異論はない。しかし、これらの事柄がA型文とB型文の間の意味的相等性を示すために用いられるとしたら、それは適当ではないであろう。

というのは意味的には任意のA型文とそれに対応するB型文とは異なったことを述べているからである。例えば次の例文をみてみよう。

- (23) a. I snoozed.
 b. I took a snooze.
 (24) a. I feel that Arch will show up.
 b. I have a feeling that Arch will show up.

- (25) a. Sam progressed.
 b. Sam made progress.
- (26) a. Bill gave me \$ 40.
 b. Bill made a gift of \$ 40 to me.

(23a) と (23b) において, (23a) はうたたねの寝息を含意するが, (23b) は始めと終りのあるまとまった「うたたね」という事象を含意する。(24a) と (24b) においては, (24a) が「信念」に近いのに対し, (24b) の “a feeling” は一種の直観に近い。(25a) と (25b) では, (25b) が「意図性」をはっきり表わしているのに対し, (25a) はその点が不明確である。さらに (26a) と (26b) に至っては, (26a) ではビルから借金として受け取ったこともあり得るのに対し, (26b) ではビルに返済の必要がないことになってしまう。これらの観察から明らかなのは, 一般に任意の A 型文とそれに対応する B 型文においては意味が異なること, とりわけ B 型文においては, 事象の瞬間的側面, 意図性などの意味特徴がはっきりと示されていることであろう。

4. 変形理論での取り扱い

以上, A 型文と B 型文の間には統語上・形態上の規則的な対応関係が存在するが, 意味上は両者の間に差異が生ずるということを述べてきた。変形理論の立場だと恐らくここで重要になってくることは, 任意の A 型文(a)とそれに対応する B 型文(b)があるとき, (a)と(b)とは同一の論理構造を共有するかどうかという点であろう。しかしこの問題には少なくともさらに二つの要点が関係してくる。すなわち, まず変形が意味を変えるか変えないかという議論, もう一つは, この場合の「意味の差」とはそもそもどの程度のものなのかという議論である。この二点がはっきりしなければ, (a)と(b)との論理構造の関係はモデルとして明示できない。かつて Harris (1957) は A 型文から B 型文への変形操作を ‘modalization’ とよび, 上に例文としてあげた(23)から(26)までのペアの文を彼流の変形操作で結びつけたが, その頃は1950年代でもあり, 意味の差は無視されていた。その後の変形理論においては, A 型文と B 型文の意味の差は概ね文体論的なものとして扱われてきたようである。Ross (1967) や Fillmore (1968) もこの問題を取り扱ったが, いずれも同一の論理構造から両者を関係づけようと試みている。いずれにせよ, 現存の理論の枠組の中でこうした問題を議論するには明確な前提を設けてかからねばならないが, 本章では言語のモデルよりむしろ言語事象を観察することの方が主目的であるので, この問題にはこれ以上立ち入らない。ただ一言述べておきたいのは, A 型文と B 型文との意味の差の在り方においてはかなり規則的と判断できる部分があり (例えば先にも触れたが B 型文では瞬間相・完了相・意図性等が顕在化する点), そうした規則

性を含めたA型文，B型文間の対応関係というものを深層レベルでどう処理すべきかについて，今後積極的に取り組んでいかねばならないということである。

5. 「もの」に見たてられた表現

さてB型文の観察に立ち返って，まずB型文の生ずる言語心理的契機といったものを考えてみたい。B型文の特徴は簡単に言うと，表現しようとする事象の一部分を一つのまとまりのある「単位」として把握し，動作目的語として表現している点であろう。単位として把握するという事は，現実の一部分を始めと終りのある一つの輪郭をもった概念的全体として切り取ることである。その結果単位としての表現は，数概念で処理される具体的な「もの」に見たてられた表現として表わされることになる。B型文が一般に瞬間相や完了相を表わし得るのは，動作目的語がこうした契機から生ずるからであろう。この点については次の説明が参考になる。

(27) Nouns of continuous action or existence, as *crying, falling, flying, kicking, living, pushing, running, sleeping, speaking, striking*, etc. They are distinguished from verbal sbs. of the same form as the verb-stem, as *a cry, a fall, a kick, a push, a run, a shout, a sleep*, etc., in that the latter denote *acts* of momentary or short duration, having a definite beginning and end, and grammatically take *a* and *plural*, while the sbs. in-*ing* imply indefinite duration without reference to beginning or end, and take no plural.

-OED (s. v. *-ing*, I. (a))

さらに，B型文の動作目的語はしばしば修飾語句をとる。これは現象を「もの」として把握する以上，できるだけ現象をある特徴をもった具体的な「もの」として捕えようとする言語心理が強く働くからに他ならない。もちろんこれは，個々の目的語の概念内容が一般的であるか特殊であるかに依存することが大であろう。例えば，“*take a nap*”や“*take a snooze*”の如く具体的で特殊な概念の目的語の場合は修飾語を必要としないことが多いが，“*have a feeling*”や“*hold a belief*”などでは目的語の概念が広いため，特殊な状況でない限り修飾語なしで用いられることはほとんどないと言ってよい。

6. 表現機能の分担

B型文の観察の第二点は，表現機能の分担についてである。論理的に言えば，A型文の動詞の機能からそれに対応するB型文の動作目的語の機能を差し引いた残りがB型文の動詞‘*v_i*’の機能ということになるが，実際はどうであろうか。既に明らかな点として，(i)動作目

的語として取り出されている要素はA型文の動詞の中核的意味要素であること、さらに(ロ)の中核的要素が「もの」として表現される結果、新たな意味の側面、すなわち動作の瞬間性・完了性および意図性などの意味特徴が新たな表現効果として付加されたこと、である。この二点を考慮して残された‘v_i’の機能を考えてみると、結論的には‘v_i’は二つの機能を持つと言える。すなわち、

(i) 時制・数の一致やその他の文法的機能の一切を担うこと。

(ii) 動作目的語と主語との間の論理的・意味的關係を明示すること。

以上の二点である。この第二の点は後で触れるようにB型文の表現効果をさらに豊かにする新たな契機となる機能である。要するに、こうした機能の分化がB型文のもう一つの特徴ということになる。

7. ‘v_i’の性質

B型文の観察の第三点は、基本的動作語‘v_i’が具体的にどのような性質の動詞であるかについてである。先に述べた通り“a verb with a vague meaning”とか“a connective”とかいわれてきたが、そもそもこの種の動詞がどのようにして生じてくるのかについては、最近の変形理論の研究を含めて納得のいく説明はなされていない。本章のはじめで少し触れたが、まずB型文に現われるこの種の動詞について明らかになっている点をまとめてみると(i)それぞれの動作目的語は一定の基本的動作語“v_i-Nv”でいわば慣用的な枠構造をなすものであること、次いで(ロ)一般に[+stative]の特性を内含する動作目的語の場合は‘have’またはそれに類する動詞が対応し、[-stative]の特性を内含するもの場合は‘make’, ‘take’, ‘give’, etc. が対応する、などである。これらの点から明らかになることは、‘v_i’の選択にあたっては、各々の動作目的語の意味特徴にあった動詞がそれぞれ選ばれているということであろう。

この点をいさ少し詳しく述べると、まず[+stative]の目的語(例えば‘knowledge’, ‘liking’, ‘desire’, ‘love’, ‘belief’, ‘feeling’ etc.)をとるB型文においては、一般に主語たる人物がそれらを「精神的・心理的に経験する」という意味内容を表わすことになるが、この場合内的に「所有する」という意味から‘v_i’にはたいてい‘have’が用いられる。これに対し、“take a step” “take a bath”のように「動作的に経験する」([-stative])の場合は一般に‘take’が用いられる。この‘have’と‘take’の場合はいずれも主語たる人物が Experiencer(経験者)である点で共通しており、動作目的語の方向づけとしては、共に経験者側からみて「内」側に向かっている。これに対し‘make’や‘give’は動作目的語を主語からみて「外側」に方向づける動詞であり、共に‘Agentivity’を表わす。‘make’はもともと意図性を内含した「創る」という意味なので、その意味と論理的に矛盾しないような動作目的語

と結びつき易く、また意図性もはっきりと示される（例えば，“make an examination”）。これに対し‘give’の方は、むしろ「表出」の方に重きが置かれている（例えば，“give a sigh”）。このようにそれぞれの動作目的語が一定の‘v₁’と対応するのは、意味上の選択制限が動作目的語の側に働いているからであろう。動作目的語がいくつかの‘v₁’と対応する場合も、従って、この選択制限の範囲の中で行なわれることになる。

8. ‘v₁’の潤色

B型文の観察の第四点は、B型文でありながら‘v₁’の位置に‘v₁’以外の動詞が用いられている場合についてである。(16), (17)で既に触れたが、次の例は‘v₁’が潤色されたもので、(30)は‘v₂’の例、(31)は‘v₄’の例である。(‘v₃’については第二章で詳しく取り扱う。)

(30) He heaved a heavy sigh.

(31) She smiled a sweet smile.

(31)は一般に同族目的表現といわれるもの、また(30)は部分的な同族目的表現として取り扱われているものである。まず、この種の構文の特徴の一つは、動作目的語の名詞句全体が‘v₂’, ‘v₄’の意味を含意するという関係が一般に成立することである。いま‘⇒’が“(logically) imply”を表わすとすれば、上の関係は

a heavy sigh ⇒ sigh

a sweet smile ⇒ smile

と表わされる。ところがこの逆の関係は必ずしも成立しない。例えば‘smile’は必ずしも“a sweet smile”を含意しないからである。

もう一つ(30), (31)の文に関して言えることは、(30), (31)に対応して次の(30)', (31)'が言えることである。

(30)' He gave a heavy sigh.

(31)' She gave a sweet smile.

これらの二点から考えられる推測は、まず、(30), (31)はそれぞれ(30)', (31)'に深層的に対応すること、次いで(30)', (31)'の目的語たる名詞句全体の意味の一部分がそれぞれの‘v₁’(‘give’)にコピーされて生じたのが(30), (31)であるという推測である。恐らく、この観察そのものには大きな誤りはないであろう。ただ不安なのは、コピーという操作を導入することによって(30), (31)の文が一元的に生成されたように論をすすめる点である。

つまり(30)の文が生成されるにあたって、まず(30)'の文があり、次いでコピーングによ

って“a heavy sigh”の意味の一部分が‘give’の上に投影されて‘heave’を生成する、という一元的なものではなくて、恐らく実際の言語心理においては同一の事象を、一方では(30)’(B型文)として把握しながら、他方では“He heaved”(A型文)として把握するという、いわば二元的把握が同時に行なわれ、その産物として生じたのが(30)ではなかろうか、と思うからである。このことは(31)に関しても同じである。この二元的把握の考え方は、次のような修辭的次元の高い文学的な表現に適用すると一層効果的である。

(32) She sobbed a violent negative.

(33) She merely nodded a listless approval.

この二元的把握という考え方は、とかく一元的に処理しようとする変形理論的な考え方とは相容れないであろう。しかし、本章の考察から明らかなように、A型文とB型文間の規則的対応関係が両者の相等性を導くほど完全なものではないということが明らかである以上、これらの規則性は、両型間の言語心理的な距離の密接さを示唆する以上の役割は果し得ないことになる。そうすると次の問題として、この言語心理的な密接さをどのようにモデル化するかということになるが、その際はここでいう二元的把握の考え方を含めたn元的なレベルで対処する方法が考えられなければならないであろう。

第二章

枠構造動詞とその修飾語の関係

1. 序

次の二文は外見上何ら違いはないかに見える。

(1) John made a box.

(2) John gave a sigh.

ところが(2)はほとんどその意味を変えないで(4)に書き換えることができるのに対し、(1)は(3)に書き換えることができない。

(3) *John boxed.

(4) John sighed.

(2)の文は前節で扱った枠構造動詞の表現、すなわちB型文であり、(4)がそれに対応するA型文である。本章の目的は、(1)文と(2)文の構造的差異を明確にし、さらにB型文における v, Adjective (A), Nv の機能的特徴、特に枠構造動詞とその修飾語の関係を明らかにすることである。

2. 単一動詞の心理構造とその Direct Object との関係

一語で完成した動作概念を表わし得る動詞を「単一動詞」(Single Verb)と名づけると、この単一動詞の表わす動作概念がわれわれの心理状態においてどのような構造をなして存在しているかを分析し、便宜上、一種のモデル構造として形式化したものを、単一動詞の「心理構造」(Psychological Structure, 略して PS)と名づけるとすれば、例えば、'rise'の心理構造は、次のように表わされ得る。ここで絶対値符号| |に入れられた要素は、心理構造における要素のことである。

(5) rise → |do + rising|

すなわち 'rise' の心理構造は、最も未分化で漠然とした動作内容を表わす |do| という要素と、特殊化された具体的動作の表象を表わす |rising| という要素とからなると考えられる。

さて、‘rise’に代表されるこの種の動詞は、動作主以外の事物と何らの関係もなく成立する動作に対して名づけられた動詞（従来の自動詞）である。ところが、例えば‘put’などのように、いつも動作主以外のあるものとの関係として捕えられた動詞（従来の他動詞）においては、心理構造は、|do+putting (x)| のように、特殊化されていない目的語のクラスを具体的動作内容の中に含んでいて、(x)が特殊化されてはじめてこの動詞は完成された表現となる。この特殊化された要素が、いわゆる直接目的語（Direct Object）である。

$$(6) \text{ put} \rightarrow \underbrace{|\text{do}+\text{putting (x)}|}_{\text{Specified x}} + \underbrace{\text{Specified x}}_{\text{(Direct Object)}}$$

このように、心理構造は、|do| という漠然とした動詞要素と、具体的な動作内容を伝達する名詞要素（「～すること」という動作の意味単位で、「もの」の意味単位と区別する）とからなると言えるが、後者は、前者の動詞要素から見れば目的語の関係にあり、また、動詞の内部構造にあるところから、以後 Internal Object (|Nv| と表記) と名づける。(Kiteley (1964, p. 257) の用いている *Internal Accusative* は外部言語形式の段階のものであり、本章の Nv に相当する。また、ドイツ語文法でいう *Inneres Objekt* は、Einen herrlichen Traum habe ich geträumt. などの同族目的表現についてのみ用いられる。) また、この |Nv| には、(6) のように目的語のクラスを含む場合（他動詞）と(5) のように含まぬ場合（自動詞）とがあり、含む場合には、(x) から特殊化された要素が直接目的語として外部構造に現われる。この特殊化された直接目的語を、以後、External Object (O と表記) とよぶ。

3. “S+v+Nv” 構文：B型文

さて、(1)、(2)の二文に立ち返って考えてみたい。

(1) John made a box.

(2) John gave a sigh.

まず(2)の文は、その意味をほとんど変えることなく、(4) John sighed. と言い換えることができた。ところが、

(7) sigh = |do+sighing| = give a sigh

という類推関係から、(2)の構造は、単一動詞‘sigh’の心理構造が幾分変化して言語構造に現われたものではないかという推論がなりたつ。一方、(1)では“a box”は‘give’の内含する目的語のクラスから特殊化されてできた External Object (O) と解することができるため、(2)とは明らかに異なった構造をもつと言えよう。

これらのことから、動詞の外部言語形式には、少なくとも二つのタイプ、すなわち、「単一動詞形態」と「枠構造動詞形態」とがあることがわかる。この二つの構造を以後区別するために、(1)または(4)の如き単一動詞を含む構文を“S+V+(O)”構文、(4)の如き枠構造動詞を含む構文を“S+v+Nv”構文とよぶことにする。ここで‘Nv’とは、外に現われた|Nv|、すなわち Outer Internal Object のことで、厳密には、相関関係の Terminus としての目的語ではなく、具体的動作の表象ないしはその variants であり、目的語の姿を借りた枠構造動詞の一部、言わば、比喩的な目的語である。また‘v’とは、様態の意味特徴を付加されることによって様々に変化する|do|の variants の総称である。一般に目的語をとる構文は、このように、動作表現を相関関係の目的語にしたた表現レベルと、「もの」の相関関係を示す表現のレベルとの二つのレベルに区別することができる。

さてこのようにして定義された“S+v+Nv”構文は、具体的にはどのようなものであろうか。次にこの点を考察してみたい。

まず、枠構造動詞の構造は、先にモデル構造として設定した単一動詞の心理構造と一致すると言える。例えば、次の表現などは、この関係を裏づける良い例である。

(8) he tried to *swim*, but could not *do it*-OED, s. v. *it* 9.

この文で、“do it”は明らかに“do swimming”の意味である。つまりこれは、‘swim’の心理構造が、まず、枠構造動詞の内部言語形式に移行し、次いで、それが“do it”という外部言語形式の形態をとって現われたものだと言える。(9b)、(9c)も同質の例文である。

- (9) a. Martin giggled, and then George *giggled*.
 b. Martin giggled, and then George *did it*.
 c. Martin giggled once, and then *did it* again.

(Langacker (1975) からの例文)

また次の二例はいずれも他動詞の例である。この場合は、“do it”の‘it’は当然 Specified x を含んでいる。例えば(10)の‘it’は“killing himself”を指している。また(11)では、‘it’の代わりに‘that’がきているが、本質的には変わりはない。

- (10) ‘What did he want to *kill himself* for?’
 ‘How should I know?’ ‘How did he *do it*?’
 ‘He hung himself with a rope.’

(E. Hemingway, *A Clean Well-lighted Palace*)

- (11) 'Thanks all the same. I won't bother you.
I'll *hop down the road*.' 'No, no.' she said.
'Oh! no. Don't *do that*. It's a long way.
Don't *do that*.' (H. E. Bates, *Night Run to the West*)

このように、“S+v+Nv”構文の原初的形態は、単一動詞の心理構造に求められる。しかし、この心理構造がそのまま書きことばの言語表現として現われる例は、そう多くはない。理由は、こうした「こと」の表現だと、できるだけ「もの」の表象として表現しようとする英語の表現傾向に合わないことや、未分化な段階にある‘do’では、動作内容を具体的に方向づける機能を充分果し得ないことなどが考えられる。

しかし、話しことばにおいては、この構造が比較的多く用いられる。これは形式に余りこだわらない colloquial なレベルでは、内容が心理構造に最も近いが、あるいはそれに忠実な形で表出され易い、ということかもしれない。未分化の‘do’が逆に何でも屋の‘do’として利用され易いという側面も、このことと関係があるであろう。“do (one's) shopping”や“do the~ing”はごく普通に用いられる表現である。

- (12) a. I am willing to *do copying*. (Edna Lyall, *A Hardy Horseman*)
b. I have not *done much walking* since I saw you. (Poutsma)
c. She's a person we have to *do the sewing*. (C. Brontë, *Jane Eyre*)
d. Who's *doing the interviewing* him?

言語表現に現われる場合は、先にあげた‘give’のように、未分化な‘do’に、何らかの基本的動作が加わってできた「基本的動作語」 v_1 となって現われる場合が大部分だと言える。同時に、動作の表象である「こと」の要素も、そのまま表現に現われるのではなくて、「もの」の表現に変化して現われる。これは、本質的には、「~すること」という動作の表現であることに変わりはないのだが、英語の慣用上、できる限りすべての表象を「もの」として捕え表現しようとする、一つの比喩的表現傾向の現われだと言える。この変化によって外に現われた|Nv|、すなわち Nv は、一つのまとまりのある明確な動作の表象を持つことになる。

さて、|do| の variants の第一段階である基本的動作語 v_1 は、その特徴として、方向語としての性格を持ち、具体的動作内容を表わす Nv をしかるべき位置に方向づける役割を持っている。第一章で詳しく述べた通り、代表的な v_1 は、have, make, give, take などである (do は v_1 より一つ上の原初的段階として区別する)。このうち、have と take は Nv を主語の側に方向づけ、また make と give は、Nv を概して主語の対象の側に方向づ

ける。

- (13) I then begged to *have an interview*. (H. Melville, *Bartleby the Scrivener*)
 He *made a gesture* and laughed loudly. (E. Hemingway, *A Farewell to Arms*)
 Emma *gave a start*. (J. Austen, *Emma*)
 He turned his back and *took a step or two* towards his door, ... (G. Greene, *The Power and the Glory*)

これらの例文はいずれも、この構文の最も簡単な形態をなすものであって、一般には、こうした素朴な形態はむしろ少なく、大抵の場合は、Nv に何らかの修飾語 (Adnominal Modifier, 略して A) が加わって一層複雑になっているのが普通である。

- (14) We *had a long talk* yesterday. (E. M. Forster, *A Room with a View*)
 The one thing that *made a profound impression* on me was their sincere desire for peace. (*Time*)
 But their discovery by a guiding theory has *given an enormous boost* to physics. (*Time*)
 He spoke of the need to *take a fresh view* of the U. S. relations with recalcitrant allies. (*Time*)

では、こうした修飾語は、この構文ではどういう役割を果しているのだろうか。まず大切なことは、修飾されている要素が Nv である点である。形態的には「もの」の表現として表わされているが、先にも述べた通り、これは本質的には動作の表象を表わす「こと」の意味単位である。「こと」の意味単位を修飾するということは、単一動詞で言えばその |Nv|, すなわち、具体的動作の表象を修飾することである。つまり、動作の在り方を修飾していることになる。言い換えると、この構文の A は、単一動詞の副詞的修飾語の役割を果しているということができる。この関係は次のように図式化できよう。

$$(15) \quad S + \underline{v} + A - \underline{Nv} : S + \underline{V} + A^{+Lx}$$

ところで、このような特色を持つこの“S+v+Nv”構文は、機能の上から二つの大きな利点を持っている。その第一は、動作の表象が「もの」の表現の姿を借りて言語表現に現われることによって、動作の瞬間的な相 (aspect) をも表わし得る表現となったことである。大部分の Nv が不定冠詞を伴っているのも、これを裏づけるものと言える (第一章, (27))

を参照のこと)。

第二の利点は、この構文を用いると、動詞の副詞的修飾語を形容詞的修飾語で表現できるという利点である。これは英語の名詞的表現傾向とそのまま合致するものであり、また '-ly' のつく副詞を clumsy なものだとして極力避けようとする一般的傾向ともそりの合うものである。また、単一動詞だと '-ly' を持った副詞を二重に重ねなければならない場合や(例えば、よく用いられる例であるが、“He thinks entirely progressively”を“He has entirely progressive thoughts”とするなど)、副詞の位置をどこにするかという問題にも、この構文は、ごくスムーズな解決を与えることができる。この点については、Poutsma (1904—26) からの次の引用が参考になる (Pt. II., Ch. XII, 20)。

It deserves special mention that the group-verb offers some welcome syntactical facilities, inasmuch as it sometimes obviates the difficulty of finding a suitable adverb to convey the meaning intended and affords an opportunity to avoid the clumsy adverb in *ly*, for which, besides, it is sometimes difficult to find a convenient place in the sentence.

以上、この章では、まず従来の“S+V+O”構文に構造上二つのレベルを区別し、次いで、“S+v+Nv”構文とはどのようなものであるかを簡単に考察してきた。しかし、|do| の variants は、基本的動作語の段階でとどまるものではない。また、修飾語と Nv との関係についても細かく調べてみる必要がある。そこで、次の節からは、広く“S+v+Nv”構文全般にわたって考察してみたい。

4. 潤色された基本的動作語

3節では、心理構造が言語表現に現われる際には、|do|はその variation の第一段階として基本的動作語をとることを明らかにした。この節では、その基本的動作語がさらに具体的な動作内容をうけいれ特殊化されることによって、様々に潤色されていく段階を考察してみたい。

さて、基本的動作語の段階では v_1 が単に方向語としての機能を持ち、一方 Nv が具体的な動作内容を示すというふうに、 v_1 と Nv との機能の分化がはっきりしていた。この関係を図式化すると(16)のようになる。‘ α ’は方向を示す基本的動作のこと、()は必ずしも現われるとは限らない要素を意味する。枠構造動詞の表現であるので、Specified (x) は当然 Nv である。これは [v_2] 以下では省略する。

$$(16) \quad S + \underbrace{|\text{do} + \alpha(x)|}_{v_1} + \underline{(A-)} Nv + \dots$$

ところがこの基本的動作語も、その方向づけの在り方が具体的にどういふものであるかを重視して表現しようとする、当然変化をうけてくる。このようにして、基本的動作語が幾分潤色されてできた v_2 の段階が生まれる。

- (17) Fell Thirst and Famine *scowl* / *A baleful smile*. (T. Gray, *Bard*.)
 he *heaved a heavy sigh* when he thought of encountering the terrors of
 Dame Van Winkle. (W. Irving, *Rip Van Winkle*)
 His wife and daughter *sobbed a violent negative*. (Poutsma)
 López Mateos gently prodded Johnson to *device a speedy solution*. (*Time*)

例文中、‘scowl’、‘heave’、‘sob’ はいずれも ‘give’ の、‘device’ は ‘make’ のそれぞれ variants であると考えられる。すなわち、‘scowl’ は “a baleful smile” の表わし方を特殊化し、‘heave’ は “a heavy sigh” が本来持っている独特の表情を示し、また ‘sob’ は “a violent negative” がどういう態度で示されたかを具体的に説明している。このことから、(A-) Nv が持つ表象の属性の一部が v_1 を潤色する要素となって心理的に v_1 に作用し、その結果 v_2 を生んだとも言えよう。つまりこの段階は、Nv が本来その伝達内容として持っている具体的動作内容が、一部分動詞側と overlap した状態だと言える。なお、動作内容が部分的にしる overlap されるということは、 v_2 と Nv とが同一動作を一部分重複して表現することであり、ここに一般に同族目的と言われる表現の原初的形態が生まれるのである。この段階の関係を形式化すると、次のようになる。

$$(18)' \quad S + \underbrace{|\text{do} + (A-) Nv \text{ の属性の一部}|}_{v_2} + \underline{(A-)} Nv + \dots$$

(18) の分析を “he heaved a heavy sigh...” の例に適用してみると、次のようになる。

$$(18) \quad S + \underbrace{|\text{do} + \text{heaving}(x)|}_{v_2} + \text{heavy sigh} + \dots$$

このように、 v_2 の段階では、動作内容の重複は部分的なものである（部分的同族目的の段階）。だから、 v_2 と Nv とは、方向語としての機能と具体的動作内容の伝達機能という本来の役割をまだ保っていると言える。ところが、この overlap の傾向がさらに進んで次のような表現になると、この機能の分化は完全にくずれ、具体的動作内容のほとんど全部が動

詞の側で表現され、その結果、動詞と Nv とに、枠構造動詞の動作内容がほぼ完全に overlap する、いわゆる同族目的語の段階が生じる。この段階の動詞を v_3 とし、この段階全体を $[v_3]$ として表記する。

- (19) a. The world's youngest monarch, Constantine will be tutored in state craft by the foxy Papandreou, 76, whose Center Union coalition *won a landslide victory* over Karamalis' Conservatives last month. (*Time*)
 b. Those of us who see what is happening from the inside believe we will soon *reap a considerable harvest* from our present efforts. (*Time*)

(19a)の 'win' は、'have' または 'get' の variant と考えられるが、ただ「手に入れる」という意味ではなく、「勝って手に入れる」という意味である。従って 'victory' の内容のほとんど全部が動詞の側と overlap していると解釈できる。'reap' と 'harvest' との間にも同じことが言える。この関係を形式化すると、

$$(20) \quad S + \underbrace{|\text{do} + \text{Nv}|}_{v_3} \text{ のほぼ全部} + (\text{A}-) \text{Nv} + \dots$$

次に、この同族目的の表現から、動詞と Nv とが同一語根から生じている表現を区別して $[v_4]$ とすると、 $[v_4]$ では動作内容が完全に重複してしまう。

- (21) a. Soams *smiled a sneering smile*. (J. Galsworthy, *The Forsyte Saga*)
 b. I wanted to *live a large life*. (G. Eliot, *Daniel Delonda*)
 c. Sinuous and shimmering, dressed in green and gold, she *danced a ritual dance*. (*Time*)

なお、次の諸例も $[v_4]$ の一種と理解してよかろう。

- (22) a. His friends were *doing their best* to make him president.
 b. He *tried his hardest* to persuade them to buy. (Hosoe)

この段階を形式化すると、

$$(23) \quad S + \underbrace{|\text{do} + \text{Nv}|}_{v_4} + \text{A} - \text{Nv} + \dots$$

このように、 $[v_3]$ と $[v_4]$ の区別をつけるわけは、 $[v_4]$ では、 $|\text{Nv}|$ と Nv との動作内

容がぴったりと重複するのに対し、[v₃]では|Nv|とNvがほぼ同意義でも元来異なった語源を有し、従ってそれぞれいくらか異なった固有の含みを持つため、意味範疇がぴったりと重複しないという点があるからである。この点からも、“win a victory”の類の表現は普通に用いられても、“smile a smile”の表現は、“a smile”に“a certain smile”などの特殊な意味を持たせない限り、ほとんど用いられないわけがうかがえる。“a smile”に特殊な意味がなければ、単なる tautology に終わってしまうからである。

ここで少し脱線するが、

Lord Angelo *Dukes it well*. (W. Shakespeare, *Measure for Measure*, III. ii. 100)

の‘it’は、この重複表現を避けるために用いられたとも解される。この‘it’をL. Kellner (*Historical Outlines of English Syntax*, § 283., p. 176) や細江博士 (『精説英文法汎論』第5章 44.) は、一種の同族目的と解しているが、Jespersen (M. E. G. VI. § 6.8₇, VII. § 4.6₁₀) は“Empty Object”あるいは“Unspecified ‘it’”とよんでいる。筆者の考えからすれば、この種の表現は、少なくとも臨時動詞として用いられたものは、同族目的と解したい。すなわち、“do Duke”や“do a walk”などは、枠構造動詞と見なし得るので、‘Duke’や‘walk’はNvである。いま、このNvが、動詞部分で特殊化される場合を考えると、“Duke Duke”, “walk a walk”という tautological な表現が心理的に考えられる。この場合、重複されるNvの‘Duke’は、すでに動詞部分の‘Duke’によってその具体的な動作内容を表現されているため、いわば不要である。そこでNvは代名詞で表現されて“Duke it”, “walk it”という表現が生まれると考えられるのである。なお、上の記述で“smile a smile”が“smile it”とならないのは、“Duke it”では‘Duke (v.)’という動作そのものが問題なのに対し、一般の同族目的語は、その「動作のあり方」が問題なので、従って「形容詞的修飾語+名詞」の形が必要とされるからであろう。“Duke it”に類する表現を次にいくつかあげておこう。

king it, queen it, cat it, pig it, etc.

train it, bus it, cab it, coach it, boat it, etc.

trip it, foot it, leg it, etc.

hotel it, inn it, etc.

さて、本論に立ち返って、これまでの考察から明らかなように、[v₃], [v₄]においては、動詞部分がNvの伝達内容をほぼ完全に、または完全に表現し得ることから、二要素間の機能の分化は完全に破れ、その結果、Nvは[v₁], [v₂]の段階のものとは異質の性格を帯びてくる。すなわち、Nvは、動作の相対的数値であるAを単に期待する形式的な名詞要素

の役割しか果さないものになってしまうことになる。

さて、 v_1 が幾分潤色されて $[v_2]$ の段階が生まれる場合を先にみたが、その場合 Nv が極めて概念の幅が広い名詞の際には、潤色された動詞がその $|Nv|$ の中に Nv をすっぽりと内含する場合が生じてくる。

- (24) a. One group of Western experts, pointing out that Rumania had carefully steered a neutral course in the Sino-Soviet feud, argued that... (*Time*)
 b. Nellie spends a hysterical hour every evening getting him into his ensemble, and... (*Time*)
 c. Moreover, the British now pay preferential prices for Southern Rhodesia's staple crop of tobacco ; (*Time*)

最初の例の 'steer' は, "take a neutral course" の 'take' が潤色されたものと考えられるが, 'steer' はその $|Nv|$ の中に 'course' という意味要素をすっぽりと内含していると言える。それ故この context では, 'course' は動作の表象としての本来の役割が薄れ, 単に相対的な数値 (すなわち A) を期待するだけの役割しか持たないものになっている。(24b), (24c) の 'hour' 'price' についてもほぼ同じことが言えよう。この段階を $[v_5]$ として区別する。

しかしこの段階の Nv は, 厳密に言えば, 動詞の Nv そのものではなくて, $|Nv|$ の中に含まれている $|Nv|$ の目的語であると言えよう。この目的語の要素を $|No|$ で表わすと, $[v_5]$ の段階の心理構造は, 次の(25)のように表わされよう。

$$(25) \quad S + \underbrace{do + \dots \underbrace{No}_{Nv}}_{v_5} + A - No + \dots$$

つまり $|No|$ は $|Nv|$ の中に意味要素としてすでに含まれているものであり, それ故, "steer a course" だけでは意味をなさず, 必ず No は A を必要とすることになる。

以上, この節では, 基本的動作語が具体的動作内容をうけ入れていくに従って, Nv の本来の機能が低下し, それと同時に, A の機能の重さも変わってくる点を考察してきた。ここで, 2.4 節のまとめに入りたい。

まず, 枠構造動詞は, その本質的性質として単一の動作を二つの要素からなる枠構造として表現することから, 一般の同族目的語のすべての表現段階を含む。もっと正確に言えば, 同族目的の表現形式とは, ここに言う "S+v+Nv" 構文の一部分の段階に対して与えられ

た漠然とした名称であり、この段階を追って観察すれば、その原初的形態から完成されたものまで系統づけることができる。

第二に、この重複表現の生まれる契機を考えてみると、心理的に、一方で一つの動作を枠構造動詞で表現しようとする欲求を持ちながら、他方で、動詞部分を情報上あるいは修辞上特殊化して、できるだけ単一動詞で表現しようという欲求が働いているからに他ならない。言い換えると、この重複表現は、動詞表現の二つの外部言語形式、つまり枠構造動詞の表現と単一動詞の表現とが、心理的に mix して言語表現に現われた現象であると解釈できる。

第三に、 v が v_1 から v_5 まで変化する過程は、枠構造動詞で表わされていた具体的動作が、次第に動詞部分だけで表現されるようになって単一動詞による表現へと近づいていく過程であり、一方、それと比例して Nv は、その具体的動作伝達の機能を次第に失って、 A を期待する形式的な名詞要素の働きに変わり、相対的な数値としての A を予期する機能しか持たない語に近づいていく。

第四に、自動詞、他動詞という観点から見れば、 v_1 から v_5 への変化は、動詞の他動詞的性格から自動詞的性格への移行を意味する。すなわち、 v_1 が潤色されるにつれて動詞部分は Nv の持っている具体的動作内容を次第に吸収して、他動詞的性格から自動詞的性格へと移行し、 v_4 の段階に至って完全に Nv を吸収し尽して、何らの目的語をも必要としない動詞となる。従って、それとともに、“ $A-Nv$ ” は、その形式的目的語としての役割から、副詞的機能を持った副詞的対格の性格へと変化していく。

第五に、 A の必要度という観点からすれば、まず $[v_1]$ と $[v_2]$ および $[v_3]$ の一部においては、機能の分化から Nv の側に具体的動作内容を伝達する働きが重いので、 A が必ず必要ということはない。しかし、context に応じて A に重い情報的役割を与えることもできる。これに対して、 $[v_3]$ の一部、 $[v_4]$ の段階では、一般に A が必要である。それは、 Nv がすでに動作内容伝達という機能をほとんど失ったがために、 A との結合という点に唯一の存在理由を見い出していることから明らかである。この傾向は $[v_5]$ に著しい。この段階では、 A のために No が動詞部分から引き出された感さえある。このように、この“ $S+v+Nv$ ” 構文においては、($[v_1]$, $[v_2]$, $[v_3]$ の一部、では不要の場合もあるが、) 一般に、 A を予期する態勢を整えていて、多くの場合 A が不可欠の役割を果していると言える。

5. Nv とその Adnominal Modifier との関係

前節では、動詞と Nv との関係に焦点をあてて考察してきたが、この節では、動詞との関係を含めて、 Nv とその A との関係を考察してみたい。

まず、ここで言う Adnominal Modifier (A) を規定しておく必要がある。ここで言う A には、大別して二つの異なった要素がある。第一の要素は、 Nv を限定的に修飾する形容詞

である。これは、この構文では最も典型的な修飾表現であるが、これと同等の機能を果すと
思われる次の第二例、第三例の如き表現も、同一要素として一括する。

- (26) a. He gave me a *long, haggard* look. (W. S. Maugham, *The Book-Bag*)
 b. She gave him a look *of hatred*. (Id., *The Back of Beyond*)
 c. He gave her a look *that had in it something pleased and humorously affectionate, as though ...* (Id., *The Book-Bag*)

第二の要素は、Nv の具体的内容を説明する要素で、多くは 'of' や接続詞の 'that' で導かれる。この要素は、Nv の External Object と解されないことはないが、厳密には、Nv のあり方を修飾する副詞的な役割を持つものである。

- (27) I had a feeling *that she was listening to me*. (W. S. Maugham, *The Book-Bag*)
 He gave an impression of *unstable hilarity, as if...* (G. Greene, *The Power and the Glory*)
 I remember having a silly idea *he might come to the hospital where I was*. (E. Hemingway, *A Farewell to Arms*)

例えば最初の例、“I had a feeling that she was listening to me.” では、'*she-is-listening-to-me+ishly*' のように “had a feeling” するのであって、斜体の部分は動詞の対象物ではない。“had a feeling” の対象物は 'her' と考えるべきである (cf. Kiteley (1964), p. 258)。

以上の二要素を Adnominal Modifier として規定し、A として略記する。ただし、これらの要素と形態的にまぎらわしい Nv の External Object は、はっきり区別されねばならない。

以上の規定を前置きにして、次に、この A と Nv とは機能の上でどんな関係にあるかを、総合的に考察してみたい。

一般的に言って、名詞要素に形容詞的修飾語がつくということの意味は、その形容詞的修飾語が表わしている属性を一相対的数値とする概念の幅が、その名詞要素に与えられたということである。言い換えると、その形容詞的修飾語を一数値とする測度性 (measurability) の幅が、その名詞要素に与えられたことを意味する。例えば、“a soft voice” というとき、'voice' に与えられた measurable な概念の幅は、「柔かさ；硬さ」ということであり、それに相対的数値を与えると 'soft' だということである。

さて、この相対的数値と measurability の考え方を A と Nv との関係に適用すると、Nv

にAがつくということは、Nvの表わす具体的動作にAの属性が属する概念の幅が与えられたことであり、その結果、Aがその数値として働いていることを意味する。すなわち、AはNvに measurability の幅を与え、自らその具体的動作を決定する数値となって働き、この枠構造動詞表現を最終的に完成さす役割を果している。

ここで事例の検討に入ろう。まず、Aがない段階。従って、Nvの measurability の幅も0である(この段階を‘Nvo’と表記する)。この段階では、動作の名詞的表現か瞬間的な表現に主なねらいがある。当然この段階には、[v₁]、[v₂]、[v₃]の一部分、しか含まれない。

[v₁] At this speech Miss Amelia only *made a smile and a blush*. (W. M. Thackeray, *Vanity Fair*)

[v₂] Marius Lyndwood *laughed an answer*. (Poutsma)

[v₃] He had *won a victory* over them. (E. M. Forster, *A Room with a View*)

次いで、Aが付加される場合であるが、まず、Aをはずして読んでも文全体の意味が通じる段階がある。この段階のAの性質は、Nvの属性と tautological なものである場合が多く、従って、具体的な動作のあり方まで数値化できないために、Aがなくても文意が通じるわけである。この段階には、[v₁]、[v₂]、[v₃]の一部、が相当する。

[v₁] Palomar's men decided to *make a closer examination*. (*Time*)

[v₂] He called his son on the phone one morning and *tried a jolly joke*. (*Time*)

[v₃] Curiosity and timidity *fought a long battle* in his heart. (Hosoe)

この段階(Nv₁)では、まだ measurability の幅は広くはないが、段階が変わって、次の如き表現になると、Nvの measurability の幅がぐっと広がっていることがわかる。

[v₁] He *had a strangely puzzled look*. (W. S. Maugham, *The Back of Beyond*)
You *make a most unfair and incorrect reference* to us in your Feb. 21 story on Beverly Hills. (*Time*)

[v₂] Polish Director Roman Polanski *maintains a suspenseful pace*, putting ... (*Time*)

In Washington the word is out that the companies must *display a more venturesome attitude* before ... (*Time*)

[v₃] Death *grinned horrible a ghastly smile*. (Hosoe)

[v₄] I sometimes *dream melancholy dreams*. (Poutsma)

[v₅] 'What is your answer, Bartleby?' said I, after *waiting a considerable time* for a reply ... (H. Melville, *Bartleby the Scrivener*)

ためしに、これらの表現からAを抜き取って読んでみると、それぞれの文章の肝心の要点がピンとこないことがわかる。つまり、その程度にまで、これらの文章では Nv の本来の伝達機能がぼやけてきている、あるいは Nv の measurability の幅が広がってきていると言える。この段階を Nv の測度性の幅が2の段階 (Nv₂) とすると、Aの機能はこの段階において最大となり、その結果、Aが文全体の伝達内容を最終的に決定するということになる。

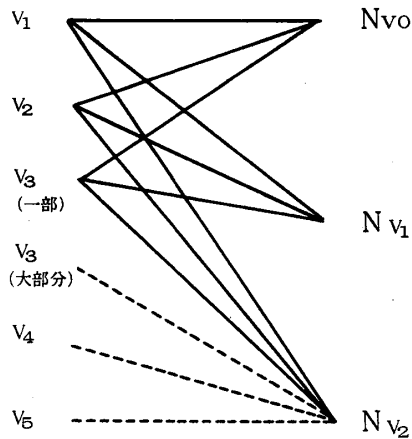
ここで、2.5 節のまとめに入ろう。

まず、第一に、この構文におけるAの機能の重さは、およそ三つの段階にわけることができる。まず、Aのない段階 Nv₀、次いでAがなくても文意の通じる段階 Nv₁、さらに、Aが必要な段階 Nv₂、である。もちろん、この種の分類にありがちなように、お互いの間に厳密な *borderline* を引くことは不可能である。

第二に、Nv の測度性の幅の広さは、そのままAの機能の重さに比例するものである。すなわち、Aの機能が重くなると、Nv 本来の機能は薄れて、測度性の幅を次第に拡大する。この関係を逆に言うと、Aの機能の増大は、Nv 本来の機能の低下に比例する（増大に負の関係で比例する）と言える。

第三に、動詞側との関連においてこのAの機能を考えると、まず、[v₁]、[v₂]、[v₃] の一部分、の段階では、Nv が本来の機能を保っているためにAが必ずしも必要ということはなく、各々の機能の重さは、context における二要素の比重関係によって決まる。従って、これらの段階では、それぞれ Nv₀、Nv₁、Nv₂ の三つの段階があり得ると言える。次いで [v₃] の大部分と [v₄]、[v₅] では、動詞の側に Nv の本来の伝達内容がほぼ完全に、または完全に移行しているために、Nv は新たに動作の相対的数値を期待する形式的名詞要素に変化し、その結果、これらの段階ではAを必ず必要とし、常に Nv₂ の段階である。

第四に、以上のことから、この“S+v+Nv”構文は、理論上、12の機能的に分類されたタイプを持つと言える。すなわち、動詞側は、v₁ から v₅ までの variants をとって変化するが、他方それに対応して Nv も三つの段階に変化する。しかし、variants のすべてがこの三段階をとるのではなく、すでに明らかな通り、[v₁]、[v₂]、[v₃] の一部、では Nv₀ から Nv₂ まで、[v₃] の一部、[v₄]、[v₅] では、Nv₂ の段階のみが対応する。当然のことながら、これはあくまでも典型的なタイプのモデル的な組み合わせであって、実際の表現では、いずれのタイプにもあてはめがたい中間的なものがあり得ることは言うまでもない。



第五に、この構文におけるAの機能は、文章全体の伝達内容を最終的に決定することである。すなわち、Aが不可欠な段階があることは、少なくともその段階においては、Aは文章全体の内容を支配する力を持っている、ということである。次の文は Nv₂ の段階のものであるが、この文の A (=x) が 'hateful' であるか 'sweet' であるかによって、文全体の内容が全く逆のものになることから、このことは明らかである。

When I saw her, she gave me a (x) look.

なお Nv₁ の段階についても、程度こそ違いますが、同じことが言えるであろう。

第六に、以上の考察から、この“S+v+Nv”構文の構造を形式化すると、次のようになる。

S + v_n + (A -) Nv_m + ...

$$\left[\begin{array}{l} n : 1, 2, 3 \longrightarrow m : 0, 1, 2 \\ n : 3, 4, 5 \longrightarrow m : 2 \end{array} \right]$$

すなわち、この構造の意味するところは、一つの動作を、一般の「もの」の相関関係に似せて、動詞(v)と名詞(Nv)の二つの要素からなる Frame-work として表現して枠構造動詞を形成し、その表現内容を最終的に決定する要素、すなわち修飾語(A)を、必要とあらばいつでもうけ入れる態勢を整えているということである。

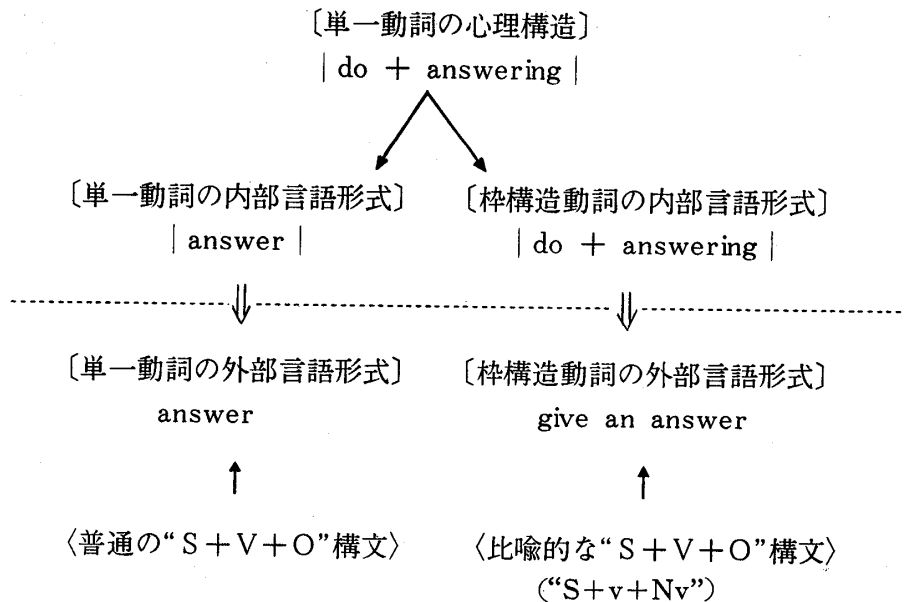
6. 結論

本章で述べたかった事柄は、およそ次の五点に要約される。

まず第一は、いわゆる“S+V+O”構文には、意味・機能の上から二つの異なった表現レベルがあることである。その一つは、一般の「もの」の相関関係を表現したレベルで、動詞

形態は、単一動詞かグループ動詞（単一動詞が副詞や前置詞と結合して新しい動作概念を表わす場合）の形態をとる。他の一つは、具体的動作内容を「もの」に見たて、一般の「もの」の相関関係と同じように扱った表現レベルで、厳密には枠構造動詞の一部であるものを相関関係の Terminus であるかのように表現した、言わば比喩的な“S+V+O”構文のレベルである。前者の普通のレベルの表現を“S+V+O”構文、後者の比喩的な表現レベルを“S+v+Nv”構文（前章のB型文、または枠構造動詞の表現）とよぶことにする。

第二に、単一動詞と枠構造動詞との両方の構造に共通するモデル構造として、単一動詞の心理構造を便宜上設定する。この結果、枠構造動詞の原初的形態は、単一動詞の心理構造に求めることができる。



第三に、枠構造動詞は一つの動作を動詞部分と名詞部分との二つの要素で表現するために、修辭的表現段階である [v₂] 以上では、同一動作内容をこれら二要素に重複して表現するという現象が起る。これがいわゆる同族目的の表現である。だから言い方を換えると、同族目的の表現とは、この枠構造動詞表現の一部分の段階に対して与えられた便宜上の名称にすぎない。なお、この重複表現の生まれる契機は、単一動詞表現と枠構造動詞表現とが mix した言語心理にある。

第四に、この“S+v+Nv”構文は、その中心的構成要素として、v, A, Nv という三つの要素を持っている。この三つの要素は、context あるいは修辭上、情報上などの理由から、機能の上でお互いに影響を及ぼし合いながら、一定の関係を保って変化する変数 (Variables) だと言える。その原則的關係は、v₁ が Nv の持つ具体的動作内容を次第に吸収して

v₅ まで変化するにつれて、Nv 本来の機能は次第に失われ、その結果、Aをうけとめるだけの形式的名詞要素へと変化していく。一方、これとともに、Aは次第にその機能の重さを増して、[v₃] 以上ではほぼ必須の要素となる。このAと Nv との関係を、それだけに限って観察してみると、Nv にAがつくということは、Nv にAを一相対的数値とする概念の幅が、つまり measurable な概念の幅が与えられたことであり、従って、Aの機能が重くなるということは、Nv の measurability の幅がそれだけ広まっていることを意味し、その結果、Nv 本来の機能をそれだけ弱めたことになる。

第五に、Nv を修飾するAは、Nv が動作表現の一部であるところから、この構文の副詞的修飾語として機能する。しかも、この構文自体が動作表現である上に、この構文の最も重要な具体的動作内容を修飾しているところから、Aは、文章全体の内容を最終的に決定づける力を持つ。従って、Aは、この構文の最も重要な機能を果していると言える。

第三章

運動の動詞と Path の表現

1. 序

格文法 (Case Grammar) の創始者として知られる Fillmore は “The Case for Case” (1968 a) の中で運動の動詞 (verbs of motion) に対して求められる格として Locative を提示したが、その後の論文 Fillmore (1968 b) で、これに加えて Source と Goal を新たに提示した。その後 Bennett (1970) が運動の動詞に関連する深層格には四つの格、すなわち Locative, Source, Path, Goal が必要であることを示したが、Fillmore も Bennett に従い、“Some Problems for Case Grammar” (1971) の中で Path の格の必要性を認め、次のように述べている。

In addition to the complements of Source and Goal, there is the complement type that David Bennett has called “Path,” (Bennett 1970) exemplified in the last phrase of “He walked from the cemetery gate to the chapel along the canal..” A particularly interesting property of the Path (or “Itinerative”?) case is that a sentence with the path designated can contain an unlimited number of Path expressions, as long as these are understood as indicating successive stretches of the same path. This can be seen in a sentence like “He walked down the hill across the bridge through the pasture to the chapel..”

第三章の目的は、運動の動詞の表現と共起する Path の表現の特性をできるだけ詳しく考察し、それらの表現が運動の動詞とどのような関係にあるかを明らかにすることである。論の順序としては、まず 3.2 節で Path の表現の特性に関する Stratton の論文 “The Pathological Case” (1971) を取りあげ、そこでなされている議論を考察する。そして 3.3 節以下で運動の動詞、二種の Path の表現、Path の通過点などの間にある関係について、Stratton の議論の欠点を指摘しながら、私見を述べてみたいと思う。

2. Stratton (1971) の考察

この節では Stratton (1971) の論文内容を、筆者の解釈をまじえながら考察してみたい。彼は Path (「経路」または「経路格」、以下 P と略す) を次のように定義している。

- (2) The rock (O) moved from the hill (So) through the squad car window (?) into the officer's lap (G).
- (3) ... leftover noun phrase seems to describe the space intervening between source and goal or to describe some characteristics of that space. Let us call these manifestations of an additional case *Path*; and let us insert Path between Object and Source in the case frame for verbs of motion: -(A) O (P) (So) (G).

すなわち、(2)における“through the squad car window”に相当する表現、つまり Source (以下 So と略す) と Goal (以下 G と略す) との間に介在する空間またはその空間の何らかの特性を記述する表現のことを Path の表現とよんでいる。この空間をさらに細かくみてみると、この種の表現におけるいくつかの空間の表わし方が明らかになる。なお例文中、A は Agent, O は Object を表わし、A=O は Agent と Object が一致していることを示している。

- (4) a. Sam (A=O) went to Reno (G) via Chicago (P).
b. Jim (A=O) went to the woods (G) by way of (the location of) the hay field (P).
- (5) a. Sam (A=O) went to Reno (G) along Interstate 80 (P).
b. Jim (A=O) went to the woods (G) across (the surface of) the hay field (P).
- (6) a. Sam (A=O) went through Chicago (P) to Reno(G).
b. Jim (A=O) went to the woods (G) through (the area of) the hay field (P).

(4) では Path が一地点または一つの場所によって特定化されているので、一次的 (1-dimensional) である。(5) では Path が一つの線に沿う (*along*) かまたは一つの平面を横切る (*across*) ことによって特定化されているので、二次元的 (2-dimensional) である。(6) では Path が, *through* から明らかのように一つの空間を通るものとして特定化されているので、三次元的 (3-dimensional) といえることができる。

これらの考察からわかることは、Path の表現の在り方には

- ① 経路を「点」として表わすか、
- ② 「平面上の、またはあるものに沿った線」として表わすか、
- ③ 「三次元的空間を動く線」として表わすか、

の少なくとも三つの表現の可能性が在るということである。

さらにまた、この表現の三つの可能性も、角度を変えると、「点的」か「線的」かの二つの表現の可能性にまとめることができる。物理学上の必然性から言えば、ものの経路はすべて時間の経過に伴う線的な動きとなるであろう。ところが言語学的には、上記の例文が示す通り二つのタイプの捕え方、すなわち「点」として捕えるか、「線」として捕えるかの可能性が存在するわけで、物理学の世界とは違ったことばの世界の特徴をここに見ることができる。

なお(4)–(6)の例文では Source を表わす表現がない。しかし前後の context から Source が明らかである場合には So が省略されるのはごく普通のことであり、これらの場合もその一例にすぎない。

英語の動詞の中には、Path の概念をその意味の中に含み持つ (incorporate) ものが多い。(7)はその例である。

- (7) a. Sam(A=O) crossed from the bank(So) to the post office(G).
 b. Jim(A=O) climbed to the top of Mt. Rushmore(G).
 c. The bird(A=O) flew out of the bush(So).
 d. The cannon-ball(O) sank to the bottom of the pool(G).

Path の概念を含み持つ動詞に関して興味深い点は、これらの動詞がほとんど制限なしに、Path の表現と共起できることである。(8)がその例である。

- (8) a. Sam(A=O) swam through the water(P) to the raft(G).
 b. The mole(A=O) burrowed through the earth(P).
 c. The car(O) crossed over the bridge(P) from Minneapolis(So) to St. Paul(G).

さらに Path の表現に関して注意すべき点は、Accusative Marking Rule (対格標識付与規則) が選択的 (optional) であるということである。次の(9)の例では、Path が Object と同様 Accusative Marking をうけているが、(10)の例ではうけていない。すなわち、Path は Accusative Marking を取ることができるという点で、Source や Goal と異なり、また eligible ではあっても必ずしも取る必要はないという点で Object と異なっている。

- (9) a. Jim(A=O) crossed the bridge(P).
 b. Salmon(A=O) swim the Columbia every spring.
 c. Have you ever driven Interstate 80(P) ?

- d. Go climb a tree(P) !
- (10) a. Jim(A=O) crossed over the bridge(P).
 b. Salmon(A=O) swim up the Columbia(P) every spring.
 c. Have you(A) ever driven along Interstate 80(P) ?
 d. Go climb up a tree(P) !

Path の表現のもう一つの特徴は、(11) が示すように単一の文の中で制限なしに繰り返すことができる点である。

- (11) a. Jim(A=O) went out the door(P), over the hill(P), along the river(P), through the woods(P), ... (P), to grandmother's house(G).
 b. Sam(A=O) went from Chicago(So) to San Francisco(G) via Joliet(P), Bloomington(P), Springfield(P), St. Louis(P), Kansas City(P), Salina(P), Denver(P), ... (P).

しかも、この経路にあたる一つ一つの地点または場所の表現は時間的経過と一致した順序で表現されていなければならない、という制約がある。それ故次の(12)の例文(a), (b)は、Path の順序が異なることになるために、同じ意味にはなり得ない。

- (12) a. Sam(A) drove his car(O) from Louisville(So) to Des Moines(G) by way of Chicago(P) and St. Louis(P).
 b. Sam(A) drove his car(O) from Louisville(So) to Des Moines(G) by way of St. Louis(P) and Chicago(P).

Stratton (1971)は、主として以上のような考察をもとに、Path の表現の持つ特性を次の六項目にまとめられるような内容で整理し、Path の格が運動の動詞のための case frames の中に含まれるべきであると結論している。

- (13) (a) Path の概念を含み持つ動詞はほとんど制限なしに Path の表現と共起できる。
 (b) Path は他の格と違って Agent と同一指示的であり得ない。
 (c) Source と Goal は animate であることがよくあるが、Path は (常に?) inanimate である。
 (d) Path 以外の格については Accusative Marking Rule が eligible なときは必ずそれをうけなければならないが、Path に関してはそれが eligible な場合は optional である。
 (e) Path の表現だけが同一文中で制限なしに繰り返されてよい。

(f) 同一文中の Path の表現は経路の順序に一致したものでなければならない。

3.1. 考察の順序

前節で述べられた Stratton の考察に筆者もほぼ同意見である。しかし彼の分析にはいくつかの重要な見落としがあるように思われる。以下の議論では、Path の表現について三つの観点から筆者の考察を述べ、あわせて Stratton の分析の問題点を指摘したい。

まず 3.2. では、Path の表現には二つのタイプがあることを指摘し、次いで 3.3. では運動の動詞と Path の表現の関係について考察し、さらに 3.4. では Path の表現と Place の表現の関係について述べてみたい。

3.2. 二つのタイプの Path の表現

Path の表現には二つのタイプがあるように思われる。すなわち (4)–(6) 型と (8)–(10) 型である。Stratton はこれら二つのタイプの用例をあげてはいるが、それらの間の関係および差異については何も触れていない。

(4)–(6) 型の表現と (8)–(10) 型の表現の違いを知る一番良い方法は、これら二つの型を同時に含み持つ文を作ってみることであろう。(14) にあげた文のうち、(14 a) は (4)–(6) 型の表現であり、(14 b) は (8)–(10) 型の表現、さらに (14 c) はこれら二つの型が一緒になった表現である。なお、 P_1 , P_2 (以後一般に P_n) は通過の地点を示し、 P_s は通過の地点すべてをその中に含む空間または平面を意味するものとする。

- (14) a. Sam toured from Japan(S_o) to Taiwan(G) *by way of* Seoul(P_1) and Shanghai(P_2).
- b. Sam toured East Asia(P_s).
- c. Sam toured East Asia(P_s) from Japan(S_o) to Taiwan(G) *by way of* Seoul(P_1) and Shanghai(P_2).

前節(13f)によれば、同一文中にある Path の表現は経路の順序に一致したものでなければならなかった。ところで(14c)における P_s , P_1 , P_2 はいずれも Path の表現であるので、この三つに S_o と G とを加えた五つの地点は、経路の順序に一致したものでなければならないはずである。ところが実際は、 S_o , P_1 , P_2 , G の四地点を順序づけることはできても、 P_s をこれらのどこに位置づけるかについては適当な方法が考えられない。つまり (14c) に関する限り Stratton の考察(13f)はあてはまらないことになる。すなわち P_s と P_1 , P_2 ... P_n とはもともと異質の表現であると考えざるを得ないわけである。

以上の考察が正しければ、Path の表現に二つのタイプを区別しなければならないことに

なる。以下本章では(4)―(6)型の表現を「Pn型」、(8)―(10)型の表現を「Ps型」、さらに(14c)のように二つの型が混合した表現を「Ps・Pn型」とよぶことにする。これらのうち、(13f)の「同一文中にある Path の表現は経路の順序に一致したものでなければならない」という原則があてはまるのは、Pn型の表現だけである。

さて次の問題は、Ps型とPn型の関係はどうなっているのか、あるいはそれらの本質的な違いはどこにあるかという点である。結論的に言うと、(14c)の例文では Sam の旅程の中にある四つの地点、So, P₁, P₂ およびGは、すべて空間的にPsの中に含まれている、という関係が存在する。すなわち、Japan (So), Seoul (P₁), Shanghai (P₂), Taiwan (G) はすべて East Asia (Ps) の中に含まれている。それ故、Ps と Pn との本質的な違いは、Ps が経路 So, P₁, P₂, ... Pn, G のすべての地点または場所を包括的に含む地域または空間を表わす表現であるという点である。同じことは(15)のPs・Pn型文についても言える。

- (15) a. She walked *Iowa City*(Ps) from the *Court House*(So) to *EPB*(G) *by way of Whiteway*(P₁).
- b. Salmon swam up *the Iowa River*(Ps) from *Iowa City*(So) to *Amana* (G) *through Lake McBride*(P₁).
- c. He walked *that area*(Ps) from *the hill*(So) *across the bridge*(P₁) *through the pasture*(P₂) to the *chapel*(G).

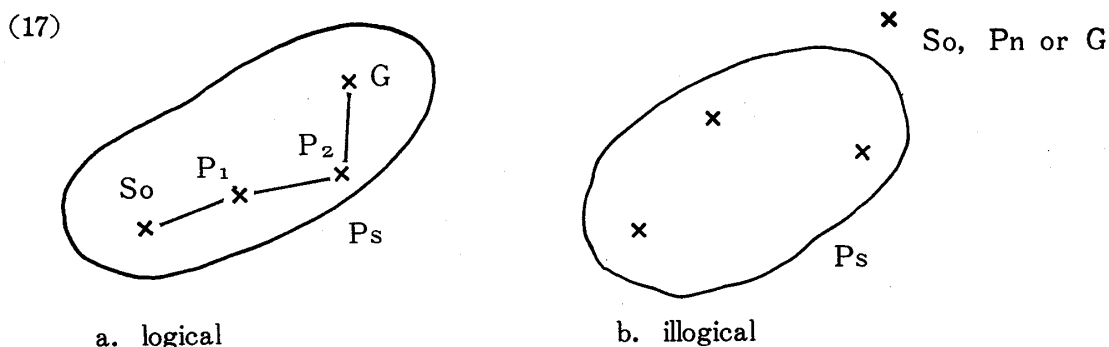
(15a)では、*Iowa City* (Ps) は *Court House* (So), *EPB* (G) (大学の建物), *Whiteway* (P₁) (スーパーマーケット) をすべて空間的に含むという事実と一致しているし、(15b)では *the Iowa River* (Ps) が三つの地点を通過して流れているという事実と矛盾しない。(15c)についても同じことが言える。

ところで「Ps が So, Pn, G を含む」という原則が破られたらどうなるかであるが、その場合は(16)で示すように当然変則的な文になる。

- (16) a. ? Sam toured *East Asia*(Ps) from *Japan*(So) to *South Africa*(G) *by way of Seoul*(P₁) and *Shanghai*(P₂).
- b. ? Sam toured *East Asia*(Ps) from *Japan*(So) to *Taiwan*(G) *by way of Shanghai*(P₁) and *Moscow*(P₂).
- c. * Marco Polo traveled *the Via Appia*(Ps) from *Dallas* to *Mexico City*.

(16a)では *South Africa* (G) が *East Asia* (Ps) の範囲外であり、(16b)では *Moscow* (P₂) が *East Asia* (Ps) の範囲の外にあるので、いずれも上述の原則を破っている。それ

故, (17b) で図示するように, この種の文が変則的な文になるためには, So, Pn, G のうち少なくともいずれかが Ps の範囲外にあれば十分であることになる。また(16c)のように Ps と So, G が全くかけ離れてしまうと, 明らかに非文である。それ故, この種の文が正常な表現であるためには, (17a) で図示する関係が満たされなければならない。



しかし(17a)で示す関係が満たされておれば Ps・Pn 型文はすべて正常文であるかという、必ずしもそうではない。(17a)は, この型の文が変則文でないための単なる必要条件にすぎない。例えば, (18)の文はいずれもこの条件を満たしているにも拘らず, 正常な文とは言えない。

- (18) a. ? Tom traveled *Asia*(Ps) from Tokyo(So) to Atami(G) by way of Yokohama(P₁).
- b. ? Tom toured *North America*(Ps) from Iowa City(So) to Des Moines(G) by way of Amana Colony(P₁).

(18)の二文がおかしいのは, Ps の表わす空間が, 経路にあたるすべての地点を結ぶことによって得られる空間に比べて, 余りに大き過ぎるかまたは余りに広過ぎるからである。このことから, この種の表現が正常であるためには, Ps の表わす空間と経路にあたる地点を結ぶことによって得られた空間との空間的ズレ(あるいは広がり)のズレはできるだけ少ない方がよい, ということになる。従って, Ps と So, Pn, G 間の関係に関して, 任意の Ps・Pn 型文が正常文であるための必要かつ十分条件は, 次の二つの条件が同時に満たされていることである。

- (i) Ps が So, Pn, G の地点を含むこと。
- (ii) So, Pn, G を結んでできた空間と Ps の空間とのズレができるだけ少ない(または認識的に適切である)こと。

これらの考察から容易に理解されるように, 任意の Ps・Pn 型文において Ps によって特定化された空間は, その文の動詞によって記述された運動が生ずる空間であり, 従ってその

空間の中にその運動の経路 (So, Pn, G) が当然含まれることになる。他方経路の通過点 Pn は、時間的経過に一致してその運動の経路を表現する。注意しなければならないのは、Ps と通過点との間には時間的優先関係は何ら存在しない点である。時間的優先関係は、通過点相互間だけに存在する (この点の指摘も Stratton が見落している部分である)。それ故、任意の Ps・Pn 型文における二つのタイプの Path 表現の機能は、それぞれ独立しているということではなくて、互いに相補的であると言うべきである。すなわち、同一の運動の同一の経路を二つの角度から表現しているわけである。一つの角度 (すなわち Ps) は、運動が行なわれる空間を包括的に表現する機能を持ち、もう一つの角度 (すなわち So, Pn, G) は、その運動の具体的な経路を時間的経過と一致して特定化し表現するという機能を持っている。それ故、Ps・Pn 型という混合文ではなくて、Ps だけ生ずる Ps 型文は、この最初の機能を重視した表現と言えるし、また Pn だけ生ずる Pn 型文では二つ目の機能を重視した表現ということになる。

なおこの章のもとになった拙論(1974)の原稿に目を通した D. C. Bennett は私信の中で、二つの角度からの Path の表現の機能が “in apposition” の関係にあるとしているが、これは上に述べた筆者の考え方と本質的に一致するものである。彼は Ps ではなく、‘sink’ に内含された Path の概念と Pn との関係について説明しているが、議論の本質においては変わりはない。次は関連する箇所の引用である。

Let us consider your example : *The cannon-ball sank to the bottom of the pool past the spot where I had swum a few seconds before.* The two candidates for path expression status are (1) *sank* and (2) *past the spot* ... Certainly there's no question of any temporal sequence here of the kind that would have either (1) taking place prior to (2), or (2) prior to (1). If one wants to look at the situation in this way, then presumably (1) takes place both prior to and simultaneously with and after the completion of (2). ... I agree with Stratton that the notion 'path' is part of the meaning of *sink*. Where I think he goes wrong is in not recognizing the possibility that two path expressions may be *in apposition*. This is what we have in your example. Rather than having two successive paths, we have a single path which is specified by means of two path expressions, each of which focuses on a separate feature of the physical situation - on the one hand, the path was a downward one ; on the other hand, it took in the vicinity of the spot where...

ここで運動の動詞に内含された Path の概念 (the incorporated Path) と Ps との関係

について一言触れておかなければならない。結論的に言えば、Ps とは運動の動詞に内含された Path の概念が特定化され表現されたもの、と行うことができよう。それ故、動詞が他動詞（略して Vt とする）である文中で Ps が現われない Pn 型の場合は、もともとそれを特定化する必要がなかった場合か、あるいは、前後の文脈からそれが明らかである場合、ということになるであろう。なお動詞が自動詞（Vi と略す）の場合は、次節(29)で詳説するように、文の性質上 Pn 型の文しか現われない。

この節の最後に触れなければならないのは、Path の表現は単一の文中で制限なく繰り返すことができるという点についてである。すでに(11)で示したように Pn は同一文中で制限なく繰り返されてよいが、面白いことに Ps もまた次に示すように制限なく繰り返して用いられてよい。

(19) Sam traveled Japan(Ps₁), India(Ps₂), Iran(Ps₃) ... Egypt(Ps_n).

しかも(19)の場合、Ps₁, Ps₂ ... Ps_nの間には時間的順序の原則が生きていて、少なくとも論理的には、この順序に従って 'travel' がなされたと理解されるのが普通である。(19)は Pn 型文ではないかという意見もあろうが、(20a)のような Ps・Pn 型文もあるので、やはり Ps もまた制限なく繰り返して用いられてよいということになるろう。

(20) a. Sam traveled Japan(Ps₁), Korea(Ps₂) and China(Ps₃) from Tokyo(So) to Peking(G) via Seoul(P₁) and Shanghai(P₂).
b. ? Sam traveled Korea(Ps₁), Japan(Ps₂) and China(Ps₃) from Peking(So) to Seoul(G) via Tokyo(P₁) and Shanghai(P₂).

(20a)の場合、Ps グループ(Ps₁, Ps₂ ... Ps_n)と通過点との間には時間的優先関係はもちろんないが、少なくとも論理的には、Ps グループの時間的経過の順序 (Japan → Korea → China) が経路 (So, P₁, P₂, G) における時間的順序 (Tokyo → Seoul → Shanghai → Peking) と一致しなければならないという制限が考えられる。しかしこれは、その制限を破った(20b)の文が不自然であることから、当然支持されるべき原則であるといえよう。

3.3. 運動の動詞と Path の表現

すでに(7)で示したように、運動の動詞の多くはその意味の中に Path の概念を内含している。(13f)で示した Stratton の指摘の通り、Path と共起できる動詞は正しくこの Path の概念を内に含む動詞に限られると行うことができる。しかし、この種の動詞がすべて二種の Path の表現と共起できるわけではなく、そこにはいくつかの重要な制限があるように思われる。この節では、Path の概念を内含する運動の動詞と二種の Path の表現との関係に

ついて、三つの角度から考察したい。

まず第一の点は、Path の表現と共起できる動詞とできない動詞の特徴の差異について、第二の点は、Path の表現と共起できる動詞のうち、Ps を取り得るものと取り得ないものの区別について、最後は Path と Object の関係についてである。

Gruber (1965) によれば、位置の動きを表わす運動の動詞の意味的特徴は、次のように形式化され得る。

- (21) $\left[\begin{array}{c} V \\ \text{Motional} \\ \text{Positional} \end{array} \right]$

しかし、(21)の特徴を持つすべての動詞が Path の表現と共起できるかという点、そうではない。例えば、(21)を満たす二つの動詞 *cross* と *reach* をみてみよう。これはともに [+Motional] かつ [+Positional] であるが、興味深いことに両者の間には、(22)で示すような機能上の差異が存在する。

- (22) a. Harry crossed *the bridge*(Ps).
b. Harry reached *the bridge*(G).

つまり 'cross' は Ps を取り得るのに、'reach' は Ps を取り得ず、(22a) の Ps に相当する表現が(22b)では Goal になってしまうという意味上の差異である。すなわちこの限りでは、'cross' は Path の表現と共起し得るが、'reach' は共起し得ないことになる。

ごく一般的に言って、Path の表現と共起できる動詞は、次のように規定することができるであろう。

- (23) 二つの空間的に異なる位置の間を何らかの連続的な運動（例えば「歩く」のような）を伴って線的に移動する動作を表わす動詞

(23)で規定されるような動詞が表わす運動というのは、「二つの空間的に異なる位置の間」の線的な動きであるから、必ず Source と Goal を含むはずである。そうすれば当然 Path が係わり合いを持つことになる。というのは、Path のない So と G は考えられないからである。それ故、Path と共起できる動詞というのは、(23)の規定を満たすものでなければならず、逆に(23)を満たすものであれば、Path と共起できると言える。(23)で表わされた特徴を(21)にならって形式化すると、(24a)かまたは(24b)のようになるが、ここでは構造記述が簡単である(24a)の方を採用したい。

- (24) (a) $\left[\begin{array}{c} V \\ \text{Motional} \\ \text{Positional} \\ \text{Path} \end{array} \right]$ or (b) $\left[\begin{array}{c} V \\ \text{Motional} \\ \text{Positional} \\ \text{Source} \\ \text{Goal} \end{array} \right]$: cross, swim, drive, etc.

なお 'reach' のように通常は Path の表現と共起しない動詞は、次のように規定できよう。

- (25) 特定の空間的位置に関連して終止したり開始したりする運動を表わす動詞

これらの動詞についても当然 Source と Goal が関係してくるが、重要な点は Source と Goal が同時に関与することがない点である。それ故、(25) の特徴を持つグループの動詞は、次のように形式化され得る。

- (26) (a) $\left[\begin{array}{c} V \\ \text{Motional} \\ \text{Positional} \\ -\text{Path} \end{array} \right]$ or (b) $\left[\begin{array}{c} V \\ \text{Motional} \\ \text{Positional} \\ -(So \cdot G) \end{array} \right]$: reach, leave, start, etc.

ここでは(24a)との関係から(24a)と対照的な(26a)を採用することにする。

ところでこれまでの考察から明らかなように、一つの文中で Path の概念は三つの文法的に相異なる形態によって表現される可能性があると言える。すなわち、

- (イ) 動詞の意味の中に含まれる場合
- (ロ) Ps として表わされる場合
- (ハ) So, Pn, G といった経路点で表わされる場合

の三つである。この節で考察する第二の点は、(24a)で規定された動詞がすべて Ps 型文、Pn 型文および Ps・Pn 型文に制限なく用いられるかどうかという問題である。

'cross' も 'go' もともに(24a)を満たす動詞であると思われるが、両者の使用範囲はいくつかの点で互いに異なっている。次の(27)、(28)のうち、(28a)、(28d)、(28e)がいずれも非文である点に注意されたい。

- (27) a. Tom crossed the bridge(Ps).
 b. Tom crossed from the bank(So) to the post office(G).
 c. Tom crossed from the bank(So) to the post office(G) by way of the

marked point in the middle of the street(P).

- d. The car crossed the bridge(Ps) from Minneapolis(So) to St. Paul(G).
 e. The car crossed the bridge(Ps) from Minneapolis(So) to St. Paul(G)
 by way of the designated spot on the bridge(P).
- (28) a. *Tom went the bridge(Ps).
 b. Tom went from Minneapolis(So) to St. Paul(G).
 c. Tom went from Minneapolis(So) to St. Paul(G) by way of the designated spot on the bridge(P).
 d. *The car went the bridge(Ps) from Minneapolis(So) to St. Paul(G).
 e. *Tom went Japan(Ps) from Tokyo(So) to Fukuoka(G) by way of Kyoto(P).

まず(28b)と(28c)が非文でないことから, 'go' が(24a)のグループに属する動詞であることがわかる。また(28a), (28d), (28e)の非文は, 'go' が Ps を取らない動詞であることを明らかにしている。ところでこの [-Ps] という特徴は, 別の表現を用いれば [+intransitivity] (以後 [+Vi] と表記する) ということであるから, 'go' のように Pn 型しか取らない動詞は $\begin{bmatrix} \text{Vi} \\ \text{Path} \end{bmatrix}$ として, また 'cross' のようにすべての型を取り得る動詞は $\begin{bmatrix} \text{Vt} \\ \text{Path} \end{bmatrix}$ として, より一般的に記述することができよう。これらの考察をふまえて, Path の表現と共起できる動詞の "pre-lexical structure" (語彙化される前の構造) を考えてみると, 次の(29)のように表わすことができる。ここで { } は二者択一を, () は選択的 (optional) であることを意味する。また 'α' は '+' か '-' の変数を意味し, '+' のときその特徴が存在し, '-' のとき存在しないことを表わす。すなわち '+' のとき $\begin{bmatrix} +\text{Vi} \\ -\text{Vt} \\ \vdots \end{bmatrix}$ (-Ps) (…)… となり, Vt および Ps は(29)には現われないことになる。逆に '-' の値のときは Vi がなく, Vt と Ps が存在する。つまり, αがプラスのときは 'go' のような動詞を, αがマイナスのときは 'cross' のような動詞のグループを表わすことができる。すなわち(29)は, 変数を用いることによって Ps 型, Pn 型, Ps·Pn 型の表現を総合的に記述したものである。

$$(29) \left[\begin{array}{l} \{ \alpha\text{Vi} \\ -\alpha\text{Vt} \} \\ \text{Motional} \\ \text{Positional} \\ \text{Path} \end{array} \right]_{\text{v}} \quad (-\alpha\text{Ps}) (\text{So}) (\text{Pn}) (\text{G})$$

なお(29)を(3)であげた Stratton の考察による構造と比較されたい。彼の構造記述では Path の表現の二つのタイプの違いが反映されていない。また(13a)でまとめられている

Stratton の考察、「Path の概念を含み持つ動詞はほとんど制限なしに Path の表現と共起できる」という考察も正確とは言えないことが明らかであろう。

この節の最後に取りあげておきたいことは、Path と Object との関係についてである。Stratton の考察の(13d)によれば、「Path 以外の格については Accusative Marking Rule が eligible なときは必ずそれをうけなければならないが、Path に関しては、それが eligible な場合は optional である」とある。(13d)を一読しただけでは、Path に関して「eligible でない場合」が明らかでないかに見えるが、結論的に言えば、それは他の格と Path とが同一文中に共起した場合のことであって、そのときは他の格は必ず Accusative Marking をうけなければならない、従っておのずから Path は Accusative Marking をうける資格がないことになる。次の例は Path と Object が同一文中に共起した場合である。

- (30) a. Sue drove Interstate 80(Ps).
 b. Sue drove along Interstate 80(Pn).
 c. Sue drove her car(O).
 d. *Sue drove her car(O) Interstate 80(Ps).
 e. *Sue drove Interstate 80(Ps) her car(O).
 f. Sue drove her car(O) along Interstate 80(Pn).

(30e)と(30f)から明らかなように、O と Ps が共起した場合には Accusative Marking Rule の優先権は O の側にある。O が同一文中にない場合は、(30a)のように Ps が Accusative Marking をうけてもよいし(30b)のようにうけなくてもよく、(13d)で述べられているように optional である。

なお Accusative Marking をうけない(30b)のような場合、Path の表現の機能が異なる点に注意しなければならない。(30a)においては“Interstate 80”は明らかに Ps であるが、(30b)の“along Interstate 80”は Path の表現である。これを Pn と判断する理由は、次のように(30b)に Ps を挿入した表現が可能であることによる。

- (30)' Sue drove Iowa(Ps) along Interstate 80(Pn).

そして Sue の運転した“Interstate 80”は、Iowa 州の中に含まれている。それ故、Accusative Marking をうけるかうけないかの問題は、単に統語上の eligibility の問題ではなく、話者が Path の表現をどのように捕えて表現したいのかという、話者の表現上の intention と係わりあいを持つ、と考えなければならない。(30a)では“drove her car”に表現の中心があり、一方、(30)'では“drove Iowa”が表現したいことの中心である。また Ps のない(30b)は、3.2. で述べたように、Ps が前後の context から明らかであるか、あるいは

記述の必要のない context での表現であり、そういう状況の中での “drove along Interstate 80” である。(30a) は ‘along’ がいないので Ps 型であり、特別の州とは係わりなく、とにかくアメリカ大陸を横断している “Interstate 80” を走った、という表現意図を持った “drove Interstate 80” である。

3.4. Path の表現と Place の表現

Fillmore は “The Case for Case” (1968a) の中で、「位置」と「方向」の解釈を持つ格として、単一の “Locative” を提案したが、その後この考えを修正し Fillmore (1971) で九つの格を示したことは、先に述べた通りである。この九つの格のうち、位置と方向に関する格は、Source, Goal, Path, Place の四つであり、このうちの前者三つが通過地点に関係するものであることは、これまでみてきた通りである。

そこで Path と Place の相違点であるが、どちらも運動の動詞が表わす動作内容と密接に関係して位置的状况を表わしている、という点では共通している。しかし、決定的な両者の違いは、Path の表現がその位置的状况を線的に規定するのに対し、Place の表現はそれを点的に規定する点である。いますこしこの点を詳しく述べれば、Path の表現と共起することができる動詞は普通線的な動きを伴う動作を表わすので、その空間規定の表現は必然的に Ps, So, Pn, G と係わりあいを持ってくる。一方、Path の表現と共起できない動詞（すなわち [-Path] の特徴を持つ動詞）は、線的な動きではなく本質的に静止的な特性を持つため、その空間規定の表現は必然的に特定の空間点か領域を表わす表現、すなわち場所 (Place) の表現にならざるを得ない。つまり動詞の意味的特徴において、動作位置に関して動的か静的かの違いがあり、それが [+Path], [-Path] の区別となって反映されていると考えてよからう。この考え方に従うと、同一文中で Path と Place の表現が共起することはないということになるが、筆者にはそれが事実のように思われる。概念的には、(23) で規定されたような線的な動きを伴う運動が特定の空間で生ずることはごくあたり前のことであるので、この種の動詞に対して Place の表現が用いられて当然と言えるが、そのように用いられた Place の表現が、実際には Ps の表現となるところに、動詞の性質の差をはっきりと認識させられるわけである。しかし、話者の表現心理としては、Place の表現も Path の表現も本質的には同質のもの（すなわち Locative の表現）であることはまちがいあるまい。ただ意味論的には、[+Path] の動詞の場合には Path の表現が対応し、[-Path] の動詞の場合には Place の表現が対応することになる。

具体例をみてみよう。(31) は Place の表現であり、(32) は Path の表現である。

(31) Sam sat in the park under a tree on a bench.

- (32) a. Sam drove from Chicago(So) to San Francisco(G) via Joliet(P₁),
Bloomington(P₂), Springfield(P₃), ... San Bernardino(P_n).
b. Sam toured Japan(Ps₁), Taiwan(Ps₂), India(Ps₃), ... Iran(Ps_n).

(31)の Place の表現は、一つの特定の地点を三つの表現要素でもって段階的に狭めていく形式になっている。つまりこの種の表現では、特定の地点や領域を複数の要素でもって可能な限り狭めていき、それをより一層正確に記述できるしくみになっている。これに対して Path の表現では、So と G の間の Path、すなわち P_n は線的な経路であるから、(32 a)で示す通り経路を沢山の地点に区分することができ、区分が細かければそれだけ一層経路が正確に表現できるしくみになっている。この点に関しては Place の表現と Path の表現はほぼ共通した性格を持っていると言える。ところが(32 b)のような Ps 型の文では状況が違ってくる。Ps 型文では、経路点が含まれる空間または地域 Ps だけが与えられていて、その経路については全く implicit であるので、(33)のように Ps をいくら細かく分割したところで経路がより明確になるものでは決してないのである。

- (33) *? Sam drove Southern Japan(Ps₁'), Northern Japan(Ps₁''), Southern Taiwan
(Ps₂'), Northern Taiwan(Ps₂''), ...

4. 結論

以上本章では、Path の表現の文法的側面をある程度詳しく調べながら、運動の動詞と Path の表現の関係を中心にいくつか私見を述べてきた。結論的に言って、Stratton の考察の基本的な誤りは、Path の表現に二つのタイプがあることを認識しなかった点である。その結果として、(13)に示した彼の考察のうちのいくつかは言語事実と反することになった。例えば、(13 a)と(13 d)は Ps 型の表現にだけあてはまるものであり、また(13 f)は Pn 型の表現にしかあてはまらない。

第三章の考察から明らかになったいくつかの重要な点をまとめてみると、次のようになる。

- (a) Path の表現には二つのタイプがある。Ps 型と Pn 型である。この二つのタイプが同一文中に共起したものが Ps・Pn 型である。
(b) 運動の経路を表わす文法要素は Source と Pn と Goal である。これらはすべて Ps の表わす空間または地域に含まれる。
(c) 経路点 So, Pn, G を結んでできた空間と Ps の表わす空間との空間的ズレは、できるだけ小さいか、または認識的に適切と思われる程度でなければならない。
(d) Ps の空間と経路点 (So, Pn, G)の間には、経路順に関して優先関係は何ら存在しない。

あるのは So, Pn, G 間においてであり, 特に P₁, P₂, ... P_n の表記の順序は, 実際の経路の順序に一致しなければならない。

- (e) 複数の Ps が同一文中に現われる場合には, 少なくとも論理的には, それらは経路の順序と矛盾したものであってはならない。
- (f) Path の表現と共起できる運動の動詞の内的構造および Path の表現の “case frame” は, 次のように一般化できる。

$$\left[\begin{array}{l} \alpha V_i \\ -\alpha V_t \\ \text{Motional} \\ \text{Positional} \\ \text{Path} \end{array} \right]_v \quad (-\alpha P_s) (S_o) (P_n) (G)$$

- (g) Ps が Object と同一文中に共起するときは, Accusative Marking の優先権は, 常に Object の側にある。
- (h) [+Path] の特徴を持つ運動の動詞の Locative は Path の表現となり, 一方 [-Path] の特徴を持つ運動の動詞の Locative は Place の表現となる。

Path の表現には, Ps 型文, Pn 型文および Ps・Pn 型文の三つのタイプがあるが, これらのタイプの表現機能は互いに異なっている。Ps 型文は, 運動が行なわれる空間全体との係わりあい重点をおいた表現である。これに対し Pn 型文は, 運動が行なわれる個々の空間点との係わりあい重点をおいた表現であり, それ故, Ps がすでに context から明らかであるか, あるいは表現の必要性のない状況において用いられる。また Ps・Pn 型文は, この両方の特徴を兼ね備えた表現形式であり, その意味でこの表現のもつ情報量は大へん大きいということになる。

なお Ps, Pn が表現に全く現われないけれども動詞が [+Path] の特性をもつ次のような表現の場合も, 明らかに一種の Path の表現と言える。

The cannon-ball sank to the bottom of the pool.

このタイプの表現を考慮すれば, Path の表現のタイプは, 上述の三つのタイプに加えて, このような P が全く現われないタイプを付け加える必要があるであろう。また Path の概念が表現として現われる可能性も全部で三種類, すなわち, [+Path] の動詞, Ps, Pn の三つである。

第 四 章

「形容詞＋名詞」構造における内包的特殊化の機能

1. 序

本章の目的は、「形容詞＋名詞」の統語構造を持つ表現のうち、形容詞が名詞を内包的に特殊化する関係に焦点をあわせ、その修飾関係の特徴を明らかにすることである。便宜上「形容詞＋名詞」の統語構造を「AN 構造」とよぶことにする。

まず内包的特殊化の形容詞とはどういうものかを規定しなければならないが、その前に AN 構造を次の四点から規定しておきたい。第一に、範囲を Jespersen の Direct Adjuncts (1913, Pt. II, Ch. XII, 12. 17.-12. 59.) に限定する。従って彼が Indirect Adjuncts とよんだ次の四項目は除外される。

- (1) Shifted Subjunct-Adjuncts : 他の構文的な語結合から移行されたもの、例えば、
an early riser (← *he rises early*)
perfect simplicity (← *perfectly simple*)
- (2) Partial Adjuncts : 派生または複合の結果、AがNの一部を特殊化する形をなすもの、例えば、
the Pacific Islanders (← *the Pacific Islands*)
a public schoolboy (← *a public school*)
- (3) Compositional Adjuncts :
a sick room などの複合語。
- (4) Other Indirect Adjuncts :
mid-ocean, half this amount など。

第二に、Jespersen の Direct Adjuncts にはNの外延を規定する *this* や *any* なども含まれるが、本章では次の如き「限定辞」(石橋(1966), Pt. I, 6, 11. 1a. による)は取り扱わない。

- (1)冠詞 (2)指示形容詞 (3)名詞の属格 (4)人称代名詞の属格 (5)代名形容詞
- (6)数詞 (7)その他

第三に、後置の形容詞および形容詞的とよばれているものは取り扱わない。例えば、中島(1961)の次の三項目は除外される。

- (1) Predicative Modifier :

a man *carrying a bag* ; a man *in action*

(2) Appositive Modifier :

Elizabeth, *Queen of England*

(3) Relative Modifier :

a lover *of music* ; a letter *from London*

第四に、‘be’ 動詞以外の動詞構文から変形された AN 構文（例えば、the *snow-enshrouded* countryside）は取り扱わない。

以上の四点から規定された AN 構造を一般の AN 構造から区別するために、以後

S(X)-N 構造

とよぶことにする。‘S(X)’ は形容詞に相当し、‘S’ は Specifier（特殊化詞）、‘X’ は S の機能的性格を表わす記号の一般記号である。

2. S(X)-N 構造の分析

ところで S(X)-N 構造では大抵の場合

$$S(X)-N \iff N \text{ is } S(X)$$

という関係が成立するようにみえる。しかしよく検討してみると S(X) と N との関係が一樣ではなく、少なくとも次の五つの型が区別できる。

- I. S(X) が N を内包的に特殊化する場合
- II. S(X) が N を外延的に特殊化する場合
- III. S(X) が N の指示関係の妥当性を判断する語である場合
- IV. S(X) が N の指示関係を修正する語である場合
- V. S(X) と N との関係が以上のいずれでもない場合

第一の型はごく普通の特殊化の関係で、非偶有性の差はあるにせよ、いずれも N の内包的特徴を特殊化している。この種の形容詞を S(I) とよび、この型を S(I)-N 構造（‘I’ は Intension の意）と名づける。

- (I) a *red* rose, a *sincere* person, an *interesting* story,
a *young* genius, a *small* house

この型の特性は $S(I)-N \iff N \text{ is } S(I)$ という関係が成立することである。それ故、S(I) は R. B. Lees (1966) のいう “the bona fide adjective” (p. 180) に相当すると考えてよい。

これに対して第二の型は、N を外延的に規定する関係で、これには(a)時間的規定、(b)空間

的規定, (c)指示的關係の規定, (d)所屬の規定などがある。この種の形容詞を S(E) とよび、この型を S(E)-N 構造とする。Eは Extension の意味である。この型では

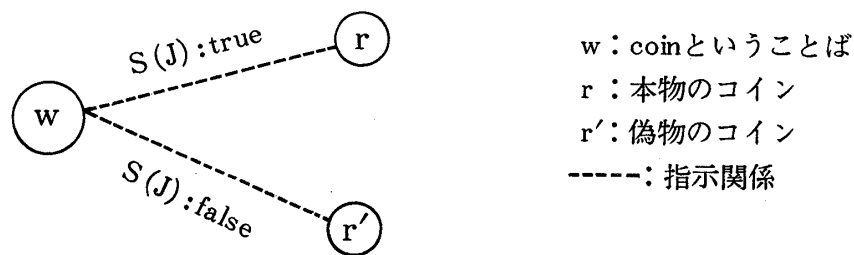
* S(E)-N \iff N is S(E) という関係は成立しない。

- (II) (a) *previous experiences, the most recent example, their present indignation, tomorrow morning, his future yield*
 (b) *the following replies, the ensuing chapters, the next room*
 (c) *a different atmosphere, a similar folly, the same experience, a corresponding amelioration, the various concepts*
 (d) *Russian proposals* (cf. Khrushchev's proposal)

第三の型は、形容詞AがNとその被示体との指示關係に対してその是非の判断を示す關係である。この種の形容詞を S(J) とし、この型を S(J)-N 構造とする。Jは Judgement の意味である。

- (III) *a false (or real) coin, a sham diamond, our true sentiments, our real feelings, its exact meaning*

“a false coin” の ‘false’ とは、coin という名称が本来外延として適用されるべきはずのものと現実にそれが適用されているものが同一かどうかについて下した反省判断であって、coin の指示關係に対する一種のメタ言語の關係にあると言ってよい。coin や diamond のような名称は通常は本物に対してのみ用いるので指示作用が一定であるのに対し、後の三例では、名詞要素の指示作用が任意であるために、それを規定するための ‘our’ や ‘its’ が不可欠である。



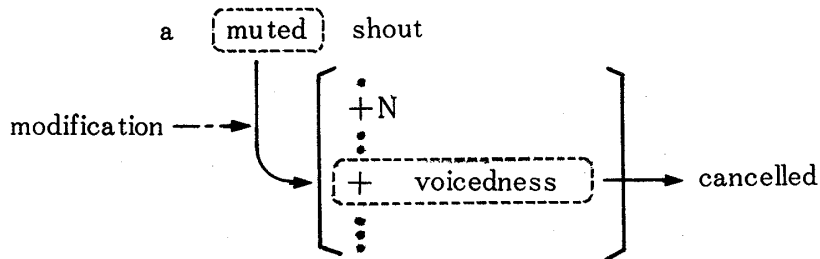
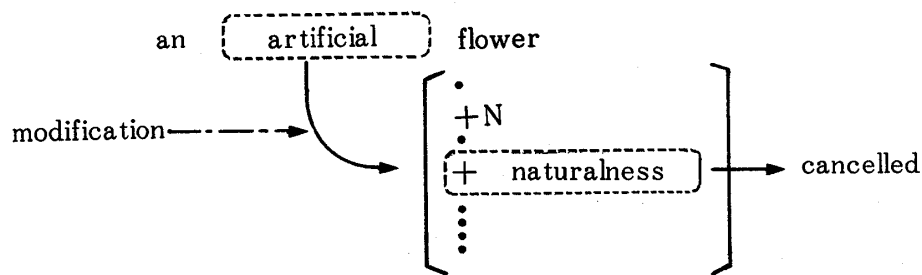
〈“a false coin”の場合〉

“our true sentiments” の場合は、“it is true that those sentiments are ours” という反省判断が含まれていると言ってよい。

第四の型は、第三の型の関係を前提としたものであって、否定的反省判断の上にさらに識別が加えられ、その結果として一般に Modification (修正) と言われる表現となったものである。この種の形容詞を S(M) とし、この型を S(M)-N 構造とする。

- (IV) an *artificial* flower, a *man-made* satellite, a *painted* flower, a *miniature* train, a *muted* shout, a *horseless* carriage, the *silent* (or *non-verbal*) language

“an artificial flower” という表現には、詳しく言えば「これは本来の意味の ‘flower’ ではないが、『ある種の flower』と言える。その『ある種の』とは、正確に言うなら ‘artificial’ ということだ」という識別が含まれていると考えられる。このメカニズムを図示すると、次のようになる。



つまり “a flower” に形容詞 ‘artificial’ を付加することの意味は何かと言うと、flower の本質的な意味素性のうちの一つ [+naturalness] (artificial と矛盾関係にある意味素性) が cancel され、それに代って [+artificialness] が素性の一つに付加されたということである。“a muted shout” の場合も同じであって、‘muted’ が付加されることにより、[+voiced] が cancel されている。要するに、Nの持つ本質的な意味素性の一つと矛盾関係にある語が S(M) として選ばれている点がこの型の特徴である。

このように述べてくると、S(M) が付加されたが故にNの意味素性が cancel されたかのように受けとれるが、話者の言語心理に立ち返って言えば、恐らくその逆であって、それぞれの場合 [+naturalness] および [+voicedness] の素性が欠如しているという判断が先

行し（すなわち “it is a false flower” ; “it is a false shout” のような判断が先行し）、然るのちに、その意味素性を補うために S(M) を付加し修正した、とするのが適当であろう。それ故、この型の表現の場合、話者の言語心理においては、“it is a false flower” という判断と “it is artificial” という判断が二重に重なり合っていると解釈すべきで、その表層構造における表現が “an artificial flower” ということになる。

第五の型は、以上の四つの型のいずれにも属さないものの総称であり、便宜上 S(Y)-N 構造と名づける。

(V) the *educational* system, the *international* language, the same *historical* relation, the *standard* phrase, a totally new *psychological* reality
cf. a *dental* surgeon, the *elementary* school

これらの表現では、S(Y) と N との関係が深層的にはそれぞれ異質であり、それがたまたま表層的に「形容詞+名詞」の構造をとったものと考えられる。それ故、当然のことながら

* S(Y)-N \iff N is S(Y)

という関係は一般に成り立たない。例えば、

* the system is educational

* the language is international

は意味をなさない。これらの表現の裏には、それぞれ、

the system for education

the language for international use

といった深層的判断があるように思われる。この型には、結合の程度に差はあるが、最後の二例のように、複合名詞化していると考えてよいものがかなり含まれ得る。明らかに複合名詞と判断されるものは、前節で述べた通り *compositional adjuncts* であり、AN 構造から排除される。

以上、五つの型の S(X)-N 構造をみてきたが、本章の目的は形容詞の内包的特殊化の機能の考察であるので、II, III, IV, V の型については、以下議論の展開に特に関係のない限り、触れない。3 節からは、S(I)-N 構造を中心に議論を進める。

3. 議論の順序

内包的特殊化の機能を明らかにするということは、S(I)-N 構造の S(I) と N との関係を明らかにするということである。この関係を明らかにするために、以下議論を三つの段階に区切って考察を進めていきたい。

まず 4 節では、S(I)-N 構造とは直接に関係ないかに見えるかもしれないが、“red-hair-

ed girl” に類する臨時的複合形容詞の構造を取りあげ、‘red-haired’ と ‘girl’ との関係を考察する。

5節では、4節の考察に基づいて、“an open-hearted gentleman” や “a mustard-colored cardigan” などの臨時的限定形容詞が ‘kind’ や ‘yellow’ などの S(I) の形容詞と類似性を持つことが指摘され、S(I) が N の何を特殊化しているかが明らかにされる。

6節では、S(I) と N との関係が、「認識的意味」の概念体系と「表現的意味」の概念体系という二つの側面から考察され、さらに S(I) の持つ偶有性のテストの方法が述べられる。

4. ‘Red-haired’ に類する複合形容詞

‘red-haired’ に類する複合形容詞については拙論(1970)で多少議論されている。しかしここでは議論が主に表層構造に関してなされていたために、規則や制約がかなり複雑になっているのが欠点であった。それ故本節では、専ら underlying structure における意味的・統語的制約に注目しながら、この種の表現の持つ生成規則を一層簡潔な形式で取り出してみたいと思う。以下これらの表現に関して、まず

- (i) Semantical Constraints (意味上の制約),
- (ii) Syntactical Rules (統語規則)

を明らかにする方向で考察を進めたい。

4.1. 意味上の制約

(1) に示す複合形容詞は共通して ‘-haired’ という要素を持っており、いずれもその共通要素に ‘red-’, ‘white-’, ‘grey-’, ‘black-’ といった言わば変数的要素が結合されてできたものと考えられる。いまこの変数的要素を ‘X-’ で置きかえてみると(1)の複合形容詞は ‘X-haired’ という一般的形式で表わすことができよう。

- (1) red-haired, white-haired, grey-haired, black-haired, etc.

ところが(2)の諸例をみると、この ‘X-haired’ という形式もまたそれを一つのメンバーとするさらに大きな語群、つまり ‘X-Y-ed’ (Yは名詞要素)として一般化されうる語群の中に含まれていることがわかる。

- (2) a red-haired woman, a big-nosed man, a red-faced old woman, a dark-eyed girl, etc.

以上のことから、‘red-haired’ に類する複合形容詞とは、Xを形容詞的要素、Yを名詞要素とするとき(いずれも変数) ‘X-Y-ed’ として一般化されうる複合形容詞のことであると規定できよう。

ところで、複合形容詞 ‘X-Y·ed’ によって修飾される名詞要素をいま ‘Z’ とすれば、(2) の諸例はいずれも(3)のように書き変えることができる。なお便宜上冠詞は省略する。

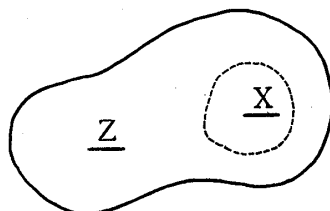
(3) X-Y·ed+Z

ここでまず重要なのは、Yの指示するものとZの指示するものが物理的にまたは属性的にどのような関係にあるかということである。この点については OED (s.v. -ed) の説明が有益である。

- (4) The suffix is now added without restriction to any sb. from which it is desired to form an adj. with the sense ‘possessing, provided with, characterized by’ (something); e. g. in *toothed*, *booted*, *wooded*, ... etc., and in parasynthetic derivatives, as *dark-eyed*, *seven-hilled*, *leather-aproned*, etc.

つまりその関係とは、「YはZの物理的または属性的構成要素である」という関係である。(以下Y, Zのように下線の付された名詞要素は、その語に示された referent そのものを表わすものとする。) すなわち簡単に言えば、(5)に図示するように、ZとYとの関係は「全体とその一部分」という関係である。

(5)



X: accidental or
necessary

それではZの存在がYの存在をいつでも imply しているかという、必ずしもそうではない。例えば、“a red-haired girl”における girl (Z) と hair (Y) との間では、girl の存在が必然的に hair の存在を imply しているが、“a long-tailed animal”においては animal (Z) の存在は必ずしも tail (Y) の存在を imply しているとは限らない。何故なら tail のない animal は沢山いるからである。従って後者の場合は animal (Z) と tail (Y) との関係は必然的ではなくて偶然的な関係といわなければならない。これらのことから Z と Y の間の全体と部分の関係には、必然的な関係と偶然的な関係があることがわかる。

さて以上の考察を念頭において(6)の表現が何故文法的でないかを考えてみたい。

- (6) a. *a haired girl
b. *a nosed man
c. *a faced man

d. *an eyed girl

例えば(6a)の場合, その underlying structure はおよそ次のようなものであろうと考えられる。ここで 'HAVE' は所有を表わす抽象的な動詞である。

(7) *a girl [a girl HAVE hair]
_s _s

(7)のはめこみ文 S が文法的でない理由は, 特殊な presuppositional condition がない限りそれは何の意味も持たないからである。つまり常識的な状況では, girl という物理的存在物は, 必然的に hair という物理的存在物の存在を imply しているから, このはめこみ文 S は新たな事実については何も伝えていない分析文になっているわけである。そこでこの分析的なはめこみ文 S が何らかの新たな事実を伝達する表現になるためにはどうすればよいかということになるが, それは girl と hair との存在関係が必然的な存在関係ではなくて, 偶然的な存在関係になることである。すなわち, 'hair' を例えば 'red hair' で置きかえると, girl と red hair との関係はもはや必然的な存在関係ではなくて偶然的なものである。何故なら red hair をもたない girl は無数に存在していて, girl の存在が必ずしも red hair の存在を imply しているとは限らないからである。これらのことから(7)が文法的な構造になるためには "red hair" を導くもう一つのはめこみ文 S' を持たなければならないことになる。

(8) a girl [a girl HAVE hair [hair BE red]]
_s _{s'} _{s' s}

ところで "a red-haired girl" の例は Z (girl) と Y (hair) との存在関係が必然的な場合であったが, これが(9)に示すように Z と Y とが偶然的な存在関係にある場合はどうなるであろうか。

(9) a long-tailed animal, a tailed animal, a verandahed house, a white-verandahed house, etc.

(9)においては Z (animal, house) の存在は必ずしも Y (tail, verandah) の存在を imply しない。何故なら tail のない animal は沢山いるし, verandah のない house も沢山あるからである。従ってこれらの場合は, Z と Y の存在関係が最初から偶然的であるために, はめこみ文 S が分析的であるという理由で非文法的になることはないのである。つまりはめこみ文 S は最初から分析的ではあり得ないのである。

(10) an animal [an animal HAVE tail]
_s _s

なお(10)の構造が(11)のようにもう一つのはめこみ文 S' を持つ場合も当然その文法性には問題はない。いずれも Z と Y との関係が偶然的であることに変わりはないからである。

(11) an animal $\left[\begin{array}{c} \text{an animal HAVE tail} \\ \text{S} \qquad \qquad \qquad \text{S}' \qquad \qquad \qquad \text{S}' \text{ S} \end{array} \right]$

以上の考察から *a haired girl の如き非文法的表現が生成されないために、表層構造 'X-Y·ed+Z' の underlying structure :

(12) Z $\left[\begin{array}{c} \text{Z HAVE Y} \\ \text{S} \qquad \qquad \text{S}' \qquad \qquad \text{S}' \text{ S} \end{array} \right]$ [Y BE X]

におけるはめこみ文 S に関して、次のような Semantical Constraints が働いていると考えられる。

- (13) [A] Z の存在が、その物理的または属性的構成要素として、 Y の存在を必然的に imply するときは、 X が必ず要求される。
 [B] [A] が満たされないときは、表層構造を生成する変形はブロックされる。
 [C] Z の存在が、その物理的または属性的構成要素として、 Y の存在を必然的に imply するのではないときは、 X は必ずしも要求されない。

(13C) が述べていることを吟味してみると、要するに「 Z が Y を必然的に imply するのではないときは、(12)の文法性に X は無関係」だということである。そうすると、表層構造 "X-Y·ed+Z" が文法的であるためには(13A)が満たされれば十分ということになる。逆に Z が Y を必然的に imply するときは、 X がなければ "X-Y·ed+Z" は文法的であり得ない。これらのことから "X-Y·ed+Z" が文法的であるための必要・十分条件は、(14)のようになる。

- (14) 表層構造 "X-Y·ed+Z" が文法的であるための必要・十分条件は、その underlying structure において、 Z の存在が Y の存在を必然的に imply するならば $X \neq \phi$ であることである。

さてここで問題として残るのは、「必然的に imply する」かどうかをどのようにして判定するかという問題である。しかしこれは、われわれの内に在る百科辞典的知識体系に依存するしかないであろう。言語学的にこの知識体系をモデル化できるかどうかの問題はさておき、とにかくわれわれが日常用いている語（または語句）が指示する事象に関して各自が認識している全ての知識が、われわれの知識体系においては、客観度の高いものから単なる個人的印象に至るまで、かなりきちんと整理されて蓄積されているのはほぼ確実のように思われる。物理的または属性的構成要素間に関する知識も当然この知識体系に含まれる情

報の一部であり、(14)の如き意味的制約が機能し得るその基盤となっている。言語学の扱う知識体系は、いわゆる言語学的知識に限られるべきだとする立場もあろうが、ここで扱っている事象のように、文法性がわれわれの百科辞典的知識体系にそのまま依存せざるを得ない場合もあることを考慮すると、言語学とわれわれの知識体系との係わりあいをもっと根本的に探究する必要があるように思われてならない。

4.2. 統語規則

さて(8) (一般的には(12))に示された *underlying structure* が、いくつかの変形操作をうけて “a red-haired girl” (一般的には “X-Y-ed+Z”) に至るのであるが、変形操作の考察にはいる前に ‘red-haired’ に関連のあるいくつかの表現について、その文法性のテストをしておきたい。

- (15) a. a red-haired girl
 b. *a redly-haired girl
 c. *a red-hair girl
 d. *a haired girl
- (16) a. She has red hair.
 b. *She is redly haired.
 c. She is red-haired.
 d. *She is haired.
 e. *She has hair.

まず(15b)と(16b)が非文法的であるのは、‘hair’ が動詞的に用いられていないことを暗示している。さらに(15d)、(16d)、(16e)が非文法的であるのは、(14)の制約を破っていることから考えると考えられる。(15c)は ‘-ed’ が脱落しているので意味をなさない。(16c)については、*acceptable* ではないという *native speakers* もいたが、大部分は肯定的であった。

これらのデータから “a red-haired girl” の *underlying structure* は、ほぼ(8)に示された構造を持つということが裏づけられるわけであるが、それでは(8)はどのような変形操作を経て表層構造に至るのであろうか。

- (8) a girl [a girl HAVE hair [hair BE red]]
 s s' s' s

一般に *underlying structure* は抽象度の高い論理的な構造と考えられる。そこで(8)の論理構造に着目してみると、二つの抽象動詞 HAVE, BE のうち、HAVE は二項関係の

動詞であり、BE は一項関係の動詞である。いま、 n 項関係を $R(x_1, x_2, x_3 \dots x_n)$ と表記する方法にならって、(8)を書き改めてみると、(17)のようになる。

(17) Girl [HAVE (Girl, Hair [Red (Hair)])]

まず S' のサイクルでは、一項関係であるので関係節縮小変形と Red を Hair の前に移す形容詞前置変形が作用し、Hair [Red (Hair)] が “Red Hair” に変形されて(18)を得る。

(18) Girl [HAVE (Girl, Red Hair)]

ところが(18)では S のサイクルが二項関係であるために、そのままでは関係節縮小変形も形容詞前置変形もうけることができない。すなわちその前に二項関係を一項関係に移して複合形容詞を作る変形（一項関係化変形または複合形容詞化変形）が行なわれなければならないわけである。この「一項関係化変形（複合形容詞化変形）」は Lexical Transformation の一種であると考えられるが、とにかく Lexicon に記された ‘X-Y·ed’ という dummy compound adjective の二つの変数 X と Y に、一定のルールに従って(18)の “Red Hair” がはめこまれる変形というふうに考えられる。この変形により(18)は(19)に変えられる。

(19) Girl [Red-Haired (Girl)]

ここでやっと(19)は(17)→(18)と同じ関係節縮小変形および形容詞前置変形の操作をうけて、(20)になる。

(20) Red-Haired Girl

以上、具体的に “a red-haired girl” を例にとり、それを生成する変形規則をみてきたが、これを ‘red-haired’ に類する複合形容詞一般の生成規則の形で表わすと、次のようになる。（ただし、‘seven-hilled’ のように数詞を伴うものについては、(21)におけるはめこみ文 S' の構造が ‘red-haired’ に類するものとは異なっていると考えられる。）

表層構造 “X-Y·ed+Z” の underlying structure は(12)に示した構造と考えられるが、上に述べた論理構造に従えば、(12)は(21)のように書き表わされる。

(12) Z [Z HAVE Y [Y BE X]]

(21) Z [HAVE (Z, Y [X (Y)])]

まず S' のサイクルが関係節縮小変形および形容詞前置変形により、Y [X (Y)] が X-Y となり(22)が派生される。

textbook, the fast-expanding industry, a smart fashion-conscious lady, a snow-covered mountain, etc.

4.3. 結論

4節で明らかになった ‘red-haired’ に類する複合形容詞の生成規則における Semantical Constraints および Syntactical Rules は、次のようにまとめられる。

まず, ‘red-haired’ に類する前置複合形容詞を ‘X-Y·ed’ とするとき, “X-Y·ed+Z” の underlying structure は次のように表わされる。

$$(26) \quad Z \left[\underset{s}{\text{HAVE}} \left(Z, Y \left[\underset{s'}{\text{X}} \left(\underset{s}{Y} \right) \right] \right) \right]$$

ここで “X-Y·ed+Z” が文法的であるための必要・十分条件は,

$$(27) \quad (26) \text{において, } Z \text{ の存在が } Y \text{ の存在を必然的に imply するならば, } X \neq \emptyset \text{ であることである。}$$

(27)が満たされた場合, (26)は次の如き変形を経て表層構造に至る。まず関係節縮小変形および形容詞前置変形により(26)は(28)となる。

$$(28) \quad Z \left[\underset{s}{\text{HAVE}} \left(Z, \underset{s}{\text{X-Y}} \right) \right]$$

次いで一項関係化変形（複合形容詞化変形）により(29)を派生する。

$$(29) \quad Z \left[\text{X-Y·ed} (Z) \right]$$

(29)はさらに関係節縮小変形および形容詞前置変形をうけ, (30)の表層構造に至る。

$$(30) \quad \text{X-Y·ed+Z}$$

なお, 上述の制約および規則は専ら 臨時的複合形容詞に対して適用され, ‘high-handed’ (=overbearing) のようなすでに一般の形容詞と同じ用法を確立したものには適用されない。

5. S(I) の機能

4節で考察された ‘red-haired’ に類する複合形容詞の場合は, “X-Y·ed+Z” の Z と Y が物理的な次元における全体と部分の関係にあった。この節では, 物理的な次元においては, Yが必ずしも Zの一部分に相当しない場合について考察し, そこから出発して一般の S(I) の機能を探ってみたいと思う。

5.1. 抽象的な要素における全体と部分

ここでは二種の表現を扱いたい。最初の例は、すでに 4.2. で取りあげたものであるが、論の展開上必要であるので、少し詳しく述べてみたい。

- (31) a. an open-hearted gentleman
b. an open-hearted hospitality

(31a)の場合、Yの要素の‘heart’は、‘gentleman’の肉体の一部としての「心臓」というよりも、抽象的な「心」の意味である。「心」というのは象徴的には「心臓」であるけれども、抽象的な概念であるが故に、物理的な次元における全体と部分の関係の原則からはかなり距離ができています。

また‘heart’（心）は、いま述べた通り、本来抽象化された要素であるがために、修飾される側のZが必ずしも物理的要素である必要はない。それ故(31b)の如き表現がごく普通に用いられることになる。つまり、YがZの厳密な意味での物理的構成部分でないときは、前節でみたように、‘X-Y-ed’の側のXとY相互の結合の度合がより密になり、独立した形容詞として確立する傾向が強いということである。次例はいずれもこの種の表現である。

- (32) the high-handed oppression, an open-minded generosity, the cold-blooded assassination

‘open-hearted’や‘warm-hearted’は、それぞれ‘unreserved’、‘kind’と同様独立した形容詞の機能をもち、ともにZの「人柄」を特殊化する働きを持つが、違う点は、前二者が「人柄」に関する‘-hearted’が言語化されているのに対し、後の例ではそれが言語化されていない点である。

本節で扱うもう一つの例は、「色」に関するものである。

- (33) a. a mustard-colored cardigan
b.*a yellow-colored cardigan
c. a yellow cardigan

(33a)の場合、YはZの色であり、従ってこの関係は、顔と口との関係のような全体と部分の関係とは性質を異にしている。しかし、恐らく *cardigan* の全体が *mustard-color* であろうから、ZとYの所有関係は、これまで同様、ZがYを所有する関係にあることはまちがいない。問題はなぜ(33b)が許されないかであるが、それは(33c)が変則でないことからわかる通り、‘-colored’が余分であるためである。つまり‘yellow’の中には概念的に‘-colored’がすでに内含されていると考えられる。このように‘mustard-colored’と‘yellow’は、

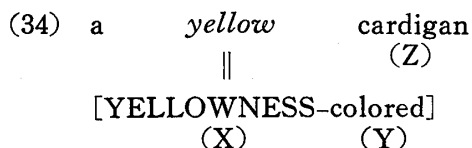
‘cardigan’の「色」を特殊化するという点で同じ機能を果たしているが、両者の根本的な違いは、前者が臨時形容詞であるので‘mustard’の中に‘-colored’が含意されず、それ故‘-colored’が言語化されなければならないのに対し、後者ではそれが含意されているため言語化される必要がない点である。

5.2. 臨時的複合形容詞と S(I)

5.1. 節の二例の考察から、次のような仮説が考えられる。すなわち、

“X-Y·ed+Z”の臨時的限定形容詞‘X-Y·ed’の構造は、S(I)-N 構造の S(I) の内的構造を反映している

という仮説である。これによると、例えば“a yellow cardigan”の‘yellow’の内的構造は次の図のようになる。



ここで‘YELLOWNESS’は、‘yellow’の本質的特徴で非言語的要素、‘color’は‘cardigan’の所有する要素であり、それぞれの関係の制約は、原則として臨時的複合形容詞における X, Y, Z 間の制約と一致する。あくまでも内的構造であるので、言語化（つまり表層構造化）される際には、*‘yellow-colored’の如き変則形は生じないのは言うまでもない。

逆に、このような仮説に従うと、S(I)-N 構造の諸表現をうまく説明することができる。例えば、任意の名詞‘eyes’には、次のような S(I) が結合できる。

(35) dark, hollow, dreamy, grey, hazel, projecting, dull, slanting, sleepy, sharp, deep blue, etc.

これらの S(I) はいずれも‘eyes’の何かを特殊化していると考えられる。いまこれらの S(I) を概念の相対的近似性に従って結びつけてみると、次の①から③までの三つのグループに組分けすることができる。

- ① dark eyes, grey eyes, hazel eyes, deep blue eyes
- ② hollow eyes, projecting eyes, slanting eyes
- ③ dreamy eyes, dull eyes, sleepy eyes, sharp eyes

この事実から分ることは、一定数の S(I) を「それらよりさらに高次のレベルで包括するような抽象概念」の存在が、われわれの概念作用においては前提されているということである。

その概念とは、①のグループで言えば、すべての具体的事物に絶対的に規定されている「色」という概念であり、②では顔における目の「位置」または「形」、③では「外的印象に基づく性質」という概念である。従って、われわれが人の目にある特徴を見出して例えば“dark eyes”と表現するとき、‘dark’が特殊化しているものは、‘eyes’が本質的に備えている「色」という概念なのである。

これらのことから、‘eyes’という概念は、「色」、「形」、「性質」その他の抽象的諸概念をその本質的要素として内包し、さらにその抽象的諸概念は S(I) という個別的特徴の諸概念を内包する、という二重の構成から成ることが分る。これを(34)の図式にあてはめて言うと、Yが本質的要素としての抽象的概念であり、Xが S(I) として言語化される個別的特徴の概念ということになる。

「色」の如き高次の包括的な抽象的概念は、Nに S(I) が結合されると同時に顕在化するものであるが、こうした抽象的概念をNの「徴表単位」とよび、以後 F(X) と記す。例えば、「色」は、F(Color) である。そうすると S(I)-N 構造は、一般的には

$$S(I)[F(X)\cdot ed]-N$$

と形式化され得る（ここで [] は通常は表現として現われずにその直前の要素に含まれることを示す）。またこの一般式の変形から得られる

$$F(X) \text{ of } N \text{ is } S(I) \text{ または } N \text{ has } S(I)[F(X)]$$

という判断は、われわれの深層構造における判断と解釈され、それが nominal phrase に変形されたものが S(I)-N 構造であると考えることができる。

6. 二種の概念体系

これで S(I) が特殊化している要素が明らかになったが、それでは“F(X) of N is S(I)”という深層判断はわれわれのどういう概念体系から生じるのであろうか。これには意味の二つの側面が関係している。一つは「認識的意味」の概念体系であり、もう一つは「表現的意味」の概念体系である。なおこの二種の意味については、第五章 2.2. (認識的意味) と 2.3. (表現的意味) で少し角度を変えて詳説するはずである。

6.1. 認識的意味の概念体系

任意の名詞Nは F(X) をその本質的徴表として内包するが、Nの内包する F(X) の数はNに結合し得る S(I) の全部が高次の何らかの抽象概念で組分けされ得るその数だけ存在すると言える。もちろんどの抽象段階で組分けするかによってその数は左右されるが、少なくとも物理的対象に対しては空間における絶対的概念のレベル（例えば、高さ、広さ、長さ、など）を客観性の高い徴表単位として採用できる。

さて任意の概念を表わす名詞 Na が, $F(X_1), F(X_2), \dots, F(X_n)$ の徴表単位からなるとき, Na の内包 $Na(Int)$ は, $F(X_1), F(X_2), \dots, F(X_n)$ を元とする集合として解釈できる。

$$Na(Int) = \{F(X_1), F(X_2) \dots F(X_n)\}$$

さらに $Na(Int)$ の元たる $F(X_1)$ は, Na の $F(X_1)$ として存在し得る一定の範囲の $S(I)$ をその元とする集合として解釈できる。

$$F(X_1) = \{S_1(I)_1, S_1(I)_2, \dots, S_1(I)_m\}$$

例えば, $F(X_1)$ を 'eyes' の「色」という徴表単位とすれば, それは特殊な状況でない限り, われわれの常識の許し得る $S(I)$ の集合からなる。'snow' で言えば, $F(color)$ では可能な範囲は常識的には 'white' ただ一つであり, 従って "purple snow" とか "black snow" とかを特殊な状況以外で耳にしたときは, 奇妙な感じを抱く。従って, Na の $F(X_1)$ についてわれわれの常識が許し得る $S(I)$ の集合を $F(X_1)$ の「徴表範囲」とよべば, Na の内包 $Na(Int)$ とは, Na に固有の徴表範囲を持った $F(X_1), F(X_2), \dots, F(X_n)$ を元とする集合である, と言うことができる。別の角度から言えば, ある語の認識的意味を知っているということは, その語の持つ各徴表単位の常識的な広がり, すなわちその語に固有な各徴表範囲を知っているということである。従って, この認識的意味の概念体系から対象に対してなされる "F(X) of N is S(I)" という深層的判断は, その性質からして常識的にすべての人間が合意できるものである場合がほとんどである。

6.2. 表現的意味の概念体系

これに対して表現的意味の概念体系から生じる場合は事情を異にする。表現的意味は, 通常は「連想的意味 (associative meaning)」と「情緒的意味 (affective meaning)」とに区別されるが, 両者は概念の構成において互いに深く関連している。この概念構成の過程は, Osgood (1952) の「象徴・媒介過程 (representational mediation)」モデル (この紹介は田中 (1967) pp. 31 f. に詳しい) を利用するとうまく説明できるが, ここでは詳しく論ずるスペースがない。要点のみを述べれば, 例えば「平和」という抽象的な概念は, 不安や恐怖を代表する「原爆」や「戦争」と分離的 (dissociative) に結びつくことによって, また「国連」や「共産党」とは連合的 (associative) に結びつくことによって作り上げられる。この際「平和」の意味は, その人間が過去の連合習慣 (associative habits) から例えば「共産党」をどのように評価しているかによって新しい意味を獲得する。すなわち, もともと「共産党」の嫌いな人にとっては「平和」の意味は悪くなり, 逆に好きな人は「共産党」と「平

和」が一層密接に結びついてくる。このようにして概念の世界では、個人の体験やマスコミの影響などによって絶えず流動する連想的意味と、それによって少しずつ変化をうける情緒的意味とが複雑に入り混っていると見える。従って、こうした心理的背景から作り出された“F(X) of N is S(I)”なる深層的判断は、おのずから主観的であり個人的印象の傾向が強いのは言うまでもない。

6.3. 偶有性の測定

さてこのような認識体系を背景にして生じた S(I)-N 構造において、S(I) は N の純粋に inherent な F(X) のみを特殊化しているのであろうか。Robert B. Lees (1966. p. 12) は、内在的な、すなわち非偶有的な性質を記述する形容詞は「場所」の副詞がこのあとに続くことができないことを示して、次の例をあげている。

- | | |
|---|---------------------------------|
| { | John is popular in America. |
| { | *John is wise in America. |
| { | John is happy in his new house. |
| { | *John is tall in his new house. |

この考え方を援用し、

- | | | | | |
|-----|-----------------------|---|-----|--------------------------------------|
| (+) | nonaccidental | ↔ | (+) | accidental |
| | (<i>always</i> を用いる) | | | (<i>in Tokyo</i> や <i>now</i> を用いる) |
| | 〈非偶有的〉 | | | 〈偶有的〉 |

のような尺度を作り、S(I)-N 構造に適用してみると、S(I) が特殊化している F(X) の内在性の度合いが明確になる。方法は、S(I)-N 構造を“N is S(I)”に変形し、これに *always* (-) と *in Tokyo* (+) (または *now*) を加えて、その有意味性によって (+), (-) を判断する。(-) のみの場合は純粋に内在的であり、(±) の場合は時と場所により支配される程度に内在的である。また (+) のみの場合は、その S(X) は内包的特殊化の S(I) ではなく、ある瞬間またはある場所において純粋に偶有的な状態を示す形容詞であると言える。なお、この (-), (±), (+) の標記は、次章で論ずる「必然的」、「可能的」、「偶然的」の標記に対応するものである。

- | | | |
|----------------|-------------------|------------------------|
| tiny eyes (-), | sleepy eyes (±), | tear-bleared eyes (+), |
| dark eyes (-), | tearful eyes (±), | tear-laden eyes (+) |

7. 結論

これで本章の考察を終るが、最後に筆者がここで述べたかった点をまとめておきたい。まず内包的特殊化の AN 構造を S(I)-N 構造として規定できること、第二に臨時的複合形容詞の修飾構造 “X-Y·ed+Z” は S(I)-N 構造の修飾構造を反映しているということ、第三に S(I) は N の徴表単位たる F(X) を特殊化すること、第四に “F(X) of N is S(I)” という深層的判断から変形されたものが S(I)-N 構造であること、第五に “F(X) of N is S(I)” という深層的判断はわれわれの認識的意味体系と表現的意味体系から作り出されるということ、第六に S(I) の持つ非偶有性の度合は場所などを表わす副詞を付加して有意味性を測る方法によってかなり明確になること、だいたい以上の点である。

なお ‘red haired’ に類する複合形容詞の考察については、4.3. 節で結論をまとめてあるのでここで繰り返すことはしない。

第五章

“Non-restrictive adjunct”における非制限性について

1.1. 序

いわゆる“Non-restrictive adjunct”（非制限的付加詞）とは、主要語（Head-word）に対して働く機能を意味上からみた場合の付加詞（Adjunct）の下位区分の一つであって、Jespersen が *Essentials* (§ 9.2₂) で用いた用語であるとされているが、これについて『新英文法辞典』（大塚高信編，1959）には次のような説明がみられる。

主要語に限定を加えてその適用範囲を狭くするのではなく、主要語の現に有する属性を特示し、付加的・強意的・感情的色彩の強い付加詞をいう。たとえば *white snow*/...。記述形容詞（Descriptive adjective）が固有名詞を修飾する場合も多く非制限的である。

The fair Ophelia! - Sh. Hamlet. III. i. 89（ああ美しいオフィーリア!）/... (pp. 600 f.)

従って、この種の表現では付加詞が「主要語の現に有する属性を特示」するところから、この種の表現の非制限性が付加詞と主要語との内容の重複関係にあることは容易に察せられる。ところがその重複関係のあり方という点から言えば、例えば上の *white snow* と *The fair Ophelia!* とにおいては異なっているようである。つまり前者においては、*white* と *snow* との内容の重複関係が表現者の感情から離れて論理的で客観的な関係として存在するのに対し、後者においては、それが表現者の感情の世界を背景として存在するとみてよい。すなわち、それぞれの付加詞が生まれてくる意味的背景が異なっているといわなければならない。

本章の目的は、こうした非制限的付加詞が生まれてくる意味的背景を探りながら、その非制限性についてできるだけ論理的かつ組織的な説明を試みることである。具体的には、まず語には「認識的意味」と「表現的意味」という二つの意味側面があり、それらが語の「内包」を作りあげていること、さらにその各々の側面はその語のもつ必然的性質および可能的性質の集合として解釈され得ること、そしてここでいう非制限性とは主要語とその語の必然的性質を表わす形容詞との分析的関係にほかならないこと、などの点について述べてみたい。なおここでは文体的効果の問題は排除されることを断っておきたい。

1.2. 二つの前提

初めに二つの点を前提として確認しておかねばならない。その第一は、ここで取り扱われる付加詞は主要語との内容の重複関係を問題とするところから第四章（第2節）で規定された内包的特殊化の形容詞でなければならないということである。従って、私見によればいわゆる「形容詞プロパー」（限定辭は除く）における主要語の規定のあり方には少なくとも五つのタイプ、すなわち、(1)外延的规定、(2)内包的規定、(3)主要語の指示関係への反省判断、(4)主要語の指示関係への修正表現、(5)以上のいずれにも属さないもの、があるが、これらのうち本章では(1)、(3)、(4)、(5)のタイプは範囲外となる。

なお第四章の記述と同様、内包的特殊化の付加詞を‘S(I)’、主要語を‘N’とよぶことにする。‘S’は Specifier (特殊化詞)、『I’は Intension (内包)、『N’は Noun の意である。従って、内包的特殊化の語結合は“S(I)-N”として表わされる。

前提の第二は、S(I)は主要語Nの必然的、可能的あるいは偶然的性質のいずれかを表現しているところから、 $S(I)-N \iff N \text{ is } S(I)$ という関係が一般に成り立つということである。この前提にたてば、S(I)-N 結合における S(I) と N との内容の重複関係の問題は、“N is S(I)” という命題における分析性の問題に移行され得る。すなわち S(I)-N 結合における非制限性は、N is S(I) という命題が分析的である場合に現われると言える。逆に言えば、N is S(I) という命題が分析的となるような S(I) を規定することができれば、そのような S(I) が S(I)-N 結合における非制限的付加詞であるということになる。以上の二点を初めに前提として確認しておきたい。

2.1. 意味の二側面

主要語は具象名詞であるか抽象名詞であるか、そのいずれかである。J. N. Keynes (1906, p. 133)によれば、具象名詞は属性（ここでは広義で「性質」の意）を持っているとみなされるもの（つまり属性の主体）の名称であり、抽象名詞は何かほかのものの属性（つまり主体の属性）とみなされるものの名称である。従ってこの考え方によれば、S(I)-N 結合は、属性の主体に属性を付加するか、あるいは属性に対して属性を付加するか、そのいずれかの内的形成を持つ。いずれにせよ、Nたる主要語に S(I) たる属性語が付加されることに違いはない。従って、まずNの内的構造を検討してNが内に含み得る S(I) の性格と範囲を考察し、その上で一つの属性表現として選ばれた S(I) と主要語Nとの関係を考察したい。

ところで意味を扱う場合、一般に意味論、論理学、辞書編集は主として事象とそれを表わす記号との間の認識的もしくは指定的意味を扱い、これに対して心理学は記号と人間との間の語用論的關係から生ずる内包的あるいは表現的な意味を扱うと言われている(田中(1967), p. 28)。このことは意味のもつ二つの側面がそれぞれ学問的に分担された形で研究されてい

ことを示している。ところが言語を総合的に扱う言語学はこのような部分的な形で意味を追求するわけにはいかない。それ故われわれは、Morris (1938) の言葉を借りれば、言語と事象との関係つまり *semantical* な関係からくる「認識的意味」と、語と使用者との関係つまり *pragmatical* な関係からくる「表現的意味」との二つの意味側面を総合的に考察する必要がある。

さて、S(I)-N 結合におけるNもおのずからこの二つの意味側面を持つ。それ故 S(I) はこの二側面のいずれかに属する性質形容詞であるということになる。従って以下主要語の内の構造を検討するにあたっては、その「認識的意味」と「表現的意味」との二側面から検討していくことが必要となってくる。

2.2. 認識的意味

認識的意味 (*cognitive meaning*) とは、語と事象との関係つまり *semantical* な関係を背景とした意味であり、この場合表現者の感情的要素はまったく排除される。従っておのずから *physical* であり、超個人的であり、客観的、社会的、常識的な性格をもつ意味側面ということになる。

さて、語の認識的意味はその根底に三つの基本的で不可欠な規定を伴っている。すなわち、(1) 質的规定、(2) 量的規定、(3) 量的限度の規定である (大森荘蔵「質と量について」(植田清次編 (1956)) においても論じられているように、質と量との境界線を引くことは厳密には不可能であろう。しかし、巨視的、常識的レベルで考えると、この区別は便利であり適切である)。これら三規定が認識されてはじめて、語と事象との関係における認識的意味が明らかになる。もっとも抽象名詞に関してはこの限りではない。抽象名詞は事象の属性または概念の表現であって指示対象を持たぬからである。次に、それぞれの規定は三つの段階に区別できる諸要素から成ると言える。すなわち、(a) 必然的要素、(b) 可能的要素、(c) 偶然的 (もしくは偶有的) 要素の三つである。必然的要素とは語における本質的性質を意味し、可能的要素とは非本質的性質ではあるが客観的・認識的にあり得る要素を、また偶然的要素とはある時空的な位置におけるまったく偶有的な性質を意味する。(偶有性のテストについては第四章 6.3 節を参照のこと。)

まず質的规定についてであるが、一般に事物の「性質」とは、現象中で事物が他の事物と関係する相互作用においてのみ現われるものであって、その物自体のみならず、その事物が現象中で取り結ぶ他の事物との関連性にも依存するとされている (出・粟田 (1968), p. 130)。そしてどの事物もそれぞれ無数のそうした諸性質をそなえており、その総体がその事物の「質」を決定する、あるいは「質」とはこの諸性質の総体にほかならない (*Ibid.*, p. 101)。これらの諸性質のうち、その事物の存立に決定的な係わりを持つその事物に固有な諸

性質が、その事物の「本質的性質」あるいは「本質的特徴」、あるいはまた一般に「属性」ともよばれるものであって、伝統的な「実体」という概念の核心をなすものである。これに対して、その事物が他の質的に異なった事物と共通にもち得る性質が「非本質的性質」あるいは「付帯的性質」といわれるものである。従って本質的性質とは、その事物が関連する相互作用系をどのように変換しても変化しない性質のことであり、非本質的性質とは変化し得る性質ということになる。こうしたことから、質的規定において事物の本質的性質とはその事物の「必然的要素」であり、非本質的要素とはその事物の「可能的要素」および「偶然的要素」ということになる。

次に量的規定について言えば、事物は以上のように「質的に規定されているとともに、量的に規定され、大きさ・重さ・かたさ・存続期間などに関する或る規定をともなっている。こうした規定は、すべて、そのものの『或るどれほどか』として、すなわち、定量(Quantum)としてある。」(Ibid., p. 102)「しかしそれは、もはや存在と直接に同一な規定性ではなく、存在に対して無関与な、それにとって外的な規定性なのである。」(ヘーゲル・村松(1951), p. 280)それ故に、事物の量的規定はその事物の本質的性質とは直接関係を持ち得ない。従ってその事物の必然的要素とはなり得ず、その事物の可能的要素または単に偶然的要素であるにすぎない。

ところがどのような事物にも、その質を規定する固有な量的規定性つまり量的限度というものがあり、その限度が破られると当の事物ではなくなり他の事物へと変化するような規定性が存在する。すなわち、「定在の量的諸規定は、一方では、その質への影響をあたえることなしに変化させることができるとともに、他方では、しかし、また、こうした無関係な増減にもその限界があって、それをこえると質が変化させられる。」(Ibid., p. 325)例えば、「水」に対する「温度」という量的規定がある限度を越すと、「水」は「水蒸気」という質的に異なった物質へと転化する。このように、「ある限度を越す量的変化は質的变化をもたらす」という規定性は、その意味ではものの本質に係わりを持ち、そのものの本質的性質を変化せしめるが、しかし量的変化はあくまでも量的変化であって、決して変化した本質的性質そのものではない。この点において量的限度の規定性は、量的規定性と同様必然的要素とはなり得ず、その事物の可能的要素または単に偶然的要素であるにすぎない。

このように事物は一般に上記の如き三つの規定性を持ち、三つの要素を含むと言える。すなわち、どのような事物も一定の質と一定の限度を持つ量との統一体であり、必然的要素を中核に可能的要素と偶然的要素とを含み持つ総体であると言うことができる。だからある事物についてこれらの規定の具体的内容を認知するとき、われわれはその事物の認識的意味を知っているということになる。もちろんこれには個人の知識量により個人的差異が生じる。しかし認識的意味が常識的かつ社会的に客観化の可能な意味側面であることに違いはない。

2.3. 表現的意味

語の表現的意味 (representative meaning) は認識的意味と違って語と表現者との関係つまり pragmatic な関係から生じる意味側面であって、この場合表現者の主観的立場がその中心となる。従っておのずから mental な性格が強く、個人的、情緒的、印象的、連想的、価値判断的である。それ故、一般に各個人によってそれぞれ異なった表現的意味が存在し得るわけで、認識的意味の如く常識的かつ社会的に客観化され得るとは必ずしも言えない。

語の表現的意味には、その語の被示体 (referent) が表現者にとって情緒的、印象的、連想的、価値判断的にどのようなものであるかという純粹に心的な状態を表わす場合と、その語の認識的意味に対して感情的要素がはいる場合との二通りが考えられる。しかし後者の場合はある程度偶有的なものとして解釈できるため、ここではもっぱら前者を中心に考察したい。また表現的意味を個人的レベルでみるのと、個人の集合体である社会的レベルでみるのとでは、明らかに異なった意味構成をなしている。純粹に表現的意味という場合にはやはり個人的レベルで考察すべきで、社会的レベルはなかば認識的意味に近いと考えるべきであろう。従ってここではまず個人的レベルで考察し、次いで社会的レベルから検討を加えたい。

表現者がある事象に対して心的状態を述べる場合にも、やはり必然性、可能性、偶然性を区別することができる。例えば、ある事象のある側面に強く印象づけられたり感情を動かされたりした場合、表現者の意味体系の中では、その印象や感動的要素がその事象の必然的な要素としての位置をしめるようになる。すなわち、表現者にとって “Sally is miserable” という印象が余りに強烈であったとき、‘Sally’ という対象を想起することは ‘miserable’ という印象を「必然的」に想起させることになる。この印象がそれほど強烈でなければ、‘miserable’ という印象を想起させる程度は「可能的」ということになる。 「必然的」となる場合の対象が人間であることが比較的多いのは、人間にとって人間がより強烈な心的・情的な印象や感動を与え得る対象であることを物語っている。そして表現者が対象に対する自己の感情的要素を表わすとき、この必然性は最高度のものになる。(e. g. *Ophelia is fair!* cf. *The fair Ophelia!*) このように個人は自己の表現的意味体系の中で、対象に対する必然的要素や可能的要素を感覚的、生理的、あるいは理性的に作りあげていると言える。

ところでいま理性的に作りあげていると述べたが、個人が自己の表現的意味体系を作りあげる際に理性的に判断する基準となるのが先に述べた社会的レベルにおいて既に社会的価値や評価の定まった表現的意味であると言える。もちろん社会的レベルは個人的レベルの総合と考えられるが、社会的レベルは必ずしも個人的レベルと一致するものではない。むしろずれていることが少なくないであろう。しかし、社会的レベルは個人的レベルが作られる際の基準にはなり得る。これはわれわれが認識的意味を獲得していくときの方法とほぼ同じであ

ると言ってよい。例えば、“Shakespeare is immortal!”という価値判断がそれである。ここには、感覚的・生理的な色彩の濃い個人的レベルの必然性はほとんど感じられないが、知的色彩の濃い必然性が存在する。

ここで表現的意味と認識的意味との重要な差異を述べておかねばならない。認識的意味は表現者の心的状態を離れて存在する意味形式であるが故に、事象の持つ中核的要素すなわち必然的要素が必ず存在すると言ってよい。ところが表現的意味においては表現者の心的状態が中心となるために、事象が表現者に対して強い心的要素を引き起すだけの力を持たなければ、表現的意味における中核的要素や必然的要素は存在し得ず、従って単に可能的あるいは偶然的な要素しか存在しないということになる。すなわち、認識的意味においては必然的要素は必ず存在するのに対し、表現的意味においては必ずしも存在するとは限らない。

2.4. 「内包」の定義

以上、認識的意味と表現的意味を区別して考察してきたが、事象に対するわれわれの実際の内的意味構造はこのように判然としたものでは決してなく、互いが重なりあい、複雑にからみあった様相を呈していると言える。だが、認識的意味と表現的意味という二つの極は確かに存在するに違いない。また、必然的要素、可能的要素、偶然的要素と名づけた三段階も、その境界線の不明瞭さは残るが、語の有する中核から周辺までの意味内容を示す要素として承認すべきものである。そこで、語の意味のほぼ中核的要素をこれら二つの意味側面における必然的要素と可能的要素とに限り、これらを一括して語の「内包」と名づけることにする。ここで表現的意味における可能的要素をも内包の中に含むのは、このような可能的要素といえども対象の所有する性質が生ぜしめたものにほかならないという観点にたつからである。

2.5. Carnap の「内包」

さて、ここに定義された「内包」という概念は、従来の論理学者のものとは異なっている。例えば Rudolf Carnap はその著 Carnap (1947) において、それまでの論理学者の分析や記述と異なった“the method of extension and intension”という新しい方法を取り入れたが、そこで定義された‘intension’は上に述べた認識的意味に相当するものである。

The technical term ‘intension,’ which I use here instead of the ambiguous word ‘meaning,’ is meant to apply only to the cognitive or designative meaning component. I shall not try to define this component. It was mentioned earlier that determination of truth presupposes knowledge of meaning (in addition to knowl-

edge of facts) ; now, cognitive meaning may be roughly characterized as that meaning component which is relevant for the determination of truth. (p. 236)

従ってこの component としての property には qualitative, quantitative, relational, spatiotemporal などの要素が含まれるが, mental な要素は完全に排除されている。

... the properties of things are not meant as something mental, say images or sense-data, but as something physical that the things have, a side or aspect or component or character of the things. (p. 20)

つまり Carnap は, 論理的な立場から比較的客観化され得る, 従って真理決定の可能な, また論理的に処理しやすい要素のみを ‘intension’ と定義したと言える。しかしながら Carnap は言語学的な立場における mental element を決して否定しはしない。

The non-cognitive meaning components, although irrelevant for questions of truth and logic, may still be very important for the psychological effect of a sentence on a listener, e.g., by emphasis, emotional associations, motivational effects. (p. 237)

この Carnap の場合も当然のことながら, cognitive meaning と non-cognitive meaning との境界線をどこに引くかで問題を残す。例えば, cognitive な世界を科学の世界, 従って物理学的処理の可能な範囲, つまり数量化の可能な範囲とするならば, それでは mental quality の量的処理可能な範囲はどう扱うのかというような問題である。

このように Carnap は「新しい方法」として “the theory of intension” を提示したが, 自然言語を扱う者からみると, それが cognitive meaning のみに限られているところに論理的処理の限界を感じる。やはり表現的意味の取り扱い, Osgood ら(1957)の心理学の分野に属する人々の仕事であろう。しかし先にも述べた通り, 言語学はそのいずれを欠いてもいけない。言語研究にとって論理的, 心理学的, また哲学的な分野を総括することは避けられない仕事であるからである。

なおここでいう「内包」とは語のもつ一義性の側面に対して与えられたものであって, 複義性を有する語に対して与えられたものではない。例えば Jerrold J. Katz ら(1964)の “semantic marker” (意味標識)は語の持つ複義性を説明し, 最終的に “distinguisher” (弁別要素)が語の意味を一義的に決定するが, ここで述べられた「内包」とは, この最終的に一義的となったときの語に対する内包であって, 複義的な状態の語に対するものではない。単に ‘bachelor’ の内包」というときは, 従って, ‘bachelor’ の持つ複数の意義の数だけの

内包がこの一語に重複して、複合的な内包を形造っていると解すべきである。

3.1. 分析性

さてここで分析性の問題を考えてみたい。一口で言えば、分析性とは二つの表現 's' と 'p' が主語と述語の関係にあり、両者が同義的であるか、あるいは前者の意味が後者の意味をすべて含む場合に生ずる論理的に真なる性質であると言える。これを Katz らの用語で言い換えれば、分析性とは 's' と 'p' とが主語と述語の関係にあり、両者がまったく同じ意味指標を持つか、あるいは前者のそれが後者のそれをすべて含む場合に生ずる論理的に真なる性質であるということになる(服部他編(1968), p. 87)。すなわち分析性とは、(i)「pはsに等しい、かまたは、pはsの一部分である」という前提のもとに、(ii)「sはpである」という形式を得たとき現われてくる論理的に真なる性質だと言える。

ところで Quine (1964, p. 20)が明らかにしたように、論理的真理と総合的真理との間に明確な境界線を引こうとすれば、当然多くの困難に出あうことになる。しかし、ここではそうした深い問題とは直接関係をもたない。ただ分析性という論理的性質そのものに便宜上係わりあいを持つにすぎない。

3.2. S(I)n の非制限性

ところでこれまでに語の意味の二つの側面、すなわち認識の意味と表現的意思とは、それぞれの中核的要素として必然的要素を必ず持つ、または持ち得るということを述べてきた。いまもしある事象に対する語Nがその必然的要素 S(I)n を持ち、上に述べた(ii)の形式、つまり“N is S(I)n”という形式を得たとき、このNと S(I)n との間に分析性の関係は成り立つであろうか。

この問題に答えるためには、上述の説明から明らかな通り、両者の間に上の(i)の前提が満たされているかどうかを調べれば充分である。そこで便宜上二つの場合に分けて調べる。まず S(I)n が認識的意味における必然的要素の場合は、前述の2.2.の説明から、S(I)n はNの本質的性質に一致するかまたは含まれる。従って、Nのすべてに等しくはなくとも、少なくともNの本質的性質に等しいか、またはその一部分である。次いで、S(I)n が表現的意味における必然的要素の場合には、2.3.の説明から、S(I)n は認識的意味における本質的性質と同等の意味的価値を持つ。従って S(I)n は、Nの本質的性質に同等か、またはその一部分に同等であり得る。

これらのことから、Nと S(I)n との間に上の(i)の前提が満たされていることが明らかとなった。故に、Nと S(I)n とは(i)、(ii)の両条件を満足さす。すなわち、“N is S(I)n”におけるNと S(I)n との間に分析性の関係が成り立つことが明らかになったと言える。

ところで、“N is S(I)n”が分析的であるということは、1.2.における第二の前提により、S(I)n-N 結合において S(I)n はNに対して非制限的であることを意味する。ここに至って、非制限的付加詞とは主要語の必然的要素を表わす形容詞であることが明らかとなったわけである。すなわち、S(I)n は「主要語に限定を加えてその適用範囲を狭くするのではなく、主要語の現に有する属性を特示」ということが確認されたわけである。

3.3. 非制限性と context

ここで、非制限性を左右する要素に‘situation’または‘context’という要素があることをつけ加えておきたい。常識的な situation では、例えば *white snow* というとき、*white* は *snow* の必然的要素であるが故に非制限的となる。ところが situation をわれわれの常識的な世界から空想小説の中に移し、さまざまな色の雪を人工的に作る実験の場を想定すると、そのときの *white* はもはや *snow* の必然的要素ではなく、*black* や *yellow* と同様に、*snow* の単なる可能的要素となるにすぎない。そして *black snow* はもはやわれわれに奇異な感じも、文学的イメージも想起させはしないのである。*green blood* も同じであって、もし situation を昆虫の世界の話に限るとすれば、今度は *red blood* の方が奇異な感じで受け取られることになってしまう。

この‘situation’の考え方は、表現的意味における場合にも重要である。young Emmet が old Emmet と区別するための表現であるとき、young は言うまでもなく制限的である（大塚(1944), p. 144）。

4. 結論

本章では、いわゆる「形容詞+名詞」結合のうち、形容詞が名詞の内包に関係する結合を S(I)-N 結合として区別し、これを研究の対象とした。従って、形容詞 S(I) はNの性質を表わす形容詞であり、それはNに対して必然的か可能的か偶然的か、そのいずれかの関係にある。ところで S(I) は自然言語であるために当然のことながら、語と被示体との関係から生ずる認識的意味範疇に属する形容詞であり得るとともに、語と表現者との関係から生ずる表現的意味範疇に属する形容詞でもあり得る。これらのことから考察にあたってはこの S(I)-N 結合を、論理的な semantical な立場と、心理学的な pragmatical な立場とから考察した。その結果として、pragmatical な考察にその性質上多少の曖昧さは残るが、非制限的付加詞と主要語との関係を主要語とその必然的要素との分析的関係として説明し、非制限的付加詞を semantical な関係から生じるもの (*a round ball*, *red blood*, *white snow*, etc.) と pragmatical な関係から生じるもの (*Rare Ben Jonson*, *Beautiful Evelyn Hope*, *The fair Ophelia* ! etc.) とに区別することができた。

ここに取り扱われたテーマは、ごく常識的な文法事象であり、別に新しい解釈も加え得なかったが、この事象の内的構造が幾分なりとも組織的、論理的に説明されたとすれば、本章の目的は達せられたことになる。

第 二 部

語 用 論 的 研 究

第一章

否定表現における婉曲と強調

1. 序

否定辞が同一文中に二つ続いた場合、通常は婉曲か強調の効果が生じる。例えば次の場合である。

- (a) I am happy.
- (b) I am not unhappy.
- (c) I am never unhappy.

(b)が(a)の婉曲で、(c)が(a)の強調ということはすぐわかる。ところが、否定の意味的關係がどのような場合に婉曲となり、またどのような場合に強調の効果が生ずるか、その理論的メカニズムについては、筆者の知る限り、これまで余り適切な説明がみうけられなかったように思われる。本章では、二つの否定辞が同一文中に続くような否定表現について考察し、意味論的にどのような否定關係が文全体の意味を婉曲に導き、またその逆に強調に導くかを論じてみたいと思う。

まず2節では、3節以降の考察のために必要と思われるいくつかの作業仮説や基本的な事項を説明または確認する。次いで、3節では婉曲の効果をもたらす否定表現について、4節では強調の効果をもたらす否定表現について考察し、それぞれの効果を導く内的メカニズムを明らかにしたいと思う。

2.1. 基本事項の概観

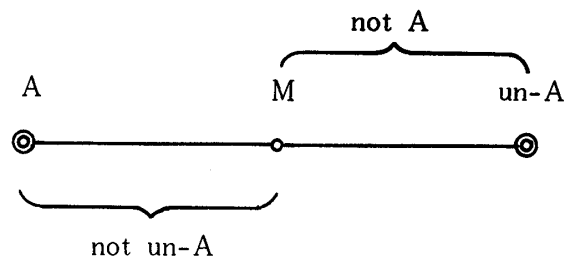
この節では、3節以降の議論に必要なと思われるいくつかの作業仮説や、基本的な事項について、二つの角度から説明または確認しておきたい。まず2.2節で、反対概念、矛盾概念を中心とする論理学上の原則を概観し、次いで2.3節で、否定辞が具体的な発話文の中で機能する役割、および否定辞のかかり方のタイプについて検討してみたい。

2.2. 反対と矛盾

論理学者が伝統的に説明してきた方法に従えば、反対事項 (contrary terms) とは一般に A と un-A の關係としてとらえることができ、例えば necessary (必要な) と unnecessary

(不必要な), like (好む) と dislike (嫌う) の如きもので, ある幅をもった概念のものさし (measure) の両極端にたとえることができる。したがって, 二つの反対事項はその中間に一つ, あるいはそれ以上の相対的な中間事項を許すことができる。これに対し, 矛盾事項 (contradictory terms) の関係とは, 一般に A と not A の関係としてとらえることができ, necessary (必要な) と not necessary (必要でない), like (好む) と (do) not like (好まない) の如き関係である。概念のものさしでいえば, not A とは A の部分を除いた残りのすべての部分を表わす。したがって, 二つの矛盾事項が合わさると存在のすべてが表わされることになり, それ故これらは中間事項を一つも許さない関係である。

(1)



上の図でいえば, 今中間項を M とするとき, A と un-A が互いに反対事項 (あるいは反対概念) をなしており, A と not A (=M+un-A) および un-A と not un-A (=A+M) はそれぞれ互いに矛盾事項 (あるいは矛盾概念) をなしていることになる。

ところでこの反対事項, 矛盾事項の関係は, 現代論理学 (または形式論理学) の方法に従うと, もっと要領よく, しかも反対, 矛盾相互間の関係をより正確に説明することができる。そこで次に沢田允茂著『現代論理学入門』(pp. 128~31) の説明を援用し, 要点をのべてみたい。ただしここでは, 論理学上の基本的な原則を概観, 確認することが目的であるので, 何故そうなるかという点については立ち入ることはしない。

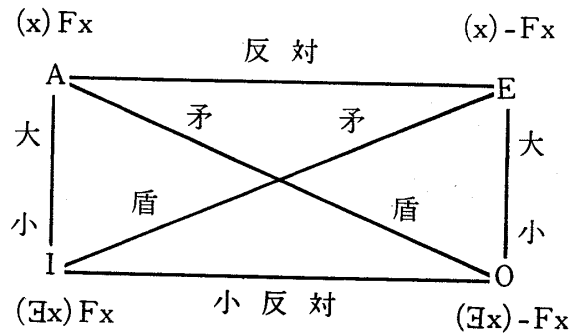
基本的な論理的な主語 x とその述語 F とからなる文についての量化と否定の関係を, 古来 A, E, I, O の名称で呼ばれている四つの場合について, 命題関数を用いて表わすと次のようになる。

(命題関数)

- | | | |
|-----|--------------------------------|--------------------|
| (2) | a. A: 全称肯定……すべての x は F である | — $(x)Fx$ |
| | b. E: 全称否定……すべて x は F でない | — $(x)-Fx$ |
| | c. I: 特称肯定……ある x は F である | — $(\exists x)Fx$ |
| | d. O: 特称否定……ある x は F でない | — $(\exists x)-Fx$ |

この四つの命題関数相互間の関係を対当表を用いて表わすと次の図のようになる。

(3)



ここで重要なのは、A, E, O, I, 相互間の関係である。まず形式論理学が「矛盾関係」というときは、二つの異なった主張が共に真でも、共に偽でもありえず、一方が真ならば他方は必ず偽であるという場合であるから、(3) 図でいうと、A-O, E-I の対立にみられるような関係ということになる。これに対して「反対関係」というのは、共に真ではありえないが、共に偽ではありうるような対立のことで、A-E にみられるような関係である。この反対関係が4節の強調の説明に関係してくる。さらに I-O の対立は、共に真でありうるが、しかし共に偽であるということはある関係で、「小反対関係」とよばれる。そして A-I, E-O の関係は、前者が真ならば後者も真であるという関係で、「大小関係」とよばれる。この大小関係が3節の婉曲の考察に関係してくる。

以上沢田教授の説明を借用して(2), (3)を紹介したが、3節以降での説明の便宜上、もう二点だけつけ加えておきたい。

まず(3)の対当表からも明らかなように、Aの命題関数 $(x)Fx$ は、Oの命題関数の矛盾表現でもってしても表わすことができることから、次の関係が成り立つ。

$$A: (x)Fx = -\{(\exists x)-Fx\}$$

同様にして、E, O, I, についても次の関係が成り立つ。

$$E: (x)-Fx = -\{(\exists x)Fx\}$$

$$O: (\exists x)-Fx = -\{(x)Fx\}$$

$$I: (\exists x)Fx = -\{(x)-Fx\}$$

これらについていえることは、左辺と右辺は論理的には等値であるが、左辺が肯定的にしる否定的にしるいずれも主張 (Assertion) の形式であるのに対し、右辺はいずれも否認 (Denial) の形式であることである。これらの関係を(3)の対当表に記入すると、次の(3)' のようになる。なお、Ass は主張 (Assertion) を、Dは否認 (Denial) を表わす。

(5) a. The door is not open.

b. The door is open.

(5a)を主張ととれば、(5a)は最初から not を内包した命題をもつことになるが、一方否認ととれば、not は命題の外から入ったと解釈され、恐らく(6)に示すような構造から生じたことになる。

(6) I say it is *not* the case that *the door is open*.

(p)

これまで否定辞 not についてのみ着目してのべてきたが、(5b)のような否定辞を含まない表現に対しても主張と否認に対応する区別は当然可能である。(5b)がコンテキストに依存しない表現、すなわち主張としてのべられる場合は問題ないであろうが、コンテキストに依存した表現として用いられる場合は「確認」(confirmation)となる点に注意を要する。

以上、否定辞 not の入り方に二つのタイプがあることをのべてきたが、一般に not が最初から命題の中に入っている否定表現の形式を命題内否定 (internal negation), または命題否定 (propositional negation) とよび、また not がもともと命題の外にある否定表現の形式を命題外否定 (external negation) とよぶ。それぞれが主張と否認に対応するのは上にみた通りである。

なおここで、様相論理学での取り扱いに触れておく必要がある。necessary, possible のような p の事実性 (factivity) の程度を明示する要素を伴う表現の場合の論理構造は “it is necessary that p” あるいは “necessarily p” であると思われるが、この場合も否定辞 not の入り方には二つのタイプが考えられる。すなわち、

(7) a. it is *not* necessary that p: *not* necessarily p

b. it is necessary that \sim p: necessarily \sim p

(7a)の場合は否定辞の作用域 (scope) の中に様相表現 (modal) が含まれているが、(7b)の場合は逆に様相表現の作用域の中に否定辞が含まれる関係になっている。前者が命題外否定、後者が命題内否定または命題否定に相当するのは明らかである。

次に具体的なコンテキストの中で用いられる発話文 (utterance) の論理構造について考えてみたい。なおここで発話文という表現を用いるのは、Chomsky の変形理論でいう文 (sentence) から区別するためである。Chomsky 的な角度からみた文は、理想的な状況で生成された理論的な生成物 (“theoretical construct” あるいはいわゆる “system sentence” (cf. Lyons(1977), Chapter 14)) であり、この理論的な生成物を具体的な発話文に理論的に結びつけていくためには、話者およびその他のコンテキストの諸々の条件を考慮した、いわ

ゆるコンテキスト付与 (contextualization) の理論を適用しなければならない。それ故、ここで議論する「発話文」の構造は「文」のそれとは本質的に異なるものであることに注意しなければならない。

具体的な発話文の論理構造は(8)に示すような三つの構成要素 (components) からなると考えられる。

(8)	(I say so	(it is so	(that p))
	<u>performative</u>	<u>modal</u>	<u>propositional</u>
	component	component	component
	(the neustic)	(the tropic)	(the phrastic)

すなわち遂行動詞要素 (performative component), 様相表現要素 (modal component), 命題要素 (propositional component) の三構成要素である。このうち命題内容そのものである命題要素は説明を要しないであろう。

様相表現要素は、上にもものべたとおり、pの事実性に関するさまざま修正 (qualification) となる要素が表現される部分であって、それ故、事実の客観的様相 (objective epistemic modality) のすべてを受けもつと考えてよいであろう。pの事実性を100%真として受けいれるときの表現、すなわち「確認」の場合も、“it is the case that p” という形式でこの要素に関係する。逆に、100%偽として退けるときは、いわゆる「否認」の表現となり、“it is not the case that p” という形式でこの要素に関係する。さらに上述の通り、possible, probable, certain, necessary などの事実性に関するさまざまな様相を表わす表現も当然関係するが、それが具体的表現として実現される際は、“it is possible that p” の他に、副詞化された “possibly p” という表現もごく普通である。

遂行動詞要素は文字通り典型的には遂行動詞を伴い、一人称単数を主語とする要素であるが、この構成要素もさまざまな修正を受けいれることができる。しかし様相表現要素との本質的な相違点は、遂行動詞要素がもっぱら p の主観的様相 (subjective epistemic modality) の表現に関係しているところであろう。例えば I-say-so 要素に [+probability] の修正がなされると、具体的には ‘perhaps’ とか ‘probably’ などの文修飾副詞として実現されることになる。

以上、I-say-so 要素と it-is-so 要素の特徴を、主観的様相を表わすものと客観的様相を表わすものという関係で説明してきたが、この関係を整理すると、次の(12)のように表わすことができる。

可能である。

- (14) a. I don't like modern music.
b. I like modern music.

以上の考察が正しければ、二種の命題否定を区別する主な要因は、命題の述語が [+gradable] か否かにかかっていることになる。それ故命題否定の一般的説明としては、「命題否定は一般的にはネクサス否定であり、命題を矛盾概念に変えるが、その命題の述語が [+gradable] の特性をもつ場合は述語否定の傾向が強く、一般に命題を反対概念に変える」ということになる。

様相表現否定は、(8)の説明の際すでに述べた否認の表現に対応する。pを話者が100% 偽として受けとめ、それを表現する際の表現である。これは会話のコンテキストで相手が述べたことに対してそれを否認するという場合と、会話ではなくて話者自身がpを前提として頭におき、それを~(p)として否定して述べる場合が考えられるが、いずれも様相表現否定として取り扱うべきであろう。特に後者は次節で取り扱う婉曲表現と関係する。すなわち、Aを婉曲的にいうのにまず反対概念 'un-A' をたて、それを否定して "not un-A" とすることにより間接的に表現するのであるが、この場合の not は否認と解すべきであろう。

遂行動詞否定には二つの機能が考えられる (Lyons (1977, p. 769))。一つは否認であり、もう一つは行為を行なわないとのべる行為である。例えば(15)の場合、一つの解釈は 'promise' していることを否認する場合である。

- (15) I don't promise to assassinate the Prime Minister.

もう一つの解釈は、"I promise" という言語行為を遂行することを拒絶、またはできないと表明することであり、このべること自体が一つの言語行為ということになる。これは何も言わない場合とは区別されるという意味において、一つの言語行為といえよう。

3. 婉曲の効果をもたらす否定表現

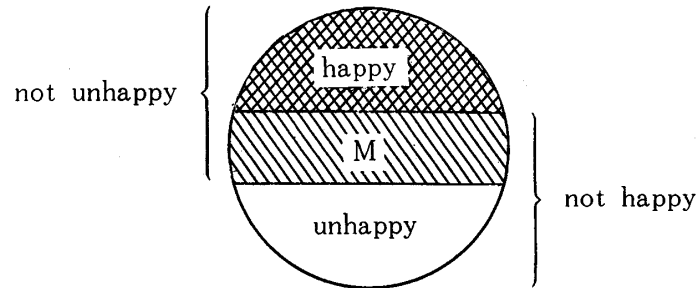
この節からは本章の冒頭で提示した文に立ち返りたい。まず本節では、否定辞が同一文中に二つ続いて生ずる場合のうち、婉曲の効果をもたらすケースについて考察したい。(16)の二文は意味論的には互いに異なった内容を表わしているが、語用論的には(16 a)が(16 b)の婉曲的表現になりうることは直観的に明らかであろう。

- (16) a. I am not unhappy.
b. I am happy.

本節では、(16 a), (16 b)の表現の意味関係がどうなっているかをまず考察した上で、この種の婉曲の効果が生じてくるメカニズムを明らかにしたいと思う。

happy と unhappy は互いに反対事項の関係にある。この二つの概念の関係を分りやすく理解するために、(1)に代わって(17)のような書き方をしてみよう。

(17)



(M: happy でも unhappy でもない)

丁寧さなどの婉曲効果をねらって(16 b)をのべる代わりに(16 a)をのべる場合、どのような操作が行なわれているかという点、まず(16 a)の述語 'happy' の反対概念をたてておいて、それを否定する（あるいはもっと正確には not を用いてその矛盾概念を作る）ということである。結果としては 'happy' をいうのに “not unhappy” でもって表わすという手法がとられたことになる。これが何を意味するかであるが、まず(17)に注目したい。(17)の斜線の関係からわかることは、“not unhappy” の領域がすっぽりと 'happy' の領域を包みこんでいる。すなわちこの両者の間には(18)の関係が存在するといえる。

(18) happy \supset not unhappy

(happy ならば not unhappy である)

いま(18)に関して、その逆「“not unhappy” ならば 'happy'」が言えないことから、“not unhappy” は 'happy' であるための必要条件であることがわかる。それ故(16 b)をいうのに(16 a)でもって表現するということは、(16 b)をその必要条件でもって表現するということであり、いわゆる間接発話表現の原則（ここでは Searle (1975) に詳説されているように、丁寧さまたは婉曲性を表わすために、Pをのべる代わりにPの必要条件でのべる語用論的原則をさす。換言すれば、一般に $P \supset Q$ がいえるとき、Pの代わりにQでもって表わす方法。）がここでも生きていることが明らかになる。なお、この必要条件でものを言うということは、視覚的に説明すると(17)の図からわかる通り、'happy' をいうのに余分な領域Mが加わった “happy + M”(=not unhappy) の領域でものをいうことであるので、より一層間接的で焦点をぼかした表現になるのは一目瞭然であろう。

すなわち、(21 b)を“I am unhappy”の婉曲表現と解する場合は否認であり、否定的主張と解するときは命題内否定の関係になっている。このように I-say-so 要素と it-is-so 要素が何ら修正 (qualification) を受けていない場合は、否定の内部構造が異なっているとしても、表層構造が同一のものになることが可能である。

ところが、例えば主観性を表わす“I think”が I-say-so 要素を修正する場合を考えると、事情が少し異なってくる。

ここで“I think”が I-say-so 要素を修正するとはどういうことかであるが、これは、発話文の論理構造において“I say”が“I think”にとって代わられる場合のことである。“I say”は、命題 p をのべる場合の基本的な遂行動詞であり、話者が p を客観的なものとして取り扱っていることの標識といってもよく、(22), (23)でみてきた通り、普通は変形の途中で削除され表層構造に現われることはない。ところが p の内容を婉曲的にのべようとするとき、“I say”が主観性の標識である“I think”でもって代わられることがよくある。これを I-say-so 要素の“I think”による修正 (qualification) と呼ぶ。なお、こうすることにより婉曲的效果が生ずることの理由は、次の関係から明らかであろう (この表記法は大江教授 (1978) に負うところ大である)。

(24) I say (p) \supset I think (p)

(p が客観的に真なら、主観的にも真)

すなわち、“I say”の代わりに“I think”を用いることは、客観的な言い方を主観的に言い換えることであり、p をその必要条件でのべることになる。それ故、(18)で触れた間接発話表現の原則がここでも生きているわけである。

ところで本論に立ち返って、(22 a), (23 a)が“I think”で修正された場合の構造が次の (22 a)', (23 a)' であり、それぞれの構造から派生された表層構造が、(22 b)', (23 b)' である。

(22)' a. I think—it is not the case that I am happy.

↓

b. I don't think that I am happy.

(23)' a. I think—it is so—that I am not happy.

↓

b. I think that I am not happy.

(22 b)' と (23 b)' は、(22 b) と (23 b) の場合と違って、同じ表層構造になっていない点に注意すべきである。すなわち、“I think”の修正を受ける場合は、表層構造は否認か否定的主張が判然としているという点においてその論理構造に一層近い構造を保っている、ということであろう。このことを別の角度から言えば、(21 b)のように主観的修正を何もうけていな

い表現の場合は、not の性質に関して二つの解釈，すなわち否定的主張と否認が可能であるが、(22 b)' や (23 b)' のように主観性の表現が付加された場合は、否定的主張（すなわち (23 b)') と否認（すなわち (22 b)') とが構造の上ではっきりと区別されるということである。

なお (22 b)' と (23 b)' は、これまで変形理論において否定辞上昇 (NEG-Raising) 現象として扱われてきたペアである。この現象の説明については次章で詳しく議論するが、その場合上述の内容が重要な意味を持つてくる。以上、いわゆる否定辞上昇として取り扱われてきた文法事象においても、基本的には否定辞を伴う婉曲表現の原則と全く同質のものが作用していることをのべたかったわけである。

注意すべき第三点は、一人称主語の量化に関してである。本節のこれまでの説明では、例文の主語が専ら 'I' であったため、量化を主語に対して直接反映できなかった。それ故、すでに(19)で示したように、量化を表わす時の副詞が主語の量化に代わってその役割を果たしている。このように量化された時の副詞を主語の量化の一変形とみなす解釈は、一人称主語を量化する最良の方法の一つは 'I' を時間的に分割することであるとする考え方に基づくものである。

なお、主語が 'I' ではなく、量化をそのまま反映できる 'everybody' の例がすでに (4) に示されている。また (19) で示した例文中の always はすべて選択的と解釈し、(always) と記した。本章の他の例文では必要のない限りこの always は省略されている。

4. 強調の効果をもたらす否定表現

本章の冒頭に引用した強調の効果をもたらす否定表現の例を(25)に再度引用し、この表現において話者がどの視点から意図する内容を表わしているかをまず探してみたい。

(25) I am never unhappy.

(25)を発する場合の話者の表現意図は、(26)の表現内容を強調して伝達することだと考えられる。

(26) I am happy.

もしそうだとすると、話者は(25)を導き出すのに、まず(26)の反対概念(27)をとりあげ、

(27) I am unhappy.

さらにこの(27)の特称命題(28)をとり出しておいて、その矛盾概念を(25)として発話したものと考えられる。

(28) I am sometimes unhappy.

つまり、強調の効果をもたらす否定表現のメカニズムとは、まず意図する命題の反対概念をとり出し、次いでその特称命題をとり出しておいて、その矛盾概念でもって表現するという方法である。

もう一例、今度は主語に量化の要素が加わった(29)の例をみてみよう。(4)を参照のこと。

(29) Everybody is happy. $((x)Fx)$

(29)の反対概念は(30)である。

(30) Everybody is unhappy. $((x)-Fx)$

さらに(30)の特称命題をとると(31)の表現となる。

(31) Somebody is unhappy. $((\exists x)-Fx)$

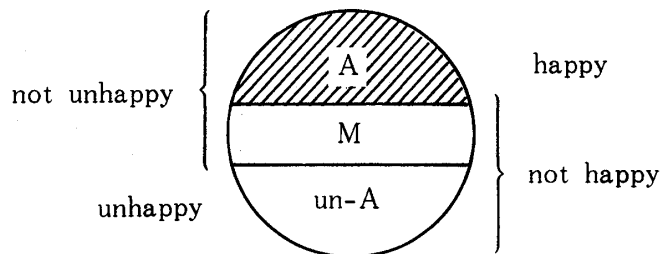
(31)と矛盾関係にある表現は、次の(32)である。

(32) Nobody is unhappy. $(-\{(\exists x)-Fx\})$

(25)に関する上の説明に従えば、(32)が(29)の強調表現ということになるが、事実(32)が(29)よりも内容を強く表現しているので、以上の説明にはほぼ誤りはなさそうである。

それでは表現内容の反対概念のそのまた特称命題の矛盾概念をもって強調表現とするこの方法の裏には、どのような言語心理が隠されているのであろうか。便宜上、(33)の図を用いて考えてみたい。

(33)



結論から先に言うと、「必ずA」ということをのべたいとき、話者の頭の中には、「非Aの可能性はありえない」という判断が存在すると思われる。表現内容の反対概念のそのまた特称命題の矛盾概念というのは、実は(33)の図でAをいわんとするとき、非A（すなわち un-

A+M)の可能性は全くないということに等しい。すなわち

『Aの反対概念の特称命題』の矛盾概念」

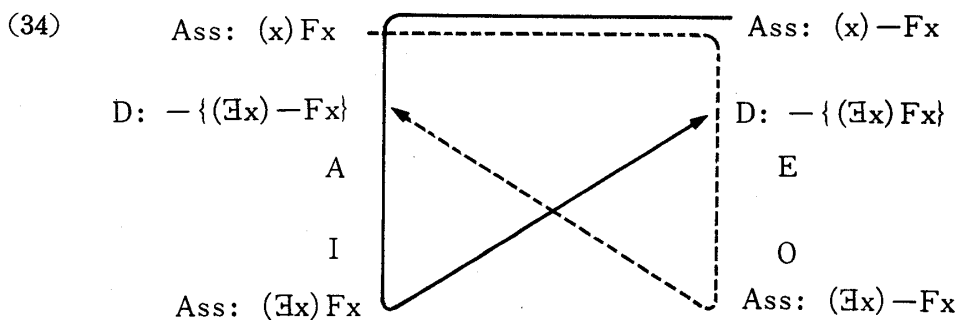
というのは

『un-A が少なくとも一例はある』ということはない」

ということであり、これを(30)の例でいうと、「『unhappyの人が少なくとも一人はいる』ということはない」(一人もいない)ということである。すなわち、「非Aの可能性はありえない」ことを示すことから、この手順に従って導かれた表現はAの強調表現ということになる。

なお、非Aを導くために、いきなりAの矛盾概念をとって not A とし、さらにその矛盾概念をとり出せばAの強調表現になりそうなものであるが、ここでこういう手順を踏まない理由は、この方法だと「非Aの例は一例もない」という説明にはならないからである。またこの方法だと、not Aから un-A の表現がうまく導けない。例えば(30)の矛盾概念は“Everybody is not happy.”であり、さらにこれの矛盾概念は“Everybody is not not happy.”となるが、この表現からは“Nobody is unhappy.”をすんなりと導くことはできないのである。

以上の考察を命題関係による対当表にあてはめて考察してみると、強調の効果をもたらす否定表現のメカニズムは、次のように表現できる。



すなわち、(x)Fx(すべてxはFである)の強調表現を作りたいときは、その反対概念(x)¬Fxをとり、さらにまたその特称命題(∃x)¬Fx(xの中にはFでないものが少なくとも一つある)の矛盾概念¬{(∃x)¬Fx}(xのうちFでないものは一つもない)を作れば、それが(x)Fxの強調表現ということになる。論理的には、(x)Fxと¬{(∃x)¬Fx}とは同値であるが、語用論の視点からいうとこれらは同値ではない。それは、(x)Fxが存在の主張(Assertion)としての全称肯定であるのに対し、¬{(∃x)¬Fx}が、これまでのべてきたように、「(x)Fxを否定する(∃x)¬Fxの可能性が全くない」ことを表わした否認(Denial)の表現であることから明らかであろう。

以上、 $(x)Fx$ の強調表現が $\neg\{(\exists x)\neg Fx\}$ であることをのべてきたが、これと全く対称的に、 $(x)\neg Fx$ の強調表現が $\neg\{(\exists x)Fx\}$ であることも同様の方法で説明できる。 $(x)\neg Fx$ の反対概念 $(x)Fx$ の特称命題は $(\exists x)Fx$ (F である x が少なくとも一つある)であるが、この矛盾概念をとると $\neg\{(\exists x)Fx\}$ (F であるような x は一つもない)となり、これが $(x)\neg Fx$ の強調表現ということになる。

5. まとめ

本章では二つの否定辞が同一文中に続くような否定表現について考察し、意味論的にどのような否定関係が文全体の意味を婉曲に導き、また逆にどのような関係が強調の効果をもたらすかを論じてきた。論点をまとめると次のようになる。

[1] 婉曲の効果

- (i) 婉曲の効果は一般に、 $A \supset B$ がいえるとき、 A の内容を B でもって表わすときに生ずるといえる。これは関接発話表現の原則であり、以下の(ii), (iv)もこの原則に従っている。
- (ii) $(x)Fx$ の婉曲表現は、一般に $\neg\{(x)\neg Fx\}$ でもって表わされる。
- (iv) (i)と平行的に論ずれば、 $(x)\neg Fx$ の婉曲表現は $\neg\{(x)Fx\}$ となるが、一般には $\neg\{(x)Fx\}$ は、単に $(x)Fx$ の否認として用いられることが多い。いずれの用法であるかは、コンテキストに依存する。

[2] 強調の効果

- (ii) A の強調表現は、一般に「非 A の可能性は一つもない」という表現形式をとる。(iv)もこの原則に従っている。
- (vi) $(x)Fx$ の強調表現は、一般に $\neg\{(\exists x)\neg Fx\}$ で表わされる。
- (vii) $(x)\neg Fx$ の強調表現は一般に $\neg\{(\exists x)Fx\}$ で表わされる。

本章はもっぱら never, no などの強調表現および not un- の形の婉曲表現に的を絞って議論を進めてきたが、強調や婉曲の効果はこうした語彙要素に限られるものではなく、ストレスなど音韻論的側面からも生じてくる。この側面については本章では何ら触れられていない。本章における筆者のねらいは、強調や婉曲の効果という語用論的現象の裏には、どのような意味論的メカニズムが隠されているのかを明らかにすることである。

* 本章の原稿を修正するにあたり、九大大学院の諸氏 (1979年当時)、特に中村 芳久、熊本 千明、宮崎 充保の諸氏との議論が有益であったことを付記しておきたい。

第二章

いわゆる ‘NEG-Raising’ の現象について

1. 序

本章では五つの観点からいわゆる ‘NEG-Raising’ の現象を取り扱う。まず2節では、NEG-Raising 現象のこれまでの取り扱いおよび問題点について概観する。3節では、verbs of opinion の代表として ‘think’ を取りあげ、“I think” が主観性の標識であることを論証する。4節では以上の考察を踏まえて、従来の NEG-Raising 現象の考察とは違った角度から、否定辞の移動に関する説明を試みる。さらに5節では、挿入句として用いられた “I think” と否定辞との関係が論理構造を用いて分析される。そして最後に6節においては、否定辞上昇に関係するペアの文の意味上の距離の問題を、時制、人称の異なるものに関して考察する。7節の結論では、4節で提示された方法が ‘think’ 以外の NEG-Raising predicates の例文にも適用されることが示される。

2. NEG-Raising 現象の取り扱い

いわゆる ‘NEG-Raising’ とよばれるこの文法現象は、もともと Fillmore(1963) で次の (1a)(1b)文の意味の similarity を説明するために提案されたもの、とされている。

- (1) a. John thinks Sally hasn't left.
b. John doesn't think Sally has left.

(1b)は ambiguous で、少なくとも次の二つの意味をもつ。

- (2) i. 否認 : It is not the case that John thinks Sally has left.
ii. b=a : John thinks Sally hasn't left.

従来の変形理論では、(2ii)の解釈の場合、(1a)(1b)は(1a)の構造の深層構造を共有し、そこから *not* が変形によって主文の側に繰り上げられたのが(1b)であるとされる。この変形による繰り上げがいわゆる ‘NEG-Raising’ とよばれる変形規則である。なお、この(1a)(1b)の意味の類似性の現象は最近になって気づかれたものではなく、すでに Jespersen(1908)の中で言及されていることがらである。

NEG-Raising を許すといわれる述語は多くはない。代表的なものだけあげてみると、

- (3) a. think, believe, suppose, ...
 b. want, intend, choose, ...
 c. seem, appear, be likely, ...

便宜上三つの syntactic classes, すなわち (3a) : predicates of opinion, (3b) : predicates of expectation or intention, (3c) : predicates of perceptual approximation (Horn (1975), Sheintuch (1976) 他による), として分類されることが多いが, これらが自然な意味的クラスをなしているか否かは議論の多いところである。G. Lakoff などは, 個人により異なるので自然なクラスはなさないと言い, 各述語が mark されているだけの minor rule にすぎないと述べている(R. Lakoff (1969) による)。しかし筆者の直観では, これらの predicates は話者の主観性と密接な関係をもっており, それ故意意味的にも自然なクラスをなしているように思われる。

ところで変形理論における恐らく最初の NEG-Raising に関する語用論的な観察と思われるものは, Dwight Bolinger のコメントとして R. Lakoff (1969) 他に引用されている (4) にあげるような観察であろう。

- (4) 否定辞がそれが否定する動詞から遠くへ動かされると, それだけ一層, 主張内容に関して話者の uncertainty が増す。

すなわち(1)の例文でいえば, (1a) の *not* の位置が(1b)のように主文に移ると, 否定辞が否定する動詞から遠くに動かされるわけで, それだけ一層 “Sally hasn’t left” という主張内容に関する話者の certainty が減ずるというものである。

この差異が強調されすぎると, 意味上の類似性という証拠だけでは NEG-Raising が存在するとする見方が怪しくなってくるが, 反面, syntactically には説得力があると思われるいくつかのデータが存在する。三例だけあげてみよう。

- (5) a. I thought that John wouldn’t leave until tomorrow.
 b. I didn’t think that John would leave until tomorrow.

(5a)の基底構造では, *not* は *until* の直接上 (directly above) にこなければ意味をなさない。にもかかわらず(5b)では *not* が主文にきている。この現象の説明としては, もともと *not* が *until* の直接上にあって, それが変形により主文に移動した, とするより他に方法がない。この現象が *think* などの NEG-Raising を許す動詞に独特のものであることは, 次の(6a)(6b)から明らかである。*think* であれば ‘OK’ である現象が *say* であれば ‘OUT’ である。(詳しくは R. Lakoff (1969) を参照のこと。)

- (6) a. I said John wouldn't leave until tomorrow.
 b. *I didn't say John would leave until tomorrow.

第二例としては(7)があげられる。

- (7) I don't think *Bill paid his taxes* and Mary is quite sure of *it*.

この文の *it* が指すものは、文構造だけからいうと否定辞の入らない "Bill paid his taxes" になりそうだが、実際は "Bill did not pay his taxes" のことである。この現象を説明するには、*not* が主文に移動する前の段階で *that* 節の代名詞化 (sentence pronominalization) が行なわれ、その後で *not* が主文に移動したと解釈すればうまくいく。(詳しくは Lindholm(1969) を参照のこと。) さらにもう一例だけあげれば、(8)の場合、

- (8) I don't think that ever before have the media played such a major role in a kidnapping.

not の移動が "Subject-Aux inversion" を引き起こしたと考えれば説明がつく。これらの他にも NEG-Raising を支持すると思われるデータはあるが、以上必要最少限に留めておく。

以上二つのパラグラフにわたって、Bolinger のように (1a)(1b) 間の語用論的な意味の差を考慮する観察態度と、NEG-Raising を支持すると思われる統語上の証拠とをみてきたわけであるが、今度はこれら二つの相異なる考察からくる当然の帰結として、両者を融合させる考え方が生じてくるのは想像に難くない。すなわち「NEG-Raising は語用論的要因が引き金 (trigger) となって適用される」とする立場である。実はこれが Sheintuch(1976) らにみられる NEG-Raising の語用論的研究である。この考え方によると、例えば (3a) に属する *think*, *believe* などの動詞に関しては、

- (9) 補文内容の真偽性に関して話者が *uncertain* であるとき、NEG-Raising が trigger される

というものである。そしてこの変形の適用にあたっては、適用の結果生ずる (1a)(1b) 間の「補文内容の真偽性に関する話者の *uncertainty* の差」は、語用論的な、あるいは文体論的な差であり、従って「変形は意味を変えない」とする変形理論の一般的大前提には抵触しない、という暗黙の了解があるように思われる。

いわゆる 'NEG-Raising' 現象の外面的説明としては、このような Sheintuch(1976) その他の研究はおおむね正しいように思われる。しかし、この種の否定表現をもっと根本的に

観察し、分析してみると、この現象は全く相異なる二つの現象が合体したものであると言えそうである。本章の目的は上に述べた変形理論的な表層的理解ではなくて、この種の否定表現のメカニズムをもっと掘りさげて観察し、その本質的な部分を明らかにすることである。

以下本章では主として(3a)に属する *predicates of opinion*, 特に *think* に焦点をあてながら議論をすすめたい。そしてその後で、考察の結果を(3b)(3c)に属する *predicates* にも適用する(6節)という方法をとりたいと思う。

3. 主観性の標識としての “I think”

この節ではまず二つのタイプの “I think”, すなわち ‘reportive’ と ‘expressive’ の用法を区別し、そのうちの一つ ‘expressive’ の用法が主観性の標識としての用法であることを示し、次いでそれが “I promise” などの *performative verb* と本質的にどう違うかを明らかにしたいと思う。

Kimball(1970)は(3a)に属する述語の用法に二つのタイプを区別する。すなわち ‘expressive’ utterance と ‘reportive’ utterance である。reportive な用法とは、主張(assertion)として用いられる表現の一部としての I think であり、文全体で真か偽かに関わる類のものである。これに対して expressive な用法とは、まず①主要伝達内容 p には直接関係がなくて、命題 p に対する話者の “states of mind”, すなわち “I think” の場合だと p が主語(私)の心の中で真だという主観性を表わす。また、②私的な心的状態の表現であるので、他人が立ち入ることができず、それ故 “I think” そのものについて他人の修正を受けたり拒否されることがない。また③ parenthetically に用いられることができ、④ performative verbs に類似している。さらに⑤一人称のみではなく、二人称、三人称、さらには過去形においても用いることができる。

これらの点を具体例で説明してみよう。まず①と③についてである。

(10) I think this milk is spoiled.

- | | |
|---|---|
| { | a. How's the milk doing?
(そのミルクは使えますか) |
| | b. What do you think about the milk?
(そのミルクについて何をお考えですか) |

(10)の文は可能性として二つのタイプの疑問文(10a), (10b)の答えとなり得る。(10b)の答えとしての(10)は、自分が考えていることを主張(assertion)として述べている(すなわち「私はこのミルクが腐っているということを考えている」)。一方(10a)の答えとしての(10)は、自分にはそう思えるということであり、この場合 ‘I think’ は単に心の状態を表わして

いるにすぎない（つまり「腐っていると思う」）。

この違いを角度を変えて統語的特徴から説明すると、(10b)の質問に対する答えとしては(10)が最適であり、(11)の如き表現は適当ではない。

(11) This milk is spoiled, I think.

何故なら “What do you think...?” のような質問の場合は

(12) I think such-and-such.
(S)(V) (O)

という S-V-O の関係全体が反応として求められているからである。

一方(10a)の質問に対しては、一番重要な情報は要するにミルクが使えるかどうかであるから、答えとしては “This milk is spoiled” だけで十分のはずである。それ故、“I think” はいわば余計な表現であり、なくてもよい。だから(11)のように “parenthetical verb” として後に付加しても一向に差し支えないのである。

やや脱線するが、この I think の用法に関する expressive と reportive の対応関係は、日本語の「思う」にも適用できるように思われる。すなわち前者は「一と思う」にあたり、後者は「一を思う」にあたる。前者の場合は「思うに、一」がいえのに対し、後者の場合はそれがいえない。なお、この “parenthetical verb” としての一面については5節で詳説するはずである。具体例の説明に立ち返り、②と④については後述する performative verbs との相違点に関する議論に譲るとして、その次の⑤の例としては次の(13)をみていただきたい。

(13) a. Jerry believes there will be a recession.

b. I thought we could keep our clothes on for this.

(13a)は三人称の例であるが、これを二人称にすることもできよう。また(13b)は過去形の例である。

以上 Kimball の考察を援用しながら、'think' の二つの用法のうち expressive の用法に焦点をあてて、その特徴をいくつか述べてきた。筆者としてはこの expressive の用法を、発話における話者の主観性の標識として結論づけたいわけであるが、そうする前に、この用法と非常に類似した行動をとる performative verb の場合を比較・考察し、この両者がどの点で共通し、どの点で本質的に異なっているかを明らかにしておかなければならないと思う。以下 expressive の用法の特徴としてあげた④を除く①から⑤までのそれぞれの点について、'promise' の場合と比較してみたい。まず①の場合、think は命題 p が主語の精神の

世界では真ということを述べているにすぎないので、ことばを発することによって行為を行なうということはないが、*promise* の場合は、主語は必然的に *I* であり、“*I promise to...*” と発したとたんに行為が成立するという、いわば [+ritual] の性格をもつ。すなわち、*I hereby promise to...* は OK だが、**I hereby think...* という表現は非文である。②については、“*I promise to ...*” の場合ことばを発すると同時に行為が成立するので、他人がそのことについてコメントはできても、*qualify* したり、*cancel* したりすることはできない。一方、“*I think*” の場合も、これを発したとたんに *p* は私の心の中で真ということが成立するわけで、他人がたちいる余地は全くない。一般に私的感覚や私的経験に他人がたちいる余地がないことは、わざわざ Wittgenstein を引きあいに出すまでもない。その意味においては共に等しく [+performative] という性格は共有しているといえよう。しかし、*promise* のように [+ritual] な性格のものは本質的に発声行為に関係し ([+linguistic])、一方 *think* などは精神内行為であるという点で [+mental] [-linguistic] といえる。③については共に *parenthetical* でありうる。ただし、その性質または機能的意味は両者で根本的に異なっている。

- (14) a. She's in the dining-room, I think.
b. I think (that) she's in the dining-room.

(14a) の場合は事実をのべた主張文が前半にきており、その事実性を弱めるために “*I think*” が付加されていると考えられる。つまり客観的な事実文の記述を “*I think*” で主観化することによって、より婉曲的な効果を出そうとしているといえる。

- (15) a. I'll be there at two o'clock, I promise you.
b. I promise (that) I'll be there at two o'clock.

(例文は Lyons(1977)より借用)

これに対して(15a)の前半においては、*performative verb* のない(すなわち *implicit* な)主張文の形をしていて発話の力は弱い、明らかに *promise* の内容と考えられる。後半の “*I promise*” は、前半のやや弱い発話の力に対して話者の *commitment* を *confirm* するために付加されたものと考えられる。つまり “*I promise*” も “*I think*” も付加されていない平叙文は、論理構造でいうと、

- (16) I say so-it is so-that *p*

であり、*I-say-so, it-is-so* 共に何ら *qualification* もうけず、すべて *implicit* であるため、純粹に客観的な記述であるということになる。ところが ‘*I-say-so*’ component が “*I*

promise”として顕在化すると、話者の commitment が明確化し、*promise* の場合は [+ritual] の効果が生ずる。しかしこの場合、“I think”だと、同じ ‘I-say-so’ component を修正しておりながら、逆に indirectness の効果しか生じないのは一体何故であろうか。

これには②でのべた *promise* のもつ発声行為という特徴 ([+linguistic]) と *think* のもつ精神内行為という特徴 ([+mental]) とが重要な形で関係してくる。すなわち、ある発話が行為遂行的に (performatively) なされる場合には、その行為遂行的発言 (performative) がなされるための必要条件が満たされていなければならない。上述のことばでいえば、[+linguistic] であるためには [+mental] でなければならないのである。具体的にいえば、“I say” や “I assert” が成り立つためには少なくとも “I think” や “I believe” が成立していなければならない。(この点の指摘については大江三郎教授に負うところが大きい。)つまり行為遂行的発言の必要条件は、その発言を導くのに必要な精神的行為が先行して満たされていなければならないということである。具体例で示そう。(17a) の論理構造は (17b), (18a) の論理構造は (18b) であると考えられる。

- (17) a. She's in the dining-room.
 b. I *assert*- it is so-that she is in the dining-room.
- (18) a. I think (that) she is in the dining-room.
 b. I *think*-it is so-that she is in the dining-room.

(17a) は客観的事実の主張文であり、p を100%事実としてのべているのに対し、(18a) は婉曲的でやわらかい表現であるのは、(19)の関係からわかるように、“I assert” の代わりにその必要条件である “I think” を用いて表現しているからである。

- (19) I assert... ⊃ I think...

explicit な表現をできるだけ避けて、その felicity conditions (適切性の条件) を用いて表現し、より間接的な効果をねらうという語用論的側面は、すでに前章でも触れてきたことではあるが、ここでもまた、この間接的発話の原理が生かされているわけである。なお(19)の関係は次のようにも書きかえられる。

objectively true ⊃ subjectively true

それ故 (17a) と (18a) の差は、前者が客観的主張文であるのに対し、後者は「少なくとも主観的には真」という控え目な表現であるということになる。

最後に⑤であるが、‘think’ が 人称と時制を選ばない平叙文であるのに対し、‘promise’ は一人称、現在、平叙文、(肯定) が普通である。(肯定) とカッコの中に入っているのは、

前章の(15)で示したように否定の *performative* も考えられるからである。‘*think*’ が人称と時制を選ばないのは [-ritual] すなわち [+performative (狭義), +mental, -linguistic] という特性と密接に結びついているためである。

以上の考察の結果, *performative verb* としての ‘*promise*’ と, *expressive use* の ‘*think*’ との類似点と相違点は, 次の表の通りまとめられる。

(20)

	<i>promise</i>	<i>think</i>
	Performative verb	“expressive” use NEG-Raising verb
①	necessarily true + ritual (I hereby promise...)	subjectively true - ritual (*I hereby think...)
②	performative (狭義) + linguistic - mental	performative (狭義) - linguistic + mental
③	parenthetical confirmation	parenthetical indirectness
⑤	一人称 現在 平叙文 (肯定)	一・二・三人称 現在・過去・未来 平叙文
	direct speech acts の一種	“I <u>think</u> ”: a necessary condition of “I assert” indirect speech acts の一種 ↓ 婉曲的

(20)から明らかな通り, “I think” の発話における機能的意味の中心点は, それが “I assert” の必要条件であることであろう。これまで “I think” は ‘I-say-so’ component を qualify するという言い方をしてきたが, その本当の意味は, “I assert” という explicit performative を用いるのではなくて, “I assert” が遂行されるために満たされなければならない条件の一つである “I think” によってそれが取って代わられたということである。換言すれば, “objectively true” (すなわち “I assert p”) というところを “subjectively true” (すなわち “I think”) でもって言い換えたということである。

なお “X think (that) p” の解釈は一般に次のように説明することができよう。

- (21) X think (that) p
 =P is true in X's subjective world

すなわちこの種の ‘think’ は, 主語の主観性の標識として機能していることになる。なお, このことは(3a)の predicates of opinion 全般にもいえることである。

4. 婉曲性の根拠

この節の目的は, まず2節の冒頭で述べた(1a)と(1b)の意味上の関連性を, 発話の論理構造を用いることによって明らかにすること, 次いで NEG-raised utterance と non-NEG-raised utterance の意味上の相違が生ずる一般的理由を議論することである。議論においては前章および本章の第3節の考察が大幅に援用される。

まず(1a)と(1b)を一人称の文に移した(22a)と(22b)の意味的關係から考察したい。

- (22) a. I think (that) I am not happy.
 b. I don't think (that) I am happy.

すでに(2)で説明したように, (22b)は ambiguous であり, 次の二つの意味をもっている。

- (23) <i> 否認 : not (I think (that) I am happy)
 <ii> b=a : I think (that) I am not happy.

ところが(23 ii)は必ずしも b=a ではなく, (4)で説明したように, (22a)と(22b)の間には補文内容の事実性に関して, 語用論的差異が存在する。

このような(22a)(22b)の意味上の関連性を明らかにするために, 以下前章で導入した発話の論理構造を用いて考察してみたい。すでに明らかなように, (22a)は否定的主張文であり, “I am happy” を p で表わせれば, (22a)の構造は(22a)'のように命題内否定の形で表記できる。

いるとってよい。しかもこの透明のおおいは否定辞には無感覚であり、自由に通過させる。つまり "I think" と否定辞 *not* との関係は統語的な段階での結合にすぎず、意味的には *not* は "I think" に本質的影響を与える要素とは思われない。*not* が重要な意味をもつのは、"I think" によって qualify される側の記述においてである。

以上の仮説が正しいとすれば、例えば(24)の構造の分析にあたっては、それを(27)に示すような二つの要素、すなわち, qualify される側の構造と qualify する側の構造, からなるものとして捕えることができるであろう。

$$(27) \quad (24) \left\{ \begin{array}{l} [\text{Qualified}] : \text{I say so — it is so — that } not \ p \\ [\text{Qualifying}] : \text{I think} \end{array} \right.$$

(Function : subjectification)

この(27)の分析は, NEG-Raising の現象を, いわゆる NEG-Raising predicates (すなわち [Qualifying] の表現) から切り離し, [Qualified] の構造だけで分析することを可能ならしめた点で重要な意義を持つ。それ故この仮説に従うとすれば, 本節の課題としてあげた(i), (ii), (iii)の三点は, (27)の [Qualified] の構造における課題として置き換えることができる。従って, 以下の否定辞上昇に関する議論は, 任意の命題 *p* を含む発話の論理構造における否定辞の入り方の問題となってくる。なお [Qualifying] の表現は, 3節で考察したいわゆる「主観性の標識」であり, 上述の表現を用いるならば, 否定性に関して無感覚な, 主観性を表わす透明のおおい, ということになる。

ここで, 発話の論理構造の略式記述について述べておきたい。任意の命題 *p* を含む発話の論理構造は, 次のように表わされる。

$$(28) \quad \text{I say so — it is so — that } p$$

この構造を, 記号だけで略記すると, 次のようになる。

$$(29) \quad \cdot[\cdot(p)]$$

ここで '·' は, I-say-so および it-is-so の要素を表わすが, 特にその要素の存在を強調する必要のないときは, 省略されてよいものとする。[] および () は, 各 component を含む文の構成単位を表わすものとする。また否定辞を '~' で表わすとする, 前章(13)でみた通り, (29)には少なくとも三つの否定辞の入り方が可能である。

$$(30) \quad \text{a. } \cdot[\cdot(\sim p)]$$

$$\text{b. } \cdot[\sim(\ p)]$$

c. $\sim[\cdot(\ p)]$

以上の略式記述を確認したあと、(24)、(25)、(26)の論理構造に立ち返りたい。上述の略式記述に従えば、(24)、(25)、(26)の [Qualified] の部分は、それぞれ次の(24)', (25)', (26)' の構造を持つことになる。

(31) (24)' $\cdot[\cdot(\sim p)]$

(25)' $\sim[\cdot(\ p)]$

(26)' $\cdot[\sim(\ p)]$

これを表層構造と対照させて表にまとめてみると、次の(31)のようになる。なお「 \cdot 」の部分は省略されている。

(32)

[Qualified] の部分 の論理構造	発話全体の表層構造
(24) $[(\sim p)]$	(22a) I think (that) <i>not</i> p
(25) $\sim[\cdot(\ p)]$	(22b) I <i>don't</i> think (that) p
(26) $[\sim(p)]$	

ところで(24)は否定的主張文である。いまこの否定的主張を婉曲表現に変える方法を考えてみると、前章3節の原則に従って、 $(\sim p)$ の反対事項のそのまた矛盾概念を表わす表現を作ればよい。 $(\sim p)$ の反対事項は(p)である。さらに(p)の矛盾概念は $\sim(p)$ である。それ故 $[(\sim p)]$ の婉曲的表現は $[\sim(p)]$ ということになる。ところが $[\sim(p)]$ は、まさしく(26)の論理構造であるので、(24)の婉曲的表現は(26)ということになる。

さて(26)の表層構造である(22b)は、たまたま(25)の表層構造でもある。すなわち(22b)は ambiguous である。それ故、(22a)の婉曲表現である(22b)には、(25)と(26)の二つの論理構造が二重にだぶっていることになる。

以上のことから、次の二つの関係が成り立つ。

(33) a. (22a) \supset (22b)

((22a) ならば (22b))

b. (22b) \supset (22a)

(「(22b) ならば (22a)」は言えない)

(33)が意味していることは、(22b)が(22a)の必要条件の関係にあるということである。否定的主張文(22a)を言う代わりに、その必要条件の表現である(22b)を用いて述べるわけで、婉曲をねらった間接発話の原則がここにも生きているわけである。

なお(～p)の反対事項を(p)としたが、これに対応する表現が“I am not happy”と“I am happy”であることから、これは反対概念ではなくて、矛盾概念ではないかという疑問が生まれてこよう。この点に関しては、前章2.3節の(14)の説明の際詳説したように、「命題否定は一般的には *nexus negation* であり、命題を矛盾概念に変えるが、その命題の述語が [+gradable] の特性を持つ場合は、*predicative negation* の傾向が強くなり、一般に命題を反対概念に変える」という原則を適用すればよいと思われる。

以上の考察を踏まえて、本節の課題としてあげた(i), (ii), (iii)の三点に立ち返りたい。まず(i)の(22a)=(22b)と解する理由については、(33)に示した関係から容易に説明がつく。(ii)の(22a)と(22b)の意味的差異の理由については、(32)で示したそれぞれの論理構造の差、および(33)の関係から明らかである。(iii)の、「(22b)の方が(22a)に比べて主張内容に関する話者の *uncertainty* の度合いが高い」とされる理由については、(22a)が否定的主張文であり、一方(22b)はそれを婉曲的に表現した発話であることから明らかであろう。

5. 挿入句としての “I think”

本節の目的は、(34)の例文に見られる文法現象を、これまでの考察に基づいて説明することである。特に、①(34b)が何故非文であるか、次いで②(34a)と(34c)の両方が許される理由は何か、さらに③それらの意味論的相違点はどこにあるか、の三点の考察が中心になる。

- (34) a. Harry can't drive, I think.
 b. *Harry can drive, I don't think.
 c. Harry can't drive, I don't think.

挿入句としての “I think” の例は、本章の(11)と(14)で取り扱った。これらの例文を便宜上次に繰り返す。

(11) This milk is spoiled, I think.

(14) She's in the dining-room, I think.

いずれも共通して言えることは、文の前半に事実を述べた主張文がきており、その事実性を弱めるために、“I think” が付加されている点である。従って、表現の中心はあくまでも前半であり、“I think” は、その前半の ‘I-say-so’ component を *afterthought* として *qualify* していると言えよう。

いまはめこみ文 S_2 を伴う任意の文 $S_1(S_2)$ があるとき、この S_1 の要素が挿入的に移動できるための条件は何かをまず考えてみたい。一般的に言って、 $S_1(S_2)$ の構造をもつ文に

は、少なくとも二つのタイプがあるように思われる。一つのタイプは、文の情報上の重心が専ら S_2 の側にある場合であり、もう一つのタイプは、 S_1 (S_2) 全体で情報的なまとまりをなす場合である。情報上の重心をイタリック体で表わすと、この二つのタイプは次のように表記できる。

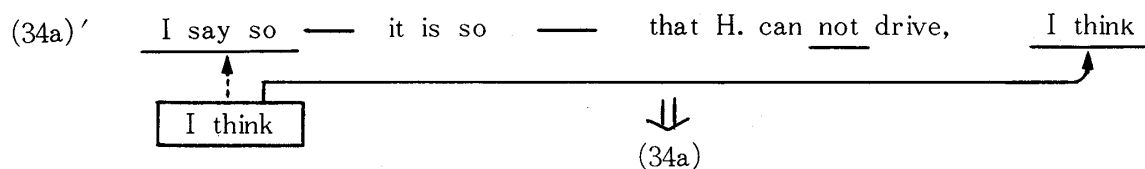
(35) a. S_1 (S_2) (S_1 : +parenthetical)

b. S_1 (S_2) (S_1 : -parenthetical)

例文で言えば(12)であげたような 'reportive' use の表現が(35b)に相当し、'expressive' use の場合が(35a)に相当する。なお、一般に一つの文には情報の中心(焦点)は一つしかないのが普通であるので、(35a)の場合に S_1 に中心が移ることはない。

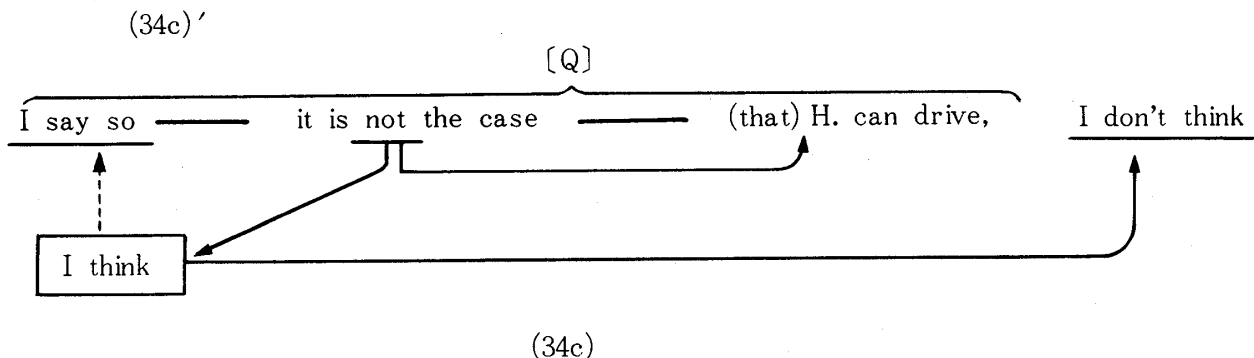
さて結論から先に言うと、 S_1 が挿入的に移動できる場合は(35a)の場合に限られている。それは、情報の中心が専ら S_2 の側にあり、 S_1 は単にそれを qualify する要素にすぎないからである。"I think" の場合は、婉曲の効果をねらう主観性の標識として機能し、(15)で示したような "I promise" の場合は、performative verb として話者の commitment の強さを表わす機能を持っている。

さて、話を(34)の例文に戻そう。(24)にあげた論理構造にならって(34a)の論理構造を表わすと、次のようになる。



(34a)は、否定的主張文に "I think" が付加されたものである。本来ならば I-say-so が修正されるところを、afterthought として付加されたために、図のように後置されている。

一方(34c)の論理構造は次のように表わされよう。



この文が伝達したい情報上の中心は [Q] の部分であって, "I think" は (34a) の場合と同様, 婉曲のための付加的要素にすぎない。ところが (34a) と決定的に違うのは (34c) が命題外否定, すなわち否認の構造になっている点である。もしこの構造で "I think" だけを後置すると, [Q] の部分は恐らく変形の結果 *not* が命題内に入って, 全体としては

Harry can't drive, I think.

となり, (34a) と全く同じ表層構造になってしまう。それ故この結果を避けて, 否認の構造を残すためには, 'not', を "I think" の側に結合さすより他に方法がない。しかも [Q] の部分は情報上の中心であるので, 'not' は必ず p と行動を共にしなければならない。その結果, 論理構造の 'not' が, 表層構造ではいわば機能を分化させられた形で, 一方で "I think" と結合して "I don't think" の形で後置され, もう一方で proposition と結合して, 情報の中心である文前半の意味内容を保持することになるわけである。

この仮説が正しければ, (34b) の非文の理由は明らかである。情報の中心が "Harry can drive" だとすると, Qualification は "I don't think" になりようがない。逆に, 後置された "I don't think" が否認の marker だとすれば, 前半の事実文は, 否認の表現 "Harry can't drive" でなければならないはずである。

以上の考察に基づいてこの節の冒頭で提示した課題を検討してみると, まず① (34b) の非文の理由については今述べたばかりだから繰り返す必要はなからう。② (34a) と (34c) の両方が許される理由は, それぞれが違った論理構造を持っているからである。さらに③その意味論的相違点は, (34a) が否定的主張文の *afterthought* としての *qualification* の場合であり, (34c) の場合は, 否認の *afterthought* としての *qualification* である。

6. 表現間における意味上の距離の問題

本章最後の考察は, 表現間の意味上の距離の問題である。

- (36) { a. I think he won't do it.
 b. I don't think he'll do it.
 c. I thought he would not do it.
 d. I didn't think he would do it.
 e. She thought he wouldn't do it.
 f. She didn't think he would do it.

Lyons (1977. p. 776) によると, (36) の三つのペアはいずれもほぼ同じ意味には違いないが, 語用論的な意味の差を考慮するとそれぞれの二文間の意味の差に開きがある, とされて

いる。そして(a)と(b)のペアと(e)と(f)のペアを比べたとき、(e)と(f)の方が一層意味的に近く、そして(c)と(d)の差は両者の中間である、と述べている。本節の課題は、この現象をこれまでの考察をもとに説明することである。

まず、2.3節およびその他の考察で明らかになった発話の論理構造を用いて、これらの表現を分析してみたい。(36)の(a)から(f)までの文は、(37)の(a)から(f)の構造に対応する。なお便宜上 “He will do it” を p で書き換えることにする。

- (37) { a. I think—it is so—[~p]
 { b. I think—it is *not* the case [p]
 { c. I say so—it was so—[I think—it is so—[~p]]
 { d. I say so—it was so—[I think—it is *not* the case—[p]]
 { e. I say so—it is so—[I think—it was so—[she thinks [~p]]]
 { f. I say so—it is so—[I think—it was so—[she doesn't think [p]]]

(37a), (37b)の構造に関してはコメントは不要であろう。(37c), (37d)については、過去形であるのでその分だけ発話の時点からずれている。(37e), (37f)では、“she thinks [~p]” は話者の心の中で内省することができないので、何らかの外的根拠をもとに話者がそう判断することになり、その過程を論理構造に反映させることがどうしても必要になってくる。(37c), (37d)に比べ “I think” の項を余分に挿入したのは、そのためである。

(37)の論理構造から、少なくとも三つの点が明らかになる。まず第一点は、(a)-(b)のペアよりも(c)-(d)のペアが、さらに(c)-(d)のペアよりも(e)-(f)のペアがより複雑になっていること。第二に、(a)-(b)のペアよりも(c)-(d)のペアの方が、さらに(c)-(d)よりも(e)-(f)のペアの方が、構造記述の共通部分が多いこと。第三に、この共通部分が従文の側から(右から)ではなくて、主文の側から(左から)であること。以上の三点である。

実は、この第二、第三点が本節の議論には決定的に重要である。すなわち、任意の二文が論理構造において主文の側からの共通部分を多く共有するということは、逆に言うと、この二文は、従属節の一部に差異を残すだけということになるからである。この事実が明らかになったことにより、Lyons の指摘した意味の開きの差は、論理構造の共通性の部分の大小関係に移行され、客観的に判断されることになる。すなわち、(e)-(f)間が共通部分が最大で、従って意味の開きは最小、次いで(c)-(d)がそれに続く。そして(a)-(b)間の開きが、相対的に言って最も大きいということになる。

以上本節では、(36)の三つのペアに関する Lyons の指摘を取りあげ、それが発話の論理構造を援用することによってうまく説明がつくことを示した。

7. 結論

本章では、4節でみたように、従来の方法とは違った角度から NEG-Raising 現象を扱ってきた。すなわち、論理構造による分析の結果を、[Qualifying] の要素と [Qualified] の要素に分割し、それぞれを別個のものとして考察する方法である。この方法だと、NEG-Raising の現象は発話に対する否定辞の入り方の問題に移行され、極めて処理しやすくなる。

この方法の説明力については、本章で詳しく論ずる余裕を持たなかったが、(3)で示した NEG-Raising predicates が用いられる構文では大抵応用できるものと思われる。なおここで詳細にわたって議論する余裕はないが、一例として Sheintuch (1976) の指摘した以下に述べる三点を取りあげ、それらに対しこの方法が説明力を持つことを簡単に示してみたい。

まず第一の指摘は(3a)の verbs of opinion (think, believe, suppose など)を伴う文で NEG-Raised の場合(例えば(38b)), non-NEG-Raised の場合(例えば(38a))より、話者のもつ補文内容の事実性に関する信念は弱いというものである。

- (38) { a. I believe I didn't see anyone in the room.
b. I don't believe I saw anyone in the room.

この場合は4節でみた "I think" の場合と同質であるので説明は不要であろう。(38b)の [Qualified] の要素の方がより婉曲的であることから説明がつく。

次いで、(3b)の verbs of expectation or intention (want, intend など)を伴う文で NEG-Raised の場合(例えば(39b))は Raised されない場合(39a)よりも、主語のもつ controllability が弱いということが指摘されている。

- (39) a. I want her not to leave early today.
b. I don't want her to leave early today.

'want' は clause の目的語をとれないので、上記のような文構造になっているが、論理構造は次にみるように(38)の場合と同質のものと考えられる。

- (40) (=39 b の論理構造)

[Qualified] I say so—it is *not* the case—(that) she leaves early today
↑
[Qualifying] I want

[Qualified] の要素は婉曲的表現であるので、[Qualifying] の要素が加わった文全体では話者の欲求を弱く表現したものとなる。これに対し、(39a)の論理構造(省略)では、[Qualified] の要素が否定的主張文であり、従って話者の欲求は相対的に強く表現されることにな

る。なお *controllability* という概念は [Qualifying] の [Qualified] への係わりとしてでてくるもので、[Qualified] そのものは本来中立の発話構造であることは言うまでもない。

最後に(3c)の *verbs of perceptual approximation* (*seem, appear* など)を伴う文で NEG-Raised の場合(41b)は、話者の直接的関与 (*direct involvement*) の意味が生ずるが、(41a) のように NEG-Lowered された場合 (“*did not say anything*” から “*said nothing*” になる現象のこと) は逆に、話者の間接的関与 (*indirect involvement*) の意味が生ずる。(NEG-Lowered されない “*did not say anything*” の場合は少なくとも直接的関与でない表現である。)

- (41) a. It seems that John said nothing insulting to his sister. (At least that's everybody says!)
- b. It doesn't seem that John said anything insulting to his sister. (I tell you, I heard them arguing myself!)

この場合もはじめの例とほぼ同様の分析を試みることができるが、[Qualifying] の要素がこれまでと少し異なる。スペースの制限上、*p* = “John said anything insulting to his sister” として表わす。

- (42) [Qualified] *I say so—it is not the case—(that) p*
 ↑ ↑
 [Qualifying] *I think* *seem*
 ↓
 (41 b)

‘*seem*’ は *perceptual approximation* を表わす動詞であるので ($\sim p$) は外界の事象にかなり忠実なものと考えられる。この点からいうと *seem* は客観の様相を表わす ‘*it-is-so*’ *component* を修正するものと考えられる。しかし一方、外界の事象を感受するのは各個人の個別的感觉器官であり、そこには必ず個人の主観的判断が関係してくる。この点からいうと、‘*seem*’ の *qualification* には必ず “*I think*” (あるいはそれに類する主観性の標識) が付随するものと思われる。この考え方を裏づけるデータとしては、一般に “*it seems to me*” が表層構造に現われるという事実を考え合わせれば十分であろう。なお(41)の例のように、この “*to me*” が表層構造に現われないのはよくあることである。

ところで一般的にいうて「～らしい」という判断を下す際には、その根拠に関して二つの場合が考えられる。一つは自分が直接経験して判断を下す場合、もう一つは他人の言うことに従って判断を下す場合である。前者の場合には他人の判断と一切係わりをもたないので、その意味で主観的であり、事実性について言えば客観性に乏しい。これに反して後者の場合は、自分で判断を下さないで、その意味では主観的ではなく、事実性について言えば客観

性が高いことになる。

さて(42)の構造に立ち返っていうと, [Qualified] の要素は, not が外部否定であるので, 否定的主張文(～p)の婉曲表現である。ところがこの婉曲表現は否定的主張文((41 a)の Qualified の部分一省略)よりも事実性が弱い(すなわち客観性が低い)ことから, 上述の議論に従えば, 話者の直接的経験に基づく判断につながっていくことになる。一方, 否定的主張文(特に(41 a)のように NEG-Lowered によって事実性が強調された命題)を含む [Qualified] の要素は, 事実性でいえば客観度が高いため, 一般に他人によってなされている判断に結びつくことになる。

以上の議論から, (41 a)(41 b)に対してなされた Sheintuch の考察, すなわち(41 b)が話者の直接的関与(direct involvement)を意味し, (41 a)が話者の間接的関与(indirect involvement)を意味するとする考察の説明は明らかになるであろう。

以上 Sheintuch (1976) で指摘されている事象について筆者独自の観点からごく簡単に説明を試みてみた。Sheintuch はこれらの事実を提示してはいるが, 全体を包括的に取り扱う理論は何ら示していない。例えば(38)に関する factivity, (39)に関する controllability, (41)に関する involvement はそれぞれ別個のものとして取り扱われていて, それらをつなぐその裏にある共通のメカニズムには触れていない。筆者の仮説でいうならば, この共通のメカニズムとは [Qualified] の要素における否定的主張文と否認構造に基づく婉曲表現の関係(もっと簡単には「主張」と「婉曲」の関係)であり, factivity, controllability, involvement の各々を個別化させる要因は [Qualifying] の要素からきているものである。

NEG-Raising の現象は恐らく, 従来の一面的な角度からの分析ではうまくいかないと思われる。本章で提示された [Qualified] の要素と [Qualifying] の要素の二面から分析する方法は, その意味で新しい観点ということができるかもしれない。今後詳細なデータの研究を続けなければならないと思う。

第 三 章

否定文と Discourse Context

1. 否定文の意味論的分析

まず否定についての古典的議論として知られる Frege (1952) の考察を引用してみよう。^⑧ Frege は判断 (Judgment) に否定的判断と肯定的判断の二種を区別すべきかどうかという議論の中で次のように述べている。

- (1) What is more, it is by no means easy to state what is a negative judgment (thought). Consider the sentences 'Christ is immortal,' 'Christ lives for ever,' 'Christ is not immortal,' 'Christ is mortal,' 'Christ does not live for ever.' Now which of the thoughts we have here is affirmative, which negative? (p. 125)

つまり判断に二種を区別することはできないということである。Frege は更に進めて、もし二種を区別することになれば、(1) affirmative assertion (2) negative assertion (3) a negative word の三つのカテゴリーを必要とすることになるのに対し、逆に二種を区別しなければ (1) assertion (2) a negative word の二つのカテゴリーで充分であり、論理的・言語的経済の観点からするとより簡潔であるという利点を指摘している。

言語学的なレベルでの「否定」に関心をもつわれわれが、より深層的なレベルである「判断」の議論に、これ以上たちいるつもりは毛頭ない。しかし言語学的なレベルとの係わり合いから、Frege からの引用に関連して少なくとも次の二点をここで明確にしておかなければならない。まず、(A)否定的判断と肯定的判断の区別は存在しないとしても、言語表現のレベルでは、否定文と肯定文の区別は存在するのではないかという点、更に(B)引用文中の五つの文に関して否定文と肯定文の差異はどこにあるのか、そもそも否定文とは何かという点、以上の二点についてである。本章を進めるにあたっては、まずこれらの問題を煮つめておく必要があるだろう。なお筆者の考えを述べる前に、意味論的考察の代表として、Frege の理論を受け継ぎ内包的意味論を提唱する Katz の否定概念について少し検討を加えておきたい。

Katz の否定に関する立場は、およそ次の三点にまとめられるであろう。まず上の(1)についての Katz の立場は、肯定的、否定的命題の区別は排除するが、肯定文、否定文の存在は否定しないとするものである。つまり Katz は肯定文、否定文の区別を認めている。^⑨ 第

二点として、多くの哲学者・論理学者は logical vocabulary と extra-logical (or descriptive) vocabulary の区別をたてて、否定を logical vocabulary の一特徴にすぎないとするのであるが、これに対し Katz は extra-logical terms も logical terms と全く同じように文の logical form に貢献することができると主張し、両者の区別を排除しようとする立場をとる。例えば次の例で各組の(b), (c)文はそれぞれ(a)文の否定であり、同じく各組の(a)文はそれぞれ(b), (c)文の否定である。さらに(c)文は logical term は持たないのに(b)文と同意である。^②

- (2) { (a) Christ lives forever.
(b) Christ does not live forever.
(c) Christ is mortal.
- (3) { (a) The design of the robot is perfect.
(b) The design of the robot is not perfect.
(c) The design of the robot is flawed.

こうした現象を包括的に取り扱うために Katz はいわゆる“antonymy operator”の概念を導入する。第三点として、普通哲学者や論理学者による否定概念は、偽の陳述の否定は真であり、真の陳述の否定は偽である、という条件のみを満足させればよいのであるが、Katz は否定概念としてこの条件に加えて更に別の条件、すなわち「文 S_i の否定の読み (= S_j) は S_j と同意のすべての文と同じ意味解釈をもつものとして表わされなければならない」という条件、具体的には(2), (3)の(b)の読みと(c)の読みが identical でなければならないという読みの条件を新たに付け加えている。これは Katz の合成的意味論 (compositional semantics) の枠組に否定文を包括するためには是非必要な条件なのである。

以上の三点から明らかになる Katz の否定の概念を上述述べた(A), (B)の観点から再検討してみると、まず、すでに第二点で述べた通り、Katz によれば(a)文の否定は(b)・(c)文であり、更に(b)・(c)文の否定は(a)文である。この考え方が意味していることは、「否定」とは特定の文に内在する固有の概念ではなくて、一定の条件を満たした文相互間に存在する incompatibility relation (または antonymic relation), すなわち文相互間に存在する意味論的矛盾関係、ということになる。否定に対応する「肯定」に関しては Katz は特に説明を加えていないが、或る文をそのまま認めるという意味での肯定であるなら(a)文の肯定は(a)文、(b)文の肯定は 'not' があっても(b)文、(c)文の肯定は(c)文ということになる。そうではなくて或る文がすでに否定文であり、それに対応する肯定文という意味での肯定なら、(a)文の肯定は(b)・(c)文となるはずであるが、しかしこの場合は結果が上の否定の概念を適用した場合と全く同じになり、しかも形の上では否定=肯定という論理が成りたつかに見えるので、すこ

ぶる具合が悪い。

ところで否定を二つ以上の文相互間の意味論的矛盾関係としてとらえるこの Katz の立場を更に押し進めていくと、或る文が否定文であるか否かを決定する際、否定辞の存在によって識別するという方法は放棄される結果になってしまう。すなわち上述の第一点から明らかかなように、Katz は 'not' のごとき logical terms と 'flawed' のごとき extra-logical terms とを区別しないために、'not' の存在が否定文を識別するための必要十分条件にはなりえないのである。それ故 Katz の考え方に従うと、「否定」のみならず「否定文」に関しても、(a)文の否定文は(b)・(c)文、(b)・(c)文の否定文は(a)文という具合に相対的な言い方でしか否定文を定義できないことになる。更にこの場合、'not' をもつ(b)文の否定文が 'not' をもたない(a)文であるという、すこぶる奇妙な結果を生ずるのである。

以上から明らかな通り、Katz の意味論では否定は二つ以上の文相互間の意味論的矛盾関係としてとらえられ、しかも(a)文の否定は(b)・(c)文、(b)・(c)文の否定は(a)文という具合に、そこでは意味的「相互」関係が優先されている。特に compositional semantics との整合性という観点からは、否定概念をこのようにとらえることは望ましいことであろう。しかし、この立場から「否定文」を定義するとなると、上に見てきたようにおかしい結果を生じてしまう。こう見てくると、概して「否定」の概念は意味論的に定義できても、「否定文」となると意味論的には処理しきれず、どうしても具体的な discourse context に依存しなければならない部分が生じてくるといえそうである。この点については次節で詳しく述べたいが、とにかくこのあたりに Katz の意味論的分析の限界と、Katz が「否定文」の存在は認めながらもそれに対して明確な規定を与えていない理由が存在するように思われる。

2. 否定と否定文

この節では「否定の概念」と「否定文とは何か」について筆者の考えを述べてみたいと思う。まず「否定」・「肯定」という言葉はいずれも共通して「二次的」という本質的特徴をもっている。どういう意味において二次的かという点、いずれの言葉も一次的に存在する対象もしくは言語表現を想定した上で用いられる言葉であるからである。すなわち「否定する」という言葉が正常に機能するためには、かならず否定されるべき対象もしくは言語表現が想定されていなければならない。また同様に「肯定する」という言葉が正常に機能するためには、かならず肯定されるべき対象または言語表現が想定されていなければならないのである。つまり、「否定」とか「肯定」という概念は、一次的なものをかならず想定した上でそれに対して二次的に機能する概念であるということである。

さて、この考え方を更に押し進めると、一次的なものとの間に存在論的な前後関係が介在することが明らかになる。すなわち、この考え方でいくと、一次的なものは

かならず二次的なものに時間的・存在論的に先行しなければならないという制約があることになる。これはどういうことかという、例えば「Aの否定はBである」というとき、AとBとの存在論的關係はすでに contextually に明確に定まっていることを意味する。それ故、「Aの否定はBである」は決して「Bの否定はAである」と相等ではありえない。以下、便宜上「否定」にマツを絞って議論を進めていくことにしよう。

このように「否定」を一定のコンテキストで固定された一次的なものに対する二次的機能として位置づけるやり方に従うと、当然のことながら先に述べた Katz の意味論における分析とは異なった結果を導く。すなわち Katz の意味論は、コンテキストを排除した上での文間の意味論的矛盾関係から「否定」を定義しているのだから、「Aの否定はBである」と「Bの否定はAである」とを比べた場合、ともに意味論的には同じ読みが与えられることになる。この点が前節で述べられた「否定」の概念と contextual な定義との最大の相違点である。

「否定」の概念についてはこれくらいにして、次に否定の contextual な定義に基づく「否定文」の定義にうつろう。「Aの否定文はBである」というとき、AとBにはどのような制約が存在するであろうか。第一にAとBはともに言語表現であることが必要である。第二に、Aは contextually に一次的である必要がある。第三に、BがAの否定文であるためには、BはAの全部または一部分を二次的に否定する 'not' またはそれに類する否定辞を含まねばならない。この第三の条件が満たされない場合は、(a) Christ lives forever を一次的要素を含む文とする場合、(c) Christ is mortal をその否定文として許すことになってしまう。筆者の考えでは、(c)は Christ の mortality に対する一次的 assertion としての性格が強いと判断すべきで、やはり(a)に対しては(b) Christ does not live forever をその否定文とすべきである。「否定文」を以上の三点から規定すると、このように規定された否定文は、常に具体的コンテキストの中でしかとらえられないことになる。厳密に言えば、'not' を含む(b)のような文でも単独では否定文ではなく、具体的な discourse context かまたは適切な一次的コンテキストを想定することによってはじめて二次的なものとしての否定文の機能が明らかになるのである。

これまで「一次的」という言葉を用いてきたが、一次的表現がどのような特徴をもつものであるかについては、明示的な説明を避けてきた。これまでの考察から明らかな通り、一次的なものは常に時間的・存在論的制約を受け、二次的な機能が成立するための下地とならなければならない。この関係を情報という観点からいえば、一次的なものは二次的機能が正常に働くための先行情報ということになる。つまり「否定する」という二次的機能は、一次的な先行情報に作用することによって新たに新情報を作り出す役目を果たす。こうしてみると「一次的」表現のもつ最も核心的な特徴は、[+definite] ということになるだろう。もしこれが正しければ、「否定は一次的なものに作用する二次的な機能」といういい方は、「否定は

definite なものに作用する二次的な機能」といいかえることができる。もちろんこの definite なものは、特定の、または想定された discourse context において規定されるものでなければならない。

3. 否定文と Discourse Context

本章のこれまでの考察によると、否定文とは「具体的な discourse context またはそのように想定された context にあって、一次的な表現（すなわち [+definite] の特徴をもつ表現）に対して ‘not’ またはそれに類する否定辞により二次的作用を受けた文」ということになる。しかしこの定義は実際の言語分析の場合、効力を発揮できるであろうか。この節では、具体的な英語の否定現象をとりあげ、コンテキストに制約された否定文の概念が意味論的な否定文の概念に比べ一層の説明力をもつことを示してみたい。

まず Givón (1975) の文章英語の調査によると、‘active-declarative-affirmative-main clauses’ においては、‘accusative object nouns’ の約50%が ‘referentially indefinite’ (指示的に不定) であると報告されている。^③ ここで注目すべきことは、英語では accusative object の位置が、指示的名詞 (referential noun) を discourse の中に indefinite なものとして導入する際の最も重要な環境であるということである。ところでこの約50%という分布は、否定を伴う動詞に続く accusative object の場合、すなわち否定文の場合には、著しく変化する。Givón によれば、二つの小説で数えられた referential objects (指示的目的語) のうち100%が referentially definite であり、referentially indefinite なものは一つもなく、また indefinite なものはあってもそれらは全て ‘nonreferential’ であったと報告されている。これまでの考察から容易に想像されるように、否定文においては目的語は100% ‘referentially definite’ であるということは、本章の言い方をすれば、一次的で definite な要素に対して否定辞が二次的に作用しているということに他ならない。Givón のこの報告は、否定の本質は ‘contextual’ であることを示したいい実例である。具体的なコンテキストを考慮しない意味論的分析では、この現象を説明することはむづかしいであろう。

否定文の contextual な概念を支持する第二の例は、次のような文の解釈に関してである。

(4) ? A man didn't come into my office yesterday.

(5) ? The man you didn't meet yesterday is a crook.

疑問符号(?)があるのは、(4)・(5)の文はいずれも少しおかしい文であることを示す。ただしこれには少なくとも二つの注釈が要る。すなわち、(1)いずれの文も competence grammar

または意味論的判断に従えば‘?’である。(ロ)ただし適当なコンテキストを与えればいずれの文もおかしくない。(イ)の立場からいえば、いずれの文も具体的なコンテキストから遮断されたものとして取り扱われ、しかもそれぞれの文だけから‘not’が何を否定しているかを理解しなければならない。それ故、(4)「(ある一人の)男が昨日私のオフィスに来なかった」、(5)「あなたが昨日会わなかった男は、……」などのコンテキスト抜き解釈がまず生まれ、それぞれの解釈をこんどは日常の生活経験に直観的に照らし合わせてみて、(4)なら「(ある一人の)男が昨日私のオフィスにやって来た」というのが確率的に普通のいい方であり、また(5)なら「あなたが昨日会った男は、……」の方がより普通のいい方であることから、それぞれの文が確率的に普通のいい方ではないという意味で‘?’が付加されたものと考えられる。しかし実際の言語生活でこれらの文が用いられる場合は、上述の(ロ)が示すように、(4)も(5)も normal な文として通用するわけで、この事実を説明しきれない点に(イ)の立場の弱点がある。ところが本章の否定文の概念に従えば、そもそも否定文はコンテキストから遮断できないものであり、それ故(4)や(5)を孤立させて解釈することは無意味なのである。従って(4)と(5)の解釈にあたっては、具体的コンテキストをまず与えなければならない。それが本来の否定文の在り方であるからである。このように考えれば、(4)と(5)の文が‘?’をつけられることは、最初から避けられるはずである。(4)の文は、‘All the men except one came into my office yesterday’ という既知情報を背景とするようなコンテキストにおいてのみ本来用いられるべき文であり、更に(5)の文は、‘Yesterday you met all the men except one’ で表わされる情報が明らかであるようなコンテキストにおいてのみ用いられるべき文であろう。

否定文はdiscourse context から遮断されてはならないとする立場を支持する第三の現象は次のような文における否定の scope (作用域) に関してである。

(6) He did not run as fast as he could.^④

(7) The man is not a trustworthy congressman.^⑤

(6)において否定辞‘not’の作用域は‘as fast as he could’である。その理由は次の含意関係の事実から明らかにされよう。

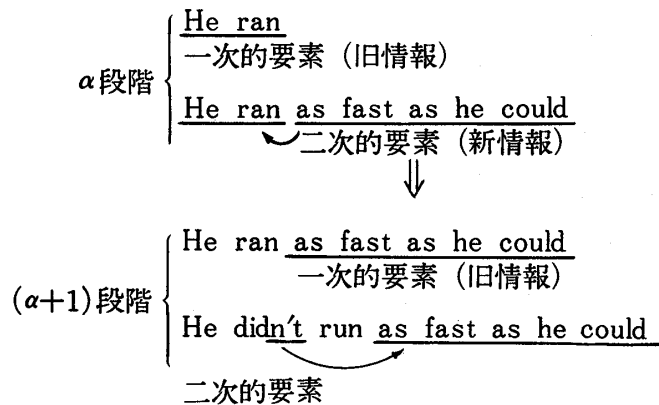
(8) He ran as fast as he could \supset He ran

(9) He did not run as fast as he could $\left\{ \begin{array}{l} \supset \text{He ran} \\ \supset \text{He did not run} \end{array} \right.$

すなわち、discourse への新情報の導入順序という観点から(6)・(7)を観察してみると、まず discourse の α 段階 ((10)を参照のこと)において一次的なもの (definite な先行情

報)として, 'He ran' があり, それに対して新情報の修飾語句 'as fast as he could' が二次的に作用し, 'He ran as fast as he could' が生じると考える。(もしここで修飾語句の代わりに 'not' が二次的に作用すれば, 'He did not ran' となるはずである。) discourse の次の段階, すなわち $(\alpha+1)$ 段階では, 形式的には 'He ran as fast as he could' 全体が一次的な要素をなすかにみえるが, すでにみてきたように実際にはこの文の内部自体にも部分的に新・旧情報の区別が存在する。そこで結論的にいうと, $(\alpha+1)$ 段階での 'not' の作用域は, α 段階における二次的要素, つまり α 段階の新情報だけであって, α 段階の一次的要素は $(\alpha+1)$ 段階では情報的にはいわば固定的なものとして化してしまう。すなわち, α 段階の二次的要素だけが $(\alpha+1)$ 段階では新たな一次的要素となり, 'not' の二次的作用を受けるのである。

(10)



新・旧情報をいわば 'primitives' としてとらえ, それでもって discourse を分解していくと, 具体的な discourse は新・旧情報の交代として表わすことができるであろう。このように仮定されたメカニズムの中に, 否定文の論理もびったりとはまりこむというのが筆者の見解である。

なおここで, α 段階の一次的要素について二つの点を補足説明しておかなければならない。まず上の説明で一次的要素は $(\alpha+1)$ 段階ではいわば情報的に「固定的なもの」と化してしまうと述べたが, この要素がいわゆる伝統的に 'presupposition' と呼ばれてきたもので, 説明からもわかる通り, 否定が internal negation である限り, 否定辞 'not' との係わり合いは全くない。このことは, 次の Horn (1969), Morgan (1969) らの presupposition の定義からも明らかである。^⑥

(11) S_1 presupposes $S_2 = \text{df } S_1 \text{ entails } S_2 \text{ and } S_1\text{'s denial entails } S_2$

' S_1 's denial entails S_2 ' の具体例としては, (9)に挙げた含意関係で十分であろう。

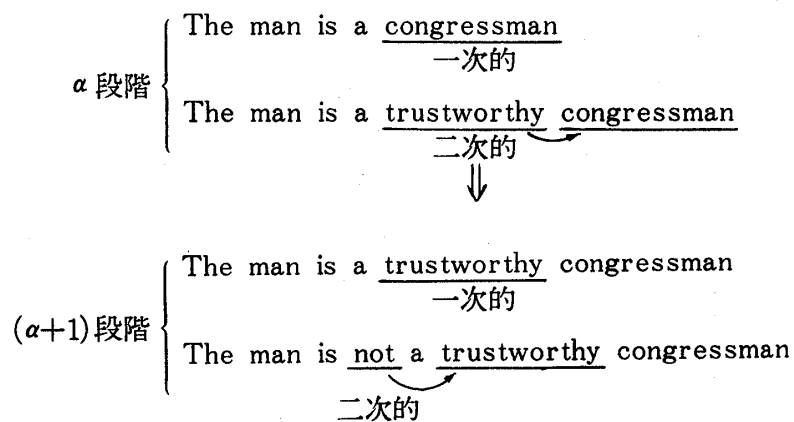
α 段階の一次的要素について補足すべき第二点は、 $(\alpha+1)$ 段階の否定辞が external negation として機能した場合のことである。Böer and Lycan (1976) の報告によると^⑧、external negation が普通の context で用いられる場合はまれであり、用いられたとしても good English ではなく、それ故この概念は 'logician's claptrap' にすぎないという意見もあることが報告されている。internal negation と違う点は、external negation の場合 $(\alpha+1)$ 段階の否定辞の作用域が α 段階の一次的・二次的要素の全てに及ぶ点である。これを 'presupposition' という言葉を用いて言い換えれば、external negation は presupposition をも含めて否定してしまうということである。^⑧ これは discourse 全体の流れからみると、

… $\alpha-2$, $\alpha-1$, α , $\alpha+1$, $\alpha+2$ …

のように段階的に流れている discourse において、突如として α 段階の全てが $(\alpha+1)$ 段階で否定されることを意味する。もしこの種の否定が A, B 二人の間の会話の流れにおいて生じたと仮定すると、その表現は相手の表現を根底から否定したことになり、その結果会話における協調の原則が破られるわけで、ややもすると会話の断絶につながる可能性をもつことになる。external negation が good English でないというのは、こうした会話の原則に関係した部分があるからかもしれない。また、もしこれが小説の記述文の中で生じた場合は、例えば読者が作家の意図なり表現を誤解しそうだとか作家が予測したとき、作家が先まわりしてその予測を打ち消すような場合が考えられるであろう。いずれにせよ external negation の場合は、 $(\alpha+1)$ 段階が α 段階全体を一次的要素とみたと、それに二次的に否定辞が機能することになる。

以上で補足説明を終り、(7) の説明に戻ろう。例文 (7) においても 'not' の作用域は 'trustworthy' だけであるが、この現象も (6) の場合と同じ論理で説明できる。

(12)



α 段階の二次的要素 (新情報) が $(\alpha+1)$ 段階では一次的要素 (旧情報) に変わり、それに対

して否定辞が二次的に作用する。これと平行して α 段階の一次的要素は, $(\alpha+1)$ 段階では既知情報として固定化され (いわゆる *Presupposition*), 'not' の作用域からは除外される。

以上本節では, 否定文を *discourse* における一次的要素への 'not' による二次的作用としてとらえる考え方が, 英語の否定表現の説明には有効である, ということをもつ具体例を示して考察した。^⑩

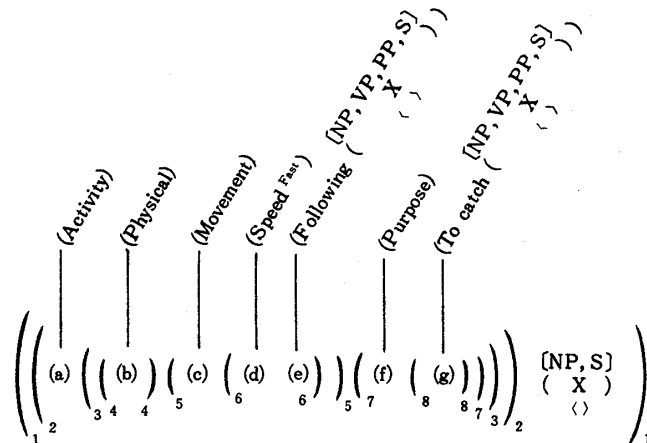
4. Katz による否定文の分析

Katz は *Semantic Theory* (p. 168) の中で意味論の立場から (13) に示された文の意味解釈を試みているが, この節ではこの分析の弱点を指摘し, その修正案について考えてみたい。

(13) John is not chasing Bill

Katz によれば, 動詞 'chase' の読みはおよそ次のような形で表わされうる。^⑨

(14)



Katz による (13) の意味解釈に従うと, 'not' の作用域は専ら 'chase' の内部に限られていて, その結果 (13) の読みはおよそ (16) のようになる。なおここで (14) に対する *antonymic operator* の作用原則は次の (15) に与えられた公式に従っている。

(15) a. $A/((d)(e)) = (A/d) \vee A/(e)$

[すなわち, $((d)(e))$ の否定は A/d か又は $A/(e)$]

b. $A/((Mi)((Mj))) = (A/(Mi)) \vee ((Mi)(A/(Mj)))$

(16) The reading of (4.101) that results from this application represents the truth conditions of the proposition expressed by (4.101) as follows : either John is not engaged in an activity at the specified time and place or, if

he is, then that activity is not physical, movement, and purposeful, or, if it is, then either the movement is not both fast and following (of Bill) or the purpose of the activity is something other than to catch Bill. [(4.101) = (13)]

この読みに従うと、(13)の 'not' の作用域は専ら 'chase' に限られ、その結果(13)の読みは(14)の semantic markers の組み合わせの少なくともどれかひと組が偽であるといういい方でしか表わされないことになる。それ故、Katz の分析は次の二点で限界がある。すなわち、(i)本来否定文は contextual なものであるにも拘らずコンテキストを抜きにした意味論的解釈にとどまっている点、(ii)従って、'not' の作用域が 'chase' に限られ、コンテキストを考慮したときの読みが切り捨てられている点、である。

筆者の解釈によれば、コンテキストを考慮に入れると、(13)の文は論理的には少なくとも六つの場合の読みが考えられる。^⑩

- (17) a. John is not chasing Bill, but John is chasing *Tom*
 b. John is not chasing Bill, but John is *running with* Bill
 c. John is not chasing Bill, but *Tom* is chasing Bill
 d. John is not chasing Bill, but *Tom* is *running with* Bill
 e. John is not chasing Bill, but *Tom* is chasing *Robert*
 f. John is not chasing Bill, but John is *running with* *Tom*

(17)の各文の前半において、後半のイタリック体に相当する部分が、否定辞 'not' の作用域、すなわち一次的要素であることを示している。これらのうちいくつかは performance レベルでは少し無理な解釈かもしれないが、しかしここで大事なことは、上述の Katz の分析ではこれらのうちの(17 b)の読みしか与えられていないことである。そこで以下では、コンテキストを考慮したこれら六つの読みを総合的に記述できる方法について簡潔に述べてみたい。次の(18)は、(17 a)-(17 f)の六つのコンテキストにおける 'not' の作用域の違いまたは 'not' が作用する一次的要素を明示したものである。ここで 'John is chasing Bill' は便宜上論理構造を用いて chase (John, Bill) として表わし、進行形を表わす部分は省略してある。A/…は Katz にならって否定を意味する。下線のない部分が 'not' の作用する一次的要素、下線のある要素はすでに固定化された既知情報、すなわち presupposition に相当する部分である。なお(17 a)-(17 f)はそれぞれ(18 a)-(18 f)に対応している。

- (18) a. A/{chase (John, Bill)}=chase (John, A/Bill)
 b. A/{chase (John, Bill)}=A/chase (John, Bill)

- c. A/{chase (John, Bill)}=chase (A/John, Bill)
- d. A/{chase (John, Bill)}=A/chase(A/John, Bill)
- e. A/{chase (John, Bill)}=chase (A/John, A/Bill)
- f. A/{chase (John, Bill)}=A/chase (John, A/Bill)

言うまでもなく(18)の右辺で、A/…の形式で表わされている部分だけが一次的要素であり‘not’が二次的に作用する。また、A/chaseのある場合、すなわち(18b), (18d), (18f)だけがKatzの分析による‘chase’の意味構造(14)の否定に関係する場合で、その読みは(16)に与えられた通りである。

以上の規定から(18a)の解釈はおよそ次の通りである。左辺は{John is chasing Bill}に否定がかかっていることを示すが、しかしJohnとchaseは下線が引かれているので既に既知情報(すなわちpresuppositionに相当するもの)となっていて、否定辞の作用域の外にある。下線のないのはBillだけなのでこれが一次的要素であることがわかる。右辺は左辺の情報にもとづいてなされたこの文の解釈であるが、BillだけにA/…がかかり、その他のものは否定のscopeの外にあることが示されている。それ故(18a)の解釈は「Johnが追っかけているのはBillではない」にほぼ相当する。なお、右辺にA/…の形式が二個ある構造(すなわち18d, 18e, 18f)の解釈では、二個がorの関係ではなくてandの関係である点に注意しなければならない。例えば(18d)の解釈は、「Billにに対して或人が或ることをしているが、それはJohnがしているのではなく、かつまたchaseという行為でもない」にほぼ相当するものである。ただしA/chaseの場合(14)のsemantic markersの少なくともいづれかひとつと組だけが偽であれば成立するのは、先にみた通りである。

この節の結論として筆者が述べたいことは、否定文はコンテキストと切り離せないから、(18)のような分析をした上で(14)のような意味論的分析と総合し、文の読みを決めるべきだということである。

5. 結論

本章では、英語の否定文に関して主に次の三点に要約されるような内容について四節にわたって議論を進めてきた。まず、「否定」とか「否定文」という概念は具体的なdiscourse contextから切り離して取り扱うことはできないこと。第二に、それ故具体的なコンテキストを考慮しない意味論的分析では否定文を取り扱う際その限界が生ずること。第三に、「否定文」をコンテキストから切り離せないものと理解すれば、意味論的に説明のできないいくつかの現象の説明が可能になること、等である。

本章で取り上げられなかった否定文の側面および否定に関する語用論的側面全般について

は取り組むべき問題が山程残っている。これらの点については稿を改めて検討していきたいと思っている。

[注]

- ① Katz (1972), p. 157.
- ② 例文は Katz (1972), p. 158から借用。
- ③ Givón (1975), p. A8.
- ④ この例文は Givón (1975), p. B10より借用。
- ⑤ この例文は Katz (1972), p. 164より借用。
- ⑥ しかしながら Presupposition とは何かについては様々な議論がある。この問題は本章の範囲とは直接関係がないのでこれ以上立ち入らない。
- ⑦ Böer and Lycan (1976), p. 77.
- ⑧ (6)の文を external negation として解釈するのは不可能であろう。ここでは It is not the case that he ran as fast as he could の場合の 'not' のかかり具合について考えている。
- ⑨ Katz (1972), p. 165. (14)について Katz は次のように説明している。

The parenthesization marked "2" indicates that the individual (s) referred to by the reading

[NP, S]

that is the value of the categorized variable 'X' engages in an activity. The parenthesiza-

< >

tion marked "3," which has the parenthesizations marked "4," "5," and "7" as components, indicates that this activity is physical, involves movement, and is purposeful. The parenthesizations marked "5" and "6" indicate that the movement involved is fast and is guided in its course by the trajectory of the object (s) chased. The parenthesizations marked "7" and "8" indicate that the purpose of the activity is to catch the individual (s) being followed, i. e.,

[NP, VP, PP, S]

what is referred to by the value of 'X'

< >

- ⑩ ここでは external negation の読みは排除する。
- ⑪ この考え方は否定辞の作用域の違いから生ずるあいまい文の分析に特に有効であることに最近気付いたが、この点については稿を改めて議論したい。
- ⑫ Geach, P., and M. Black, eds. (1952), *Translations from the Philosophical Writings of Gottlob Frege*. Oxford: Basil Blackwell & Mott.

第 四 章

“Locative + Verb + Subject” 型文の考察

1. 序

本章は大きくわけて四つの考察からなっている。2節では“Locative + Verb + Subject”型文（以下 L-V-S 型文と略す）の意味論的・語用論的考察、3節ではこの種の構文の統語上の制約に関する考察、4節では *There-Verb-Subject* 型文の考察、5節では、主語が一人称か二人称である L-V-S 型文の考察、がそれぞれ中心になっている。

2.1 意味論的・語用論的考察

次の二文の斜体の部分はいずれも“Locative + Verb + Subject”という構成をなしている点で類似している。

(1) I opened the bedroom door, and *out walked the cat*.

(2) *On the table lay a dagger*.

ところが、(1)文の *walked* が運動の動詞 (a verb of motion) であるのに対し、(2)文の *lay* は存在を表わす動詞 (a verb of existence) である点で、二文は互いに異質に見える。

2節の目的は、次の三点からこの種の文の特徴を考察することである。まず、(a)話者の視点（または位置）に着目して、(1)、(2)に類する文がもつ意味論的・語用論的特徴を明らかにすること、さらに(b)(1)、(2)に類する文は一見互いに異質に見えるが、根本的には共通した特徴をもっていること、さらに進んで、(c)この異質な面と共通な面は互いに矛盾するものではないこと、以上の三点である。

2.2 運動の動詞 (verbs of motion) を伴う場合

Longuet-Higgins (1976) の指摘するところによると、次の二文における意味上の差異は以下の通りである。

(1) I opened the bedroom door, and *out walked the cat*.

(3) I opened the bedroom door, and *the cat walked out*.

(1)では話者‘I’は恐らく寝室のドアの外にいるであろうという推測がなりたつものに対し、(3)ではそういう推測がなりたないという点である。もしそうだとすると(1)の斜体部分の邦訳は、「ネコが出て行_{った}」ではなくて、「ネコが出て来_た」とならなければならないことになる。

それでは何故このような意味上の差異が生ずるかであるが、これについては Longuet-Higgins は一言も触れていない。私見によると、これは表現上の perceptual strategy に関係しているように思われる。(1)文の後半は“Locative+Verb”が先に来て、Subject が最後になっているので、主述関係が正常の語順の逆である。それ故文の最後まで主語がわからないことから来る dramatic effect が効を奏することになる。(1)の解釈はそれ故、「walked out」したのは(何かと見れば)‘the cat’だということになる。しかも、この dramatic effect が生きてくるので、‘the cat’は情報の価値が一番高く、従って、意外さや驚きの感情がこめられることになる。(これは、「文法上の構造にかかわりなく、ある文のテーマ(Theme)をSとし、それについて情報(Information)を与える部分をPとし、すべての文を、その文脈においてS is Pの論理的構造に還元して考える」(『意味論からみた英文法』p.144)という毛利可信教授の考え方も軌を一にするものである。)これらのことを頭において(1)を和訳してみると、

(1) 私_はは寝室のドアを開けた、すると出て_{^{a. 来た}_{b. ? 行った}のは(何かと見れば)そのネコだった。

となり、可能性としては二つの訳があることになる。ここで二つのうち(1’b)が不適當にみえるのはどういう訳であろうか。この問題は、ドアをはさんで接する寝室内外の二つの空間に「私」、「ネコ」が存在したその在り方と関係している。考えられる組み合わせとしては次の四通りがある。

- (A) 「私」・「ネコ」: 共に外
- (B) 「私」・「ネコ」: 共に内
- (C) 「私」: 外, 「ネコ」: 内
- (D) 「私」: 内, 「ネコ」: 外

これらのうちどれが一番適切かということになるが、まず、(A)はすでに共に外にいるので対象外となる。さらに上述の dramatic effect から生ずる Subject への意外さや驚きを考慮すると、「私」と「ネコ」が同じ空間にいたことはまず考えられない。同じ空間におれば既知である可能性が大となり、上の驚きの効果は生じないはずだからである。よって(B)の可能性が消されることになる。前述の(1’b)がおかしいのは、この(B)の可能性が消されたからで

ある。残りの(C), (D)のうち, (D)は「ネコ」がすでに寢室の外にいたので, 全くあてはまらない。結局のところ, (C)がこの状況では一番適切な組み合わせとなる。逆に(C)であれば, (1'a)の訳とぴったり一致するので問題はない。

以上が何故(1)文が「ネコが出て行^{った}」ではなくて, 「ネコが出て来^た」とならなければならないかの理由づけであるが, この説明は(4)以下のこの種の構文にもいずれもあてはまるように思われる。一方(3)であるが, これは(1)文のような統語上の特徴がないために, 常に「ネコが出て来^た」とならなければならないことはない。つまり「ネコが出て行^{った}」となる場合もあるわけである。

以下この節では Longuet-Higgins の用例のいくつかについて, 筆者自身の考察をまじえながら氏の説を敷衍することにより, この種の表現のもつ特性を明らかにしたい。

次の四文は(1)文と同じく, open space と closed space のどちらの側に話者 (= 観察者) が位置しているかに関係している。

- (4) Out of the cave charged an elephant.
- (5) Into the cave charged an elephant.
- (6) Out of the cranny scuttled a mouse.
- (7) ?Into the cranny scuttled a mouse.

(4)は, 「洞窟の外へ突進して出て来たのは(何かと見れば)一頭の象であった」というのであるから, 話者は洞窟の外で観察していることになる。一方(5)は「突進して入って来た」のであるから, 話者は洞窟の内部にいないといけない。(6)も(4)と同じで, 「割れ目からあわてて出て来たのは(何かと見れば)一匹のネズミであった」のであるから, 話者は当然, 割れ目の外から観察していることになる。同様に(7)は「割れ目の中に入って来たのは(何かと見れば)一匹のネズミであった」ということになる。しかしここで困るのは, 人間である話者 (= 観察者) が, ネズミが通るような小さな割れ目の中に位置することは, 童話のような特別な世界を想定しない限り, 一般常識では誠に不自然な点である。それ故‘?’が付加されることになる。

(4)~(7)の例は, 平面で接する二空間での話者の位置関係が問題になっていたが, 次の三例では上下に接する二空間が関係している。

- (8) Up the ladder climbed three firemen.
- (9) Three firemen climbed up the ladder.
- (10) Down the bean-stalk climbed a giant.

(8)では話者は, はしごの上かまたはそれに近い位置から見下ろしている場合で, 「はしご

を上ってきたのは（見ると）三人の消防士であった」という状況であるが、(9)の場合は位置関係がそれとは逆で、話者は恐らくはしごの下にいて見上げているのであろう。これに対し(10)の場合は、巨人が豆の木の茎をつたって下りて来る姿が見えてきた状況であって、話者（＝観察者）が豆の木の下から見上げていることになる。

以上(4)～(10)の例文の観察から明らかな点は、いずれも相接する二つの空間において話者のいない空間から話者のいる空間に向かって或る対象物が出現してくるというパターンが繰り返されていることである。これを Longuet-Higgins は簡潔に“coming into view”という言い方で表わし、この種の表現のもつ意味の essence であるとしている。確かにこの説明をもってすれば、次の二文が不適当な文であることも納得がいく。

(11) ? Into the pub disappeared Stuart.

(12) ?? Into the summerhouse strode I.

(11)では、話者は‘the pub’の内部にいるのであるから、その中へ‘disappeared’というのは不自然である。つまり中にいるのなら目に映ってこなければ、つまり‘appeared’でなければおかしいというのが‘?’の理由であろう。話者のいない空間から話者のいる空間に Stuart が‘disappeared’というのであるから、解釈がすんなりといかない訳である。この文が Stuart disappeared into the pub. となっておれば、話者が必ずしも居酒屋の中になくてもよい構文であるから問題はない。

(12)は話者と動作主が同一人であることからおかしいことになっている。話者はすでに‘summerhouse’の中に位置していると考えられるにもかかわらず、入ってきて話者の目に映ったのが話者と同一人物の‘I’というのであるから、常識的な解釈はむずかしいことになる。つまり、両方の空間に同一人物がいることになり、話者のいない空間からいる空間への出現というこの種の構文の在り方と矛盾するわけである。なお、この場合も、語順が正常であれば問題はない。

ここで一言つけ加えておかねばならないのは、(11)、(12)がおかしな文であるのに、次の(11)’, (12)’は全く正常な文であるという事実が何を意味するかについてである。

(11)’ Stuart disappeared into the pub.

(12)’ I strode into the summerhouse.

この事実から明らかになる側面は少なくとも二つ考えられる。まず第一の側面は、(11)、(12)型文と(11)’, (12)’型文とでは話者の在り方が全く異なっているという点である。(11)はいわば現場実況型の文で、話者の視点が pub の中に固定されていて、話者は必ず現場の一角に位置していなければならない。それ故‘disappeared’という表現と矛盾することにな

る。一方(11)'はいわば全場景一望型の文で、この場合は話者と Stuart は別人で、話者が Stuart の行動を遠くからながめている。一方、(12)の文が変則的であることが意味しているのは、話者は現場の一角に位置しているにもかかわらず、この型の文を用いて自分自身のことについては一切記述できないという制約である。つまり、話者は記述される側の一員であってはならず、観察者に徹しきらねばならない。ここに後述するようにこの構文の話者をテレビカメラにたとえることができる最大の理由がある。実況的記述文の本質といえる部分である。これに対し、(12)'は(11)'と同じく全場景一望型であるが、面白い点は話者がその場景の一員たり得るということである。

上記の考察から明らかになるもう一つの側面は、構文論的にはこの二つの型は互いに変形操作によって関係づけられるように見えるが、意味論的・語用論的には(あるいは文の機能的意味においては)、全く違った構文と考えなければならないという点である。例えば(1)と(3)を比べてみると、(1)では話者が部屋の外にいるという点でマークされているのに対し、(3)ではマークされていない。それ故(3)では、話者が部屋の外にいるか内にいるかについてはいずれの可能性も残り得る、ということが予想される。

(1) I opened the bedroom door, and out walked the cat.

(3) I opened the bedroom door, and the cat walked out.

また(8)と(9)の場合も同様である。

(8) Up the ladder climbed three firemen.

(9) Three firemen climbed up the ladder.

(9)が話者の視点に関してマークされていないという点では、話者がはしごの上から見ているのか、はしごの下から見上げているのかについて、両方の可能性があることになるが、実際は、前述した通り、話者は恐らくはしごの下にいて見上げているのであろう、とするのが普通のようなのである。しかしこれは、このように空間が上下に分かれているような場合は、地上からの視点がより普通の視点であるという、単に経験的な判断からの解釈にすぎないもののように思われる。従って論理的には(1)と(3)の場合と同様、いずれの可能性も残り得ると考える方が適切であると思われる。してみると、これらのペアには少なくとも一つの意味が重なっていると考えることが可能であり、従って統語的にも関連性が予想されることになる。ところが、この予想をうち消す決定的な証拠となるのは、実は上にあげた(11)と(12)の変則性から導かれるこの種の構文の機能的意味の特殊性である。この特殊性が統語的側面に及ぼす影響については次節で詳しく述べるが、いずれにせよ、結論的に言えば、これらのペアが変形的操作により相互に導かれ得るとする立場は根拠が弱い、と言わなければならない。

以上の考察から明らかになるこの種の構文のもつ意味論的・語用論的特性について、以下三点から整理してみたい。

まず、この種の構文の意味論的・語用論的特性の essence を Longuet-Higgins は “coming into view” と呼んだのであるが、これは筆者の言い方ですれば、相接する二つの空間において、話者 (= 観察者) のいない空間から話者 (= 観察者) のいる空間に向かって或る対象物が出現すること、ということになる。つまりこの種の構文は、動作の deictic meaning を表わし得るわけで、この点に留意することが大切である。例えば、例文の(1), (4), (5), (6), (8), (9), (10)で用いられている運動の動詞は、いずれもその動作の方向性 (deixis) に関しては中立的な動詞であり、“coming into view” という構文的意味と前置詞 (または副詞) の意味とが総合されて話者がどの位置にいるかが明らかになるという仕組みになっている。

この点で特に注意すべきは、日本語にこれらの文を和訳する場合である。walk や climb はこれだけでは deixis に関しては中立的で、歩いて行くのか、歩いて来るのかは不明である。walk out/into ; climb up/down と副詞をつけても、この中立性はまだ保たれている。例えば “walk out” では、歩いて出て行くのか、歩いて出て来るのか明らかではない。そこで “L+V+S” の構文がもつ “coming into view” という deictic meaning が加わり、やっと方向性をもった動作表現として完成する。和訳の際注意すべきというのは、この最後の deictic meaning を落さないようにという点である。上に見たように、この意味に対応する日本語は「……(して)くる」がびったりであろう。問題は、「……(して)くる」という日本語 (lexical unit) に対応する英語の lexical unit が、walk out/into や climb up/down 自体の中には見当たらないということであろう。

ところで、この種の構文では deixis を含む動詞は全く用いられないのかというと、そうではない。この点について Longuet-Higgins は何も触れていない。次は come と go が用いられた例である。

(13) But he could not open the box—it would not open! Then he hit it once with his hand. It opened ; and *out came the dog whose eyes were as large as eggs!* (West, *SFFT**)

(14) Just then the door opened, and *in came the King's men.* (Ibid.)

(15) Hans ran and put her on the dog's back, and *away went the dog through other streets.* (Ibid.)

(**SFFT* : *Seven Famous Fairy Tales*, Longman, 1931.)

(13), (14)の “out came...”, “in came...” はそれぞれ「……出て来た」, 「……入って来た」

に相当し、この種の構文のもつ deictic meaning と矛盾しない。ところが(15)の場合は少し様子が異なる。この場合は眼前にいた犬が視界から消えたのであり、明らかにこれまでの“coming into view”という原則と矛盾するように見えるからである。このことは次の例を見ると一層はっきりする。

(16) *Away went the dog, and soon it came back again, bringing a box of money in its mouth.*

(16)では、犬が話者の眼前からひとまず消え去り、次いで一定の時間経ったあと再びその同じ犬が同じ位置に戻って来たことを述べている。

結論から先に言うと、これまで述べてきた“coming into view”の原則と、(15)、(16)の用例とは異質ではあるが、本質的には矛盾するものではない。すなわち、(14)までの用例においては、対象物が視界に新たに登場してきたという意味で“coming into view”であったが、(15)、(16)においては、すでにコンテキストに登場している対象物に関して新たな event (事態) が眼前に生じたと考える方が妥当である。例えば、(16)では、the dog はこのコンテキストには既に登場していて、ここでの描写の中心は、その犬が新たにどうなったのかということである。それ故(14)までの用例とは違って、“Away went the dog”の the dog には情報上の期待はほとんどなく、“Away went…”の部分が記述の中心となっている。その犬が立ち去った、という(予想しなかった)新たな event が眼前に生じた、というのが(16)の斜体部分の意味である。(15)についても同様のことが言える。ここでの記述の中心もすでに登場している the dog にはなくて、その犬が今、眼前で新たにどういう事態になったかにあり、それを表わしている“away went...through other streets”が描写の中心部分である。

こう見てくると、Longuet-Higgins の“coming into view”という概念は、新たな対象物が眼前に登場する場合のみに適用し、対象物がすでにコンテキストに登場している場合は、その対象物について「新たな event が眼前に発生する」場合と解釈した方が適當のように思われる。この点を今少し詳しく述べると、まず一般に「新たな event が眼前に生ずる」在り方には次の二種類が考えられる。すなわち、

- ① 眼前の場景の中に新しい対象物が登場してくる場合
- ② 眼前の場景の中のある対象物が特別に目立つ行動を起こす場合

①は「新たな対象物が眼前に登場する場合」と同じで、すでに見てきたように、(4)から(14)に至る“coming into view”の例文がこれに相当する。②はすでに視界の中にある対象物が何らかの目立つ行動をとることによって、場景の中に一つの変化をもたらすような場

合のことで、(15)、(16)の例文がこれに相当する。いずれの場合も、「新たな event が眼前に発生する」場合の在り方の違いにすぎず、本質的な違いはない。その意味ではこの種の構文は、「新たな event が眼前に生じた場合の記述に用いられる文形式」というふうにまとめた方が適当のように思われる。

なお、新たな event が眼前に生ずる場合の二種類の在り方に関連して‘L+V+S’のSがいずれの冠詞をとるかが問題になってこよう。一見して①の場合は不定冠詞、②の場合は定冠詞という基準が予想されるが、実際はどうであろうか。まず①の場合は、新しい対象物が登場してくるので、一般に不定冠詞が予想される。実際のところ、実例としても不定冠詞を伴うものが多いようである。しかし、定冠詞を伴う場合もごく普通である点に注意を払うべきであろう。例えば例文(1)である。この場合は、話者も聴者も共に *the cat* の存在についてはすでに知っているが、この特定の言語的コンテキストにおいて *the cat* の出現を予期していなかったという意味では、*the cat* の出現は意外であり、従って「新たな対象物の登場」であるのはまちがいない。それ故、definite noun でもその言語的コンテキストにおいて出現を予期されなかった対象物の場合は①の場合に含まれるとしなければならない。一方②の場合は、その場景の中にすでに登場している対象物について新たに目立つ行動が生ずるのであるから、Sは当然定冠詞を伴うと考えなければならない。

こう考えてみると①の場合は不定冠詞、②の場合は定冠詞といった単純化されすぎた予想は誤りであることがわかる。しかしここで言及すべき点は、①の定冠詞表現と②の定冠詞表現とをどこで区別するかという点である。これは与えられた言語的コンテキストに依存して相対的に判断するしかないようにも見えるが、しかし実例では上の例文(1)や(15)、(16)のように、情報上の重点についてはかなりはっきりした区別がなされているのが普通である。

ここで特定の‘L+V+S’文が、①の新たな対象物が登場した場合の記述であるか、②の新たな event が生じた場合の記述であるかを区別する方法について、上に述べた考察をもとに整理してみると、次のようになる。まず冠詞の表現の特徴で整理すると、

- (イ) Sに不定冠詞がついているときは① [例:(4)~(6)]
- (ロ) Sに定冠詞がつき、かつ、当該コンテキストに未登場のものは① [例:(1), (13)]
- (ハ) Sに当該コンテキストにすでに登場し、定冠詞がつくか、または代名詞のときは② [例:(16)]

次に動詞の *deixis* について整理すると、

- (ニ) 視界から外に向かう *deixis* をもつ動詞のときは② [例:(15), (16)]

(この場合は上の(イ)に一致し、Sは定冠詞だけか、または代名詞である)。

(外) 視界から外に向かう *deixis* をもつ動詞でないときは上の(イ)~(外)に従う。

さて、この種の構文の特性の第二は、すでに触れた通り、この種の構文が情報上 *dramatic effect* をもつという点である。例えば、(13)、(14)、(15)からもわかる通り、この型の文では次に何が起こるかについて一種の緊張状態が存在する。特に新たな登場物が眼前に現われてくる場合などは、まず、視界に入ってくる際の在り方の表現 (*Locative+Verb*) が先にきて、それから動作の主体が最後にくるので、読む方は動作の主体に対する期待が最後まで取っておかれることになり、その点で *dramatic* な効果が一層高まるのである。例えば(13)では、「箱が開いた。出て来たのは(何かと見れば)目が卵ほどもある犬ではないか!」という具合に、驚きの効果が遺憾なく発揮されている。それ故、この種の構文では、*Subject* の部分にはそのコンテキストで情報価値が高いものか、または新情報となるものが来ることが多く、従って不定冠詞のつく場合とか、定冠詞がついていても修飾語句の多い表現が目立つことになる。(15)の場合のように、場景の中の対象物が目立つ行動を起こしたことを表わしたい場合でも原則は同じであって、この場合は、先にも触れたように、新しい *event* の在り方の記述、つまり“(away went)...through other streets”が *dramatic* な効果を与えることになる。

この種の構文のもつ特性の第三は、この型の文が普通の会話文の中では現われず、もっぱら読んだり聞いたりするために書かれた記述文にのみ現われるという点である。特に児童文学の作品(童話、詩、童謡、子守り歌など)にこの種の表現が頻出することはよく知られている。しかも一般に単純現在形または単純過去形の動詞を伴うのが普通である。つまりこの型の文は、話者(=観察者)が読者または聞き手のイメージの世界に話者の観察した状況を描かせる類の文であって、それ故に、上に述べた表現の劇的效果が重要で、一層効果的になってくるのである。

それでは普通の会話文でこの種の表現が全く用いられないかという点、そうではない。例えば次の例がある。

(17) There comes the train! (OED)

(18) Here comes Betty.

これらの表現はいずれも具体的な会話場面でじかに用いられた表現であるため、*Locative* が直接的な空間表現になっている点に注意しなければならない。それ故、*Longuet-Higgins* も指摘している通り、これらの表現が実際に用いられる時には、*there, here* が表わす正確な位置(または方向)を示すための *gesture* (たいていは顔を向けるか指をさすかなどの単

純なもの) が伴うのが普通である。このことは次の例文を見れば一層明らかである。

- (19) Trent pointed. 'There he is, straight in front of you, in the middle of that flower-bed...'
(毛利(1954)から借用)

(17), (18)が発せられた時、聴者はその場に居合わせるために、gesture さえ伴えば、*here* や *there* だけでもことたりるわけであるが、聴者とその場に居合わせない場合には、'*here* (or *there*)+gesture' 全体に相当する意味内容が、それぞれ適切な Locative に書き換えられなければならないわけである。この意味で(17), (18)の類の文は、会話文の直接的空間表現ということができ、一方、これまで本章で扱ってきたものは、記述的伝達文に生ずる間接的空間表現ということができよう。なお、(17)に類する表現については4.1節で詳しく考察するはずである。

以上この節の考察から、運動の動詞を伴う“Locative+Verb+Subject”構文の特性は、次の三点に要約できよう。まず、この種の構文は予測しない対象、または事態が視界に現われて来たり(coming into view)生じたりした場合の記述に最も適した構文であること、第二に、この構文による記述が劇的効果を伴うこと、第三に、この構文は読んだり聞いたりするために書かれる記述文の中にのみ現われる類のものであること、以上の三点である。なお、第一点について一言つけ加えるならば、対象または事態が話者(=観察者)の視界に現われて来るのであって、その意味では話者(=観察者)はその直前の記述のコンテキストの視点から新たな方向に視点を動かす必要は全くない、ということである。これは動詞が運動の動詞であることからくる特徴であり、この点が次節で述べる存在の動詞の場合と根本的に異なる点である。

2.3 存在の動詞 (verbs of existence) を伴う場合

この節では、筆者が存在の動詞と呼ぶ一連の non-motional verbs (be, lie, stand, be sitting, be put など) を伴った“Locative+Verb+Subject”構文を考察する。まず用例を見てみよう。

- (2) On the table lay a dagger.

- (20) "Is this your country?" she said. But there was no answer. Near her stood ten white birds. They could not speak. (West, *SFFT*)

- (21) She looked about her. It was a beautiful country. At her feet were the prettiest flowers she had ever seen. On all sides were great trees. In front of

her were hills, and on one of the hills was a great white house, with many windows. (Ibid.)

(22) If you open one door and go into the room you will see a big box. On the box is sitting a dog with eyes as large as eggs. (Ibid.)

(23) Then my friend sat upon another bed. On the bed with him were put six little loaves of bread and a small jar of water. (Ibid.)

これらの例文において運動の動詞の場合と著しく違っているのは、Locative の表現における前置詞の性質である。上例の on, near, at, in はいずれも「(静止)位置」を表わす前置詞であり、運動の動詞の場合にみられた into, out of, out, in, up, down など運動の方向を示す副詞や前置詞と著しい対照を示している。それ故、存在の動詞を伴う“Locative + Verb+Subject” 構文においては、「(静止)位置」+「存在動詞」+「対象物」の構成となり、話者は聴者にまず特定の場所を認識させ、次いでそこに存在する対象物を認識させるという順序をとっていることになる。このように存在の動詞を伴う場合は、「ある特定の位置に、ある対象物が存在する」という表現内容だから、運動の動詞の場合のように対象物は動いて視界に入ってはこない。しかしよく観察してみると、Locative の表現の名詞句((20)の例では her—以下カッコ内は(20)の例)はすでに当該コンテキストには恐らく直前の文あたりで登場済みの要素であり (she), その要素の然るべき位置 (Near her) にまず読者を着目させて、その上であるもの (ten white birds) が存在すると述べるのであるから、読者 (または聴者) のイメージの世界では、その対象物が新たに視界に入ってくる (coming into view) ことはまちがいない。ただ運動の動詞との相違点は、たいていの motional verbs の場合、対象物が動いて視界の中に入ってきてくれるのに対し、存在の動詞の場合は、当該コンテキストに既出の名詞から、読者の目を前置詞句が表現する位置にまで移さなければならない点である。つまり、(22)の例文で言えば、読者の目は直前のコンテキストでは ‘a box’ 全体にあるが、次のコンテキストでは、その箱の ‘on’ の位置まで移されている。移されたあとで、‘a dog...’ が視界に入ってくるのである。この意味で、運動の動詞の場合に述べた第一の特性は、存在の動詞の場合にもあてはまるということになる。

ただし、運動の動詞の場合と異なる重要な点があることを指摘しておかねばならない。それは、運動の動詞を伴う場合、「新たな event が眼前に生ずる」在り方に二種類考えられたのに対し、存在の動詞を伴う場合は一種類しか考えられないことである。つまり、①眼前の場景の中に新しい対象物が登場してくる場合は、上述の通り、存在の動詞を伴う場合にもあてはまるが、②眼前の場景のある対象物が特別に目立った行動を起こす場合というのは、存在の動詞が対象物を「静的存在物」としてしか捕えていないがために、ありえないわけ

で、従って、存在の動詞を伴う場合には②はあてはまらないことになる。この点が運動の動詞を伴う場合との重要な相違点である。

運動の動詞を伴う場合の第二の特性としてあげた dramatic effect に関しても、運動の動詞の場合とまったく同じである。このことは例文(20)～(23)を見れば明らかであろう。特定の場所を規定して、その上で対象物を導入するやり方であるので、導入される要素は当該コンテキストでは新情報であり、またその文中では情報量が一番高い要素となる。この点はすでに運動の動詞の際言及した通りである。なお、この構文も(21)のようにいくつもたたみかけられるように用いられると、dramatic な効果がさらに強化され、一層写実的な記述が生ずるのは言うまでもない。

前節の第三の特性についても運動の動詞を伴う場合と同じであって、存在の動詞を伴うこの種の構文も、読んだり聞いたりするために書かれる記述文の中にのみ現われる類のものであると言ってさしつかえないであろう。なお、存在の動詞を伴うこの種の表現が会話文で用いられた一例が(19)であるが、この場合も直接的な gesture を伴っていることは、先にみた通りである。

2.4. 2 節のまとめ

こうみえてくると、運動の動詞の場合も存在の動詞の場合も、この種の構文のもつ本質的特性は変わらないということになる。ただ違うのは、用いられている動詞のタイプが異なる点であり、それに呼応して Locative の性質、特に前置詞、副詞の性質が異なってくるということである。つまり簡潔に言えば、「表現のタイプ」は異なるが、「構文の特性、つまり表現から生ずる効果は同じ」ということになる。「まとめ」としては、以上の考察に加えて話者(=観察者)、聴者(=読者)という要素をいれなければならないが、少し複雑になるので、話を分りやすくするために新たに TV カメラ、TV 受像器という比喻を用いながら、整理してみたい。

		Locative + Verb + Subject		
話者：TVカメラ (=観察者) 〈表現の性質〉	verbs of motion	verbs of existence		異質な面
	直前のコンテキストと同じ位置で 固定撮影 (視点：固定=眼前に事態が 入ってくる)	直前のコンテキストから動いて 移動撮影 (ある特定位置にきて対象物 が現われる)		
読者：TV受像器 (=聴者) (イメージ 世界の映像)	劇的效果を伴って視界に現われてくる： "coming into view"			共通な面

二つの構文に共通な性質として述べた「劇的な効果を伴って視界に現われて来る」というのは、実は読者（＝聴者）のイメージの世界の映像における効果であって、これは TV 受像器の画面に現われた効果にたとえることができる。運動の動詞を伴う構文であろうと、存在の動詞の構文であろうと、読者（＝聴者）の脳裡に生じてくる効果は共通しているということである。これに対し、話者（＝観察者）の側は、運動の動詞の構文と存在の動詞の構文の両方を用いるのであるが、運動の動詞の記述によれば、事態（または対象物）が視界に飛びこんで来てくれるので、いわば TV カメラを直前のコンテキストと同じ位置に固定しておいて充分であるのに対し、存在の動詞の記述では、話者は直前のコンテキストの視点から *Locative* で表わされる位置にまで視線を動かしてはじめて対象物が視界に現われてくるので、いわば TV カメラを直前の撮影位置からその位置まで移動させるか、またはカメラアングルを変えねばならないのである。

このように話者は二つの相異なる撮影方法を用いて対象を TV カメラにおさめているわけであるが、一方読者（＝聴者）の方は、その撮影方法の差異にもかかわらず、同質の劇的効果を伴って視界に現われる映像を味わっているのである。

3.1 統語論上の制約

前節の考察から、この型の文の意味論的・語用論的特性（あるいは機能的意味の特徴）は、次のように要約される。すなわち、この型の文は(1)予測しなかった対象または事態が視界に現われたり生じた場合の記述に用いられる文形式である。しかし、(2)話者はその記述の対象にはなり得ない。さらに(3)劇的効果を伴い、(4)普通は読んだり、聴いたりするために書かれた記述文の中にのみ現われる文形式で、いわば実況的記述文とも呼べるものである。ただし(5)会話でこの形式の文が用いられるときは、聴者が眼前にいるので直示的な副詞の *there* か *here* が *Locative* として用いられる。また(6)時制はもっぱら現在形か、または単純過去形である。そこで本節では、まず(1)このような機能的特徴をもった文形式が、実際にどのような統語的制約をうけているのか、さらに又、(2)その統語的事実がこの構文の特徴とどう結びついているのか、主としてこの二点について考察してみたい。

3.2 Kuno (1976) の指摘

Kuno (1976) は次の(24)、(25)のような文を、話者が観察した新しい事態 (*new events*) を ‘*present*’ する文であるということから、‘*presentational sentences*’ (新事態表出文) と呼び、この種の文の特徴について次の二点を指摘している。

(24) *There came John, tagging along after Marry.*

(25) Then out of the bushes jumped John.

すなわち、これらの文は 'themeless sentences' であり、それ故、関係代名詞化が不能である、という指摘である。例えば、(24)、(25)に関係代名詞を挿入した次の二文は非文である。

(26) *The man who there came, tagging along Marry was John.

(27) *The man who out of the bushes jumped was John.

ただし、すべての関係代名詞化が不能というわけではなく、次の(28)のような場合は非文とはならない。

(28) John ran into the house out of which came a strange sound.

(29) *John ignored the strange sound which out of the house came.

以上の Kuno の指摘に関して、二つの角度からの考察が必要である。一つは 'theme' と関係代名詞の関係からの角度であり、もう一つは(28)が何故許されるかという角度からである。

3.3 Presentational Sentence と関係代名詞化

最初の点については、Kuno の判断はこうである。関係代名詞化が可能なのは theme のはっきりしている文においてであるが、(24)、(25)のような文は新しい事態を導入するだけの機能しかもたないので、theme をもたない。それ故、関係代名詞化は不能である。以上が Kuno の説である。ここで theme というのは、おおまかに言って、会話の discourse の中ですでに話にのぼった要素であるか、または、そうでなくても話者と聴者の意識の中にすでに存在しているものであって、実際の表現の中ではそれについて記述がなされているそのもののことであり、たいていは文の主語の位置を占める。ところで関係代名詞というのは、すでに話にのぼった要素、または話者と聴者の意識の中にすでにあるものの、いわば確認の表現であって、必ずこの表現に先行する discourse との何らかの係わり合いがあってはじめて機能する表現である。ところが(24)、(25)によって表わされている事態は、はじめて当該コンテキストに導入される内容であり、それ故、これらの表現は何ら、それに先行する discourse と直接的なつながりをもたない。だから、この種の構文が関係代名詞の表現の中で生起する可能性はないことになる。

ここで Kuno の議論について明確にしておきたい点が二つある。まず、Kuno の論点は、(30)のように、L-V-の統語的特徴がSを先行詞とする関係代名詞(RP)節の中で生起することはできないということであって、(31)のように、L-V-と関係代名詞節とが直接統語的に

関係していない表現の場合は、この議論はあてはまらない点に注意すべきである。

(30) *.....S (RP) L-V-.....

(31) L-V-S (RP)

(31)の例は前節ですでにみた通り [(32)で繰り返す], ごく普通の L-V-S 構文の表現であり, 関係代名詞があっても統語上の性質は(30)と異なっている。なお, Sの要素が + definiteか - definite かに関する議論は, 前節でなされた通りである。

(32) But he could not open the box—it would not open! Then he hit it once with his hand. It opened; and *out came the dog whose eyes were as large as eggs!* [前節(13)]

明確にしておきたいもう一つの点は, (26), (27)がそれぞれ(26)', (27)' のようになっておれば, これらの表現は全く問題のない文であるという点である。それは斜体部分が正常な語順であり, それ故, もはや 'presentational sentence' の機能的意味を少しも反映していないからである。

(26)' The man who *came there*, tagging along Marry was John.

(27)' The man who *jumped out of the bushes* was John.

(26)', (27)' の表現の裏には

(26)'' A man came there, tagging along Marry.

(27)'' A man jumped out of the bushes.

という前提がそれぞれ隠されていると考えねばならない。そして言うまでもなく, (24), (25)の文には(26)'', (27)'' の如き前提は全く存在しないのである。

3.4 Figure と Background

Kuno の指摘に関するもう一つの角度からの考察は, (28)が何故非文でないかについてである。

(28) John ran into the house out of which came a strange sound.

(John はその家の中にかげこんだが, 家の中からは奇妙な音が聞こえてきた。)

一般に一つの発話には, 一つの情報上の焦点があるのが普通である。二つある場合は重文になっている場合が考えられる。一般に単文の場合は二つ以上でも, また一つもなくとも非文

となるのが普通である。(例えば無内容の表現: He has a head.) 従って, 正常な発話は重文でない限り一つの焦点をもつと言えるが, もしこれが正しければ, (28)もまた重文でないので, 一つの焦点をもつと考えざるを得ない。(28)では“out of which”以下が presentational sentence の特徴 (L-V-S 構文) をもつので, 当然この部分が新事態の発生を記述することになり, 従って(28)全体の情報上の中心が“out of which”以下にあることが明らかになる。

一つの発話全体のもつ調和を一枚の肖像画にたとえるならば, 発話文の焦点あるいは情報の中心となる部分は, 像 (figure) の部分であり, その他の部分はその像をひきたたせるための背景 (background) の部分に対応すると言えるであろう。それ故, (28)で言うなら, “out of which”以前の部分は, この発話全体のいわば background を形成しており, “out of which”以下が figure ということになる。 (28)は関係代名詞の中に -V-S が含まれているので(33)のような構造をなしているが, L以下が figure となっているために, 非文をまぬがれているわけである。

(33)L (RP)-V-S.

この発話の場合でも, (29)のようにSを先行詞として L-V- を関係代名詞 (RP) の節の中に含むような構造の場合は, (30)の制約にひかかり非文となる。

(29) *John ignored the strange sound which out of the house came.

3.5 When 節の場合

この figure と background の区別の考え方でもって副詞節の中に生起する presentational sentence を説明したのは, Jerry L. Morgan (1975) である。彼は figure, background という表現は用いず, ‘main point’ と ‘stage’ という言い方をしているが, 本質において違いはないので, 本節では筆者の術語を用いさせていただく。Morgan によれば, (34)は二つの “intended functions” をもっている。

(34) I was doing the dishes when John came in.

(34)には二つの読みがあるということであるが, より正確に言えば Speaker の意図の在り方に二種類ある, ということになる。すなわち, (1) when 節が背景をなし, 「時」を設定している場合と, (2)主節が when 以下の背景をなしている場合である。それぞれ, (1)「John が入ってきたとき, 私は皿洗いをしていた」, (2)「私が皿洗いをしていたら, John が入ってきた」の意味に対応する。ところが, (35)の場合はこの二つの機能のうち,

(2)の場合しか考えられない。

(35) I was washing the dishes when in came John.

このことは次の(36)の事例から一層明らかになる。

(36) A. ...and at two o'clock suddenly in came John.

B. What were you doing at that time?

A. I was doing the dishes when he came in.

*I was doing the dishes when in he came. (Morgan (1975) より)

要点は、when 節に figure としての“intended function”がある時にのみ、presentational sentence の構文を用いてよい、ということである。ただしL-V-S構文でも、when 節が次例のように前置された場合は、非文である。

(37) *When in came John, I was doing the dishes.

前置された when 節は、background の機能しかないために、figure としての機能しかもたない“in came John”の構文とは相容れないからである。それ故、“in came John”が figure としての機能をもつ正常な文は、(35)しかないことになる。

3.6 3節のまとめ

3節の考察は次のようにまとめることができよう。

まず第一に、L-V-S構文は themeless な文であるので関係代名詞化はできない。ただし、これは(30)で示すように、L-V-の語順がSを先行詞とする構造で現われた場合に限られ、(31)の場合ではない。

(30) *.....S (RP) L-V-.....

(31) L-V-S (RP).....

また、‘themeless’ という術語が表わしている特徴は、実際は、2節の意味論的・語用論的考察で明らかにされた新事態表出文の特徴に対応する。まずこの‘themeless’ という術語は、discourse grammar からの視点を暗示するものである。第二は、(33)のような構造の関係代名詞の場合、L以下が figure をなしている場合は非文ではないが、L以下が background をなす場合は非文である。

(33)L (RP)-V-S.

第三に、when 節でも同様のことがいえる。すなわち、前置されない when 節に L-V-S 構文が生じたときは、figure として機能しているときのみ正常な文であり、background として機能しているとき、または、when 節が前置されたときは、非文となる。

第四に、この種の構文の統語的特徴の最も重要な点は、background をなす機能しか持たない従属節や関係代名詞節には現われない、という点であろう。現われたとしても、その場合は background として機能するのではなくて、figure として機能するという特殊性をもっている。別の角度からいえば、この種の発話は、いわば discourse の流れから独立した発話であり、それ故、時間的に流れていく言語的コンテキストとの関係で制約をうけている他の文法事象とは異質のものである。

最後に、Emonds (1970) はこの種の文を、Root Transformation と名づけた一連の文法事象と共に説明しようとしたが、意味論的・語用論的裏付けは全く考慮していないように見られる。この構文の統語的事象は、これまでの考察から明らかな通り、意味論的・語用論的特性（または機能的意味特徴）により拘束をうけているのであり、そうした面の理論なくして、単に統語面だけの現象を指摘しても充分とはいえないであろう。

3 節は、意味論的・語用論的側面から、この種の構文の統語的特徴を説明しようとする試みであった。

4.1 There-V-S 型文の考察

本節では L-V-S 型文のうち、L に There が来ている文について考察したい。OED の説明に従って二つのタイプに区別し、まず 4.2 節では、会話文における There-V-S 型文が考察され、次いで 4.3 節では、記述文における There-V-S 型文が There-be-S 型文との関連性において考察される。4.4 節では 4 節のまとめとして、これらの There-V-S 型文の互いの関連性、および L-V-S 型文との関係が述べられる。There-V-S 型文も L-V-S 型文の一部であり、これらは一連の連続性をもったものとして説明できる、というのが筆者の意見である。

4.2 会話文における There-V-S 型文

会話文に生ずる There-V-S 型文については、すでに 2.2 節で言及したが、この節では、OED の説明を援用しながら考察してみたい。まず、OED の説明をみてみよう。

- (38) 3. Pointing to something as present to the sight or perception, chiefly in *there is, there are...*

1535 LYNDESAY *Satyre* 1355 Tak, thair, ane vther [i. e. blow] vpon

thy peild harne-pan. ...

Mod. There is the dinner-bell ; make haste. See, there comes the train. Hark! there goes the bugle.

- b. Pointing out a person or object with approval or commendation, or the contrary. Also in anticipatory commendation of the person addressed ; ...

1595 SHAKS. *John* II. i. 163 It grandame will Giue yt a plum, a cherry, and a figge ; There's a good grandame. ... *Mod.* There's a fine horse! all skin and bones. (OED, s. v. *there* B. 3.)

(38)の説明によれば、それぞれの相違点に注目して述べると、会話文（すなわち直接話法の表現）に生ずるThere-V-S構文は二つのタイプに区別される。まず(a)のタイプは、視覚または感覚の中に入ってくるものを指し示し、それに聴者の注意を向けさせる場合である。これが会話文ではなく、記述文であれば、テレビの映像にたとえられる通り、聴者は新たに登場してくるものをイメージの中に描くのであるが、会話文では聴者が目の前にいるので、話者はじかに場所を示す指示代名詞とそれに付随する *gesture* を用いて聴者の注意を当該の方向や音声に向けさせることになる。2.2節の用例(17), (18)はこの(a)のタイプであった。

もう一つのタイプ(b)は、話者が或る人や物に対して、プラス（賞賛）かマイナス（蔑視）の評価をもっている場合、そういう人または物をじかに指し示し、聴者の注意を向ける場合である。動作的事態に注意を向けるのではなくて、特定の時点において対象が話者にとってプラスかマイナスかの価値を持つことがある場合、それを一つの新しい事態とみだてて表現するやり方といってよい。この場合、聴者は評価の対象そのものであっても差し支えない。（例：There's a goodboy! : おお感心，感心，いい子だ！）

以上が(a), (b)二つのタイプの相違点である。

これに対し，(a), (b)いずれのタイプにも共通して言えることは，まず，(1)ともに会話文の中で生ずる直接話法の表現であること，それ故，(2)聴者は話者の眼前にいて，(3)話者は聴者の注意をひく目的を持ち，さらに(4)there はじかにその場所を表わす副詞であり，従って [+ demonstrative] の特質をもち，それ故，(5) stress がおかれて発音される。しかも(6) *gesture* を伴うことが普通である。

以上，会話文における There-V-S 型文の特徴をみてきたが，次に記述文における There-V-S 型文がどういう特徴を持つかを考察する。

4.3 記述文における There-V-S 型文

これはいわゆる preparatory 'there' とよばれる用法であるが、この種の there について、OED には次のような説明がみられる。

- (39) 4. Used unemphatically to introduce a sentence or clause in which, for the sake of emphasis or preparing the hearer, the verb comes before its subject, as *there comes a time when*, etc., *there was heard a rumbling noise*. ... (OED, s. v. *there* B. 4.)

“Used unemphatically to introduce a sentence or clause” というのは、この種の there に特定の location を表わす意味がもはやなく、従って [- demonstrative] であって、発音上も stress がおかれなことを示している。また、“for the sake of emphasis or preparing the hearer” というのは、[- demonstrative] になっても、2節で考察した L-V-S 型文のもつ特徴がいまだに生きていることを示していると考えられる。確かに(39)にあげられた二つの例文では、ともに there には情報的に高い価値はなく、むしろ“L-V-S”の“-V-S”の部分記述の中心になっていることは明らかである。

ここで一つ確認しておかなければならない点がある。それは、この種の there が完全に Locative としての意味を捨ててしまっているかどうか、という点である。結論から先に言うと、筆者の考えでは、この種の there は依然として [+ Locative] であることにはちがいない。ただ「特定の位置」を表わす機能を失っているにすぎない。あるいはもっと正確に言えば、「特定の位置」の「特定」が、だんだんと空間的に広がりを持つものを意味するようになり、もはや「特定」ではなくなって、むしろ「漠然」といった方がよいような空間までも表わしうるまでにその表わす位置を拡大してしまった、という方が適当かもしれない。あるいはもっと違った角度から考えて、there というのはもともと空間の広さに制限のある概念ではなく、それはとてつもなく広い場所の概念からごく限られた空間までもを含みうる言葉である、と考えた方がよいのかもしれない。もしそうだとすると、日常我々は、限られた空間でしか生活しないので、there を用いる頻度もおのずから限られた空間をさすことが多く、その結果、特定の場所をさす意味が経験的にクローズアップされているにすぎない、ということになるのかもしれない。

いずれにせよ、この種の there は [+Locative] ではあるが、 [+ Specific] ではないということにすぎないと考えたい。つまり、いわゆる preparatory 'there' というのは、次のような feature specification をもつことになる。

- (40) preparatory 'there' : $\left[\begin{array}{l} + \text{Locative} \\ - \text{Specific} \end{array} \right]$

これをあえて言語化すれば, “in the world : in the situation (in question) ; in the area (in question)” などの漠然とした空間規定の表現に対応することになる。ただ, こうした内容を話者が意識して発話するかどうかは全く別問題であり, ここでは史的に Locative ‘there’ と係わり合いをもつことを考えあわせた上での作業仮説にすぎない。

ところが preparatory ‘there’ が, このような漠然とした意味での空間規定を表わすとしておくと, 大変都合のよい点が出てくる。例えば, いわゆる There-be-構文の「存在」の意味の説明である。

(41) There is a shrine.

(41)の意味は「神社がある」ということだが, もう少し詳しくいうと, 「この物理的な世界に, 神社がある」ということであろう。ごく大まかな言い方をすれば, あるものが物理的に存在するという事は, 一つの概念的なものが物理的空間に位置づけられることである, と見えよう。もしそうだとすれば, 次の(42)の構造から「存在」の意味がごく自然に生じてくることは明らかであろう。

(42) *There* *is* *a* *shrine*
 [+ Locative] [+ Connective] [+ Noun
 [- Specific] [- Definite] [- Definite]
 ⇒ [in this physical world is a shrine.]
 ⇒ shrineがある。

There-be-構文の「存在」の意味が明らかになったところで, 今度は逆にこの説明を利用すれば, 「固有名詞は “there-be” とは共起できない」(Langacker (1975) p. 356) という事実も説明できる。例えば, (43)は非文である。

(43) *There is Bill.

非文の理由が何であるかであるが, 結論から先にいうと, Bill がすでに $\left[\begin{smallmatrix} +N \\ +Definite \end{smallmatrix} \right]$ であって, いわば二次的な存在であるのに対し, There-be-S 型文における S は $\left[\begin{smallmatrix} +N \\ -Definite \end{smallmatrix} \right]$ の存在 (一次的な存在) でなければならない。(43)では, この二つの異質の要素が同居しているところに非文の原因があると言えよう。この点をいまい少し詳しくいえば, 固有名詞は次のような判断を含む。

(44) Bill : $\exists x \cdot \text{Bill}(x)$

(x (=a man) なるものが存在し, かつ, x は Bill である。)

[there is x]	[and]	[x is Bill]
↑		↑
一次的		二次的

この関係を別の言葉でいえば、「固有名詞とは x が既に存在していること [すなわち $\exists x$ であること] を常に前提としている」ということになろう。それ故、There-be と固有名詞との関係は、この前提の部分（すなわち一次的な部分）でのみ関係してくるのであって、二次的な部分では全く関係しないのである。(43)の表現は、この二次的な存在ともいべき Bill を一次的に取り扱った点に誤りがあると言えよう。

なお、preparatory 'there' を $\left[\begin{array}{l} + \text{Locative} \\ - \text{Specific} \end{array} \right]$ と分析したことは、次の(45)のような文が正常であることと矛盾するものではないことをつけ加えておかねばならない。

(45) There is a shrine there.

(そこには神社がある。)

最初の There は $\left[\begin{array}{l} + \text{Locative} \\ - \text{Specific} \end{array} \right]$ 、後の there は $\left[\begin{array}{l} + \text{Locative} \\ + \text{Specific} \end{array} \right]$ と考えられる。また一つの文に複数の Locatives は当然可能であるから、(45)の意味の合成には何ら支障をきたすことはないはずである。

ここで(39)の OED からの引用に立ち返り、そこであげられた例文およびそれに類する例文の考察に移りたい。次の(46)、(47)は、(39)に挙げられたものの繰り返しである。

(46) There comes a time when...

(47) There was heard a rumbling noise.

(48) Once upon a time there lived a great king.

(46)~(48)の例文を考察するにあたって、ポイントは二つある。一つは先にみた There-be-S 構文との係わり合いについてであり、もう一つは there のもつ情報量についてである。

まず、There-be-S 構文との関係であるが、(46)~(48)はそれぞれ次の(46)'~(48)' に対応するものと考えられる。

(46)' There is a time when...

(47)' There was a rumbling noise.

(48)' Once upon a time there was a great king.

S の部分を導入するだけの目的ならば(46)~(48)を用いずに、存在を表わす表現である(46)'~(48)' で充分なはずである。ところが、(46)~(48)では単なる存在表現を通り越して、その存在の在り方に言及した表現が 'be' に取って代わっていて、S の様態がより写実的でリアルなものになっている。つまり、(46)'~(48)' では記述の中心が S にのみあったのが、(46)~(48)では、“-V-S” が記述の中心になっていることになる。こうみえてくると、おのずから

there のもつ情報量にも変化が生じる。(46)'~(48)'では、「存在」を表わす機能が中心であるので、there はそれなりのはっきりした機能を果していると言える。ところが(46)~(48)では、文全体が存在の情報を通り越して、「存在の在り方」に重心が移っているので、(46)'~(48)'におけるような there の機能は、いわば副次的なものになってしまっている。それ故、この違いの分だけ、there のもつ重みが(46)~(48)では軽く、うづろうづろになっていると行うことができよう。つまり、より虚辞的性格を強めているのである。

以上の考察から、上にあげた二つのポイントは明確になってくる。まず、There-be-S 構文との係わり合いであるが、話者の言語心理としては、(46)~(48)の底には、(46)'~(48)'が存在していると考えらるべきであろう。この意味において、(39)で引用されたような表現はすべて、There-be-S 構文に還元できるはずである。また、そのように分析するのが一番適切のように思われる。第二のポイントは、there のもつ情報量であるが、上の考察から明らかな通り、(46)'~(48)'のような There-be-S 構文では、「存在」を表わす意味が第一義的にあるので、there はその意味では相対的に情報量があるといえよう。しかし、(46)~(48)のような There-V-S 構文では、「存在の在り方」に記述の中心が移っているので、(46)'~(48)'に比べて there の機能はより一層、虚辞的になっていくのは明らかである。

4.4 4 節のまとめ

4.2節と4.3節で会話文と記述文の There-V-S 型文を考察してきたのであるが、この両者の関係、および相違点について OED は次のように述べている。

- (49) Grammatically, there is no difference between *There comes the train!* and *There comes a time when, etc.*; but, while in the former *there* is demonstrative and stressed, in the latter it has been reduced to a mere anticipative element occupying the place of the subject which comes later. ...

(OED, s. v. *there* B.4.)

すなわち、文法的には、会話文の “There comes the train!” 型文と、記述文の “There comes a time when...” 型文の間には相違点はないが、前者が demonstrative (指示的) で stress がおかれるのに対し、後者はあとに来る主語の位置を占めるだけの、単なる予備的要素に変化してしまっている、という点が違っているという説明である。この二つのタイプの差はすでに述べたように伝統的に、preparatory ‘there’ と locative ‘there’ として区別されてきたものであるが、筆者はこの中間に There-be-S 型文を介在させることによって、locative ‘there’ から preparatory ‘there’ までの間が連続性をもつものであることを示したかったわけである。そしてさらに、これらの一連の There-V-S 型文は、すでに2節で

考察されてきた L-V-S 型文とも連続性をもつものであることはいうまでもない。これらのタイプをまとめて表にすると次のようになる。

(50)

Lの要素 タイプ		<u>there</u> or <u>L</u>			
		demonstrativity	locativity	specificity	preparatoriness
L-V-S	記述文	—	+	+	—
There-V-S	会話文	+	+	+	—
There-be-S	記述文	—	+	—	+
There-V-S	記述文	—	+	—	++

demonstrativity というのは、話者が *gesture* を伴って じかに 特定の場所を指示する性質のことである。つまり、直接語法の特長である。会話文以外にはこの性質はない。locativity はすべてのタイプに存在すると考える。ただ、その場所が特定であるかないかの違いがあるにすぎない。この点に、同じ記述文であっても L-V-S 型文と、There-be-S 型文および There-V-S 型文との相違点がある。また、場所に特定性があるかどうかは、*there* が結果的に preparatoriness を獲得するかどうかと関係する。There-V-S 型文のように記述の中心が “-V-S” に移ってしまうと、*there* の虚辞化は極端なまでになってしまう。

しかしながら、このような細かい点での差異があるにもかかわらず、形式的類似点からは、これらのタイプは総称的に L-V-S 型文として特徴づけることができるし、さらにまた、意味的にもこの型の文が共通して持っている presentational sentence としての特徴、すなわち、新事態を導入する機能、およびそれに伴う諸特性は、これらのタイプが一つの密接な関連性をもって、互いに話者の心理の中で結びついていることの何よりの証拠と言えるであろう。

5.1 Sが一人称か二人称である L-V-S 型文

これまで考察してきた構文ではいずれも S が三人称であったが、これが一人称、または二人称であったとしたらどうなるか。この節ではまず、5.2 で一人称の S を伴う L-V-S 型文を取り扱い、次に 5.3 で二人称の S を伴う L-V-S 型文を考察したい。いずれも会話文に生ずる慣用的な表現であるが、ここでは慣用としてかたづけることはせず、できるだけこれまでに明らかになった原則を適用して、そうした慣用的意味が何故生じてきたかを考察してみたい。なお、5.3 では命令の意味をもつ L-V-S 型文にも言及する。

5.2 一人称のSを伴う L-V-S 型文

この型には二つの典型的なタイプがある。一つは be 動詞を伴うタイプであり、もう一つは動作動詞を伴うタイプである。まず be 動詞を伴うタイプからみてみよう。

- (51) a. Here I am.
b. Here we are.

(さあ, ついた; ただいま)

いずれも同じ意味で, ごく普通に慣用的に用いられる表現である。ところがこの表現も, よく観察してみると, これまでの L-V-S 型文が部分的に変化して生じたものにすぎないことが分る。

まず便宜上, 3.1節でまとめられたL-V-S型文の一般的特徴をここで繰り返しておきたい。

- (52) (1) 新しく生じた事態を述べる場合の文形式
(2) 話者は記述の対象になれない
(3) 劇的効果を伴う
(4) 記述文にのみ生ずるいわば実況的記述文
(5) 会話文に生ずるときは直示的な there または here が用いられる
(6) もっぱら現在形か単純過去形が用いられる

さて(51)の例文はいずれも, (52)で挙げた諸特徴のすべてを満たしているとはいえないが, だからといって, (51)が L-V-S 型文ではないということにならないという点を述べてみたいと思う。すなわち, (52)にあてはまらない部分はむしろ(51)のもつ特異性からくるものであって, 本質的に L-V-S 型文の特徴と異なるものではないことを説明したいのである。

まず, (51)は自分または自分達がどこかに到着したことを眼前の者に知らせる表現である。(それは, 相手が到着したことがわからないときに新情報として述べられることもあれば, そうではなくて, たんに儀式的な確認の表現として述べられる場合もある。) まず到着という新しい事態を述べているので, (52)の(1)は満たされている。問題は(2)である。この場合, 話者が記述の対象になっているので, (52)の(2)は満たされていない。その理由はこうである。三人称のSを伴う場合は, Sの位置する場所と話者(=観察者)の地点が別々であるのが普通である。ところが here がきた場合は, 場所が一致することになり, それ故, Sの性格にも制限が生じてくる。三つの可能性を考えてみると,

- (53) a. { *Here he is.
There he is.
Here he comes.

b. Here you are.

c. Here I am.

(53 a)からわかるように、三人称で be 動詞を伴う場合は here は用いられない。何故かという he がここに居なければならず、またその際は he とはいわず、you というのが普通だからである。“Here he comes” の場合は、明らかに here に方向性があり、「こちらに向かって」やってくる姿が述べられているから問題はない。それ故、here が be 動詞を伴うときは you か I のいずれかの可能性しかないことになる。you の場合は、you にとって新たな事態を述べる文であり、I の場合は、I にとって新たな事態を述べる文、ということになる。

(3)の劇的効果については、新しい事実を記述する文であるので問題はない。(4)と(5)については、(51)は会話文であるので(5)があてはまる。ただ一人称の S を伴うので、自分のことについて、しかも今いる場所に関して述べるわけだから、必ず here でなければならない。さらに(6)は、現在の自分のことを述べる文だから、現在形があてはまる。

このようにみえてくると、(51)の文がいずれもいわゆる L-V-S 型文の原則に従っていること、そして従わない場合でも、それは S が一人称であることからくる必然的な結果にすぎない、ということが明らかになる。

一人称の S を伴う L-V-S 型文のもう一つのタイプは次のような表現である。

(54) a. Here I go.

b. Here we go.

(さあ、行くわよ)

まず(51)と違っている点は、(51)が be 動詞を伴っていて、結果の事態に注意を向ける文であったのに対し、(52)は行動の動詞を伴っていて、話者の行為に注意を向けようとする文である点である。一般に話者が自分の行為に対して聴者の注意をひこうとするとき、始まってしまったあとで新しい事態として述べるのでは遅すぎて、実に不自然である。何故なら、これから自分が行なおうとする行為が確実に起るということは、話者である本人が一番よく知っているわけで、聴者の注意をひきたいときには、その行為の始まる直前に gesture を伴いながら言うのが一番効果的で、かつ、道理にかなっているからである。本人が行動し、かつ、それを新しい事態としてその本人が記述する場合、その新しい事態とはすでに始まったものではなく、これからすぐに始まる類のものでなければならない、ということになる。

(54)の場合でも、このように S が一人称であることからくる特異性が存在するのであるが、(52)の(1)を除く(2)~(6)の特性に関しては、(51)の場合に分析したことと同じであり、

重複するので、これ以上くり返す必要はないであろう。

この節では(51)の場合と(54)の場合をみてきたわけであるが、いずれの場合も、一人称の S を伴うことからくる特異性はあるが、本質的には L-V-S 型文の特徴をそなえた表現である、と言ってよからう。

5.3 二人称の S を伴う L-V-S 型文

一人称の S を伴う L-V-S 型文に二つのタイプを区別したが、二人称の S を伴う L-V-S 型文にも、これと平行して二つのタイプを区別することができる。一つは be 動詞をとるタイプであり、もう一つはそれ以外の動詞をとるタイプである。

まず be 動詞を伴う場合の例として次のものがあげられる。

(55) Here you are.

([捜しものなどを差し出すとき] はい、どうぞ)

(56) There you are!

(それご覧!)

(55)はすでに(53 b)としてあげたものに等しい。here が来ているので、話者と聴者は同一位置におり、しかも聴者が捜していたものを差し出す場合などが、この表現の典型的な用法である。それ故、この表現は直接的には聴者の欲しかったものを提示しながら、それに聴者の注意を向けさせる表現であるが、結果的には「どうぞ」という含意が出て来ることになる。

これに対し(56)は、話者があらかじめ注意したのに聴者がこれを聴きいれず、不利な状態に陥ってしまったような場合の表現で、話者は自分の正当性、あるいは聴者の不当性に注意を向けさせようとして用いる文である。従って、話者の側に相手をつき離すような心理が働き、それが there に反映されていると考えられる。それ故、決して here にはならない。

二人称の S を伴う L-V-S 型文のうち、もう一つのタイプは次のような文である。

(57) (A) Don't talk so much.

(B) There you go again.

(それまた始まった; いつもこうだから)

(B)のセリフは、いつものいいぐさがまた始まった、という点に注意を向けさせるための表現である。これは第一人称をとる S の場合の例文(54)に対応するものと考えられるが、(54)の場合と本質的に違う点は、(57)では聴者(ここではA)がすでに開始してしまった動作について記述している点である。相手のおこなう行動を新たな事態として表現するに際しては、相手はその行動に出るまでは話者はその行動については何も知らないわけだから、相手の行

動があって、それに対して話者の表現が来るといのはごく自然のことである。ただ、自分の行動に対しては、話者はあらかじめすべて分っているわけで、その点に話者の行動と聴者の行動との記述上の差異が存在するのであろう。なおこの場合、話者の心理には当然、Aの表現を遠ざける意識が働くので、there が用いられている。この点は第一のタイプの説明でみた通りで、here にはなり得ない。

なお、第一のタイプ、第二のタイプ、いずれの場合も新たに生じた事態を提示している文であり、(52)の(4)を除いてすべて、L-V-S 型文の特徴を満たすものである。

以上、二つのタイプはいずれも here か there を伴うものであったが、これは一人称、二人称のSを伴う L-V-S 型文はすべて直接話法の会話文であり、従って(52)の(5)の原則にある通り、直示的な here か there のいずれかの表現になってしまうためである。(これに対して、実況的狀態記述文の L-V-S 構文は、いわば間接話法の表現である。) なお、here, there の用法について一般的に予想されることは、話者と密接な係わり合いのある新事態の表現には here が用いられ、一方、聴者の側に起因する事態で、話者が密接な係わり合いをもたない場合には、there が用いられるという傾向があることである。

なおこの節の最後に、形式は L-V-S 型文であるが、文の意味が命令である一連の表現について一言触れておきたい。命令の意味であっても、この種の構文に密接な関係をもつ部分がある、と判断されるからである。

(55)~(57)で考察した here, there を伴う表現は、状態動詞と共起しているために、結果に重きをおいた状態的表現であった。ところが、二人称のSを伴う L-V-S 型文には、これらとは全く性質を異にする(58)の如き例文がある。これらはいずれも、informal speech ではあるが、方向を表わす副詞または前置詞と運動を表わす動詞を伴い、また、文意に「記述」の意味は全くなく、すべて「命令」の意味である。(例文のみ Quirk et al. (1973) 8.28 より借用。)

- (58)
- | | | | | | |
|----|--------------------|---|-----|---|-------|
| a. | In (the bath) | } | you | { | come. |
| | Over (the fence) | | | | go. |
| | Under (the bridge) | | | | get. |
| | On | } | you | { | go. |
| b. | Under | | | | |
| | Round | | | | |

問題はこの命令の意味がどこから生じてくるかである。まずこれまでの考察から、次の四点は明らかだといってよい。

- (59) イ. 述べられている行為はまだなされていない。

- ロ. まだ、なされていないということを話者は知っていて述べている。
- ハ. 聴者 (you) が行為をするという文意である。
- ニ. L-V-S 型文であるので、新しい事態に聴者の注意をひく構文を用いている。

このイ、ロ、ハ、ニを総合して聴者は命令だと判断すると考えられるが、ここではその詳細にまで立ち入ることはできない。ただ、聴者がこれらの文を命令と解するに至る過程について、次のように考えることは可能である。すなわち、イから話者の意図が新しい事態に注意を向けるものでないことが分る。さらにイ、ロ、ハから、聴者の行為によってその事態が生ずることを話者が望んでいることがわかる。さらにニから、その事態が眼前で生ずべきものであることがわかる。これらの理解を総合して、聴者は、例えば “In the bath you come” の意味が、ほぼ「さあ、浴槽の中に入っておいで」という意味であることを理解するのではないかと思われる。これは丁度、(54 b) “Here we go.” (さあ、行くわよ) が、話者が「みずからの行なう行為に聴者の注意をひこうとした表現」であったのに対応するもので、(58)の場合は、話者が「聴者が行なう行為に聴者の注意をひこうとした表現」であり、おのずから聴者に行為をうながすような含意が生まれ、命令の効果が生じると考えられる。日本語でも、「さあ、みなちゃん、こっちにくるのよ」といったときの表現がこれにあたるであろう。

第 五 章

間接的行為指示型発言文とコンテキスト

1. 序

本章の目的は、間接的行為指示型発言文(Indirect Directive)の発話の力がコンテキストに依存して変化する様を考察し、その原則を明らかにするよう努力することである。ここでいう行為指示型発言文(Directive)とは、話者が聴者に任意の行為の実行を求める類の発言文のことであり、Searle(1975)に従えば、命令、指揮、要請、嘆願、懇願、祈願、指図などを表わす文が含まれる^①。また間接的行為指示型発言文とは、同じく話者が聴者に任意の行為の実行を求める類の発言文ではあるが、行為指示の内容が直接文の文字通りの意味からくるのではなくて、それが文の言外の意味として間接的に生ずる類の発言文のことである。

本章で取り扱う主なテーマは二つある。一つは‘You’を主語とする間接的行為指示型発言文、すなわち‘You’ utterance の考察であり、いま一つは Why don’t you～? 型文の考察である。

2.1節では、Searle(1975)で明らかにされた間接的行為指示型発言文の四項目にわたる一般化に触れ、まずそれらの原則は行為指示型発言文の発話の力を最終的に決定づけるものではないこと、次いで発話の力を最終的に決定づけるものはコンテキスト、すなわち、話者と聴者の間に存在する変数的要素、に依存することを指摘する。2.2節は、‘You’を主語とする間接的行為指示型発言文一般の特徴に触れ、この種の文が使用される際の文とコンテキストとの関係を整理する。

3節は、Searleの一般化の第四項に属しやや特殊と思われる Why don’t you～? 型文を取りあげ、その発話の力とコンテキストとの関係について考察する。3.1節ではこの表現を発する際の話者の言語心理について、また3.2節ではそれを受けとる聴者の側の言語心理について考察する。3.3節では前節で取り扱われなかった発話の力に言及し、3.4節ではこの文型の慣用性(Idiomatcity)とコンテキストとの関係を考察する。

2. ‘You’ utterance の考察

2.1 asking と stating

Searle(1975)は、間接的行為指示型発言文の種類が最終的には四つのタイプに区分され

ることを指摘し、それぞれのタイプに対応して次のような四項目にわたる一般化を行なっている。なお本章では以下 Searle にならって、省略記号 S は話者 (Speaker) を、H は聴者 (Hearer) を、A は行為 (act, action) を表わすものとする。

- (1) GENERALIZATION 1 : S can make an indirect request (or other directive) by either asking whether or stating that a preparatory condition concerning H's ability to do A obtains.

GENERALIZATION 2 : S can make an indirect directive by either asking whether or stating that the propositional content condition obtains.

GENERALIZATION 3 : S can make an indirect directive by stating that the sincerity condition obtains, but not by asking whether it obtains.

GENERALIZATION 4 : S can make an indirect directive by either stating that or asking whether there are good or overriding reasons for doing A, except where the reason is that H wants or wishes, etc., to do A, in which case he can only ask whether H wants, wishes, etc., to do A.

これら四項目にまとめられる間接的行為指示型発言文の内容は、いずれも H が A を行なうために満たされなければならない条件 (必要条件) が満たされているかどうかを尋ねるか (ただし Generalization 3 を除く^②)、または、満たされていると述べる、という形式をとっている。すなわち、この種の発言文は必要条件を尋ねる (asking) か、述べる (stating) かのいずれかの形式で表現されている。例えば Generalization 1 に対しては(2)が、Generalization 2 に対しては(3)が、それぞれ例文としてあげられよう。

- (2) a. Can you go now?

b. You can go now.

- (3) a. Will you listen to what I have to say and like it?

b. You'll listen to what I have to say and like it.

いずれも(1)の条件に合った間接的行為指示型発言文である。

ところが asking と stating の相違点は何かとなると、(1)の一般的原則は何も述べていない。例えば(2)の二文、(3)の二文はそれぞれ相異なる発話の力をもっているが、それらの違いについては(1)からは何も分らない^③。一見して明らかなように、(2a)は「要請」を表わし、(2b)は「間接的命令」または「許可」を表わす。また(3a)は「要請」を表わすのに対し、(3b)は「間接的命令」を表わす。つまり、asking と stating は明らかに違った言語行為を表わしているものであり、この相違点を理論的に明らかにすることが(1)の一般化

の次の段階として興味をひく問題である。

そこでこの相違点は何かということになるが、結論から先にいうと、(2a)と(2b)の発話の力の差異は、聴者Hが行なう行為Aの支配権(Control)が話者Sと聴者Hのどちらにあるか、という考え方を導入することによって説明することができる。(2a)はYesかNoかの返答をHにまかせた形式であるので、HがAを行なう際の支配権は最終的にはHの側にあり、従って発話の力は「要請」を表わす。これに対して(2b)では、Sによって「HがAを行なうことは事実」として述べられており、従って「HがAを行なう」ことの支配権は当然Sの側にある。ただしこの場合、HがAを行なうことに積極的(positive)な姿勢を示している場合は「許可」の効果が生じ、逆にHがAを行なうことに消極的(negative)な姿勢を示している場合には「間接的命令」の効果を生ずる。(3a)、(3b)についても同様の説明が可能である。(3a)はHの側に行為の支配権をもたせた言い方であり、従って「要請」の意味をもつが、(3b)はHのこれからの行動についてSが断言した形をとっており、従って行為の支配権がSの側にあり、「間接的命令」の効果を生じている。

これらの考察から明らかなのは、まず第一に、statingとaskingの違いはHの行為の支配権の移動という概念から明確に区別できるということ、そして第二に、Sに支配権がある場合には、Hの態度の在り方をさらに区別することによって細かい発話の力の差異を説明することができるということである。

間接的行為指示型発言文は、このようにコンテキストに依存してさまざまな発話の力を生じうるが、どのような発話の力がどのようなコンテキストにおいて生ずるかという角度からの研究はこれまで余り試みられなかったように思われる。上の説明では、任意の間接的行為指示型発言文のコンテキストを二つの変数要素(すなわち支配権とHの姿勢)の組み合わせとして表わし、それぞれに特定の発話の力が対応することを示すことができた。次の(4)は、その「まとめ」である。

(4)

変数要素		例文		(2b)	(2a)	(3b)	(3a)
支配権 (Control)	Sの側			+	-	+	-
	Hの側			-	+	-	+
Hの姿勢	positive	+	-				
	negative	-	+				
発話の力(効果)		許 可	間接的命令	要 請		間接的命令	要 請

2.2 'You' utterance とコンテキスト

2.1節の考察から、You を主語とする stating の表現においてはHの行為の支配権は話者の側にあること、逆に asking の表現の場合は支配権が聴者の側に移ることが明らかになった。しかしこのことは、理由に関する Generalization 4 に対応する(5)の例文には必ずしもあてはまらない。^④

- (5) a. Ought you to eat quite so much spaghetti?
 b. You ought to be more polite to your mother. (Searle)

それは(5a)が asking の表現でありながら支配権がSの側に留まっているからである。この点が Generalization 4 の特殊性といえる。しかし(5b)の stating の表現では(2b), (3b)と同様Sの側に支配権がある。そこで一般に次のような原則がなりたつように思われる。

- (6) You を主語とする stating の間接的行為指示型発言文においては、Hの行為Aの支配権はSの側にある。

「You を主語とする stating の間接的行為指示型発言文」を以下便宜上 ‘You’ utterance と呼べば、(6)の記述はより簡潔に(7)のように書き換えることができる。

- (7) ‘You’ utterance におけるHの行為の支配権はSにある。

ここで少し横道にそれるかもしれないが、‘You’ utterance の特徴を要領よく指摘した研究に一言触れておきたい。Smith (1975) は、一般意味論の立場から発話に ‘You’ message と ‘I’ message とを区別する。^⑤ ‘You’ message とは、(8)に示すような You を主語とし、そのあとに should や ought to などの義務に関する様相を表わす助動詞が続く表現で、Searle の区分でいうと Generalization 4 に対応する表現である。

- (8) a. You should stop smoking.
 b. You ought not to get married. You’re too young.

彼によれば ‘You’ message の特徴は次の三点に要約できる。すなわち①Sの姿勢が高圧的であり、②Hはこれを無視するか、または自分への挑戦あるいは攻撃と受けとり、防禦の姿勢に入る、それ故③コミュニケーションを断絶に導く恐れがある、というものである。これに対して、(8a)に対応する ‘I’ message は(9)のような表現になる。

- (9) I wish you didn’t smoke. I worry about your health, especially when I hear you coughing.

‘You’ message の特徴と対照させながら(9)の特徴をみてみると、①(8a)のように「判断

(judging)」を高圧的に述べるのではなくて、相手に対する「心配 (caring)」を自分の意見として述べていて、また②Hは自分に対する心配の気持の表現と受けとるので防禦の姿勢をとる必要もなく、従って③伝達内容もスムーズに伝わる、ということになる。

この 'You' message と 'I' message の性質の違いは、「話者と聴者の間には心理的な『垣根 (fence)』が存在する」という考え方を導入することによって、一層はっきりとした形で説明することができる。すなわち、'I' message を用いる場合には話者はこの垣根の内側に留まり、垣根を越えて相手の領域に侵入することはない。ところが 'You' message を用いると、この垣根を越えて相手の領域内に侵入することになってしまう。というのは 'You' message は相手の行為に口出しし、相手を規制しようとする表現だからである。この場合侵入された聴者の側の反応は、これを無視するか、そうでなければ、侵入に対抗するために大急ぎで自分を防禦することを強いられてしまう。以上、'You' message と 'I' message に関する Smith の説明を、筆者が自分の考えをまじえて整理し、簡単に紹介してみた。

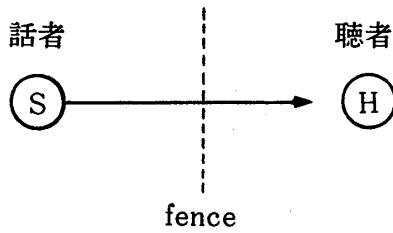
ところで Smith の指摘した以上の事実は、結論から先にいうと、すでに(7)で述べた 'You' utterance の原則によってすべて説明がつく。すなわち、'You' utterance における Hの行為の支配権はSにあることから、'You' utterance の発話の力はすべて潜在的には「間接的命令」の効果をもつ。従ってこの間接的命令がもろに現われるような使用環境で 'You' utterance が用いられた場合には(すなわち相手の領域にもろに踏み込むような形で用いられた場合には)、上述の 'You' utterance の三つの特徴の効果がそのまま功を奏することになる。逆にこの間接的命令がもろに現われないような使用環境で用いられた場合は、(8)のような支配力の強い表現であっても、攻撃や挑戦として受けとられることはない。このようにみえてくると、次の問題として考えなければならないのは、どのような使用環境において 'You' utterance が安全に用いられ、また逆にどのような場合にSとHの間に心理的な衝突が起こるかということであろう。この点を次に考えてみたい。

まず 'You' utterance がごく普通に受けいられる場合とは具体的にどのような場合か考えてみると、

(10) 「Hの行為の支配権はSにある」ということを、SもHも共に認めている場合、

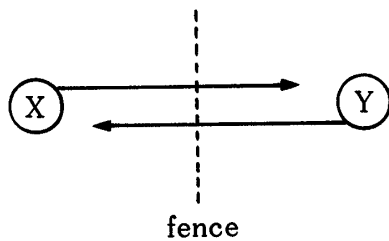
ということになろう。具体的には、子供(H)がまだ小さいときの親(S)と子の関係、医者(S)と患者(H)の関係、先生(S)と生徒(H)の関係、その他SがHの行動に対して支配力を持っている関係のすべてがこれにあてはまる。この場合はSのHの領域への侵入は当然のこととして受けとられ、Hは防禦の姿勢をとることはない。

(11)



‘You’ utterance がごく普通に受けいられる場合のもう一つのタイプは、SとHが非常に親しい間柄の場合である。例えば夫婦の間、恋人同志、親しい友人間などがそうである。この場合はお互いがお互いの領域に侵入することを許しているのが普通であるので、話者・聴者の記述をとってしまった(12)のような人間関係が存在すると考えてよい。

(12)

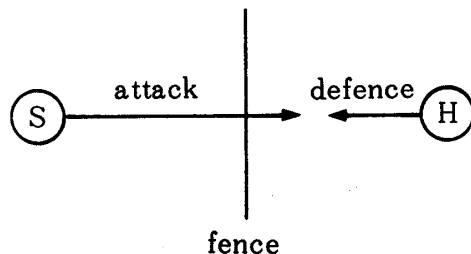


次に ‘You’ utterance をH が攻撃または挑戦と解する場合であるが、この場合のコンテキストにも二つのタイプが考えられる。まず

(13) 「『Hの行為の支配権はSにある』ことをSもHも共に認めている」とSは思っているが、Hはそう思っていない場合。

具体例としては、大学生になった息子(H)に対して父親(S)が自分の支配権が及ぶものと思って ‘You’ utterance を発したところ、息子の側は領域侵犯と解して反抗する場合などがその例である。この場合の人間関係は次のように表わされうる。

(14)



‘You’ utterance をHが攻撃または挑戦と解する場合のもう一つの場合は、

(15) (10)で扱った以外の人間関係において、「‘You’ utterance におけるHの行為の支配権はSにある」ということをSが知らないで ‘You’ utterance を用いるか、ま

たは、知っていて故意に用いる場合、

である。知らないで用いる場合というのは、まだ十分に言葉を学習していない子供や外国人の場合を含めて ‘You’ utterance の用い方を知らない人の場合が考えられる^⑥。また故意に用いる場合とは、何らかの理由で相手に対して自分の支配権を主張する場合とか、そうすることによって相手を怒らせることを意図している場合が考えられる。この場合も S・H間の関係は(14)に図示されたものと同一である。

以上の考察から ‘You’ utterance が用いられる環境がほぼ明らかになったが、まとめとして次の点をつけ加えておきたい。すなわち、‘You’ utterance が当然用いられてよい環境 [(11)と(12)の場合] においては、発話の力は「間接的命令」というより「指示」に相当する効果を生むということ、逆に本来用いられるべきでない環境 [(14)と(15)の場合] で用いられた場合は、「間接的命令」の効果が強くなるということである。

3. Why don't you～? 型文の考察

Searle (1975) によれば、この文型は Generalization 4 に対応する間接的行為指示型発言文に属する。筆者がここで特にこの文型をとりあげた理由は二つある。一つは、この文型が asking の形式をとりながら 2 節で考察したような「要請」の効果は生ぜず、本質的には「間接的命令」の性質をもつという特殊性にある。もう一つの理由は、この文型のもつ発話の力の多様性（例えば、間接的命令、指示、助言、勧誘、禁止など）をどのように説明すべきかという関心からである。

3.1. 話者の側の言語心理

特定の状況で話者 S が Why don't you～? を用いるに至る言語心理には、次のような三つの段階が区別できるように思われる。

まず第一段階は S および（または）H を取りまく状況 ‘Situation 1’ が存在することを S が認識する段階である。第二段階は、Situation 1 において新たに ‘Situation 2’ を導入することが然るべき理由があって最も適切だと S が判断する段階である。ただしここで ‘Situation 2’ とは、「H が行為 A を行なうこと」を表わすものとする。第三段階は、実際の発話の段階であり、これを詳しくいえば、Situation 2 の実現を意図して S がその内容を提示する段階、ということになる。なお、S が自分の判断の実現を意図していることから判るとおり、この文型を用いる場合には、H の行為の支配権は S の側にあることに注意しなければならない。

また表現形式は、「Situation 2 を実現させない理由は何か？」という疑問文形式をとる

が、話者の言語心理においては理由を聞くことが第一の目的では勿論なく、この表現は、「Situation 1 の状況においては、Situation 2 以外に導入すべき適当な状況が私には考えられない」という文意をHに提示する表現形式にすぎない。ところが先にも述べたとおり、Hの行為の支配権はSの側にあるため、この Situation 2 の提示は本質的に「間接的命令」の性質をおびることになる。Hの反応としては、大抵の場合 Situation 2の提示を受けいれるが、Hが然るべき理由があってそれを受けいれられない場合は、「Situation 2 を実現させない理由」がHの反応として述べられるのが普通である。この点については3.4節でもう一度触れるつもりである。

3.2. 聴者の側の言語心理

Sの側の言語心理は上述のように比較的単純で定数的であるが、これに反してHの側の言語心理は以下に述べるように変数的で複雑である。この表現の発話の力は、この定数的なSの言語心理と、変数的なHの言語心理の相互作用によって決まるのであるが、発話の力を最終的に決定する要素は、Hの側の言語心理にあるとみてよい。それ故以下本節では、Hの側の変数的な言語心理と発話の力の相互関係を明らかにする方向で論をすすめてみたいと思う。

Hの側の言語心理は少なくとも三つのタイプに区分できると思われる。第一のタイプ：

(I) HがSによる Situation 2 の提示を積極的に (positively) 求めている場合

この場合はHがSの表現を迎えいれる準備がすっかりできているため、Hの側に領域がSによって侵されたという意識が全くなく、それ故発話文の効果も間接的命令の性質は抑えられ、単に「意見の提示、提案」の性質が強い。

(16) Traveler : We've already taken a sightseeing tour of the city and gone shopping. Can you suggest something else for us to do ?

Bell Captain : Well, why don't you rent a car and go for a drive? The countryside around here is beautiful.

Traveler : I'll buy that. Thank you.

(NHK. 英会話テキスト)

この場合は、SとHの間の垣根をHの側がいわば前もって取りのぞき、SがHの側に自由に入れる状況を作っているということが出来る。次は第二のタイプである。

(II) HがSによる Situation 2 の提示に100%依存して行動する場合

この場合は、HがSの指示に100%従うべき立場にあるか、または従わざるをえない状況にある場合であり、'You' utterance の(10)の構造に類似する。すなわち、Sの支配権が当然のものとして認められている状況であり、従って発言文の効果は「指示」に相当する。

(17) Father : Is there anything that needs sampling ?

Son : I'm good at that, too.

Mother : *Johnny, why don't you help Lisa set the table ?*

Son : O.K. I'll take care of the knives and forks.

次は第三のタイプである。

(Ⅲ) Hが Situation 1 の状況を維持しようとする態度を示している場合

この場合は、Hが Situation 2 に関心がないことがわかっているにも拘らず、Sは実現を意図して Situation 2 を提示するのであるから、「間接的命令」の効果をはっきりと現われてくる。次の例は、Paula の婚約者のつもりである Collins が Paula を追いかけてきた場面で用いられたものである。

(18) Collins : Has he got a gun on you ?

Paula : No! Now please leave us alone.

Collins : Is there a phone in the car ?

Sam : Look. It's obvious she doesn't want to talk to you. *So why don't you just drop it ?*

(「スクリーン・イングリッシュ」)

これはシナリオからの引用であるが、Sam のセリフには、「おい、ポーラは君と話したくないと言っているんだ…しつこくするのはよせよ。」という対訳がついている。

また次の例は、Situation 1 を維持しようとするHを、力づくで Situation 2 にもって行くとするSのセリフである。女が男に銃をつきつけている。彼女はその男が自分達の仲間になるのを好んでいない。場所は船の中である。

(19) Now we ain't that far from shore, so *why don't cha just row right back home, all right ?*

(岸からそう遠くはなれたわけじゃなし、さっさとボートをこいで帰ったらどうなの?)^②

3.4. 慣用性とコンテキスト

Why don't you～?の表現は、ある時は極めて慣用的であるが、場合によっては慣用的とは思われず、Hから because に導かれた表現で反応を受けることもある。本章の最後の考察は、こうした側面をどう説明するかについてである。

3.1節の考察から、Why don't you～?の表現は、「Situation 1 において、新たに Situation 2 を導入することが然るべき理由があって最も適当だとSが判断し、その実現を意図してその内容をSがHに提示する表現」ということであった。これを状況の変化の観点から言い換えると、「Sによって、Situation 1 から Situation 2 への変換の実現が意図されている」ということになる。この変換の関係を図示すると(21)のようになる。

(21) Situation 1 → Situation 2

ところで、この(21)の関係の在り方を考えてみると、少なくとも次のような二つの場合が考えられる。すなわち、

(22) Situation 1 において Situation 2 を導入することが、

- (a) 習慣的・常識的である。従ってHに Situation 2 の内容の予測がつく場合。
- (b) 習慣的・常識的でない。従ってHに Situation 2 の内容の予測がつかない場合。

この区別は程度の問題であるので境界線上では判然としない場合もあるが、それはこの種の区別の性質上やむをえないことである。

まず(22 a)の場合、Situation 2 を導入することの理由が大抵習慣的・常識的なものであり、SもHもその「当然の理由」を意識することはなく、従って結果的に Why don't you～?が理由を問う内容を全く棄ててしまっていて、いわゆる慣用的表現と化してしまう。来客のとき玄関先で Why don't you come in?という場合のように、日常会話で聞かれる表現にはこの種のものが多い。

一方(22 b)の場合は、Hに Situation 2 の予測がつかないために(22 a)のような慣用性の効果は生じてこない。むしろ場合によっては Why don't you～?の文字通りの意味がHの側で重要になってくる。この場合は、Sが Situation 2 を適当と判断したにも拘らず、Hの側に何らかの理由があってこれを不適当と判断した場合であり、大抵はHが Situation 2 を不適当と判断する理由が because などのあとに続くのが普通である。次の例では、Marcie が Situation 1 を守る姿勢をとっているときに発せられているので間接的命令の効果がはっきりでている(?!に注意されたい)。しかし Marcie には Situation 1 を守る理由がある。

(23) Marcie : (To Patty) Sir, if Mr. Thibault doesn't want me to play, maybe I shouldn't...

Thibault : (To Marcie) I'll say you shouldn't ! Baseball is a boy's game ! You're just a stupid girl ! *Why don't you go home ?!*

Marcie : I can't go home, Mr. Thibault, *because* I'd be all alone... My dad is out of town, and my mother is at her office designing a new freeway ! (Peanuts Books)

また次の(24)の例は、水の女神によって水の子にされた Tom が、水の中で漁師のしかけたかごにかかってしまった Lobster と出会った時のやりとりである。Lobster (H) は Tom (S)にどうしたらかごから抜け出せるか尋ねる。

(24) Tom : Where did you get in ?

Lobster : Through that round hole at the top.

Tom : *Then why don't you get out through it ?*

Lobster : I have jumped upward, downward, backward and sideways at least four thousand times, but I can't get out.®

Tom が提示した Situation 2 は、Lobster にとってはすでに試みて失敗した方法であるので適当ではない。Lobster のセリフは *because* を伴ってはいないが、Situation 2 が不適當だと述べているのは明らかである。この場合は、H が Situation 2 を求めているが、S によって提示されたものが H の期待とズレているケースである。

以上本節では、まず *Why don't you ~ ?* の慣用性が、表現形式そのものからくるのではなくて、変換関係 Situation 1 → Situation 2 が習慣的・常識的である場合に限り生ずること、次いで *because* などに導かれた理由の表現が *Why don't you ~ ?* に続くときは、(22b)の場合であり、かつ S によって提示された Situation 2 を H が不適當と判断した場合であること、さらに、この場合も二つのタイプがあって、(イ) H が Situation 2 を求めている姿勢のとき [(24)の場合] と、(ロ) H が Situation 1 を守る姿勢のとき [(23)の場合] があること、などを明らかにした。®

4. おわりに

本章では、間接的行為指示型発言文とそれが用いられるコンテキストとの関係、特にどのようなコンテキストにおいて任意の間接的行為指示型発言文がどのような発話の力をもつかという観点から、'You' utterance と *Why don't you ~ ?* の表現に焦点をしばって考察し

てみた。いずれの表現もごくありふれた日常的な表現であるが、ひとたびそれらの用法のメカニズムを明らかにしようとするとき、さまざまな要素を考慮しなければならない。本章では、これらの表現の用法を操作していると思われる変数的要素を、話者と聴者の言語心理的關係の中から取り出し、これらを組み合わせることによって、特定の発話の力を決定している「コンテキスト」をより客観的な形で記述することができたように思う。

残された問題は恐らく山程ある。Why don't you～? と Why not～? の違いにすら言及するスペースがなかった。すべてこれからの課題である。

[注]

- ① Ordering, commanding, requesting, pleading, begging, praying, entreating, instructing など。
- ② 理由は、話者が話者の sincerity について質問を発することは不自然だからである。
*Do I want you to go there ?
- ③ もっとも Searle はこれらの発話の力の差異の問題については恐らくこの論文の範囲外だと考えていたであろうし、筆者もその点については異論はない。
- ④ なお Generalization 3 に対応し、かつ You を主語とする間接的行為指示型発言文は存在しない。誠実性の条件に関しては I を主語とする stating の表現しかないからである。
- ⑤ pp. 15—16 ; pp. 55—56.
- ⑥ 先に紹介した Smith (1975) の 'You' utterance の説明は、この状況において生ずるコミュニケーション上のマイナスの効果に特に焦点をあてて述べたものと思われる。
- ⑦ 松隈香月氏の提供による。
- ⑧ 西谷陽子氏の提供による。
- ⑨ (20)を参照のこと。なお H が S に全く依存して行動する姿勢の場合は、一般に because など理由を表わす表現は続かない。

第 三 部

アイロニーの構造

—認識と言語の接点—

第一章

アイロニーの言語学的研究

1.1 第一章の序

言語の共時的研究は少なくとも二つの方向を持つように思われる。ひとつは言語の生成のメカニズムの研究であり、もうひとつは言語の使用のメカニズムの研究である。これらはいずれも人間の言語能力の解明という共通の目標をもっている。これまでのところ言語の生成のメカニズムの研究では、変形文法理論が大きな成果をあげてきたが、言語の使用のメカニズムの研究はやっと今、手がつけられたばかりである。ことにメタファー、アイロニー、メトニミーなどこれまで修辞学の領域とされてきた分野は、どの自然言語にも観察される普遍的な言語現象であるにもかかわらず、これまでの言語理論では十分な説明が試みられてこなかった。

すでに序論で議論したように、Katz-Fodorの合成的意味論から導かれる文の意味は、いわゆる文の字句通りの意味であり、それゆえこの理論だけでは発話文タイプとされるアイロニーや間接的要請文の意味を取り扱うことはできない。そこで合成的意味論のほかに、それぞれのタイプの発話文の意味を導く理論が必要になってくる。Griceの会話のルールは、一見そのような理論のように見える。例えば、アイロニー、メタファー、緩叙法、誇張表現などが質の原則の違反であるということはその通りであろう。しかし、この理論からはそれ以上のことは何もわからない。すなわち、これらの発話文の意味がどのようにして導かれるかを詳しく説明する理論は何も示されていないのである。

今、合成的意味論のほかにそれぞれのタイプに固有の発話文の理論が必要であると述べたが、この点も実ははっきりしていない。第二部でみた間接的要請文の場合は、合成的意味論により文の字句通りの意味を算定し、その結果に間接性の理論を適用すればよかった。しかし、例えばアイロニーやメタファーの場合は、どうもそのような取り扱いではうまくいかないようである。メタファーの場合は、合成的意味論のメカニズムを大幅に修正して、選択制限の在り方を再検討しなければならないであろう。またアイロニーの場合は、伝達内容そのものが普通の文のように平面的なものではなくて、話者の認識の在り方がいわば立体的に言語に投影されているように思われる。もしそうだとすると、文および発話文の意味を算定する理論は根本的に再検討を迫られることになりそうである。

本論は、アイロニーの表現を分析することによって言語使用の理論の一部を明らかにし

ようとする試みである。この研究には次の前提がある。すなわち、アイロニーの表現を司るルールは自然言語に普遍的であること、それゆえアイロニーの研究は言語使用に関する言語能力の研究の一部をなす、という前提である。そして本論の具体的な目的は、こうした前提の上にならば、アイロニーの表現の発話と理解のメカニズムを説明する言語心理学的なモデルを提案することである。

これまでに書かれたアイロニーに関する書物や記述は多い。しかし大部分は文学的視点からのものであったり、簡単な修辞学的説明に終わっている。1970年代に入って、特にアメリカで、言語の語用論的な考察が注目され始めると同時に、アイロニーの表現についても部分的な研究がなされ始めた。しかし今のところ、アイロニーの現象を十分に説明できる理論はまだない、と言わざるをえない。最近の主だった論文をあげると、Grice (1975, 1978), 安井 (1978), 大江 (1977), Roy (1978), Searle (1979), Sperber and Wilson (1981), 西山 (1983) 他がある。いずれの研究も重要な指摘を行い、アイロニーの研究に貢献してきた。しかし、それぞれの理論の射程距離にはまだまだ限界があるように思われる。

本論は、伝統的なアイロニー観とこれらの諸研究の成果を踏まえた上で、アイロニーの表現の本質を探ろうとするものである。アイロニーを形成する根本的な要素を外観 (appearance) と実体 (reality) の対立としてとらえる伝統的なアイロニー観だけでは、複雑なアイロニーの表現の一つ一つを説明することはできない。また、変形文法理論の延長の視点だけからアイロニーの言語現象をとらえようとする、余りにも表現形式にとらわれすぎて、認識レベルでの言語心理を無視するか、あるいは外観と実態の対立というアイロニーの根本的要素すら見失ってしまう。

本論では、アイロニーの様々な言語現象を考察した結果、アイロニーの表現とは、対象に対する先行認識 (p) と現実認識 (-p) [ただし -p は p の反対概念] のズレから生ずる非言語的な「偽」の姿 (あるいは認識) を言語的な「偽」の姿で再現したもの、という仮説をたてた。そして、この仮説に基づいて、先行認識を X 軸とし、現実認識を Y 軸とする四極構造の「心理構造図」をたて、これをアイロニーの認識の表現を最もよく説明する言語心理学的なモデルとして提案した。これまでの理論では説明できなかったアイロニカルな表現から、謙遜や世辞に感じられるアイロニーの要素に至るまで細かく検討した結果、今までのところ、本論で提案するモデルはこれまで提案されてきたどの理論よりも説明力が大きいように思われる。

本論の構成は5章から成る。第一章ではこれまでのアイロニーの言語学的研究が、主として Roy (1978) および Sperber and Wilson (1981) に準拠して、批判的に概観される。第二章では、アイロニーの表現に関する予備的・基礎的な考察のあと、アイロニーの定義とアイロニーの構造に関する二種の心理構造モデルが提案される。第三章はこの心理構造理論

のアイロニーの表現への適用である。いくつかの典型的なアイロニーの表現が心理構造図で分析される。さらに第四章では、明確なアイロニーとはいえないが、アイロニカルな要素が感じられる表現や行動形態について考察がなされる。ここでも、本論で提案される心理構造モデルがその説明に極めて効果的であることが証明される。

1.2. アイロニーの言語学的研究

前節で述べた通り、これまでのアイロニーに関する記述は、大部分は文学的視点によるものであるか、または修辞学的説明であった。アイロニーの表現を言語と認識の関係という視点からとらえて、「何故伝えたい内容の逆を言うのか」といった言語心理学的な立場から考察を行うのは、ごく最近までなされてこなかった。この節では、これまでのアイロニーの言語学的な研究のうち三つの代表的な立場を取りあげ、それぞれについて簡単な紹介と批判を加えることによって、アイロニーの研究の概観としたいと思う。三つの代表的な立場とは、[1] 伝統的な定義、[2] Grice (1975, 1978) および Searle (1979) の理論、[3] Sperber and Wilson (1981) の理論、である。以下それぞれについて簡潔な紹介と批判を行いたい。

[1] アイロニーの伝統的な定義

アイロニーの伝統的な定義がどのような点で不十分であるかについて詳細に議論したのは Roy (1978) である。ここでは適宜筆者のコメントを加えながら、Roy の指摘点を紹介する。

Roy (1978) によれば、アイロニーの伝統的な定義は次の二項目にまとめられる。

[A] 意味されていること以外の何かを言うこと。

(Saying something other than what is meant)

[B] 意味されていることの反対を言うこと。

(Saying the opposite of what is meant)

しかし、これらはいずれも不十分な定義である。その理由はいずれもアイロニーでないものを含むし、またアイロニーの一部分を除外するからである。

まず [A] の定義について。この定義に従えば Gordon and Lakoff (1971) で扱われた次のような間接発話表現はアイロニーとなる。

(1) It's cold in here.

(2) Would you mind closing the window ?

(3) Can you get the window ?

(1), (2), (3) はいずれも “Please close the window” という意味の間接的の行為指示型発話文と解することができる。それゆえアイロニーの定義としては更に制限が必要ということになる。他方 [A] の定義は、アイロニーの例を除外する。例えば、

(4) I love people who signal.

この文は普通の状況では字句通りの意味を表わすが、コンテキストによってはアイロニカルな読みが可能である。例えば、斜め前を走っていた車がシグナルをつけずに急に車線を変えて直前に割り込んできたとき運転者が同乗者に述べた文だとすると、これは当然アイロニーの表現であろう。この場合 (4) は字句通りの意味のことを述べているのに、コンテキスト的にはアイロニーである。以上の点から、[A] の定義はアイロニーでないものを含み、またアイロニーの一部分を除外するので、十分な定義とはいえない。

次に [B] の定義、すなわちアイロニーとは意味されていることの反対を言うこと、という定義について。この定義に従えば、たしかに (5), (6) の説明はつく。

(5) Smooth move.

(6) Lovely weather we're having, isn't it ?

(5) は聞き手が不器用なことをしでかしたときの発話、(6) は三日続けて雨が続けているときの発話だとすると、いずれもアイロニーの表現である。しかし [B] の定義は、本がテーブルの上になくときに発せられた (7) の文もアイロニーにしてしまう。

(7) There's a book on the table.

しかしながら、(7) はどう解してもアイロニーの表現にはなりえない。同じようなことはよく知られた Grice (1975) の例文にもいえる。S と H が車のガラスが割れたオンボロの廃棄車の傍を通りかかったとき、S が H にいう。

(8) Oh, look at that car with all its windows intact.

H が何のことかわからず当惑していると、H が “I was being ironic.” と説明するが、H には判然としない。この場合も [B] の定義だとアイロニーになるはずであるが、実際はそうではない。

(7), (8) の例が示唆していることは、文がアイロニーの表現になりうるための条件は、

それが判断的かまたは情緒的内容でなければならないということである。^① *Harry's a real genius.* いうときは、話者は *Harry* のおろかさに対する判断を述べている。これに対して、上の (7) と (8) では伝達されているのは事実であって、判断ではない。

上の例は [B] の定義がアイロニーでないものを含む場合であったが、次は [B] がアイロニーの例を除外する場合である。

(9) *Everyone knows you never make any mistakes.*

この場合は、アイロニーとして述べられている語彙がどれであるのか探しても見つからない、と *Roy* はいう。すなわち、言わんとしている内容と反対の関係にあるのはどの語か同定できないので、[B] の定義が適用できないことになる。反対関係にあるのは *What everyone knows is [NEG S]* とすべきであろう、とする。

ただし、ここで筆者の反論を一言。(9) をこのように分析したことによって、*Roy* が定義の *the opposite of what is meant* を単語の単位としてのみ考えていたことが明らかになる。*the opposite* をもっと広くとって「反対関係にあるもの」とすれば、その成立の単位は単語のレベルでも句のレベルでも、また文のレベルでもよいはずである。その意味において、(9) の例は適切でないと言わざるをえない。

定義 [B] がアイロニーの例を除外してしまう実例をもう一つあげると、バレーボールでローテーションの方法が議論されているとき、一人の選手が *Don't make it too complicated.* と言ったのに対し、もう一人が次のように言う。

(10) *It's like a circle. Think you can handle a circle?*

(10) は質問文のアイロニーの例であるが、これは [B] の定義からは除外されてしまう。*Searle* (1970) の誠実性の条件によれば、適切に発話された質問文においては、話者はその答えを知らず、またその答えを知りたいと思っていることが必要である。ところが (10) の状況では、話者は聴者がサーキュラー・ローテーション方式に従うだけの知力をもっているかどうかを質問しているのではないし、またその答えを期待しているのでもない。

以上の事実から、伝統的な定義はアイロニーの表現を過不足なく定義することができず、不十分である。定義 [A] は会話の含意による要請文を含み、また、字句通りは正しいが文脈的にアイロニーであるような発話文を排除してしまう。定義 [B] はまちがって判断的ではない表現をアイロニーとして含み、また、明確な対立語の存在しないようなアイロニーの表現を排除してしまう。

以上が *Roy* (1978) で議論された伝統的なアイロニーの定義の不十分性に関する要点である。伝統的な定義の不十分性については、筆者はこれ以上議論するつもりはない。ただ理想

的なアイロニーの理論は、上記の様々なアイロニーの側面、とりわけ間接発話文とアイロニーの違いや、疑問文のアイロニーなどの複雑な言語現象を十分に解明できるものでなければならぬ、ということをご確認しておく必要がある。

[2] Grice (1975, 1978) および Searle (1979) の理論

まず Grice (1975) の理論を簡潔に紹介する。XとAとはこれまで親しい間柄であったが、Xが裏切ってAの秘密を取り引きのライバルに売ってしまった。Aも聴者もこのことは知っている状況で、A曰く、

(11) X is a fine friend.

Grice は (11) のアイロニーの解釈を会話の含意の観点から次のように説明している。Aの字句通りの発話内容はAが言いたいことではないのは、聴者にも明らかである。Aの発話がまったく的はずれでない限り、Aは今述べていることは別の命題を伝えることを意図している。この命題は、今述べていることと何らかの関連性のある命題にちがいない。最も関連性があると思われる命題は、今述べている命題の矛盾命題である。

Grice 理論の最も大きな欠陥の一つは、何故最も関連性のある命題が今述べている命題の矛盾命題でなければならないのか、そのメカニズムの説明が何も無いことである。このことは、アイロニーの表現の本質は何も述べていないことを意味することであり、致命的と言わなければならない。また、会話の含意の性質についても曖昧である。間接発話文における会話の含意と、アイロニーにおける「会話の含意」といわれるものは、本質的に異なるように思われる（この点については後述する）。また、最も関連性があるとされる命題が、今述べている命題の反対概念 (the contrary) ではなくて、矛盾概念 (the contradiction) であらねばならない理由も明らかではない。

Grice 流の語用論的アイロニー論に対しては、これまで多くの批判がなされてきた。ここでは以下、Sperber and Wilson (1981) の指摘する Grice 理論の批判点をまとめる形で、要点を整理してみたいと思う。

まず Grice 理論は、アイロニーの発話の意図するところは字句通りの意味の反対であるという点において、伝統的なアイロニーの説明と同じ仮定に立っている。唯一の違いは、意味論的か語用論的かの違いにすぎない。第二に、Grice 理論は何故アイロニーの発話の方がそれに対応する直接的表現よりも好まれるかの説明に失敗している。すなわち、What awful weather. という代わりに、何故 What lovely weather. というのかの説明ができていない。第三に、Grice 理論によれば、アイロニーの表現では字句通りの意味の反対を比喩的に意味するのではなくて、会話的に合意する。すなわち、What lovely weather. は比喩

的な意味をもつのではなくて、*The weather is awful.* を会話的に含意する。Grice 理論においては、この字句通りの意味から会話の含意の意味に至る過程が明確な形で説明されていない。第四に、アイロニーの意味が会話の含意によるものであるとすれば、アイロニーに関する会話の含意がアイロニーとは違う（例えば間接発話文におけるような）標準的な会話の含意の場合と同じタイプのものである、ということを示すのに失敗している。また、もし違うタイプのものであるなら、その差異を示すべきである。

以上の4点の他に Sperber and Wilson (1981) は別の箇所 (p. 309) で、上記の4点に付加的もしくは補足的な形で、次の2点を述べている。まず Grice によると、真実の公理を破ることがアイロニーの解釈の必要・十分条件である。それゆえ発話が明らかに偽であるとき、聴者はそれを字句通りの意味の矛盾概念を含意するものと解釈する。すでに述べたように、この説明の一つの問題点は、標準的な含意と違って、アイロニーの発話による場合は、言われていることに付加的にではなくて、言われていることに取って代わらねばならないことである。すなわち、*X is a fine friend.* がアイロニーの発話の場合、字句通りの意味 (*fine*) につけ加えて別の意味 (例えば *mean*) が加わるというのではなくて、*fine* が *mean* にとって代わらなければならない。このことから、標準的な含意とアイロニーの場合とは根本的な違いがあるといえるが、これらを同じように「会話の含意」で扱ってよいかどうかという問題である。

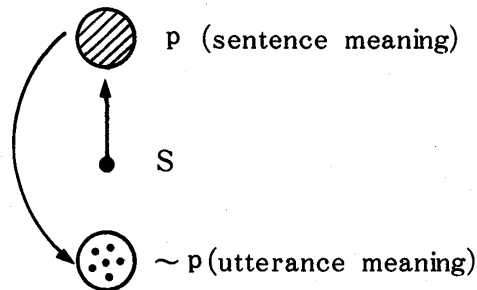
もう一つの点は、真実の公理の違反はアイロニーの解釈の必要条件でもなければ十分条件でもない、という指摘である。というのは、アイロニカルな質問文が存在すること (例えば (10)), アイロニカルな過少表現の存在、さらにまた、偽であるという事実よりか、発話の不適切性あるいは無関係性がアイロニーの効果を生ずる場合などがあるためである。また Grice 自身がすでに指摘しているように [Grice (1978)], 明らかな偽または明らかに無関係なことが、アイロニーのための十分条件ということにもならない。つまり、偽または無関係な表現がすべてアイロニカルに解されるわけではないのである。

以上 Sperber and Wilson (1981) の Grice 批判を中心にまとめてみた。この論文に準拠して書かれた Grice 理論批判に西山 (1983) があるが、本質的な批判点においてはほぼ同じであるため、言及するにとどめる。

次に Searle (1979) のアイロニー論を簡潔に紹介する。結論からいえば、Searle のアイロニー論は Grice 理論とほとんど変わらない。非常に貴重な古い花瓶をうっかり落として割ってしまったとき、皮肉っぽく、*That was a brilliant thing to do.* と言われたとき、聴者はその表現の真意が *That was a stupid thing to do.* であることを推論する。この推論のメカニズムはだいたい次の通りである。この発話をもし字句通りに解釈すると、この情況に明らかにそぐわない。この情況への不適切さが余りに大きいために、聴者はその表現

を状況に合うようなやり方で解釈することを強いられる。そして最も自然な解釈の方法は、その字句通りの表現の反対 (the opposite) を意味するものと解釈することである。

以上の説明は Grice 理論とまったく変わらない。さらに Searle は、アイロニーの根本的原則を説明するには、会話の原則と、スピーチ・アクトを遂行するための一般的原則があれば十分である、と述べている。唯一異なる点は、アイロニーの表現で意図されているのは、Grice では字句通りの意味の矛盾概念 (the contradiction) であったのが、Searle では反対概念 (the opposite) と明記されている点である。後述するように、アイロニーの本質からいえば、「字句通りの意味の反対概念が意図される」とする方が筆者には正しいように思われる。



上の図が示しているのは、アイロニーの解釈は発話文の字句通りの意味 (p) を通して会話の含意により、ちょうどその反対側の極にある意図された意味 ($\sim p$) に到達することを図示したものである。Grice 理論と同様、何故アイロニーの表現においてはその反対の意味にならなければならないのかの納得のいく説明は何ら与えられていない。

[3] Sperber and Wilson (1981) の理論

Sperber and Wilson (1981) は Grice 理論の批判から出発する。そしてこの Grice 理論批判は、すでに上の [2] で紹介した通りである。ここではまず、この論文の中心点を紹介したあと、理論としての有効性について筆者の批判的考察を加えたい。以後 Sperber and Wilson (1981) を、必要に応じて便宜的に SW と略記することがある。

SWによるアイロニーの理論の紹介に入る前に、彼らによって指摘されたレトリカルな言語事象の研究一般に関する研究方法上の重要な考え方について注目しておきたい。一つは、「レトリックの一般理論は、文化間で異なることのない基本的な心理学的かつ解釈的なメカニズムに関係づけられるべきである」という指摘である。^② 筆者の考えでは伝統的にレトリックとして取り扱われてきた領域の言語事象は、決して言語現象の周辺的要素ではなく、表現する側の認識の在り方と直結する極めて重要な現象を含むものと思われる。アイロニーやメタファー、さらにメトニミーなどの言語事象は、恐らく自然言語に普遍的であり、それゆ

え、人間の認識の在り方とある種の規則的なルールでもってつながっているものと考えられる。これまでの言語理論は言語のこうした側面を軽んじてきた傾向にあるが、言語が人間の認識の在り方から切り離せない存在であることを思えば、純粋に言語の形式的側面だけにこだわっていたのでは、いつまでも言語の本質がわからないままに終わってしまうであろう。本論はアイロニーの表現に関する研究であるが、筆者がねらいとするところは Sperber and Wilson の指摘とまさに軌を一にしている：すなわち、本論の目的は、認識と言語の接点としてのアイロニーの表現を支える心理学的かつ解釈的なメカニズムを明らかにすることである。

SWによって指摘されたもう一つの重要な考え方は次の通りである。「多少漠然としてはいるがアイロニカルと思われるタイプの発話表現も多い。特定の発話によって作り出された特定の効果およびそれらの間に感知される類似性こそ、説明されるべき基本的な事柄である。私達はこれらの効果とその相互の関連性を説明できる心理学的なメカニズムを探し続けるべきである。」(p.298) この指摘も筆者の考え方とまったく軌を一にするものである。アイロニーの表現を説明できる理想的な理論は表現に現われた、あるいは表現から感じられるごくわずかのアイロニカルな要素も説明できるものでなければならない。筆者が第二章以下で提示しようとする理論はまさにこのような理論である。具体的な例でいえば、お世辞の表現の中にとときどき感じられるアイロニカルな感じ、あるいは謙遜表現の中にとときどき見え隠れするアイロニカルな要素を過不足なく説明できる理論が、アイロニーの理論としては理想的である。

さて、Sperber and Wilson (1981) のアイロニー論に立ち返ると、SWは Grice 理論と対照させながら、自らの理論を次のように特徴づけている。まず、伝統的な理論と違って比喩的意味という概念には言及しないこと。次いで、伝統的な理論および Grice 理論と違って、置換のメカニズムは意味論的なものも語用論的なものも用いられないこと。第三に、Grice 理論と違って、表現がアイロニカルであるために必要な意味論的条件が存在すると仮定すること。第四に、アイロニーの表現は、命題のみならず、より漠然としたイメージや態度を伝達するという事実が、この枠組で自然な形で記述されること。以上がSW理論の特徴として述べられる点である。

そしてアイロニーの解釈に必須の要素として、アイロニカルな発話を mention の一例として認識することを提案する。Grice の理論で見落とされているのは、アイロニーの表現は mention の一例であるという事実であり、また、mention された命題はこれまでに誰かによって実際に心に抱かれたか、抱かれたかもしれなかった命題である、とする。そしてアイロニーのタイプを次の二つに区別する：すなわち①“echoic” irony と②“standard” irony である。①と②の間には中間的なケースが存在するので、両者は本質的に相異なるものでは

なく、同質のものとして解釈される。その結果、すべてのアイロニーの実例は *echoic mention* であるという方が正確であろうと結論づける。そして、程度やタイプの異なる沢山の *echoic mention* が存在することを指摘する。アイロニーの表現のあるものは直接的 *echoes* であり、またあるものは遅れた *echoes* である。またあるものは実際の発話の中にその源をもち、またあるものは思想や意見の中にその源をもつ。また実際の源をもつものもあれば、想像上のものもある。あるものは特定の人物に遡ることができるが、源が明らかでないものもある。そして *echoic* な性格が直接的に明らかでないときでも *echoic* であることが暗示されている、とする。以上がSWのアイロニー理論の概要である。

論文の後半でSWはこの理論の実例への適用を試みている。実例は、途中でどしゃ降りの雨に見舞われたとき発せられた次のようなアイロニーの表現である。

(12) What lovely weather.

(13) It seems to be raining.

(14) I'm glad we didn't bother to bring an umbrella.

(15) Did you remember to water the flowers ?

SWによれば、(12) はまず誰かが発した言葉 “The weather is going to be lovely.” の *echo* でありうる。あるいは、夏の太陽のもとで楽しむ散歩のことを話しながら、雨の降る冬を過ごした場合が考えられる。この場合は源は遠いが、*echoic* な性質は同じである。あるいはまた、先行する発話がないときでも、何らかの漠然とした *echo* が関係している。例えば、ふつう、人は良い天気を望んだり期待して散歩に出かける。(12) はこうした先行する希望を *echo* しているとも考えられる。すなわち、*echoic mention* の明らかなケースから、さらに漠然としたケースの違いがあるだけである。

ここで筆者のコメントを一言。(12) が先行する発話あるいは先行する希望をあらわしているという説明は恐らく正しいであろう。筆者が第二章以下で提案する理論も実質的にはこの考え方と同じである。しかし、SW理論には、*echoic mention* が一体何を意味するのか、これがアイロニーの表現である理由は何か、という視点からの理論が何もない。「アイロニーの表現は *echoic mention* である」という指摘だけでは、アイロニーのメカニズムを明らかにしたことにはならないのである。SWには、「アイロニーの表現とは、『期待（先行認識）と現実（現実認識）が正反対であった』という（話者の）認識の、言語への投影であり、その投影においては、先行認識がアイロニーの表現に、現実認識が談話の地の文と音調に投影される」という原則が見落とされている。

次に (13) についてはSWは次のように説明する。①雨が降り始めたとき、誰かがこの言葉をはじめて用いたとする。話者は、どしゃ降りのさ中にこの文を繰り返すことによって、

雨が実際に降っているかどうか疑いをはさんだことが、今振り返ってみると、いかにこっけいであったか、ということを示そうとしている。②先行する発話のないときでも、この文は同じ効果をもつ。つまりこの状況では、完全に不適當であるようなためらったふりを示すことによって、まったく滑稽といえるような反応ののろさを聴き手の心に描き出させているからである。

この説明で、先行発話をはっきりしている前半の①の場合は問題ないとして、先行する発話のない後半の②の場合は、echoic mention はどのようにして決定されるのであろうか。SWによると echoic mention の源は多様を極め、まったく明らかでない場合もあるというが、これでは理論としては曖昧であろう。

筆者の考えでは、前半の①の場合は、どしゃ降りに遇う前に、雨が降ってもごく少ないであろうという「予想」（先行認識）が存在していた。その予想の契機となったものは天気予報であったり、誰かの言葉であったり、または自分自身の単なる予想であったかもしれない。しかしその「結果」（現実認識）は、予想とはまったく反対のどしゃ降りであった。この「予想」（先行認識）とそれとは正反対の「結果」（現実認識）との著しいコントラストこそ、アイロニーの本質的な部分であることを見落としてはならないと思う。話者はこの先行認識と現実認識との最大のギャップにより、様々な主観的反応を示す。ばかばかしく感じたり、こっけいに思ったり、あるいは腹立たしく思うこともあろう。アイロニーの表現とは、話者の心に生じたこの一連の心的経験のすべてを、いわば立体的に言語に投影したものと考えることができる。ここで肝心なのは、先行認識（p）と現実認識（-p）との間の認識上の「反対関係的偽」の関係である。狭義のアイロニーの表現としてあらわれるのはこの先行認識の部分であり、現実認識および主観的反応はアイロニーの表現を支える地の文と音調に投影される。この投影により、話者が抱いた非言語的な先行認識と現実認識の間の反対関係的偽の認識は、言語的な偽の構造に移し変えられるのである。

(13)の説明のうち先行発話のない②の場合については、前述したように筆者には不満が残る。①の場合は、予想（先行認識）と結果（現実認識）との間に時間が介在する。それゆえ①の場合は、時間的経過に基づく認識のズレがアイロニーを生じさせたといえよう。これに対し、②の場合はそうした時間的経過が介在せず、いきなり現実認識（すなわち予想もしないどしゃ降り）が生じている。この予想もしないどしゃ降りは、たいていは標準的な降り方からの「望ましくない極度の逸脱」（-p）である。そしてこの望ましくない極度の逸脱の刺激は、即座に「望ましい極度の逸脱」（p）の状態と心理的に対照させられる。それが「ごくわずかの小雨」の状態である。この「望ましい極度の逸脱」の状態は、話者の過去において蓄積された経験から生まれる認識であり、普通は意識されないが、「望ましくない極度の逸脱」の刺激が与えられた瞬間に顕在化される隠された先行認識、ということができる。このよう

に考えると、先行発話のない②の場合にも、①の場合と同様、先行認識が狭義のアイロニーの表現として投影されていることが明らかになる。

次に(14)の場合であるが、便宜上次に繰り返しておく。

(14) I'm glad we didn't bother to bring an umbrella.

SWによると、この場合も(12)の場合と同じで、話者は表現の正反対を信じている。出発前に話者または聴者によって述べられたことばを echo するために用いられたものと考えられる。例えば、Don't bother to take an umbrella. とか、Let's not bother to take an umbrella. などの表現である。こうした忠言をどしゃぶりのさ中で繰り返すことによつて、話者はその無用さを強調している、としている。

筆者の考えでは、話者には天気が良くて傘は不要という予想、または確信(先行認識)があったと思われる。それがそのまま現実になっていたら、真実の表現として(14)が発話されたはずである。ところが現実認識はその逆(すなわち I'm sorry~)であった。(14)はこの著しい認識上のコントラストと、それに対する話者の心的反応を表わした表現である。アイロニー表現の原則に従い、先行認識が狭義のアイロニーの部分(I'm glad~)に、現実認識が(14)を支えるコンテクストの地の文(ここでは明示されていない)と音調に投影されているといえることができる。

最後に(15)のアイロニーの表現である。便宜上この文も次に繰り返しておく。

(15) Did you remember to water the flowers ?

まずSW理論の説明は次の通りである。(15)は言っていることの正反対を意味しているのではないのは明らかである。実際のところ、この文を含めて大部分のアイロニカルな表現ではその正反対が何であるのか言うのは難しい。この点が標準的な意味論的・語用論的アプローチの問題点であった。(15)がおかしいのは、この情況に余りにも明らかに無関係であるからである。話者は答えに関心がない。この情況の中でこの質問文を発したのは、まさしくこの文の関連性のなさ、質問したり答えたりすることの無意味さを目立たせるためであった、とする方が望ましい。もし聴者がいつも花に水をやることに熱心な人であるとすると、聴者のとりつかれた気持ちがばかばかしいという更なる含意をこの文はもつことになる。だから話者が実際に伝達していることは、この文自体ではなく、質問文に対する態度、それを生みだした心の状態への態度である。以上がSW理論の説明である。

どしゃ降りの情況では(15)は余りにも明らかに無関係であるというSW理論の説明は、ある点では正しいが、別の点は適当でない。すなわち、話者の側は答えをすでに知っていること、したがって答えを知りたく思っていないという点では、この質問文は質問文としての

成立条件を欠き、従ってこの情況に無関係といえる。しかし、まったく理由がなくて(15)を発したのではなく、しかるべき理由があって(15)の表現が選ばれた、という点では無関係ではない。SW理論は、何故(15)の文がアイロニーの表現として選ばれたのか、という説明は何も与えていない。それゆえ悪くとれば、単に無意味さを目立たさせるだけならどんな *echoic mention* でもよいのか、という極論までも許しかねない可能性があることになる。

筆者の考えでは、(15)もこれまでの例と同様、先行認識の投影であり、この情況で(15)がアイロニーの表現として選ばれた理由も説明が可能である。すなわち、どしゃ降りの前の先行認識は、晴天を予想または期待するものであった。それゆえ庭の花には水をやる必要があり(p)、いつもの通り水をやると仮定しよう。特に真夏の場合にはこの配慮は欠かせないことである。外出して、予想通りの晴天のままであった場合には、恐らく(15)の「忘れずに水をやったか」という言い方はごく自然な表現として受けとられる発話であろう。それゆえ、(15)は先行認識の一部分の投影、あるいは先行認識に合わせた質問文ということができる。ところが実際は予想の正反対のどしゃ降りであり、結果からいえば、花に水をやる必要はまったくなかった(-p)。この先行認識と現実認識との正反対のコントラストが、話者の心にある種のばかばかしさを生んだと考えられる。「先行認識(p)と現実認識(-p)との間の正反対の非言語的な偽の関係が、アイロニーの構造として話者の心理に意識され、それが投影のルールに従って言語のレベルで再現される」という筆者のアイロニー論が、(15)のような質問文によるアイロニーの表現にも適用できることがこれで明らかになったといえよう。

以上、Sperber and Wilson (1981)で試みられている実例の説明の紹介と、それに対する筆者の批判的コメントを述べてきた。SW理論の要点は、「アイロニーの表現は *echoic mention* である」ということであるが、残念ながらSW理論には、何故アイロニーの表現は *echoic mention* であるのかの説明がない。また *echoic mention* であるならすべてアイロニーの表現であるのか、という本質的な質問も当然問われるべきであろう。しかし、今のところSWは、これらの質問に答えるだけの十分な理論は持ちあわせていないと言わざるを得ない。

[3]の最後として、SWの考察にもう一点だけ批判的コメントをつけ加えておきたい。SWは、伝統的な理論の観点からすると、アイロニーの用法には奇妙な非対称性が存在するとして、次の事実を指摘している(p.312)。すなわち、How stupid…を含意するのにHow clever…でもって、またHow clumsy…を含意するのにHow graceful…でもって表現する方が、その逆、すなわちHow clever…を含意するのにHow stupid…でもって表現するやり方よりも、表現として用いられる傾向が大であるが、これは、伝統的なアイロニー論

の意味逆転のプロセスでは説明できない。しかし、SW理論では一気に説明が可能である。すなわち、行動の基準やルールは文化的に規定されたり、よく知られていたり、またしばしば思い起こされたりする。それゆえ、それらはいつでも *echoic mention* の対象として用いられうる。これに対し、批判的な判断は一定の個人や場合に特定されていて、それゆえ時々 *mention* として用いられるにすぎない。失敗した時のアイロニーとしての *That was a great success.* は世間では成功を希望するのが正常だからよく言われるのに対し、*That was a failure.* はそうではない。

以上のSWの説明は、この限りにおいては事実を述べていて納得がいく。行動の基準やルールが先行認識となることについてはすでに筆者も指摘した通りであり、異論はない。しかしながら、この説明では「アイロニーの構造」の問題と「表現タイプの使用頻度」の問題が混同されるおそれがある。アイロニーの構造またはメカニズムの観点からいえば、*How stupid* 型（あるいは *praise-by-blame* 型）と *How clever* 型（あるいは *blame-by-praise* 型）は、理論的には共に対等の価値が与えられるべき表現形式であり、アイロニーの構造の理想的なモデルは、この両者に対等の表現機能を与えるメカニズムを持たなければならないであろう。（本論の第二章以下で提案される筆者の心理構造モデルでは、この点に関しては満足いく提案がなされている。）他方、表現タイプの使用頻度の観点からいえば、*How stupid* 型は、先行認識が *stupid*（否定的価値）で現実認識が *clever*（肯定的価値）の場合であり、逆に *How clever* 型は、先行認識が *clever*（肯定的価値）で現実認識が *stupid*（否定的価値）の場合である。これには二つのケースが考えられる。まず先行認識と現実認識の間に時間的経過の介在する場合には、*How stupid* 型は外観は *stupid* に見えたが実態は *clever* であった場合で、「偽悪型」の構造をしている。逆に *How clever* 型では外観は *clever* に見えたが、実態は *stupid* であった場合で、「偽善型」の構造をしているということができよう。次いで、先行認識と現実認識の間に時間的経過が介在しない場合は、「経験的に普通のもの、または望ましいものからの極度の逸脱」が現実認識としてまず意識され、同時に、それに対する心理的対極として「最も普通のもの、または、理想的なもの」が過去の経験から作りあげられた先行認識として意識される。それゆえ頻度からいえばこのケースでは、*How clever* 型がより適合していることになる。 *How stupid* 型が生じる場合は、「一見して *stupid* である要素が目立つが、実際は *clever* である」というような場合に限られるように思われる。（なお、*clever* か *stupid* かというような判断がアイロニーとかかわる場合は、外観と実態の問題がからむので、本質的には時間的経過の介在を必要とするように思われる、ということを一言つけ加えておきたい。）

以上、Sperber and Wilson (1981) についてかなりのスペースを割いて議論してきた。その理由は、この理論が筆者の知る限り、最新のアイロニー論であり、かつ比較的注目され

てきたからに他ならない。しかし、これまでの議論から明らかのように、SW理論は本質的なアイロニー論を避けて通っているといわざるをえない。確かに狭義のアイロニーの表現として現われるのは echoic mention の部分が含まれ、その点では取り扱い異なるが筆者の理論と一致する部分がある。しかし何故 echoic mention なのか、echoic mention ならすべてアイロニーなのか、外観と実態の対立というアイロニーの根本概念はどこへ行ったのか、そもそもアイロニーとは何か、といった基本的な問題については、この理論は何も説明していないのである。

この節ではアイロニーの言語学的研究における主な理論を概観することが目的であった。すでに [1] 伝統的な定義, [2] Grice (1975, 1978) および Searle (1979) の理論, [3] Sperber and Wilson (1981) の理論などについて批判的なコメントを加えながら概観してきたが、最後にわが国で発表された二、三の論文に簡単に言及しておきたい。

外国におけるアイロニーの言語学的研究がごく最近始まったばかりであることは前述した通りであるが、わが国でもそれに刺激された形でいくつかの論文が発表された。筆者が知る限りでは、安井 (1978), 大江 (1977), 原口 (1977), 西山 (1983) などが主なものである。これらの論文は、新たなアイロニー理論を提案するというよりも、海外の論考を批判的に考察し、その延長上に立って、それぞれの独自の見解を述べるという形のもものが大部分である。安井 (1978) は、Householder (1971), Cutler (1974), Grice (1975) などで議論されているアイロニーの諸問題をとりあげ、独自の観点から鋭い批判的考察を加えたものである。また西山 (1983) は、独自のデータを示しながら Grice 理論を批判し、Sperber and Wilson (1981) を全面的に支持する論文である。大江 (1977) と原口 (1977) についてはすこし詳しく述べると、大江 (1977) は、Searle の言語行為論に立脚し、皮肉は発話行為一般に「かぶさる」ものとする。そしてある発話行為に皮肉がかぶさるのは、文字通りに遂行されるはずの発話行為のための成立条件 (の一部) が不成立の場合であると推測する。そして、皮肉 (Ir) がかぶさる二次的発話行為を IA_2 、生ずる一次的発話行為を IA_1 とすると、皮肉の発話行為の成立は次のように示される。

$$IA_2 + Ir \rightarrow IA_1$$

ここで $+Ir$ は IA_2 の成立条件 (の一部) の不成立によるのだが、この IA_2 の成立条件の不成立がとりもなおさず IA_1 の成立条件の成立でなければならない、とする。すぐれた指摘である。しかし、「皮肉がかぶさる」とはどういうことかの詳しい議論は残念ながらされていない。原口 (1977) は、皮肉の諸現象について独自の考察を加えたすぐれた論考であり、皮肉についてのいくつかの基本的な問題を提起してくれている。この論考の中で氏は、真の意味で皮肉が成立している場合というのは、話者が皮肉の意図を持っている場合のみ、として

いる。これは定義の問題であるので異論はまったくない。ただ筆者が自分の問題として感じたのは、話者が意図していなくても聴者が皮肉を感じるのは、意図した場合と同じ認識構造を聴者の側が抱いたことを意味し、これは皮肉の構造を探る場合無視できない点である、ということである。つまり皮肉のメカニズムを説明する言語モデルは、意図した場合と同様、皮肉を感じた側の認識構造をも説明できるものでなければならないということである。

以上、本節におけるアイロニーの言語学的研究の概観から、ほぼ次のような点が明らかになると思われる。すなわち、まず、アイロニーの言語学的研究は今始まったばかりであり、十分な理論がまだ提案されていないということ。そして第二に、これまでの研究は専ら、言語の表現形式に密着しすぎたものであり、それゆえアイロニーの本質的な部分が見落とされていると考えられること。さらに第三に、アイロニーの問題はむしろ言語と認識との係わり合いの問題として考えなおすべきではないか、などの点である。本論は、これまでのアイロニー研究に対するこのような展望と認識に基づいたアイロニー理論の一つの試みである。

1.3. アイロニーの理論が取り扱うべき問題点

前節で論じたように、理想的なアイロニーの理論はアイロニカルな言語事象のすべてを説明できるものでなければならない。ここで「アイロニカルな言語事象」とは、アイロニーの要素が少しでも感じとられうる言語事象のすべてをさす。このアイロニカルな言語事象は、当然のことながら、アイロニーの表現が明瞭にそれとわかるものから、表現全体にかすかなアイロニーが感じとれるにすぎないものまで、広範囲の言語事象にわたる。次にあげる言語事象はその広範囲にわたるアイロニカルな言語事象のごく一部分である。

- (16) 心から信頼していて良い友人だと思っていたのに裏切られたとき
He is a fine fellow. (偽善型)
- (17) 日頃はまったく良いところのない友人が、いざというときに助けてくれて、
He is a bad fellow. (偽悪型)
- (18) 天気予報は快晴といていたのに、どしゃぶりの雨になったとき、
What a lovely day. (期待—結果型)
- (19) 強風で髪が乱れたまま部屋に入ってきた女友達に対して、
What a lovely hair style. (逸脱型)
- (20) 道路で右前の車が信号を出さずに自分の車線に入ってきたとき、
I love people who signal. (対照型)
- (21) 荷物を両手に持って前の人に続いてドアに入ろうとしたら、手を貸してもらえず、
ぴしゃりと閉められてしまったとき、

Thanks. (成立条件欠如型—感謝表現)

(22) バレーボールのローテーションの説明をしていたら、聴者の一人が

“Don't make it too complicated.”

と言った。それに対して話者が、

“It's like a circle. Think you can handle a circle?”

(成立条件欠如型—疑問文)

(23) 丁寧すぎる表現を使用することから生ずるアイロニー (使用環境の逸脱)

(24) お世辞の表現にアイロニカルな要素が感じとられる場合

(25) 謙遜の表現にアイロニカルな要素が感じとられる場合

(16) から (22) までの例は明らかにアイロニーの表現とわかる実例である。(23) は表現の意味内容というよりか、表現の使用環境の逸脱によるアイロニーの例である。(24) と (25) はアイロニカルな要素がいわば隠れた形で存在する言語現象である。このようにアイロニカルな要素は広範囲の言語事象に及ぶが、いずれの場合にもアイロニーが感じられる以上、理想的なアイロニーの理論はこれらをすべて説明することができなくてはならないことになる。

なお、本論はアイロニーの言語学的研究であるので、その関心は専ら、「ことばのアイロニー」に向けられている。しかし、非言語学的なアイロニー、例えば「ソクラテスのアイロニー」や「ソフォクレス的アイロニー」も、同じアイロニーである以上、当然のことながら、ことばのアイロニーと共通する構造をもつはずである。例えば、伝統的にアイロニーを形成する根本的な要件とされてきた外観 (appearance) と実体 (reality) との対立という観念は、いずれのアイロニーにも共有される特性であろう。それゆえ理想的なアイロニーの理論は、非言語学的なアイロニーの現象をも (少なくともその本質的な部分は) 説明することができなければならないであろう。

第二章

アイロニーの構造

2.1. 第二章の序

この章は、丁寧さに関する偽善型アイロニーの基礎的考察のあと、アイロニーの構造を最もよく説明するモデルとして、二種の心理構造モデル、すなわち、複合心理構造図と単一心理構造図を提案することを目的とする。第一章で考察したアイロニーの表現の大部分は、ことばの反対概念に係わるアイロニーであった。2.2節では、ことばの反対概念ではなくて、まず依頼文の丁寧さの度合がアイロニーに係わる場合について基礎的な考察がなされる。そしてこの丁寧さに係わるアイロニーの現象は、複合心理構造図によって最も適切に説明されることが2.3節で示される。2.4節はこの複合心理構造図の応用である。シェイクスピアの *The Tragedy of Julius Caesar* に出てくるアントニーの有名なことば、“Brutus is an honourable man” がセリフの展開とともに次第にアイロニカルな意味を帯びてくる様が心理構造図で分析される。2.5節は、ことばの反対関係に係わるアイロニーの分析である。偽善型と偽悪型アイロニーが実は構造的に裏腹の関係であることが、単一心理構造図を導入することによってうまく説明される。2.6節は第二章のまとめである。アイロニーの定義および二種の心理構造モデルが総括的に提案される。

2.2. 丁寧さに係わる偽善型アイロニー

下記の五つの文はいずれも話者が聴者に対して「戸を閉める」という行為を求める文である。1から5に向かうにつれて丁寧さの度合が増加するが、このうち3がこの種の文の標準的な丁寧さとされている。

- | | |
|---|-------------------|
| 1. Close the door. | [C ₁] |
| 2. Will [Can] you close the door? | [C ₂] |
| 3. Would [Could] you close the door? | [C ₃] |
| 4. Would you mind closing the door? | [C ₄] |
| 5. Would you be so kind as to close the door? | [C ₅] |

ところが4、5のような丁寧な文でも、時には無礼なアイロニーを表わすことがあるし、また、1、2のような丁寧さを欠く文でも、4、5に比べて無礼でない場合も日常生活ではこ

く普通である。だとすると、上の順序は丁寧さの度合の絶対的な順序を示すものではないことになる。

結論から先にいうと、上の順序は表現そのものがもつ丁寧さの順序であって、これは、これらの表現が実際の中で使用された結果生じてくる丁寧さの側面と明確に区別されなければならない。すなわち表現そのものと、その表現の使用の両面にわたって *politeness* が異質の形で係わっているのである。

上の各文には、それらが語用論的に最も適切に用いられる環境（例えば話者と聴者の関係など）が、いわば文の意味の一部として、慣用的に指定されているとよい。この指定された環境をそれぞれ [C₁]……[C₅] で表わせば、各文はそれぞれ指定された環境で用いられているとき最も適切に用いられていることになる。このとき3, 4, 5は、表現のもつ丁寧さをそのまま保持して用いられたことになる。

ところが実際の会話では、指定された環境から逸脱して用いられることが少なくない。この場合はすべて *impolite* な文となるが、その効果として、その逸脱の方向によって *rudeness* か *irony* かの色調を帯びてくる（ただし冗談の場合は除く）。まず丁寧さの度合いが低い文がそれよりも丁寧な環境で（例えば1が [C₃] で）用いられた場合は *rude* な表現となり、音調によっては攻撃的な色合を帯びる。逆に、丁寧さの度合いが高い文が低い環境で（例えば5が [C₃] で）用いられた場合は慥無礼やアイロニーの効果が生じる。

ここで注意すべきは、[C₃] の環境で5が用いられたアイロニーの場合、話者は事実上1の内容を意図している点である。つまり3をいうべき環境で5を用いた場合、実際は3を軸に逆方向にほぼ等距離にある内容（5の反対概念）を意味している。このように1が [C₁] で用いられたときの直接的表現の *rudeness* と、5が [C₁] で用いられたときの *irony* とは密接に結びついているわけで、事実、丁寧な形式を用いたアイロニーの表現は、あとで見るように、*rude* な地の文の中で用いられるのが普通である。

このように見てくると、この *irony* や *rudeness* は、一見逸脱の方向の差異から生ずる互いに異質の効果のように見うけられるが、実は互いに無縁のものではなくて、アイロニーの構造を構成する不可欠の二側面であることが明らかになってくる。以下、この点を詳しく述べてみたい。

アイロニーの表現が発せられる場合、一般にその発話に先行してアイロニーの引き金となる非言語的事象が存在しているのが普通である。いま便宜上、アイロニーを述べる側の話者をSとし、アイロニーを直接述べられる側の対象をHとすると、発話に先行するこの非言語的事象というのは、話者Sの心の中に起る心的判断であって、これをことばで表わすと、「話者Sが、対象Hの何らかの側面に関して、その *appearance* (外観) と *reality* (実体) の対照的なズレの存在に気づくこと」ということになるであろう。ただしこのズレは、「外観」

は悪いが「実体」は良いという刑事コロンボの場合のようなものではなくて、その逆の「外観」は良いが「実体」が悪いという類のものでなければならない。

次に実際にアイロニーの表現が発せられる情況についてであるが、これは少なくとも三つの条件が満たされる必要がある。まず①Hの側が専ら appearance に偽りなしとする態度をとり続けているという事実が存在しなければならない。次いで②Sがこの appearance と reality のズレの実態に気づいていること、さらに③Sがこのズレの実態を表現する意図をもっていること。以上の三つの条件が満たされて初めて、アイロニーを発する情況が成立するものと考えられる。

ところでアイロニーを発するということは、偽善型アイロニーの場合、対象Hまたはそれ以外の人に対して、話者が非難または攻撃の意図をもって、上記の①と②を同時に伝達することである。この伝達内容をことばで説明すると、「Hは、外観は格好よく装っているけれど、実体はその逆である。そのことを私は見抜いている。」といった伝達内容になるであろう。ところが、この内容をそのまま伝達したのでは直接的表現になってしまい、アイロニーにはなりえない。アイロニーとは、Hの appearance と reality のズレの有様を言語表現の上にそのまま投影することによって聞き手にそれを悟らせる、という言わば立体的な発話表現なのである。或いはもっと正確に言えば、アイロニーの表現とは「話者Sが見抜いた対象Hの appearance と reality のズレの実態を、ことばのレベルでそのまま再現してみせるもの」に他ならない。しかもこの言語レベルでの再現においては、当然話者の言語心理が作用する。すなわち、話者の側に「外観」と「実体」のズレの印象を最大限に拡大して表わそうとする強調の言語心理が働くために、アイロニーの表現においては最もコントラストの著しい修辞学上の工夫、すなわち反対関係の表現が用いられることになる。しかも話者がズレの実態を見抜いているので、表現（地の文）の基調は、あくまでもHの粗悪な reality に合わせた丁寧度の低い表現であり、また音調もいわゆる皮肉っぽい rude なものとなる。そして、その地の文の中にぽつんとHの appearance（外観）を象徴する極めて上品な、あるいは高い評価の表現（地の文とは反対関係にある表現、ただし音調は rude）が、アイロニーの表現として現われるのである。こうして、当初話者Sが認識したHの appearance と reality のズレの実態は、ことばのレベルにおいては反対関係の両極にまで拡大・強調された姿で再現され、著しいコントラストの効果をなすことになる。

抽象的な議論が続いたので、次にこれらの考察に基づいて、request 文におけるアイロニーの表現の実例を観察してみたい。

A man is in a cinema. A woman wearing a hat sits down in front of him.

(a) "Excuse me, madam; could you take that hat off?"

No answer.

(b) “Excuse me, would you mind taking that hat off?”

No answer.

(c) “Look here, madam, *would you be so kind as to take your hat off*. I can't see a damn thing.”

No answer.

(d) “For God's sake woman. Take that hat off.”

(用例のみ Dennis Keene・松浪有共著, *Problems in English*, pp. 100—101から借用)

見知らぬ人に対して発せられる標準的な request 文は、普通の状況では冒頭にあげた 3 の Would you～? Could you～? が最も普通であるとされている。そこで上の例文の男は映画館におけるこの状況を [C₃] と判断し、(a) の文を発したものと考えられる。ところが予想に反して返事がない。そこで男は即座に丁寧さの度合を一段階上げて、[C₄] に適した表現 (b) を再度発する。ひょっとして男の言葉が聞こえなかったかもしれないし、また聞こえたとしても、相手がきちんとした淑女であるので、丁寧さの度合が低すぎたのかもしれないと判断したためであろう。ここまでは問題はない。ところが今度も返事がない。この時点に至って、男は女の態度に appearance と reality のズレをはっきりと認識する。「外観」は立派な淑女でありながら、「実体」は実に無礼な女、という対照的なズレの実態である。しかも、まだずうずうしく帽子をかぶったまま座っている。ここに至ってアイロニーの表現を発する条件はすべて整い、アイロニーの表現 (c) が登場する。地の文は「無礼な女」にふさわしい丁寧さを欠いた [C₁] のレベルの表現である。本来なら [C₃] の表現が来るべきところに [C₁] のレベルの表現が用いられているので、当然 rudeness の効果を生ずる。音調も当然 rude である。ところが斜体の部分の表現だけが [C₅] の最も丁寧な表現である。すなわち、「無礼な女」という reality にふさわしい [C₁] のレベルの地の文の中に、「淑女」の appearance を象徴する [C₅] の表現 ([C₁] のレベルとは反対関係の表現) が用いられることによって、女の虚飾の実態が言語表現の上に最大のコントラストをもってあざやかに再現されたことになる。

アイロニーの表現は先にも述べた通り、話者の認識の在り方を投影した、いわば立体的な発話である。この立体的なアイロニーの表現が女に通じないとすると、あとは直接的な表現に訴えるしか方法がない。それゆえ、(d) は男のののしりのこもった最も粗暴な直接的表現となっている。

上記の考察から偽善型アイロニーに着目して、アイロニーの構造に関する要点を整理してみると、次のようになる。アイロニーの表現というのは単一の文から成り立っているのでは

なく、厳密には、アイロニーの効果を表わす一連の談話構造から成り立っていると考えられる。便宜上この構造をアイロニーの構造とよべば、これには少なくとも三つの段階が関係してくるようになる。まず第一に、アイロニーの対象となる人物に関して、その appearance と reality の対照的なズレに話者が気づく段階がある。これは先にアイロニーの表現に先行する非言語的事象とよんだものである。第二に、アイロニーが発せられるための条件が満たされる段階がある。これには少なくとも三つの要素が関係してくる。すなわち、(イ)話者SがHのズレの実態に気づいていること、(ロ)対象Hが appearance に偽りなしとする態度をとり続けていること、(ハ)話者に何らかの目的で(イ)を伝達する意図があること。少なくとも以上の三条件が同時に満たされなければ、アイロニーの表現は発話されえない。第三は、対象Hの appearance と reality の対照的なズレの実態を、ことばのレベルで再現し発話する段階である。この再現にあたっては、この対照的なズレに表現上最大限のコントラストをもたせるために、反対関係の表現が用いられる。対象Hの appearance は狭義のアイロニーの表現に投影され、reality の側面は地の文の表現構造および全体の音調に投影される。⁹⁾ なお、実際のアイロニーの表現では第三の段階しか現われないが、第一、第二の段階を無視しては、アイロニーの構造全体の説明は成り立たないであろう。

2.3. アイロニーと反対概念

ここで H. P. Grice のアイロニーの説明に一言触れておきたい (“Logic and Conversation” in *Syntax and Semantics* vol. 3, eds. Cole and Morgan, p. 53)。彼は次のような実例を挙げている。

X, with whom A has been on close terms until now, has betrayed a secret of A's to a business rival. A and his audience both know this. A says ‘X is a fine friend.’

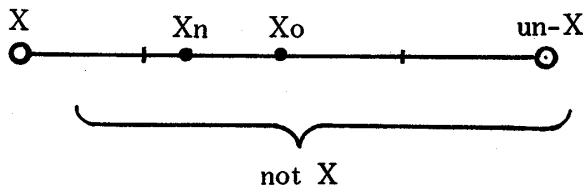
そして斜体のアイロニーの表現が意味する内容について、次のような説明を加えている。

the most obviously related proposition is *the contradictory* of the one he purports to be putting forward. (斜体は筆者)

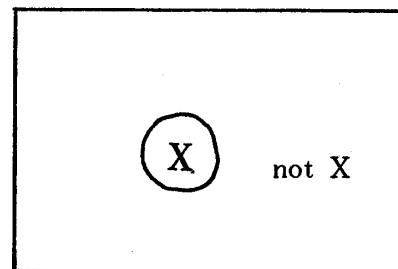
もし上述のアイロニーの表現の本意が、Grice の言うように、その表現の ‘the contradictory’ (矛盾概念) であったなら、Aの本意は ‘X is not a fine friend’ になるはずである。ところが上述のアイロニーの表現でAが主張したいと思われる内容は、どうみても ‘X is a mean friend’ に近い意味であるはずである。だとすればやはり、斜体の部分は ‘the contradictory’ ではなくて、‘the contrary’ (反対概念) でなければならない。矛盾関係 (X と

not X) と反対関係 (X と un-X, 中間項を許す) は, 根本的に違った論理構造を持っているため, はっきりと区別されなければならない。このことは上述の politeness のアイロニーの例からも明らかであろう。「アイロニーの表現とは, 外観と実体との対照的なズレ(すなわち反対関係的なズレ) の認識を言語に投影したものである」という前述の仮説が正しければ, アイロニーの構造は反対関係を抜きにしては考えられないことになるであろう。

ただしここで注意しておかなければならないのは, 「アイロニーの構造は反対関係を抜きにしては考えられない」ということが, 必ずしも「すべてのアイロニーの表現は意図することの反対概念である」ということを意味するものではない, ということである。言うまでもないことだが, 非常に大まかにいって概念のタイプには, 少なくとも [+gradable] なもの (程度あるいは尺度性をもつもの) と [-gradable] なもの (程度や尺度性をもたないもの) とが考えられる。尺度性をもつ概念は, X と un-X の極性表現の間に中間項 X_n を許す「概念のものさし」上の数値として位置づけられるような概念であるのに対し, 尺度性のない概念はそのような尺度の値として位置づけることができず, いわば孤立して存在する概念といってよい。今, これら二つのタイプの概念に否定が関係してくる場合を考えると, 両者には著しい違いが生ずる。



〔A図：尺度性をもつ概念の否定〕



〔B図：尺度性をもたない概念の否定〕

A図は尺度性をもつ概念の否定関係を図示したものである。Xの矛盾概念はものさし上のX点以外のすべてを含むのに対し, Xの反対概念はものさしのもう一方の極点の un-X であり, ものさし上の任意の点 X_n や両極の中間点 X_o は除外されている。すなわち, 尺度性をもつ概念の否定関係においては, 矛盾概念と反対概念の二種の否定が関係してくることになる。これに対し, B図は尺度性をもたない概念の否定関係を図示したものである。Xは孤立して存在する概念であるので, その否定はXではない可能性のすべてである。すなわち尺度性をもたない概念の否定関係においては, 矛盾概念のみが関係し, 反対概念は関係してこないことになる。

ところで上の説明でアイロニーの構造の第一段階は, 対象となる人物に対して, その appearance と reality の対照的なズレに話者が気づく段階であった。この場合, そのappear-

ance と reality の対照的なズレが、もし尺度性をもつ概念で表わされるような性質のものであったら、そのズレは「Xと思っていたのに実は un-X だった」というように、反対概念の対極の表現で表わされることになるであろう。ところが逆に、その対照的なズレが尺度性をもたない概念で表わされるような性質のものであったなら、その対照的なズレはB図におけるように、「Xと思っていたのに実は not X であった」というように、反対概念ではなく矛盾概念の表現で表わされることになるであろう。その結果、前者の場合のアイロニーの表現は言いたいことの反対概念であるのに対し、後者の場合は、言いたいことの矛盾概念ということになる。次の(イ)は後者の実例である。

(イ) So you didn't mean to deceive me.

(できみ、ぼくをだますつもりじゃなかったんだよな。)[大江(1980)]

この場合、話者の意図するところは、(イ)の矛盾概念、

So you meant to deceive me.

(できみ、ぼくをだますつもりだったんだよな。)

ということになるであろう。また同じく大江(1980)の引用例である次の(ロ)も、「ここにあるバラは全部赤である」という内容と、「赤くないバラが少なくともひとつある」という内容とが矛盾関係であるという意味では、(イ)と同種の実例ということができよう。

(ロ) A: All the roses here are red.

B: Oh, yes. This one is very red, isn't it? [大江(1980)]

このように、アイロニーの根本となる認識上の対照的なズレが、B図におけるような尺度性をもたぬ概念で表わされる性質のものである場合は、アイロニーの表現と話者の意図する内容とは互いに矛盾概念の関係にあるということができよう。

ところが、このような事実があるにもかかわらず、何故敢て筆者が「アイロニーの構造は反対関係を抜きにしては考えられない」というのかであるが、その理由は、B図におけるような尺度性をもたない概念の場合ですらも、その矛盾概念の対照性(すなわちXとnot Xとの対照性)の中に、反対概念的な対照性(すなわちXとun-Xの対照性)が割り込んでいると思われる現象が観察できるからである。例えば、上例の(イ)の場合について考えてみる。便宜上ここで(イ)を(イ-a)として繰り返す、それに関連した文を付加しておく。dからe、fに行くに従って、意図性の明示された度合が強くなっている。c、b、aはそのちょうど逆の関係になっている。それゆえ、点線で結ばれたペアはそれぞれ互いに矛盾概念の関係にある。

- (イ)
- a. So you didn't mean to deceive me.
 - b. So you meant not to deceive me.
 - c. So you didn't deceive me. }
 - d. So you deceived me. }
 - e. So you didn't mean not to deceive me.
 - f. So you meant to deceive me.

アイロニーの表現 (a) は次の二つのコンテキストをもつという意味で曖昧である。

- ① So you didn't mean to deceive me, but I was deceived.
- ② So you didn't mean to deceive me, and I wasn't deceived.

(a) の矛盾概念、すなわちアイロニーの表現 (a) の意図された意味である (f) も同様に、次の二つのコンテキストをもつという意味で曖昧である。

- ① So you meant to deceive me, and I was deceived.
- ② So you meant to deceive me, but I wasn't deceived.

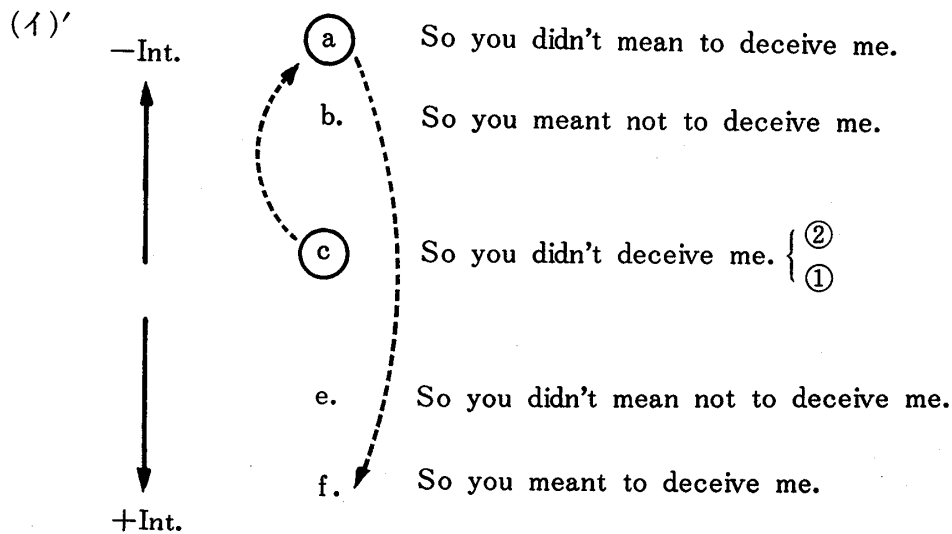
これらのことから、(イ-a) のアイロニーの表現が発せられるコンテキストは二つあることがわかる。すなわち(1)相手にだます意図はあったが実際はだまされなかった場合と、(2)相手にだます意図があつて、かつ、だまされた場合である。次にそれぞれの場合について考えてみる。

まず(1)相手にだます意図はあったが実際は成功しなかった場合は、結果的には You didn't deceive me. ということになる。しかし、この表現は次の例から明らかなように、意図性に関して曖昧でありうる。

- ① You didn't deceive me, but you meant to do so.
- ② You didn't deceive me, and you didn't mean to do so.

つまり、You didn't deceive me. においては「だます」という行為は否定されてはいるが、その意図性は否定されておらず、それゆえ意図性に関しては曖昧なままである。このことから、文字通りに②を意図して You didn't deceive me. といえるし、逆に、①、②の後半部分が互いに矛盾関係になっているので、アイロニカルに①を意図して you didn't deceive me. ということも可能である。そうだとすると、実際は相手はだますことに成功しなかったが、だます意図を十分もっていたということを見抜いてアイロニーを発する場合、相手が

I didn't deceive you. といったのに対し, No, you didn't deceive me. と発するだけでアイロニーの表現になりうることになる。ただし, この場合はだますことの意図性に関してはまったく明示されていないために, 単に含意的な比較的弱いアイロニーということになる。ところが実際にこのコンテキストでアイロニーの表現として選ばれたのは, So you didn't deceive me. ではなくて, (イ-a) の So you didn't mean to deceive me. である。この点についていさ少し詳しく考察してみる。



(イ)' は, (イ)の(d)を取り除いて, 上でみたcの二つの解釈①, ②をつけ加えたものである。c-①から, e, fに行くにつれ意図性の明示された度合いが強くなり, 逆にc-②からb, aに行くにつれその度合いが逆に弱まっている構造を示す。そして①と②, bとe, aとfは互いに矛盾概念の関係にあることは先にみた通りである。実際は相手はだますことに成功しなかったが, だます意図を十分もっていたということを見抜いてアイロニーを発する場合, 上でみたように, cを発することによって十分目的は達せられるであろう。しかし実際は, だますことの意図性が明示されていないcは選ばず, その意図性が最もはっきりしているaがアイロニーの表現として発せられている。そしてその表現によって意図された意味は, aの矛盾概念であるf, 意図性の明示の度合いでいえばaと反対関係にあるfが選ばれている。その結果, 実際はだましはしなかったが, だます意図は十分持っていたという話者の伝達意図がはっきりとアイロニカルに表わされている。

ここで重要なことは, 「だました」か「だまされなかった」という矛盾関係的な問題が, だます「つもりであった」とか, 「つもりはなかった」などの意図性の度合いという反対関係的な問題に移し変えられている事実である。すなわち, 一見矛盾概念の対照性と思われる問題に, 反対概念的な対照性が割り込んできていると思われる現象である。しかしながら, 実際はだましていなかったのだから, 意図性の度合いの問題になるのは当然であるという反論も

あろう。そこで次に、(2)相手にだます意図があり、かつ、だまされた場合について考えてみたい。

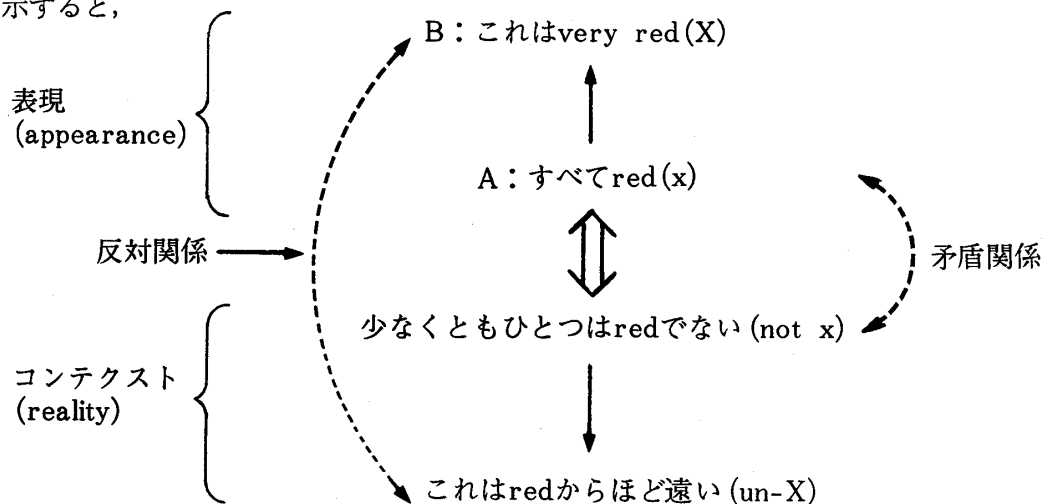
この場合は(イ)の a から f までの実例をそのまま用いると便利である。相手が実際は自分をだましていのに、外観ではうまくつくろっている場合、話者はその外観に合わせて *So you didn't deceive me.* と口裏を合わせる。しかし内心は相手の実体をつかんでいるので、この表現は明らかにアイロニーである。それゆえ、このコンテキストにおいても、アイロニーの表現としては c で十分なはずであるが、実際は c が選ばれず、a の表現が選ばれている。ここでも「だました」か「だまさなかった」かの矛盾概念的な関係が、意図性の度合の問題に移し変えられている事実をみてとることができる。

矛盾概念の対照性（すなわち X と not X との対照性）の中に、反対概念的対照性（すなわち X と un-X との対照性）が割り込んでいると思われる現象は、先に述べた(ロ)の表現にも観察できる。

(ロ) A: All the roses here are red.

B: Oh, yes. This one is very red, isn't it?

すでに述べたように、(ロ)では「ここにあるバラは全部赤である」という内容と、「このバラは赤くない」すなわち「赤くないバラが少なくともひとつ存在する」とは、互いに矛盾関係にある。その意味では *very* を除いた *This one is red, isn't it?* は *This one is not red, is it?* を意味し、A のセリフと矛盾関係にあるアイロニーの表現ということができよう。問題は *very* の存在である。結論からいえば、*very* が付加されることによって *red* に程度の概念が付加され、その結果アイロニーの表現 *This one is very red, isn't it?* は *This one is far from red, isn't it?* を意味することになる。すなわち、ここでも矛盾概念の対照性の中に反対概念的対照性が割り込んでいると思われる現象が観察できるのである。この点を図示すると、



Aが「ここにあるバラはすべて赤だ」(x)といったのに対し、Bは即座に「少なくともひとつは赤でない」(not x)と見抜き、同時にそれは赤からほど遠いという事実(un-X)を確認する。しかし、Aに対する返事としては、Aの表現(外観)に口裏を合わせて、un-X(実体)とは逆の表現Xを発話する。ここで重要なことは、アイロニーの基本となる対照的なズレの認識の段階では、矛盾概念の関係(xとnot xの関係)であったものが、それが言語に投影される段階において、反対概念の関係(Xとun-Xの関係)に移し換えられている事実である。

以上の考察から、アイロニーの表現と矛盾概念および反対概念との関係については、次のような点が明らかになるとと思われる。

- (1) appearance と reality の対照的なズレが尺度性をもつ概念で表わされるような性質のものであれば、その場合のアイロニーの表現は、意図することの反対概念である。
- (2) appearance と reality の対照的なズレが尺度性をもたない概念で表わされるような性質のものであれば、その場合のアイロニーの表現は、意図することの矛盾概念である。
- (3) ただし(2)の場合でも、その対照的なズレに尺度化されうる要素があるか、または付加されるときには、反対関係の対照性に移し換えられ、(1)の原則に従う。
- (4) アイロニーの認識および表現は反対関係を抜きにしては考えられない。それは、アイロニーの基本となる外観と実体との対照的なズレの認識そのものが反対関係的コントラストに依存すること、および、最も著しいコントラストを表わす修辞学上の手法が反対関係の表現であり、それがアイロニカルな認識を投影する際の最も適した言語上の手段であることによる。

2.4. 複合心理構造図による分析

本節は、2.2節で取り扱われた言語の使用環境の逸脱に基づく *impoliteness*、とくに *irony* と *rudeness* の効果を、複合心理構造図により分析することを目的とする。便宜上2.2節で用いられた例文を次に繰り返しておく。

[E ₁]	Close the door.	[C ₁]
[E ₂]	Will [Can] you close the door?	[C ₂]
[E ₃]	Would [Could] you close the door?	[C ₃]
[E ₄]	Would you mind closing the door?	[C ₄]

[E₅] Would you be so kind as to close the door? [C₅]

[E₁]…[E₅] はそれぞれの文を表わし, [C₁]…[C₅] はそれぞれの文が語用論的に最も適切に用いられる環境を表わす。例えば E₁ が C₁ で用いられたとき, E₁ は語用論的に最も適切に用いられている。この関係を

$$\frac{C_1}{E_1} = 1$$

で表わせば, 変形により C₁=E₁ となり, この関係が成り立つとき E₁ は語用論的に最も適切に用いられているといえる。この関係を上記の表現とコンテキストの全部に適用すると, それぞれの文について次の関係が成りたてば, いずれの文も最も適切に用いられていることになる。

$$C_2=E_2, C_3=E_3, C_4=E_4, C_5=E_5$$

E₁…E₅ は表現の politeness の度合によって順序づけられているので, これを X 軸にとり, それに対応する環境 (コンテキスト) を Y 軸にとると, 上の

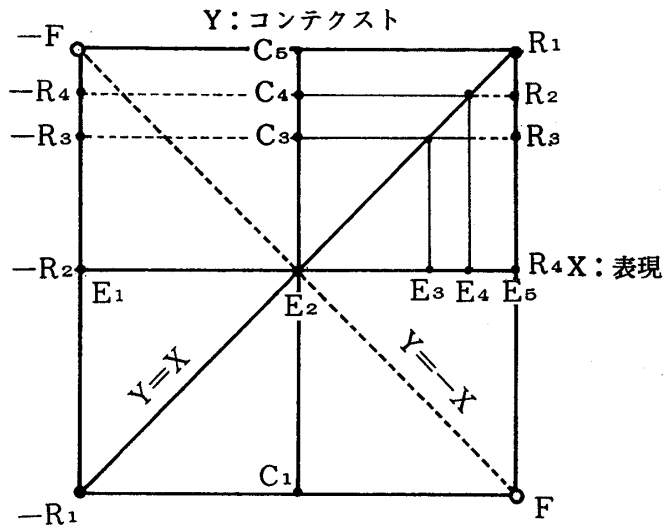
$$\frac{C_n}{E_n} = 1 \quad (n=1, 2, 3, 4, 5) \quad \therefore C_n=E_n$$

の関係は

$$\frac{Y}{X} = 1 \quad \therefore Y=X$$

と書き換えられ, E_n が語用論的に最も適切に用いられる場合は Y=X が成り立つ場合, すなわち [図 1] の Y=X 線上ということが明らかになる。つまり, Y=X 線上の任意の点をとれば, そこは必ず C_m=E_m の関係が守られていて, E_m はつねに最も適切な使用環境で用いられているということになる。逆に Y=X 線上を離れると, 表現が本来の使用コンテキストから逸脱しており, その場合はすべて impolite の効果が生ずることになる。^⑤

さて E₁…E₅ の各文は, 実際の会話では本来の使用環境から意図的に逸脱して用いられることが少なくないことは, すでに 2.2 節で述べた通りである。その場合はすべて impolite な文となるが, その効果としては, その逸脱の方向によって rudeness か irony かの色調を帯びてくる。次にこの関係を [図 1] で説明してみる。最初に丁寧度の最も高い表現 E₅ を固定しておいてコンテキストを動かしてみる。まず E₅ が C₅ で用いられた場合 (R₁ 点) であるが, これは本来の使用環境が満たされているので問題はない。次に E₅ が使用環境のランクを一段落として C₄ で用いられた場合 (R₂ 点), これは E_n=C_n の条件が守られないので Y=X 線上から逸脱し, 少々丁寧すぎる効果がでてくる。E₅ がさらに使用環境をずらし, C₃ で用いられた場合 (R₃ 点) は, 慇懃無礼の効果が生ずる。E₅ がさらにコンテキストをずら



〔図1〕

して、 C_2 で用いられた場合 (R_4 点) は、慇懃無礼を通りこしてアイロニーの色彩を帯びてくる。そして E_5 が C_1 で用いられた場合 (F 点)、 F 点は $Y=X$ から最も遠い点に位置し、完全なアイロニーの効果をあらわす。〔図1〕からも明らかなように、この場合は、表現とコンテキストのズレが最大である。以上、表現 E_5 を固定しておいてコンテキストを移動させることにより、その効果を調べてみた。このテストは、表現が本来の使用環境からどの方向にどの程度ずれることにより、どのような効果を生ずるかのテストであるが、 E_5 を固定して C_5 から C_1 へとずらした場合、その効果は R_1 点から R_2 点、 R_3 点を経て次第に F 点に近づき、最終的に $Y=X$ 線上から一番遠い位置 F 点に到達することをみてきた。つまりアイロニーの表現とは、本来の使用環境から最大のズレを表わす位置で用いられたとき生ずる効果である、ということが図式的に示されたわけである。

今度は丁寧度の最も低い表現 E_1 を固定しておいて、コンテキストを動かしてみる。 E_1 は C_1 で用いられたとき、本来の使用環境であるので問題はない。 C_2 のコンテキストで用いられると ($-R_2$ 点) かなり適切性を欠き、rude な効果を生ずる。コンテキストをさらにずらして $-R_3$ 点、 $-R_4$ 点に移ると、rude な効果ははっきりと現われ、 $-F$ 点に至ってその極点に達する。すなわち、最も丁寧な表現が用いられるべきコンテキストで、最も粗野な表現が用いられた場合である。ところで $-F$ 点は F 点と対照的な位置にあるので、 $Y=X$ 線からの距離は F 点と同様一番遠い位置である。それゆえ、「粗野」の効果も、本来の使用環境から最大のズレを表わす位置で用いられたとき生ずる効果であることが、図式的に示されたことになる。

さて、すでに 2.2 節で、 $E_1 \cdots E_5$ の各文は本来の使用環境から逸脱して用いられた場合すべて impolite な効果を生じ、その効果はその逸脱の方向により rudeness か irony の効

果に分かれると述べた。前述の [図 1] を用いて行った二つのテストは、この逸脱の方向による二つの異なる効果を明示的に説明し、かつ、それらの効果が実は互いにまったく無関係なものではなく、本来の使用環境からの最大のズレという点で一致し、また互いに対照的な関係にあることを明らかにしている。

この F 点および -F 点が $Y=X$ の線上から最も遠い位置にあるということは、別の方法でも証明できる。表現とその使用環境とが一致する場合の条件は

$$\frac{C_n}{E_n} = 1 \quad \text{すなわち} \quad C_n = E_n$$

の場合であった。だとすると、表現と使用環境とが最大のズレを表わすときは、その正反対の関係

$$\frac{C_n}{E_n} = -1 \quad \text{すなわち} \quad C_n = -E_n$$

が守られている場合ということになる。これを Y, X の座標で表現すると、 $Y=-X$ となる。すなわち、 $Y=X$ から最も遠い位置は $Y=-X$ 線上にあるということになる。ただし、 $Y=-X$ 線上でも C_n と E_n とのズレのコントラストが最大の部分、すなわち $C_n = -E_n$ が成り立ち、かつ、 n が 1 と 5 の場合ということになる（ただし $-E_5 = E_1$ とする）。この結果、 $F(E_5, C_1)$ と $-F(E_1, C_5)$ の二点が、 $Y=X$ 線から（すなわち文がその本来の使用環境で用いられる場合から）最も遠い点として位置づけられることになる。

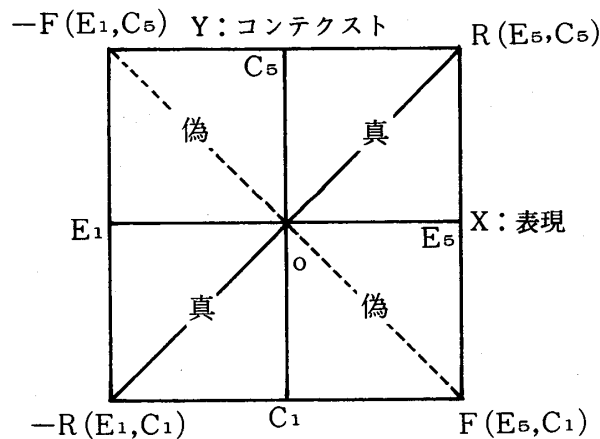
ところで、言語表現とそれが本来用いられるべき使用環境との間が意図的にずらされて、そのズレが最大になったとき、これがそのままアイロニーの基本となる対照的なズレと一致することは言うまでもないことであろう。すなわち F 点と -F 点は、まさにそのアイロニーの基本となる対照的なズレを最も明示的に示す位置であるということになる。F 点の場合は最も rude な表現がふさわしいコンテキストで、何らかの理由で故意に最も丁寧な表現を用いている場合であり、一方、-F 点の場合は、最も丁寧な表現を用いるべきコンテキストでわざと最も rude な表現を用いている場合であると考えられる。いずれの場合も、故意に何らかのふりをしていることが考えられ、F 点と -F 点は外観と実体のズレの認識としてのアイロニーの構造を明示的に反映している、といてよいであろう。

このようにみえてくると、本来の使用環境からの逸脱の方向により、irony か rudeness かの効果が分かれるというのは、[図 1] で説明すると、一方は F 点の極端に丁寧すぎる場合であり、他方は -F 点の極端に粗野な効果が生ずる場合ということになる。しかしながら、こうした表面的な差異の根底には、F 点も -F 点も共に本来の使用環境からの最大のズレを表わす $Y=-X$ 線上の両極端であり、共に広義のアイロニーの構造の要の位置にあるという点で共通した重要な機能と特徴をもっているということが出来る。それゆえ、逸脱の方向に

より irony か rudeness かに分かれるというのは、経験的に丁寧すぎる場合は狭義の irony に通じ、粗野な表現を用いる場合は irony の表現としては確率的に少ない、ということからくる判断であるとするべきである。F点および-F点の本質はやはり、広義のアイロニーの構造をなすと考えるべきであろう。この点については、後述する偽善型、偽悪型アイロニーの分析の際にはっきりして行くことである。

以上この節では、筆者がアイロニーの「複合心理構造図」(すなわち [図1]) と呼ぶものの最も基本的な部分について、2.2節の記述に関連して述べてきた。その中で、表現とコンテキストのズレの最大部分がアイロニーと関係すると述べてきたが、実際のアイロニーの実例の分析は次節に譲りここでは説明が避けられている。以下この節では、上の説明で触れられなかった [図1] の特性について、三つの点をつけ加えておきたい。

第一点は [図1] ([図2] として繰り返す) の各次元の特徴についてである。



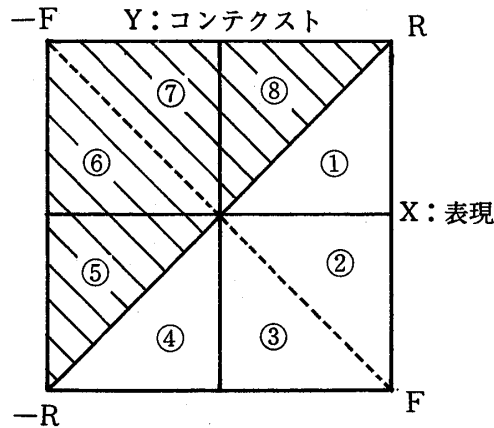
[図2]

表現がその本来の使用環境で用いられている領域は $Y=X$ の線上である。この線上からはずれた表現は本来の使用環境から逸脱したものであり、一般にすべて impolite な効果を表わすのは前述した通りである。しかしながら、例えばR点の次元において、表現またはコンテキストが中心点Oを越え C_1 や E_1 の側に移らない限り、すなわちR点の次元にとどまる限りは、その表現とコンテキストとは偽の関係であるというニュアンスは(少なくとも理論的には)でてこない。その意味において表現がR点と-R点の次元に存在する限りは、例えばアイロニーの効果はまだ生じないといってよい。しかしながら、 E_5 が用いられるコンテキストが C_5 の側からOを越えて C_1 の側に移ったとたん、その表現の価値は $Y=-X$ の領域の支配に入り、表現とコンテキストの関係は偽の関係として把握される。すなわち、少なくとも理論的にはアイロニーの効果が生じはじめる。偽の関係が最も強くなる部分がF点と-F

点であることは、これまでの説明で明らかであろう。これらのことから、 $Y=X$ の支配する次元は真の次元、一方 $Y=-X$ の支配する次元は偽の次元、すなわちアイロニーの次元ということができる。

第二点は、各次元の極点、 R 、 $-R$ 、 F 、 $-F$ の特徴についてである。 R 点と $-R$ 点とは表現が尺度化できる場合のその尺度性の両極に相当する表現が位置する点で、 R 点は一般に positive な概念、 $-R$ 点は negative な概念に対応するものとする。「表現」はこれまでの例のように文であってもよいし、尺度性を表わす形容詞であってもよい。一般に表現がその本来の使用環境で用いられている場合は不自然さはなく、意識にとまらないのが普通である。それゆえ、 $Y=X$ 線上の表現は本来意識されない用法であり、表現が逸脱して用いられてはじめて意識される類のものである。 F 点と $-F$ 点とは、表現がその本来の使用環境から最も遠いコンテキストで用いられた場合の位置を表わしている。表現とその本来の使用環境とのズレが最大の点、あるいはそのズレの偽の関係が最も強い点ということができる。ここで F 点と $-F$ 点との発話上の効果については、共通してアイロニーの構造の要といえるが、その違いは R と $-R$ に位置する表現がどのような類の概念であるかによってその効果が左右される。この点については単一心理構造図の説明の際もう一度触れる機会がある。

第三点は、複合心理構造図の $Y=X$ 以外の各領域がどのような発話効果を表わすかの説明である。



〔図3〕

〔図3〕の斜線部分(⑤~⑧)は常に $Y>X$ が成り立つ領域であるので、politeness でいえば、コンテキストの求める丁寧さより表現の丁寧さの方が低い、すなわち、少し丁寧さが足りなかったり、粗野な効果が生ずる領域である。他方、斜線のない部分(①~④)は、常に $Y<X$ が成り立つ領域であるので、コンテキストの求める丁寧さより表現の丁寧さの方

が高い。すなわち、少し丁寧すぎるか、または慥無礼やアイロニーの効果が生ずる領域である。なお各番号の領域についてその特性を簡潔にまとめてみると、次の表のようになる。

	効 果	次元	
①	Y < X (丁寧すぎる)	真	*に同じ。
②		偽	F点に近づくとつれ
③			アイロニーの効果が強まる。
④		真	* Y = X に近づくとつれ
⑤	Y > X (粗野すぎる)		逸脱の効果がうすれる。
⑥		偽	-F点に近づくとつれ
⑦			粗野の効果が強まる。
⑧		真	*に同じ。

このように [図3] の各領域の効果が明らかになれば、逆にこの図の任意の一点を選んだとき、それがどのような発話の効果をもつものであるかが即座にわかることになる。

2.5. 複合心理構造図の応用 (1)

この節と次節では、前節で導入した複合心理構造図を用いて実際のアイロニーの実例を分析する。まずこの節では、2.2節で扱った丁寧さに係わる偽善型アイロニーの実例を分析し、次節でシェイクスピアの *The Tragedy of Julius Caesar* に出てくるアントニーの有名なことば、“Brutus is an honourable man.” のもつアイロニーの効果について分析する。

まず2.2節で扱った丁寧さに係わる偽善型アイロニーの実例を複合心理構造図を用いて分析するが、その前に2.2節で用いた実例を繰り返しておきたい。

A man is in a cinema. A woman wearing a hat sits down in front of him.

(a) “Excuse me, madam; *could you take that hat off?*” (Ea, [Ca])

No answer.

(b) “Excuse me, *would you mind taking that hat off?*” (Eb, [Cb])

No answer.

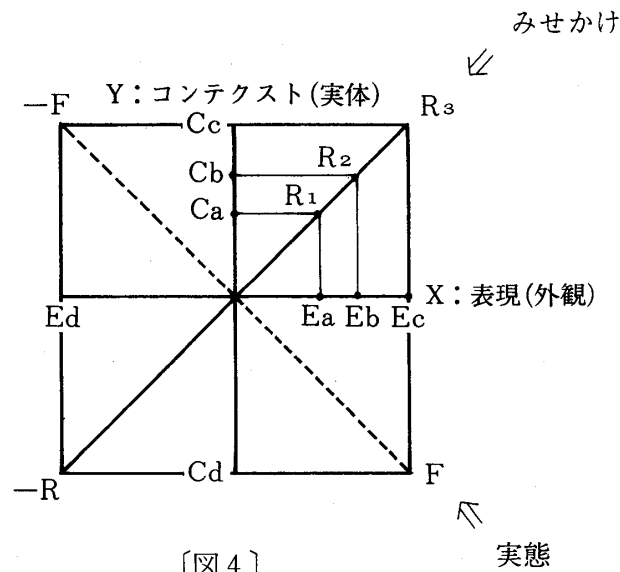
(c) “Look here, madam, *would you be so kind as to take your hat off.* I can’t see a damn thing.” (Ec, [Cc])

No answer.

(d) “For God’s sake woman. *Take that hat off.*” (Ed, [Cd])

(用例のみ Dennis Keene・松浪有共著, *Problems in English*, pp. 100—101から借用)

この実例の説明はすでに2.2節でなされているので、ここでの説明もそれに沿ったものとなる。まず、(a)～(d)の表現を丁寧さの度合を考慮して複合構造図に記入すると、次の[図4]のようになる。ただし(a)～(d)は、丁寧さの度合に着目するために、それぞれのセリフのイタリックの部分だけをさすものとする。そしてそれぞれの表現を E_a , E_b , E_c , E_d で表わし、それぞれの表現に最も適する使用環境を C_a , C_b , C_c , C_d で表わすものとする。X軸は表現を、Y軸はコンテキスト、特にここでは映画館で淑女然として座っている女性をさすことになる。



[図4]

まず、見知らぬ人に対して発せられる標準的な要請文は、普通の場合では *Would you~?* *Could you~?* が最も普通とされている。そこで上の例文の男は映画館におけるこの状況を C_a と判断し、それに最もふさわしい E_a (すなわち (a)) を発したものと考えられる。この際は表現とコンテキストにズレはないから、 R_1 点は $Y=X$ 線上にある。ところが予想に反して返事がない。そこで男は即座に丁寧さの度合を一段階上げて、 C_b に適した表現 E_b (すなわち (b)) を再度発する。ひょっとして男の言葉が聞こえなかったかもしれないし、また聞こえたとしても相手がきちんとした淑女であるので、丁寧さの度合が低すぎたのかもしれないと判断したためであろう。[図4] では R_2 点である。ところが今度も返事がない。この時点に至って、男は女の態度に外観と実体の対照的なズレをはっきりと認識する。「みせかけ」は C_b (強調されて C_c) に相当する立派な淑女でありながら、「実体」は C_d に相当する実に無礼な女、という対照的なズレの実態 (F) である。しかもまだ、ずうずうしく帽子をかぶったまま座っている。ここに至って男の意識の世界では、女の虚飾の姿が外観と実体の最大のコントラストを伴って認識されるに至る。すなわち、淑女 (C_b) だと認識していたのに実は無礼な女 (C_d) であった、と分かった瞬間、男はそのズレを最大のコントラ

トに拡大して認識し、女の姿の偽の実態を Cd (実体) と Ec (外観) のズレとして認識する。すなわち、外見は最も丁寧なことば (Ec) がふさわしい淑女 (Cc) [すなわち R₃点] のようにみせかけてはいるが、その実態は、最も丁寧な表現 (Ec) がふさわしい外観をした無礼な女 (Cd) [すなわち F点]、という認識である。言い換えると、R₁ や R₂ (したがって、それが拡大強調された R₃) は女のみせかけであって、その実態は R とはまったく逆の F である、という認識である。ここに至ってアイロニーの表現を発する条件はすべて整い、アイロニーの表現 Ec (すなわち (c)) が登場する。(c) の地の文は、「無礼な女」に合わせた丁寧さを欠いた Cd のレベルの表現である。音調には当然のことながら、女の偽の姿に対する男の精神的な反応が投影される。ところが (c) の斜体の部分だけが Ec の最も丁寧な表現である。すなわち、「無礼な女」という実体にふさわしい Cd のレベルの地の文の中に、「淑女」の外観を象徴する Cc のレベルの表現 (Ec) が用いられることによって、女の虚飾の実態 F が言語表現の上に最大のコントラストをもって再現されたことになる。

アイロニーの表現は、話者の認識の在り方を言語に投影したいわば立体的発話である。この立体的な発話が女に通じないとすると、あとは直接的な表現に頼るしかない。そこで (d) では Cd に最もふさわしい表現 Ed が用いられている。

以上の分析から重要なことは、複合心理構造図が女に対する男の認識構造を明示的に表わしていること、そしてその認識構造が言語に投影されたのがアイロニーの表現である、という事実である。上記の説明は、Y軸 (コンテクスト) と X軸 (表現) に、Y軸 (reality) と X軸 (appearance) をだぶらせるともってはっきりするかもしれない。男は、最初は女が非常に丁寧な表現 (Eb) がふさわしい淑女である (Cb) という R₂ の認識 (これは女の実体がわかったとたん強調されて R₃ (Ec, Cc) として認識される) であったが、すぐに実はそれが「みせかけ」であって、女の「実態」は、「外観は最も丁寧な表現 (Ec) がふさわしいように見えるが、実体は実に無礼な女 (Cd) である」という F 点の認識に至る。すでに述べたように、女の姿を F 点の存在だとする認識がアイロニーの表現の基本となる認識であり、[図 4] の複合心理構造図はこの F 点を明示的に表わすことに成功している。

次にこの F 点の認識を言語に投影するのであるが、その投影にあたっては、相手の偽の存在の姿が言語で再現されるような方法で投影される。つまり、言語表現そのものが女の実態のコピーとして偽の姿をとることになる。この場合は、女の外観が最も丁寧な表現として投影され、女の実体は地の文に投影される。そして女の偽りの姿から受けた男の内的反応は音調に投影される (この点については書かれた表現では明示的ではないが、確率が高い。もちろん感じたことをそのまま表わさない場合はよくあることである)。すなわちアイロニーの表現とは、対象の偽の姿の認識をそのまま言語化したものであり、それゆえアイロニーの表現そのものが本質的に偽の構造をもつことになる。つまりアイロニーの認識の投影としての

言語の構造も、アイロニーの認識構造と同様、複合心理構造図で明示的に表わされることになる。すなわち、[図4]で説明すると、Ecは狭義のアイロニーの表現として投影された部分であり、Cdは地の文に投影された部分である。そしてこの両者が構成する構造は、F点の構造、すなわち言語的な偽の姿である。

2.6. 複合心理構造図の応用 (2)

この節では、シェイクスピアの *The Tragedy of Julius Cæsar* 第三幕第二場のアントニーによる弔辞の中のセリフ “*Brutus is an honourable man.*” について、そのアイロニーの効果を複合心理構造図を用いて分析する。以下に引用するアントニーのセリフの中には、この表現が4回出てくるが、セリフの進行とともに *honourable* の意味が次第にアイロニーの色合を帯び、最後には *honourable* とはまったく逆の意味であることが決定的になる。この節では、複合心理構造図を用いると、このアイロニカルな色合の段階的な変化がうまく説明できることを示したいと思う。まずアントニーの弔辞のセリフとその和訳を引用しておく。引用中A, B, C, Dはそれぞれ件のセリフ①, ②, ③, ④が発話される直前のコンテキストと解される部分を示す。

A { *Ant.* Friends, Romans, countrymen, lend me your ears;
 I come to bury Cæsar, not to praise him
 The evil that men do lives after them;
 The good is oft interred with their bones;
 So let it be with Cæsar. The noble Brutus
 Hath told you Cæsar was ambitious:
 If it were so, it was a grievous fault,
 And grievously hath Cæsar answer'd it.
 Here, under leave of Brutus and the rest,—

① For *Brutus is an honourable man*;
 So are they all, all honourable men,—
 Come I to speak in Cæsar's funeral.

B { He was my friend, faithful and just to me:
 But Brutus says he was ambitious;

② And *Brutus is an honourable man.*
 He hath brought many captives home to Rome,
 Whose ransoms did the general coffers fill:

- C { Did this in Cæsar seem ambitious?
 When that the poor have cried, Cæsar hath wept:
 Ambition should be made of sterner stuff:
 Yet Brutus says he was ambitious;
 ㉔ And *Brutus is an honourable man.*
- D { You all did see that on the Lupercal
 I thrice presented him a kingly crown,
 Which he did thrice refuse: was this ambition?
 Yet Brutus says he was ambitious;
 ㉕ And, *sure, he is an honourable man.*
 I speak not to disprove what Brutus spoke,
 But here I am to speak what I do know.
 You all did love him once, not without cause:
 What cause withholds you then to mourn for him?
 O judgement! thou art fled to brutish beasts,
 And men have lost their reason. Bear with me;
 My heart is in the coffin there with Cæsar,
 And I must pause till it come back to me.
 (Everyman's Library 版による。イタリックは筆者)

(アントニー 友人諸君，ローマ市民諸君，わが同胞諸君，諸君の耳を拝借したいのです。

私が来ましたのは、シーザーを葬るためであって、賞讃するためではありません。

人間の罪過というものは、死後まで生き残るものでありますが、

善行はしばしばその骨とともに、地中に埋れ去るものであります。

シーザーといえども、この運命を免かれるものではありません。シーザーは、
 野望をいだいていと、そうわが敬愛するブルータス君は申された。

もしそうだとすれば、これは痛ましい欠点だったと申すべきでありましょう、

そして彼は、痛ましくも自らその酬いを受けたのであります。

さて、私は今、ブルータス君、ならびにその他の諸君、

——いや、ブルータス君は人格高潔なる人物であり、

その他の諸君もまた、すべて人格高潔の士であります——

それら諸君の許しをえて、シーザーを悼む言葉を述べにまいったのであります。

シーザーは私の友人、しかも公正信実なる友人でありました。

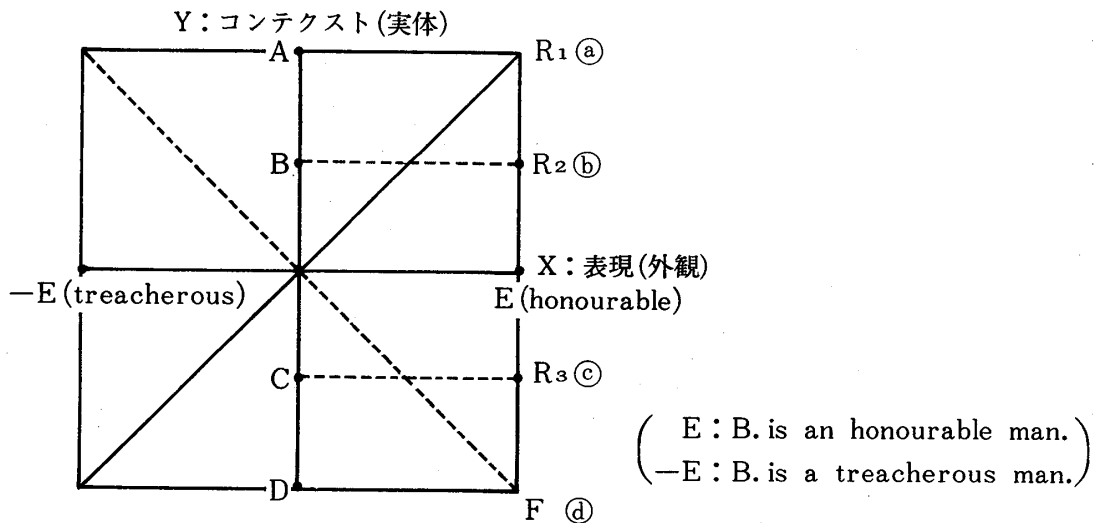
もっともブルータス君は、彼が野望をいただいたと言われます。
 そしてブルータス君は、人格高潔の士であります。
 シーザーは、おびた^とましい^と俘虜^とをローマへ連れて帰りました。
 そしてその身代金^{みのしろきん}は、すべて国庫に収められたのであります。
 このシーザーが野心家と見えたのでありま^しょうか？
 窮民たちが泣き叫んだ時、シーザーもともに泣きました。
 野心というものは、もっと冷酷な心から生れるものであります。
 もっともブルータス君は、彼が野望をいただいたと言われます。
 そしてブルータス君は、人格高潔の士であります。
 諸君もみんなご覧になったでありま^しょう。
 あのリューパーカルの祭に、
 私は三度まで、彼に王冠を捧げたのでありますが、
 彼は三度までそれを拒みました。これが野心でありま^しょうか？
 もっともブルータス君は、彼が野望をいただいたと言われる。
 そしてブルータス君は、人も知る人格高潔の士であります。
 私はブルータス君の言葉を反駁^{はんぱく}する目的で言っているのではありません。
 ただ私の現に知っていることを述べるために、立っているのであります。
 諸君もかつて一度はシーザーを愛した、それはいわれないことではなかった。
 しかるに今、何ゆえに諸君は彼を悼むことを躊躇されるのでありますか？
 ああ、理非分別の心よ！お前はあの卑しい禽獣のもとに逃げ去ってしまって、
 人間は彼らの理性を失ってしまったのであ^らうか。お許し願いたい、
 私の心は、あの棺の中のシーザーの許^{もと}に飛んで行ってしまいました。
 帰ってくるまで、しばらくお待ちを願いたいのであります。)

(『シェイクスピア』世界文学大系12(筑摩書房, 1959)所載, 中野好夫訳による)

この箇所は有名なところなので、いろいろの場所でよくとりあげられている。よく言われることだが、③のセリフは、見ている観客にはアントニーの意図がすでに分かっているので、アイロニカルにひびくということが考えられるが、劇中のローマ人達にはAにおける他の表現とのズレはまったくない。しかし、b, c, dとセリフが進むにつれて次第にアイロニカルな意味が強まり、dに至って‘honourable’は‘treacherous’ (欺瞞的)の意味を帯びてくるとされる。この点について、B以下のコンテクストとこのセリフとの関係を少し調べてみる。Bにおいては、アントニーがシーザーをはじめて肯定的に評価する表現が現われ

る。そしてそれが Brutus is an honourable man. と逆説の接続詞 *But* でつながれているところに、⑤とBのズレのきざしを感じる。Cにおいては、アントニーは、シーザーが野心家でなかったことの具体的な証拠をあげて、シーザーが野心家であったというブルータスの言葉との間にはっきりしたコントラストを示す。この段階で劇中の聴者達はCの全体的内容と③との大きなギャップに気づき、③の 'honourable' の意味がアイロニカルであることを悟る。Dの段階に至ってアントニーは、一方でシーザーが野心家でなかったことの決定的な証拠をあげながら、他方でブルータスによるとシーザーは野心家であり、そのブルータスは人格高潔の士であることを強調する。すなわち④は完全なアイロニーの効果を表わしていることになる。

Brutus is an honourable man. の表現とそのコンテキストとの関係の変化は、複合心理構造図を用いると最もうまく説明できる。'honourable' の対極表現を 'treacherous' とすると、この表現の複合心理構造図は次の [図5] のように形式化できる。



[図5]

すでに観察したように、この引用部分の特徴は、表現そのものはまったく変化せず、それが発話されている言語的コンテキストが変化していくことである。その変化の方向は、一見 'honourable' を承認するかにみえる状況から、次第に Brutus の 'treacherous' な実体を明らかにする方向にむかっている。しかもその実体を明らかにする方法は、シーザーが野心家ではないという証拠を順次明らかにするという間接的方法によってである。

③の表現はそのコンテキストとの間に異和感が何ら感じられない。これは、R₁ 点が Y = X 線上にあり、④の表現の本来の使用環境で用いられている場合である。⑤の表現は、アン

トニーがシーザーをはじめて肯定的に評価した表現と逆説関係になるという点で、表現とコンテキストのズレのきざしを感じるが、決定的なズレではなく、まだ $Y=X$ が支配する次元にとどまっていると考えられる (R_2 点)。ところがCの段階では、シーザーが野心家でなかったというアントニーの証拠と、シーザーが野心家であるとするブルータスの言葉とがはっきりした対立を示し、しかも前者が説得力をもつために、⊙の表現が偽の次元に属していることが明らかになる (R_3 点)。Dの段階に至ると、アントニーはシーザーが野心家でなかったことの決定的な証拠をあげ、ブルータスの言葉が偽りであることを示す。そしてブルータスの「実体」が外観とは逆の 'treacherous' であることを明確にし、同時にブルータスの「外観」を表わす④の表現を対照的に繰り返すことによって、ブルータスの姿がF点の存在であることを言語表現の上でみごとに再現させてみせている。

アイロニーの表現を発する場合は、そのもととなる対象の外観と実体との対照的なズレの認識がまずあり、それが言語に投影されたものが広義のアイロニーの表現である。その投影にあたっては、実体が地の文に、外観が狭義のアイロニカルな表現に投影される。上で扱った Brutus is an honourable man. の例は、アイロニーを発する場合ではなくて、その逆のアイロニーを解釈する場合である。それゆえ、アイロニーの表現から逆にそのアイロニカルな認識構造をいわば逆投影して解釈するという方法がとられることになる。引用文中のDの段階についていえば、はじめの3行がアントニーのブルータスに対する実体認識の投影であり、あとの2行はブルータスに対する外観認識の投影である。これを逆投影すれば、アントニーのブルータスに対するアイロニカルな認識構造が明らかになる。

しかしながらこの投影、逆投影という操作は、[図5]の複合心理構造図を用いれば最も簡潔な形で処理できる。結論から先にいえば、[図5]の複合心理構造図は、アイロニカルな認識構造を表わすと同時に、アイロニーの表現の構造をも表わすという二重の機能を備えている。その理由は、アイロニーの表現とは、アイロニカルな認識の、言語における再現、または言語への投影であり、それゆえアイロニーの表現とアイロニーの認識とは、共通の構造を持つといえるからである。その意味では、[図5]の複合心理構造図は、アイロニーの認識構造とアイロニーの表現構造を同時に表わす二重の機能をもつというよりか、アイロニーの表現とアイロニーの認識構造に共通するアイロニーの基本構造を最もよく表わすモデルといった方がより適切であろう。具体的な例で言うと、上の引用例文中、Dのコンテキストの前半3行(地の文)と後半2行(アイロニーの表現)との間の偽の構造は、[図5]におけるD、E、Fが構成する偽の構造にぴったりと対応し、同時にD、E、Fの偽の構造は、アントニーがブルータスに対してもつ偽の認識とぴったりと対応している。このようにみえてくると、複合心理構造図は、アイロニカルな表現とアイロニーの認識構造との両方に共通する「アイロニーの構造」の理想的なモデルということができる。

2.7. 単一心理構造図による分析

複合心理構造図は、尺度性をもつ複数の表現間の使用のズレのメカニズムを最も的確に表わすことのできるモデルであったが、この節で導入する単一心理構造図は、単一の表現の使用のメカニズムを、最も的確に表わすことのできるモデルである。このようにいうと、二つの構造図が異質のもののように聞こえるが、実は両者は異質のものではなく、基本的構造はまったく同じである。ただ、アイロニーの現象には、丁寧さのアイロニーのように複数の表現に係わる場合と、この節で取り扱うような単一表現のアイロニーの場合があり、それぞれに対して心理構造図の取り扱いのレベルが異なるというだけの違いである。それゆえ、「複合」や「単一」が記されないただの「心理構造図」は、表現の使用の基本的なメカニズムを最も的確に表わすことのできる抽象的なモデルということになる。なお、以下において特に区別する必要のない場合は、それぞれを「複合心理構造図」「単一心理構造図」と呼ばず、単に「心理構造図」と呼ぶことがある。

次の例文は、1.2節ですでに取り扱った Grice の例である。XとAとはこれまで親しい間柄であったが、Xが裏切ってAの秘密を取り引きのライバルに売ってしまった。Aも聴者もこのことは知っている状況で、Aのセリフ：

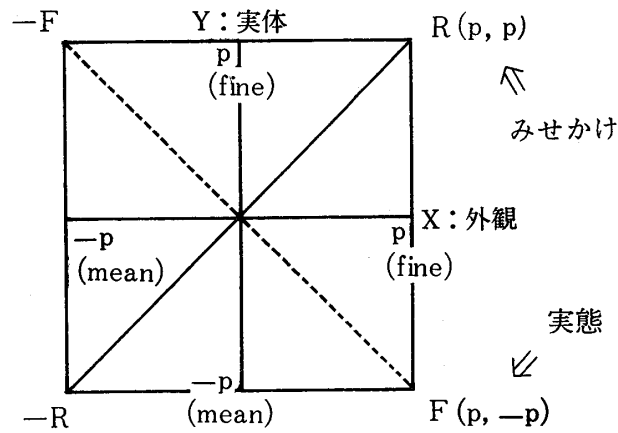
(イ) X is a fine friend.

これはいわゆる *blame-by-praise* 型、あるいは筆者が偽善型と名づけるアイロニーのタイプである。これに対して、次の(ロ)のアイロニーは、(イ)とはちょうど逆のケースである。XはいつもはAに対して良い友達ではなく、何かにつけてAに迷惑をかけてばかりいる悪い友人であった。ところがあるとき、Aが本当に困っているときに、Xは自分のことを犠牲にしてAを助けたとする。こうした状況でのAのセリフ：

(ロ) X is a bad friend.

この場合はいわゆる *praise-by-blame* 型、あるいは筆者が偽悪型と名づけるアイロニーのタイプである。(イ)、(ロ)のそれぞれのアイロニーは、構造的にはすこぶる単純である。しかし、これまでのアイロニー論は、両者の対称的な関係の説明はおろか、それぞれのメカニズムの説明さえ十分とはいえなかった。本説では、(イ)(ロ)のアイロニーのメカニズムと両者の対称的な関係について、単一心理構造図による分析を試みる。

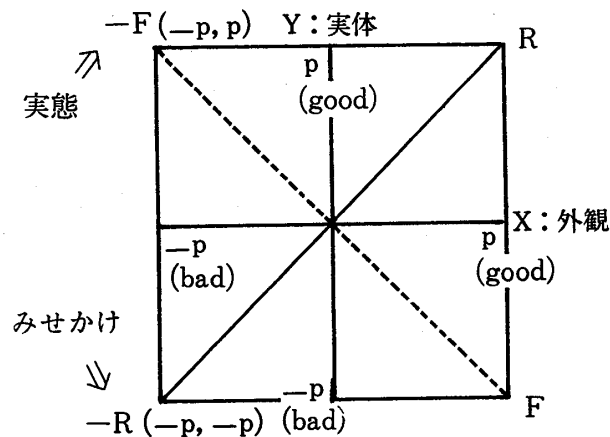
(イ)の場合、友人に対するAの先行認識(外観)は *a fine friend* (p) であったが、裏切ったあとの現実認識(実体)は *a mean friend* (-p) に近い認識である。X軸に先行認識(外観)をとり、Y軸に現実認識(実体)をとると、R点(p, p)が友人とAとが親しい間柄であったときの姿をあらわしている。



〔図6〕

ところが友人はAを裏切ることにより、自らの実体が $-p$ であることを示した。その結果、友人の「実態」は、外観は p でありながら実体は $-p$ であったのだから、偽のF点 ($p, -p$) であり、先のR点 (p, p) は「みせかけ」の姿であったことになる。これは典型的な偽善型アイロニーの例である。アイロニーの表現に投影された先行認識（外観） p と現実認識（実体） $-p$ とが偽の構造のF点を構成し、友人の偽の実態が心理構造図で明示的に表わされている。

(ロ)の場合は、(イ)の場合のちょうど逆である。日頃の経験から友人の先行認識（外観）は *a bad friend* であったが、実際は *a good friend* であった。X軸、Y軸の両極に *good (p)* と



〔図7〕

bad (-p) をとると、-R点 (-p, -p) が友人が日頃認識されていた姿ということになる。ところが友人の実体は a good friend であったので、「bad と思っていたら実は good だった」という偽悪型の偽の構造-F点 (-p, p) が、友人の実態として位置づけられる。

ここで偽善型、偽悪型という表現について一言述べておきたい。どういうタイプのアイロニーが偽善型や偽悪型と呼ばれうるかであるが、結論から先にいえば、人間の評価に係わる表現の場合ということになる。上の例などはこの典型的なタイプである。もっとも上の例でも、「good だろうと『予測』していたら bad の『結果』だった」というように、予測と結果のズレとしてとらえることも可能であることも付け加えておかねばならない。「Xだと思ったらYだった」というアイロニーの基本形式は、次節で「先行認識」と「現実認識」のズレとして定義される。その観点からいうと、偽善型や偽悪型という呼び方は単に便宜上の呼び名である。ただし、このような呼び方をしたときは、「みせかけ」とか「実態」という概念が必ず介入してくることは記しておかねばならない。予測と結果という見方には、こういう概念が介入してこないからである。

複合心理構造図と同様、[図6][図7]の単一心理構造図も、アイロニーの認識構造とアイロニーの表現の両方に共通するモデルとして機能する。そしてF点、または-F点の存在がアイロニーの構造の必要十分条件であることもまた同じである。なお、偽善型（または blame-by-praise 型）および偽悪型（または praise-by-blame 型）と呼ばれるタイプのアイロニーだけが、単一心理構造で取り扱われるということではもちろんない。筆者の考えでは、あらゆるアイロニーのタイプにこの心理構造図による分析が適用できるはずである。アイロニーのタイプについては次節で、また心理構造図によるそれらの分析は第三章で示されるはずである。

2.8. アイロニーの心理構造モデル

この節は第二章の総まとめである。これまでの考察およびそれらに基づく理論的な側面は、次の通りまとめられる。

(1) ある事象に対する現実認識が、たまたま先行認識(p)の正反対(-p)であったような場合、人はこの対照的な認識のズレに対し、さまざまな内的反応を示す。[-pはpの反対概念であることもあるし、矛盾概念でもありうる。2.3節を参照のこと。また先行認識が-pで現実認識がpであることもあるが、ここでは便宜上pを先行認識としておく。] 噴りや笑い、その他喜怒哀楽のさまざまな段階の主観的反応が生ずると考えられる。そして同じ刺激であっても、人により異なった反応を示しうるのはいうまでもない。またこれらの主観的反応は、すぐさまその人の言動に現われるとも限らない。自分の反応をまったく表に現わさない人もおれば、逆

にささいな刺激に対して敏感に反応する人もいる。アイロニーを感じたとき、それに対する主観的反応が音調としてアイロニーの表現に投影されるかどうかは、こうした個人的な側面による場合が多いといえるが、これとはまったく別に、非常に意図的な場合もあることに注意しなければならない。

(2) この先行認識(p)と現実認識(-p)の間の対照的なズレは、大まかにいって二つのタイプに区別できる。①ひとつは先行認識と現実認識の間にはっきりした時間的経過が考慮される場合である。例えば「期待(予想)(p)」と「結果」(-p)の間の対照的なズレや、「外観」(p)と「実体」(-p)の間のズレなどがこのタイプに属する。②もうひとつは明確な時間の経過が意識されないタイプであり、大部分は「日頃の経験からえられた標準的なもの」からの「逸脱」に関係する。例えば、「望ましい逸脱」あるいは「確率的によくある逸脱」(p)と、「望ましくない逸脱」あるいは「確率的に少ない逸脱」(-p)との間の対照的なズレである。この場合は①の場合と違って、先行認識(p)が前もって意識されることはほとんどなく、対象を見て現実認識(p)を意識した瞬間に先行認識(p)が意識されるという関係であり、先行認識と現実認識との間に明確な時間経過の意識は感じられない。しかしこの先行認識(p)の判断は、話者の長年の生活経験から蓄積されてきた認識である点において、現実認識(-p)よりも先行する認識であり、その意味で本質的には①の場合と同じである。このようにみえてくると、①と②はいわばひとつのものの両極端であって、時間的経過の意識性という点では差があるが、その中間領域においては明確な区別はできず、それゆえ①と②を両極として、全体がひとつの連続体であると考えた方がよさそうである。なお、「表現」と「コンテキスト」の間のズレの場合は、一見して先行認識や現実認識とは無関係のように見えるが、実際は「表現」が先行認識(例えば外観)に対応して用いられているという事実があるために、この場合も上述の原則に従っているといえることができる。

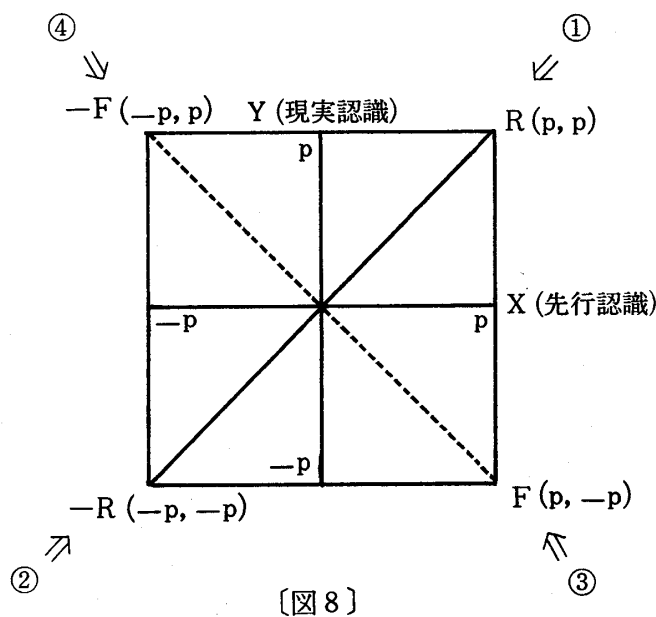
(3) 話者によるこの先行認識(p)と現実認識(-p)の間の対照的なズレの認識が、アイロニーの認識である。アイロニーの認識は、しばしば言語表現に投影される(あるいは言語表現で再現される)。また、たいていの場合、そのズレに対する話者の主観的反応も、音調として言語表現に投影される。そして、話者のアイロニーの認識が言語表現に投影されたものが、アイロニーの表現である。この言語表現への投影(あるいは言語表現での再現)にあたっては、現実認識(-p)は表現の基調をなす地の文に投影されるが、先行認識(p)は狭義のアイロニーの表現として投影される。またアイロニーの認識に対する話者の主観的反応が言語に投影される際は、地の文と狭義のアイロニーの表現の両方に投影され、その主観的反

応の性質に応じた口調で表現される。

(4) 先行認識(p)と現実認識(-p)の対照的なズレとは、「pと思っていたことが実はその正反対の-pであった」ということだから、対象の一連の経過からいうと、現実認識は先行認識に対して反対関係的な『偽』の関係にある。それゆえ、pと-pの対照的なズレの認識(すなわちアイロニーの認識)を言語表現に投影する(あるいは言語表現で再現する)ということは、「話者の認識する対象の非言語的な『偽』の姿を、言語的な『偽』の姿に投影する(『偽』の姿で再現すること)」を意味することになる。こうしたことから、アイロニーの表現とは、「対象に対して話者が認識している非言語的な『偽』の姿を言語的な『偽』の姿で再現したもの」ということができる。

(5) したがって、「アイロニーの認識」と「アイロニーの表現」との違いは、非言語的か言語的かの違いであり、共に「先行認識(p)と現実認識(-p)の間の反対関係的な『偽』の構造」を共有するといえる。そしてこの共有された部分が、アイロニーの認識と表現に共通するアイロニーの本質的な部分である。

(6) 「アイロニーの認識」と「アイロニーの表現」に共通するアイロニーの本質的な構造は、先行認識をX軸とし、現実認識をY軸とする四極構造からなる「心理構造図」において、最も適切に説明されうる。これはアイロニー表現の発話と理解のプロセスを、最も適切に説明する言語心理学的メカニズムとして機能するものである。



(7) ①ある対象に対する先行認識が p であり、そして（ある時間経ったあとの）現実認識も p であったとき、認識間にズレはなく、両認識間の関係は「真」である。この場合はまったく問題ない。[図8]のR点がこれを表わしている。②また先行認識が $-p$ であり、現実認識が $-p$ のときも、一連の経過における認識間にズレはなく、両認識間の関係は「真」であり、問題はまったくない。 $-R$ 点がこれを表わしている。これらの場合は、いずれも認識間にズレがないので、わかりきったことだが、「先行認識と現実認識とが一致している」などと意識することすらないのが普通である。

(8) 問題は、③先行認識が p であったのに現実認識が $-p$ である場合と、その逆の、④先行認識が $-p$ であったのに現実認識が p である場合である。③の場合、先行認識の時点ではR点が本当の姿であると目にうつったのだが、一定時間経って $-p$ こそ本当の姿だと知ったとたんに、今までのR点がいつわりの「みせかけ」の姿であったと認識される。「 p だと思っていたのに実は $-p$ だった」、これを座標でいうと、先行認識が p であったのに現実認識は $-p$ の点、すなわちF点が、一連の経過において新たに認識された対象の「実態」であるということになる。これに対し④の場合は、③の場合のまったく逆で、「 $-p$ だと思っていたのに実は p だった」、すなわち、 $-F$ 点が一連の経過における対象の姿として新たに認識されることになる。

なお、(2)で述べた二つのタイプのうち、時間経過型の①のタイプの例でいうと、 $|p|$ が評価を表わす概念の場合（例えば、 p が「親切的な」、 $-p$ が「不親切的な」の如く）、上の③の「 p と思っていたのに実は $-p$ 」は「偽善型」、④の「 $-p$ と思っていたのに実は p 」は「偽悪型」ということになる。

(9) すでに(6)で述べたように、心理構造図は、「アイロニーの認識」と「アイロニーの表現」に共通するアイロニーの基本的な構造を表わすモデルである。それゆえ、[図8]はアイロニーの認識を表わすと同時に、それが投影された表現の構造をも表わしている。アイロニーが投影される際のルールによれば、先行認識が狭義のアイロニーの表現に、現実認識が地の文に投影されるので、X軸は狭義のアイロニーの表現、Y軸は地の文に対応すると考えてよい。

(10) (5)で述べたように、アイロニーの認識と表現に共通するアイロニーの本質的な部分には、「先行認識(p)と現実認識($-p$)の間の反対関係的な『偽』の構造」である。心理構造図でこの本質的な部分に相当するのは、組み合わせが p と $-p$ の位置、すなわちF点($p, -p$)と $-F$ 点($-p, p$)である。つまりこの二点はアイロニーの本質そのものである。例えば、

事象の認識あるいは表現の理解を心理構造図に移したときに、F点または-F点が係わりあいを持てば、その認識あるいは表現の理解は必ずアイロニカルである。また、たとえ話者にその意図がまったくなくても、聴者の解釈の構造にF点または-F点に関係していたら、聴者はその内容をアイロニカルに理解していることになるであろう。さらにまた、ある人の言葉がときどきアイロニカルであるというときは、その人の表現の中に、ときどきF点または-F点の読みの可能性が感じられるときである。こうしたアイロニー的要素の分析は第四章で詳しくなされる。

(11) アイロニーは、心理構造図の四極構造 (R, -R, F, -F) のうち、偽 (Fか-F) 一極を含む三極とのみ関係し、Fと-Fとが同時に関係をもつことはない。それゆえ構造の可能性としては二つ、すなわち [R, F, -R] の場合と、[-R, -F, R] の場合である。[図8]でいうと、前者が③の場合、後者が④に相当する。

(12) (10)と関連して、話者と聴者間のアイロニーの意図性およびその解釈の組み合わせの可能性について述べておきたい。単純な組み合わせを考えてみると、次の四つのケースが考えられる。

	話者	聴者
(イ)	アイロニー	アイロニー
(ロ)	アイロニー	字句通り
(ハ)	字句通り	アイロニー
(ニ)	字句通り	字句通り

よくアイロニーの成立はどの場合か、という議論がなされるようであるが、言語学的に重要なことは、話者の意図と聴者の理解が一致する、しないということよりも、むしろ表現をアイロニーになさしめている要素は何か、あるいは表現をアイロニーと理解せしめている要素は何か、ということの方であるように思われる。すでに述べた通り、アイロニーの表現を発するときには、必ずそれに対応するアイロニーの認識構造が存在する。なぜならアイロニーの表現は、アイロニーの認識の言語における再現だからである。それゆえ、「アイロニーのつもりで話す」というときは、話者がpと-pとの反対関係的な偽の構造を認識していることを前提とする。逆に「アイロニーを感じず」というときは、聴者が表現とコンテキストの理解からpと-pとの反対関係的な偽の構造を認識することを意味する。(イ)の場合は、話者と聴者とが偽の構造を理解する点で一致した場合であるが、(ロ)の場合は、pと-pの間の偽の構造が聴者の側で認識されなかった場合である。逆に(ハ)の場合は、話者の側に偽の構造がないにもかかわらず、おそらく話者とは違ったコンテキストの理解により、聴者に偽の構造が

認識された場合である。

(13) [図8]の心理構造図は、厳密にいうと、極性表現(pと-p)だけを記入した単一心理構造図であるが、X軸、Y軸上に尺度性のある表現を記入すると、中間表現の表現価値を考慮した分析が可能である。この尺度性のある表現を記入した心理構造図のことを、複合心理構造図と呼ぶ。単一心理構造図も複合心理構造図も本質的に同じものであり、アイロニーのメカニズムを最もよく説明できるモデルである。

(14) アイロニーの表現は一種の間接表現であるとよく言われる。例えば Searle (1979)ではアイロニーの表現は間接発話表現と同列に扱われている。言うまでもなく、間接表現とは、何らかの理由で直接的な言い方を避けた表現で、遠まわしで婉曲的な効果をねらったものである。だから、直接表現よりも内容がおだやかになるのが普通である。それゆえ、もしアイロニーの表現が間接表現であるとすれば、直接表現よりもアイロニーの表現の方がおだやかな響きをもつはずである。ところが実際は、直接的な非難の表現よりもアイロニーの表現の方が、聞き手にとってははるかに痛烈であることがよくある。これはどういうことだろうか。また相手の外観と実体に対照的なズレを感じたとき、なぜ直接表現よりかアイロニーの表現の方がよく選ばれるのだろうか。結論を言えば、アイロニーの表現は決して間接表現ではない、ということである。これまでの説明ですでに述べてきたように、アイロニーの表現とは、相手の表と裏の実態(すなわち偽りの実態)を言葉の次元で演じてみせること(あるいは再現してみせること)である。聞き手にしてみれば、自分の実態を劇中劇で見せつけられるようなものである。それゆえ、アイロニーの表現は直接表現よりもはるかに痛烈でありうるし、またしばしばその効果をねらって用いられることになる。アイロニーの表現は、アイロニーの認識の、言葉の次元でのそのままの再現であるから、譬えていうと、「間接表現」というよりむしろ「直接話法的」であり、「直接表現」の方がむしろ「間接話法的」というべきかもしれない。筆者がアイロニーの表現をしばしば「立体的」と形容するのも、それが認識の在り方のそのままの投影(または再現)であるからに他ならない。

(15) アイロニーをこのようにみてくると、サーカズム(sarcasm)や冗談との違いもはっきりしてくる。サーカズムや冗談は、発話された表現が聴者に与える特定の効果のことである。これに対しアイロニーとは、第一義的には表現の効果ではなくて、先行認識と現実認識との間の反対概念的偽の構造そのものをさす。サーカズムや冗談は、アイロニーの表現を用いて表わすことができるし、その他の言語形式によってもその効果を生ずることができる。またアイロニーでないサーカズムや冗談が存在する。勿論アイロニーがサーカズムの意

味で用いられることはある。しかし、第一義的には上に述べた意味と解すべきである。その意味ではアイロニーの和訳は「皮肉」というよりか「反語」の方が原意に近いであろう。

(16) Grice (1978) は, **To speak ironically, he is a splendid fellow.* のイタリックの部分と言えないわけについて二つの理由を挙げている。まず、アイロニカルであることは、その語源が示すようにふりをすることであり、そしてふりをしていることを認識してもらいたいと欲する一方で、それを偽装であると口にはすることはその効果をそこなうことになるから、という理由である。もう一つの理由は、アイロニカルな口調がアイロニーの表現の慣例的な目印になっているため、というものである。このうち後の理由は、アイロニーの口調が特定の口調として存在するとは思わない、として斥けている。筆者の考えでは、アイロニーの表現は、対象に対する先行認識と現実認識の反対概念的な偽の構造（つまりアイロニーの認識）を言葉の次元で演じてみせること（あるいは再現してみせること）である。つまりアイロニーの表現そのものが、ふつうの文を発話する意味で *speak* されたものではなく、発話そのものが立体的な「上演」なのである。この点にアイロニーの表現の特殊性があるように思われる。

第三章

アイロニーの表現の分析

3.01. 第三章の序

この章の目的は、第二章で論じられたアイロニーの理論を具体的な事例に適用して、その理論の有効性を実証することである。アイロニーのタイプにはさまざまなものがある。外観と実体、期待と結果、理想と現実、肯定的逸脱と否定的逸脱、主張内容と事実内容、などといった先行認識と現実認識の対立が明白なものから、会話文のアイロニー、疑問文のアイロニー、謝礼文のアイロニーなど、その対立が必ずしもはっきりしないもの、その他 *always* がアイロニーの効果を強めている場合や、語義の曖昧性を対立させることによるアイロニーの例など、具体例の多様性は限りがない。それゆえ、この節で取り扱おうる分析対象はかなり限られたものになるが、それでも分析方法の根本的な要点は十分説明できると思う。

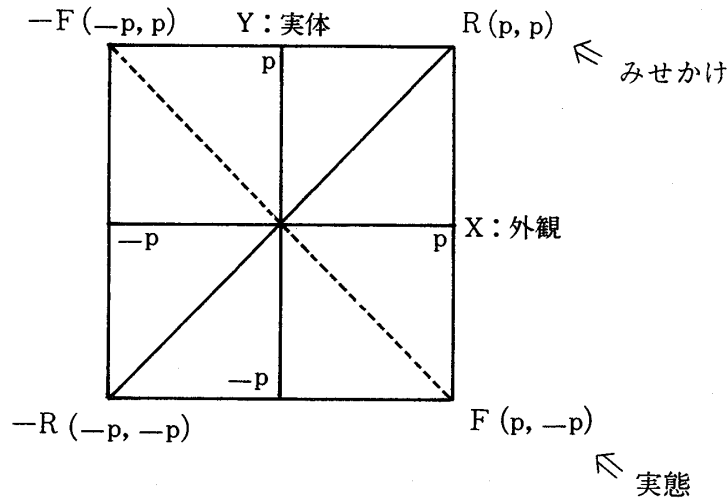
第一章で述べたように、筆者には、アイロニーの表現を司るルールは自然言語に普遍的である、という前提がある。それゆえ、本章の分析対象としては、日本語の例と英語の例が用いられることをお断わりしておかねばならない。

3.02. 外観と実体の対立

- (1) テスト前に遊んでばかりいて勉強していない友人に対して、「今度のテスト、すごく自信ありそうやね」と言った場合。⑥

この場合は、友人の外観と実体の対照的なズレがアイロニーの構造をなしている。普通は、テスト前に遊んでいるということは余裕のあることを示し、自信があることにつながる。それゆえ、友人は、外観としては、「自信があって遊んでいる」(p) ように見える。ところが実体はその逆で、遊んでいるが不勉強で自信がない、つまり「自信がなくて遊んでいる」(-p)。この場合は、後述するように、「遊んでいる」の二義性からくる対立と同質のケースである。X軸に先行認識の外観をとり、Y軸に現実認識の実体をとれば、友人の実態を知らない人にはR点(p, p)が友人の本当の姿にうつるが、友人の実体が-pであることを知っている話者には、友人の実態はF点(p, -p)であることがわかっている。なおここで、「実体」と「実態」を使いわけていることに注意されたい。「実体」は外観に対応し、「実

態」はみせかけに対応して用いられている。



〔図9〕 $\left(\begin{array}{l} p: \text{自信があって遊ぶ} \\ -p: \text{自信がなくて遊ぶ} \end{array} \right)$

なお、(1)の意味はコンテキストによって少し異質の読みが可能である。一つは、友人が $R(p, p)$ のふりをしていて、話者にそれが見破られた場合であり、もう一つは、友人がいつも勉強していないことが自他ともいわば公認されていて、話者もそれを知ったうえで冗談半分に言う場合である。前者の場合は、意図的な「みせかけ」が存在し、雰囲気は陰にこもるが、後者の場合は、「実態」があるだけで意図的な「みせかけ」は存在せず、明るい雰囲気である。むしろ、一見「みせかけ」の解釈が可能である点をひやかしている部分がある。

それから $-F$ 点 $(-p, p)$ の説明を一言つけ加えておくと、 $-F$ 点は、外観は自信がなくて遊んでばかりいる格好をしていて、実際は自信があって遊んでいる場合である。例えば、「私、自信がなくて、今度のテストあきらめているの」(意図のみせかけ)と言ったのに対して、「ほんと、自信がなかったらあきらめるしか仕方ないよな」(相手のみせかけに合わせたアイロニー)などがその例である。

次に(1)の類例を記しておく。

- テスト前に遊びまわっていると、母親に「よく勉強しているから安心やね」と言われたとき。
- 母親がマンガを読んでいる子供に向かって、「その調子だと、今度のテストはさぞかしいい点がとれるでしょうね」と言う。
- いつも遊んでばかりいる娘がテスト前にあせって勉強していると、母親が、「いつもよ

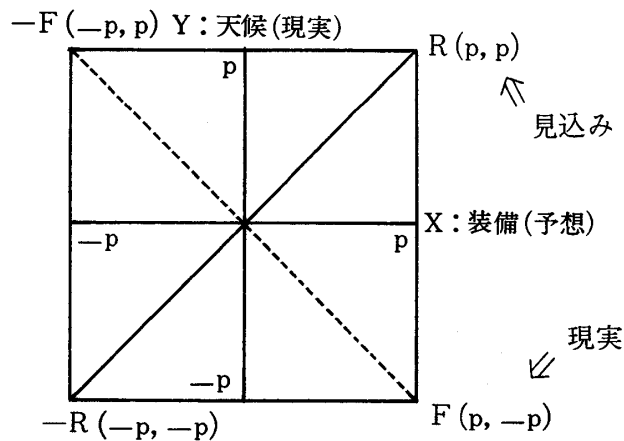
く勉強しているから、そんなにあせることないんじゃないの」という。

3.03. 装備（予想）と天候（現実）の対立

(2) 小春日和のフットボール競技場の入り口で、寒冷な悪天候を予想して装備してきたと思われる人に向かって、次のようにいう。

You're really going to need that blanket! [Roy (1978)]

これは天気予報か何かで寒冷な悪天候を予想した人の装備 (p) と、予想を裏切った絶好のスポーツ日和 (-p) との、極めてアンバランスな対照性に焦点があてられたアイロニーである。このアイロニーの発話もつ表現効果は、著しいアンバランスからくる笑いであろうが、そこには予想外の好天になってよかったという、フットボールファンの高ぶった気持ちの投影が感じられる。



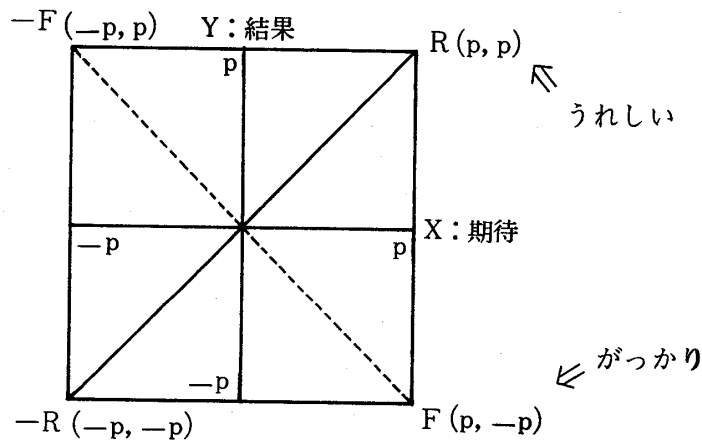
[図10] $\left(\begin{array}{l} p: \text{寒冷な悪天候} \rightarrow \text{装備を要す} \\ -p: \text{絶好のスポーツ日和} \rightarrow \text{装備不要} \end{array} \right)$

天候の予想であるので人間の意図性はまったく関係がなく、それゆえ「みせかけ」は無関係である。事象に関する予想（見込み）と結果（現実）の対立ということになる。先行認識 (p) は、寒冷な悪天候ゆえ装備を要す、というものであったが、現実認識 (-p) はその逆の絶好のスポーツ日和。ただし、この p と -p との対照的なズレは、フットボールファンを喜ばせた。つまり、話者の主観的反応は最高の気分である。アイロニーの認識の投影ルールに従い、先行認識 (p) は (2) のアイロニーの表現にそのまま投影されている。そして話者の高ぶった主観的反応は、音調に投影されている（地の文はここでは明示されていない）。

3.04. 期待と結果の対立

(3) 演習が休講でないかと期待して黒板を見に行くと、期待が見事に裏切られ、「授業があって涙が出るほどうれしい——」という。

休講であってほしいという期待 (p) と、その空しい結果 ($-p$) の対立である。



〔図11〕 $\begin{pmatrix} p: \text{休講} \\ -p: \text{授業} \end{pmatrix}$

期待と結果が一致しておれば、「やったあ！」で「涙が出るほどうれしい！」ということになる。これはR点 (p, p) の状態である。ところが実際の結果は休講ではなく、期待は見事に裏切られ、がっかりした気分である。F点 ($p, -p$) がこの状態を示している。(3) では、先行認識がアイロニーの表現に投影され、がっかりした気分が恐らく音調に投影されていると考えられる。この場合も地の文が明示されていないが、現実認識が投影されるはずである。なお、 $-R$ 点 ($-p, -p$) は授業を期待していて授業があった場合で、R点と同じく「うれしい」結果、そして $-F$ 点 ($-p, p$) は授業を期待していて休講だった場合で、F点と同じく「がっかり」した結果を表わす。(3) の類例は次の通りである。

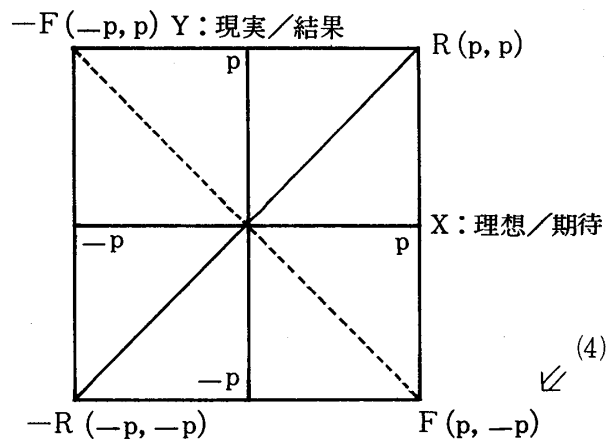
- 友人が自分の期待に反した行為を行ったとき、大声で「ありがと、うれしくて涙が出るわぁ」というとき。
- 映画を観て、それが非常につまらなかったとき、友達に向かって「あの映画最高や」とすすめて言う。
- 「おいしいものを作ってあげるから…」と招待された席で、真黒にこげた目玉焼が登

場, 「うわぁ, うまそうだ, こりゃ!」

3.05. 理想/期待と現実/結果の対立

(4) しょうもない冗談を聞いて, わざとらしく, 「ワー, おもしろー!」という。

冗談というのは楽しくおもしろいのが普通だし, また理想的である (p)。ところが「しょうもない」冗談は, まったくおもしろくない (-p)。ここでは冗談というものの理想, またはそれへの期待と, 実際のありさまの対立が中心になっている。この場合先行認識 (p) は, これまでの私的経験から得られた冗談というもののあるべき状態または基準 (すなわち, おもしろいこと) である。



〔図12〕 $\begin{pmatrix} p: \text{おもしろい} \\ -p: \text{しょうもない} \end{pmatrix}$

冗談というものはおもしろいものだ, という基準が潜在的な先行認識 (p) としてあり, それに現実認識 (結果) が合っておれば R 点 (p, p) の状況である。これに反して, それに現実認識が合っておらなければ F 点 (p, -p) の状況である。(4) は後者のケースである。先行認識がアイロニーの表現としてあらわれ, この状況からうける話者の心理的反応が「わざとらしく」で表現された音調に投影されている。なお -R 点 (-p, -p) は, ある人物がいつもつまらない冗談ばかりいって, おもしろさを期待できないような場合をさす。そしてそのような先入観で見られている人が, たまたまおもしろい冗談を言った場合に, それをほめる意味で, 「またまたしょうもない冗談ばかりいって…」という, これは -F 点 (-p, p) の状態をさすことになるであろう。

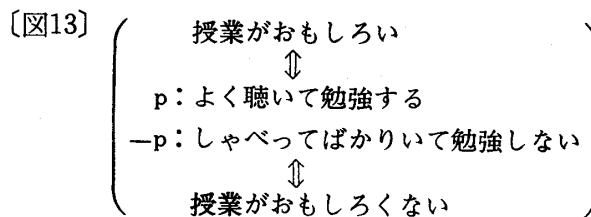
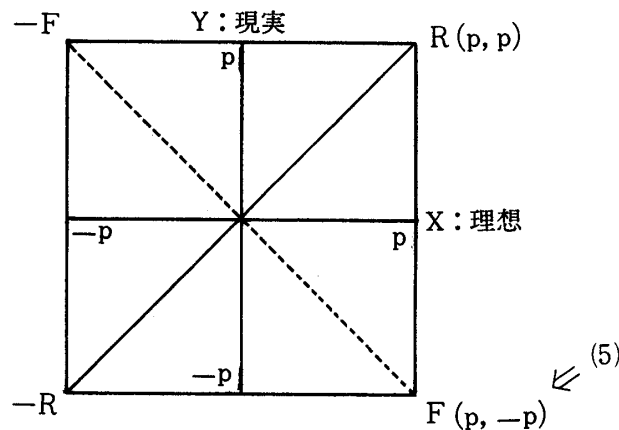
(4) の類例は次の通り。

- 先生がテストを返すとき一言、「皆さん大変よい成績でうれしいです」という。
- A君がものまねをしているが少しも似ていないとき、「おまえ、めっちゃめっちゃうまいぞ」といってしらけた笑いを見せる。
- あまり家の手伝いをしない娘に母親が、「よく手伝ってくれるからお母さん助かるわー」という。
- 久し振りに授業に出てきた友人に対して、「いつもまじめに授業に出るわね」という。

最後の類例の場合、いつも出ているようなふりをすると、外観と実体の対立となり、偽善型のアイロニーである。pretence の意図性がないときは、いつも出るべきという理想（先行認識）とめったに出でこないという現実（現実認識）との対立からくるアイロニーである。

(5) 一般科目の授業が全然おもしろくなくて、その時間中ずっとしゃべっていた。授業の終了のベルを聞いて、「あーよく勉強した」という。

この場合は、「一般科目の授業が全然おもしろくなくて」の部分がアイロニーの構造に余分にかぶさっているので、少し複雑に見えるが、この部分を取り除いて分析してみると簡単である。授業中は本来よく聴いて勉強するものであり、それが理想的である(p)。ところ



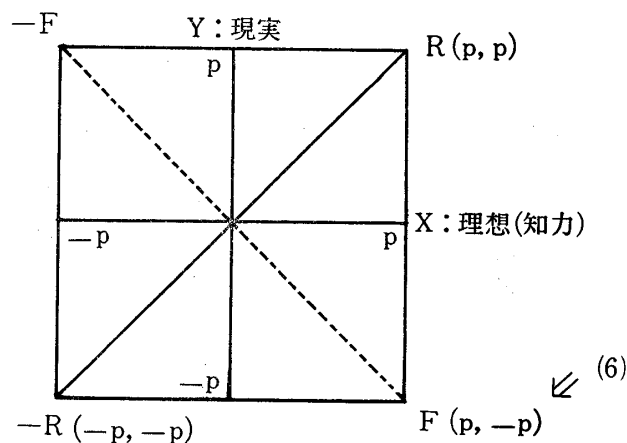
が、しゃべってばかりいて講義を聴かず、まったく勉強しなかった(-p)。理想(あるいはあるべき姿)と現実との対立からくるアイロニーである。先行認識は世間の常識としてのあるべき姿であり、(5)ではこの部分がアイロニーの表現に投影されている。

この状況からみる限り、この偽の構造から生ずる話者の心的反応は、一種の「自戒」の気持ちであろう。ところが、しゃべってばかりで勉強しなかったのには理由がある。「授業が全然おもしろくなかったから、しゃべってばかりいて勉強しなかった」という甘えの入った論理である。すなわち、話者の頭の中では「おもしろくなかった≡しゃべった」という一種の相等関係ができあがっていて、一見自戒の気持ちを述べたように見受けられるアイロニーの表現が、実は「しゃべった」が「授業がおもしろくなかった」(-p)にすりかえられ、「よく聴いて勉強する」が「授業がおもしろい」(p)にとって代わられている。すなわち、自戒のアイロニーの形をしていながら、実は授業を批判するアイロニーとなっているところが、この例のこみいったところである。

3.06. 逸脱型の「理想と現実」の対立

(6) He is a real genius. [Roy (1978)]

この文のアイロニカルな読みは、He is an idiot. という意味である。つまり、「彼」は知的発達の度合においては、普通の人(標準)から否定的な方向に向かって大きく逸脱していることを述べている。ところが逆に、字句通りの意味は、標準から肯定的な方向に向かっ



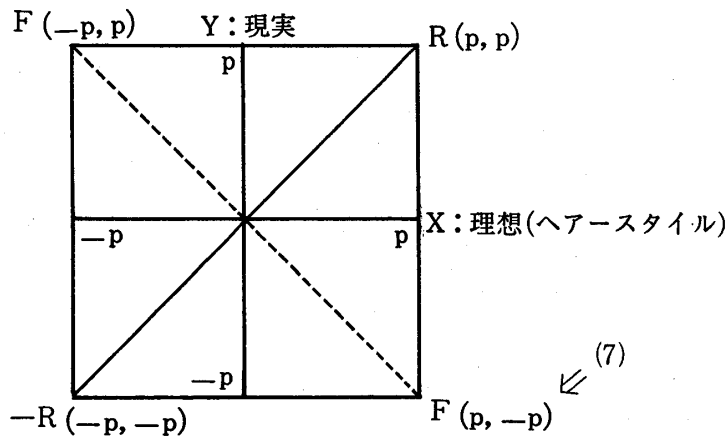
〔図14〕 (p: 肯定的逸脱→a genius)
 (-p: 否定的逸脱→an idiot)

て大きく逸脱した表現になっている。(6)は外観と実体の対立や、期待と結果の対立とは違い、先行認識と現実認識の間に時間的経過の概念が介入してこないで、「彼」の意図性とも無関係である。He is an idiot. という否定的逸脱の現実認識(-p)は、ただちに知的能力の尺度と標準を想起させ、次いでその知的能力の尺度の-pの対極に肯定的逸脱(理想的な状態)(p)を常識の世界の先行認識として意識させて、現実認識に対立させる。つまり、否定的逸脱(-p)(an idiot)を意識したとたんに、その対極に肯定的逸脱(a genius)を理想的状態として想起するわけである。したがってこのタイプは、逸脱型の理想と現実の対立によるアイロニーということになる。

「彼」の現実の姿は-R点(-p, -p)である。標準からの著しい逸脱が対極の理想的な姿R点(p, p)を想起させ、それとの対立が意識させられる。現実(現実認識)はY軸の-p(an idiot)であり、理想(先行認識)はX軸のp(a genius)である。(6)では投影のルールに従って、先行認識がアイロニーの表現に投影されている。

(7) 友達のヘアースタイルが強風で乱れているとき、「今日のヘアースタイル素敵ね」という。

いつもの友達のヘアースタイルは乱れていることがなく、きちんとしていて異和感がない(標準)。ところが今日は、強風で乱れて異常な感じである(否定的逸脱)。否定的逸脱を意識したとたん、連想として肯定的逸脱の対極(素晴らしいヘアースタイル)が意識され、それらが話者の意識の中で対照的なコントラストをなしている。-R点(-p, -p)が否定的逸



〔図15〕 (p: 肯定的逸脱: 素敵なヘアースタイル)
(-p: 否定的逸脱: 乱れたヘアースタイル)

脱としての、実際の乱れたヘアースタイルの姿を表わす。その対極R点(p, p)が肯定的逸脱としての理想的なヘアースタイルを表わしている。(7)では、投影のルールに従い、先行認識である「素敵なヘアースタイル」がアイロニーの表現となっている。

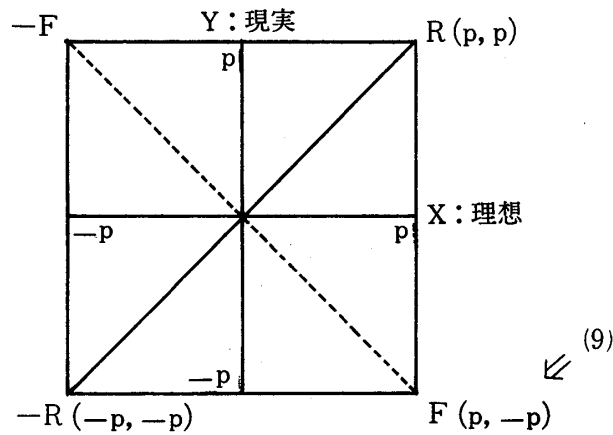
(7)の場合は、友達が意図して乱れたヘアースタイルをしているわけではない。本人の意志とは別に、偶然そうなのであり、場合によっては(7)の表現をいわれるまで、自分のヘアースタイルが乱れていることに気づかない場合もある。しかし、(7)のアイロニーが「笑い」をよぶのは、そうした非意図的情况の中で、敢て話者が遊び心から肯定的逸脱(R点)を意図して、それが失敗して-R点にみえる、という解釈の可能性をいわばもて遊び、虚構の偽善的アイロニーを楽しんでいるというところにあるであろう。(7)のようないわば「遊びのアイロニー」に対して、R点を意図して失敗し、逆に-R点にみえるという、もっと深刻な偽善型アイロニーの例を次にあげておく。

(8) 友達のヘアースタイルが誰が見ても奇抜で、およそ似合わないのに、本人はいい気になっているとき、「今日のヘアースタイル素敵ね」という。

本人(友達)は素晴らしいヘアースタイルで自分によく似合っていると思っているのに(信念/思いこみ:p)、他の人達の目には誰がみてもひどいヘアースタイル(現実:-p)である。つまり、本人はR点(p, p)の姿だと思いこんでいるのに、他の人はその対極の-R点(-p, -p)であるとしか評価せず、そのコントラストが(8)の表現に投影されていることになるであろう。「どうせやるのなら、もっと素敵なヘアースタイルにしたらどう?」ともいうような心理が、このアイロニーの表現のうらに隠されている。

(9) 友達と待ち合わせて、ひどく相手が遅れてやってきたとき、待ちくたびれて、「ずいぶん早かったね」という。

定刻にやってくるのが標準であるので、ひどく遅れた場合は否定的逸脱(-p)である。否定的逸脱の意識は、その対極的連想として肯定的逸脱(p)を意識させる。この場合、肯定的逸脱は「ずいぶん早い」ということであるので、文字通り解釈すると、待ち合わせの定刻よりずいぶん早いわけで、余り論理的でないが、いっそ逸脱するなら肯定的逸脱の方が好ましい、という心理であろう。それゆえ、先行認識は理想的状態の「ずいぶん早い」で、これがアイロニーの表現に投影され、また現実認識から生ずる話者の主観的反応は、音調に投影される。



〔図16〕 $\begin{pmatrix} p: \text{ずいぶん早い} \\ -p: \text{ずいぶん遅い} \end{pmatrix}$

次は逸脱型の類例である。

- 白飯に梅干し1個の弁当を持ってきた友人に対し、「豪華だねえ」という。
- 遅刻してきた生徒に教師が、「ずいぶん早いですね」という。
- 親が帰りの遅い子に、「今日はえらい早いね」という。

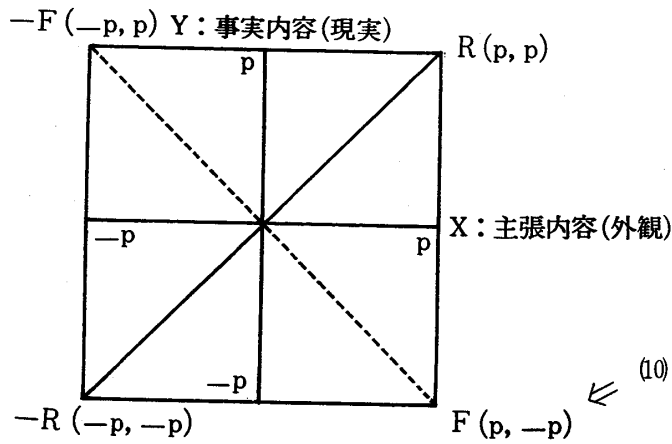
3.07. 主張内容（外観）と事実内容（現実）との対立

(10) 同僚は I had locked the door. と言っているが、実際事務室に戻ってみるとドアに鍵がかかっていなかった。そのときのセリフ：

“Sure, you locked the door.”

[Roy (1978)]

同僚の主張内容 “I had locked the door.” (p) は、同僚が自分を繕うための言い訳ともとれないことがないので、一種の外観ととれるであろう。ところが実際は鍵がかかっていなかった (-p)。この場合、先行認識は同僚の主張内容（外観）である。(10)では、投影のルールに従い、主張内容がそのままアイロニーの表現になっている。R点 (p, p) が同僚の主張する状況であるが、実際的事実内容は -p (not locked) であるので、(10)のセリフはF点 (p, -p) の状況を表わしている。



〔図17〕 $\left(\begin{array}{l} p : \text{locked} \\ -p : \text{not locked} \end{array} \right)$

3.08. 対照型の「表現とコンテキスト」の対立

(11) 斜め前を走っていた車が、シグナルを出さずに急に車線を変えて直前に割り込んできたとき、運転者が同乗者に対して次のように言う。

I love people who signal. [Roy (1978)]

上の文 (a.として次に繰り返す) をアイロニーとして直観するとき、すぐに対照的に出てくる「表現」は次の b, c であろう。

- a. I love people who signal. [p]
- b. I hate people who don't signal. [-p]
- (c. I hate the person who didn't signal. (特定の場合))

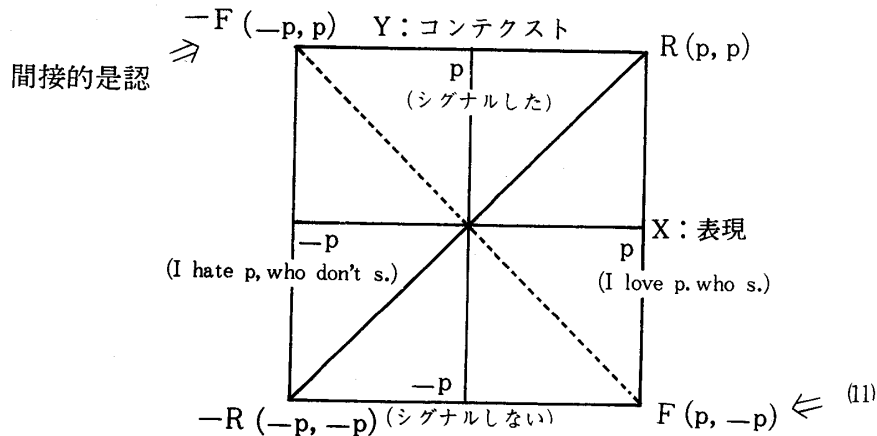
ここでは一応 a に対しては c ではなく b が、対照的に意識されたものとする。これに対して、考えられる「コンテキスト」としては二つ考えられる。すなわち、

- d. 特定の車がシグナルした場合 [p]
- e. 特定の車がシグナルしなかった場合 [-p]

以上の表現 a, b と、コンテキスト d, e の組み合わせを考えると、次の4通りが考えられる。

- $a = d$: 事実の表現 \longrightarrow R点
 $a = e$: アイロニーの表現 \longrightarrow F点
 $b = d$: 間接的是認 \longrightarrow $-F$ 点
 $b = e$: 事実の表現 \longrightarrow $-R$ 点

これを心理構造図に移すと、次の [図18] のようになる。



[図18]

R点は、特定の車がシグナルしたとき「シグナルする人は好き」といったのだから、表現とコンテキストがぴったり合い、事実表現として問題はない。逆に $-R$ 点は、特定の車がシグナルしなかったとき「シグナルしない人は嫌い」といったのだから、これも表現とコンテキストが合い、問題ない。次に $-F$ 点は、特定の車がシグナルしたとき「シグナルしない人は嫌い」といったのだから、一見コンテキストに合わないが、しかし、間接的に「シグナルする人は好き」といっていることになり、効果としては間接的是認ということになる。最後がF点である。これは、特定の車がシグナルしないときに、「シグナルする人好き」といった場合で、[図18]の心理構造図ではF点にあたり、アイロニーの偽の構造を作りあげている。表現のpは(11)のアイロニーの表現にそのまま投影されているが、確かに運転者にとっては日頃から常識として抱えている内容であり、先行認識として不自然ではない。たまたま特定の車がシグナルしないという現実認識($-p$)があり、それと対照的な先行認識(p)がアイロニーの表現として選ばれたといえよう。

- (12) 全然勉強しない子供に向かって、「お隣的美奈子ちゃんはよく勉強しているわねえ」とかいう。

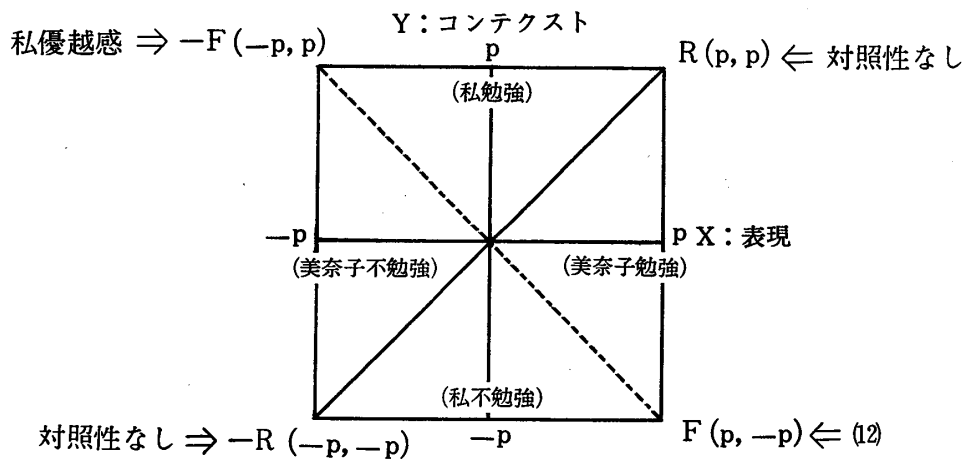
これは単なる会話の含意の対照的効果をねらった表現とすることも可能であろう。例えば、

母：お隣的美奈子ちゃんをよく勉強しているわねえ。

子：いやみ言わなくてもいいじゃない。

母：あなたがしていないとは何も言っていないじゃない。

あとの母親のことが会話の含意を打ち消した形になっているが、ただ会話の含意という言葉だけでは、この対照的効果はうまく説明できない。この点、心理構造図による分析はかなり詳しく説明が可能である。(12) がアイロニーとして受けとられる背景には、「美奈子ちゃん：よく勉強」vs.「私：不勉強」という含意からくる対照的な対立関係があり、これを分析して心理構造図に記入すると、次の〔図19〕のようになる。



〔図19〕 $\begin{pmatrix} p: \text{勉強する} \\ -p: \text{勉強しない} \end{pmatrix}$

R点(p, p)の場合、「私」も勉強しているので、「となりの美奈子ちゃんをよく勉強してるわねえ」と言われても腹が立たず、アイロニーも感じない。同様に対極の-R点(-p, -p)の場合も、両方ともが勉強していないので「美奈子ちゃん」と対照させられることはない。問題は、F点と-F点である。F点(p, -p)は、「美奈子ちゃん」が勉強していて、「私」が不勉強であるので、明らかに対照性が生じている。これが(12)の場合である。これに対して-F点(-p, p)はちょうどF点の逆の関係で、「私」が勉強していて「美奈子ちゃん」が勉強していない状況である。ここではF点と逆の効果、すなわち「私」が優越感、ないしは快い気持ちを味わうことになる。

3.09. 会話におけるアイロニーの表現

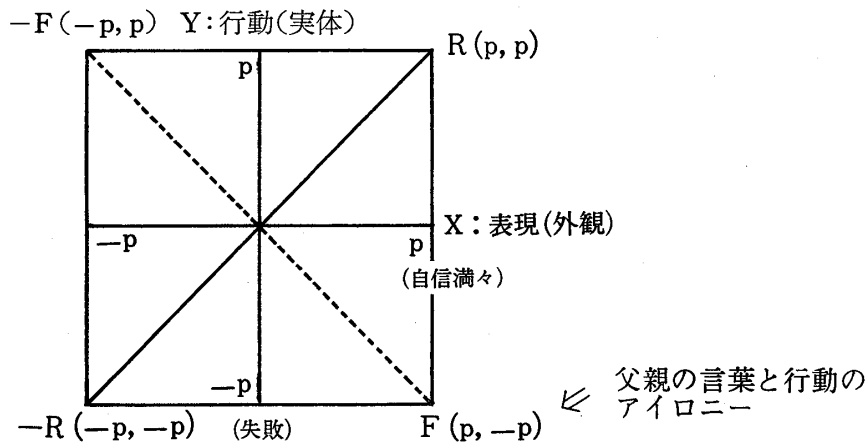
(13) 昆虫採集で子供が捕虫網を不器用に振りまわし、蝶を逃がしたのを見て、

父「そんなやり方じゃだめだ。こうするんだ、よく見ておれ。」

父親も失敗して蝶を逃がしたのを見て、

子供 { a. 「なるほど、そうするわけ。」
 b. 「なかなかうまいね。」
 c. 「あ、採れた！」
 d. 「さーすが。」

(13)の例では、子供の表現はどの場合をとってもアイロニーの効果が生じている。まず父親の言動についてであるが、「よく見ておれ」と言って模範演技を期待させておいて、失敗してしまう。それゆえ父親の言葉（外観）と行動（実体）の間にまず、アイロニーの構造を観察することができる。それから子供のセリフはいずれも、父親の模範演技が成功していた場合述べられたであろう表現である。つまり、父親の言葉（外観）にあわせた表現である。これらのことから、まず子供は父親の言葉（外観：先行認識）と行動（実体：現実認識）の間にアイロニーを認識し、それから相手の言葉（外観）にあわせて対話を行うことにより、その先行認識を投影してアイロニーの表現を作っている、ということになるであろう。



〔図20〕 $\begin{pmatrix} p: \text{自信満々} \\ -p: \text{失敗} \end{pmatrix}$

〔図20〕のF点は父親の姿の投影であるが、同時に父親に対する子供の認識構造でもある。このアイロニーの構造を表現に投影するにあたっては、子供はルールに従って、現実認識

(-p) に立脚して先行認識 (p) をアイロニーの表現で再現する。先行認識はこの場合父親の言葉であるので、子供は父の言葉にあわす形で対応することにより、先行認識を投影することになる。つまりX軸のpにあわすわけである。aからdまでのアイロニーの表現は、いずれもこのルールに従っている。もし父親の言葉にあわさず、現実認識に立脚したままで父親に対応したら、次のような表現になるであろう。

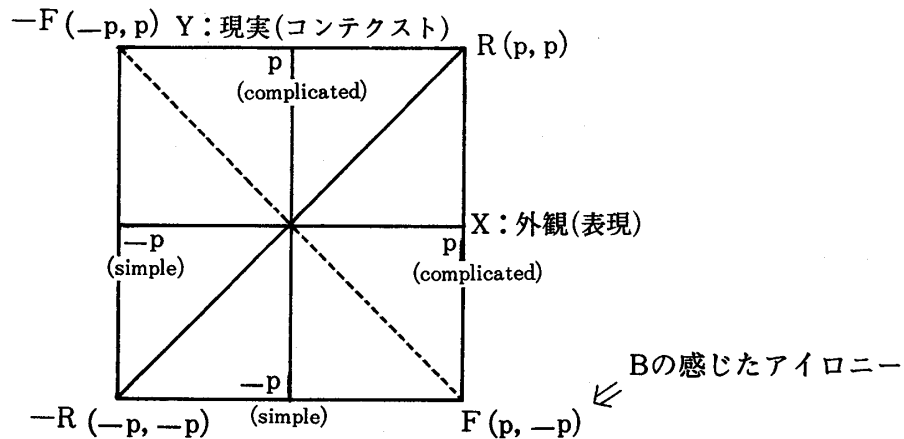
父「そんなやり方じゃだめだ。こうするんだ。よく見ておれ。」 (失敗する)

- 子 {
- a. 「なーんだ、失敗したじゃない。」
 - b. 「下手だなあ。」
 - c. 「そら、逃げられた！」
 - d. 「なーんだ。」

3.10. 疑問文によるアイロニー

- (14) バレーボールでローテーションの方法が議論されているとき、A選手が、
 Don't make it too complicated. と言ったのに対し、Bが次のように言う。
 It's like a circle. Think you can handle a circle? [Roy (1978)]

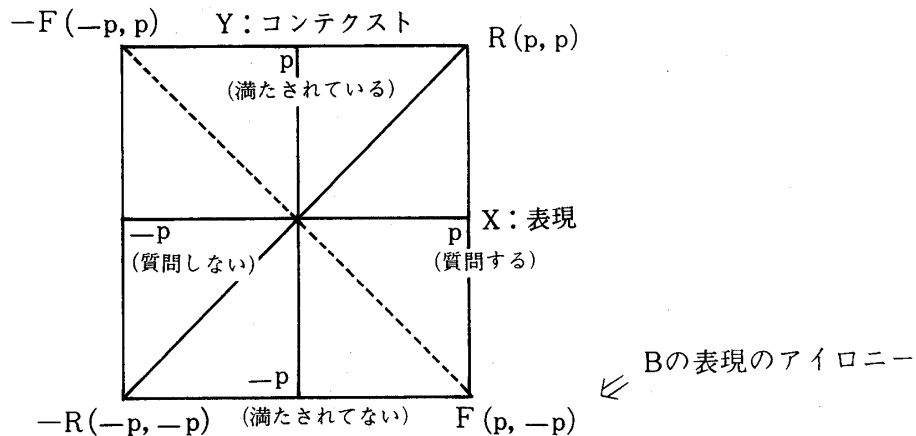
Aの言葉からBが感じたアイロニーは、Aはローテーションの説明が事態をいかにも複雑にしているかのような言い方をしているが (外観)、実際は誰にでもわかる円形方向のローテ



[図21] (p : too complicated)
 (-p : too simple)

一シヨンの説明である(現実), というものであろう。このアイロニーを言語に投影するにあたっては, (13)の対話の場合の投影ルール, すなわち相手の外観にあわせた対応をすることによって, 先行認識を言語化するという方法をとっている。つまり, Aがいかにももの分かりが悪い外観をとったので, それにあわせて, 相手が当然それができると知りながら, もの分かりの悪い人に接するような質問をしている。

[図21]のF点はBの感じたAのアイロニカルな姿である。この認識を投影するためには, Aの外観にあわせた質問をすればよい。何故そうすればよいのかというと, BがAのアイロニーを投影する際は, Aの外観の部分認識し, それをアイロニーの表現に投影する。Aの外観⇒Bの先行認識⇒Aの外観の如く, どうせもとに戻るのなら, 最初からAの外観にあわせた対応をしておけば, それがAの外観(先行)認識の投影になるという仕組みである。それゆえ [図21]のアイロニーの構造の外観にあわせたBの発話, Think you can handle a circle? も, 当然のことながらアイロニーの構造に逆投影できる。この表現のアイロニーは, 次のような心理構造図で説明できる。



[図22] $\left(\begin{array}{l} p: \text{質問文の誠実条件が成立} \Leftrightarrow \text{質問する} \\ -p: \text{質問文の誠実条件が不成立} \Leftrightarrow \text{質問しない} \end{array} \right)$

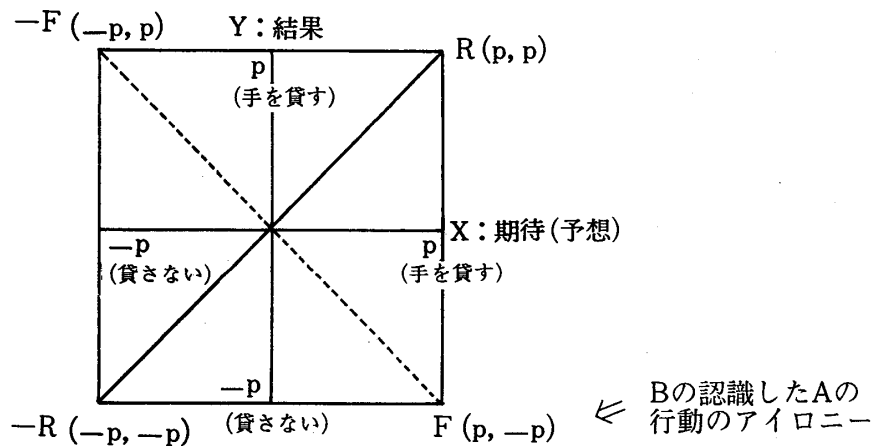
疑問文を発する際は, ①その答えを知らないこと, ②その答えを知りたいこと, の二つが話者の誠実性の条件として満たされていなければならない。逆にいうと, これらの条件のうちいずれかが欠けていたら, 正常な疑問文ではないといえる。[図22]のR点(p, p)は, 疑問文が然るべきコンテキストで発せられた場合である。-R点は, 誠実条件が満たされていないので, 疑問文を発しない場合である。-F点は, 条件が満たされていても疑問文を発しない場合である。そしてF点(p, -p)が, 条件が満たされていないのに疑問文を発するアイロニーの場合であり, Think you can handle a circle? がこのケースにあたる。

3.11. 謝礼文によるアイロニー

(15) 荷物を両手に持って前の人Aに続いてドアを通ろうとしたら手を貸してもらえず、
びしゃりと閉められてしまったときのBの言葉、

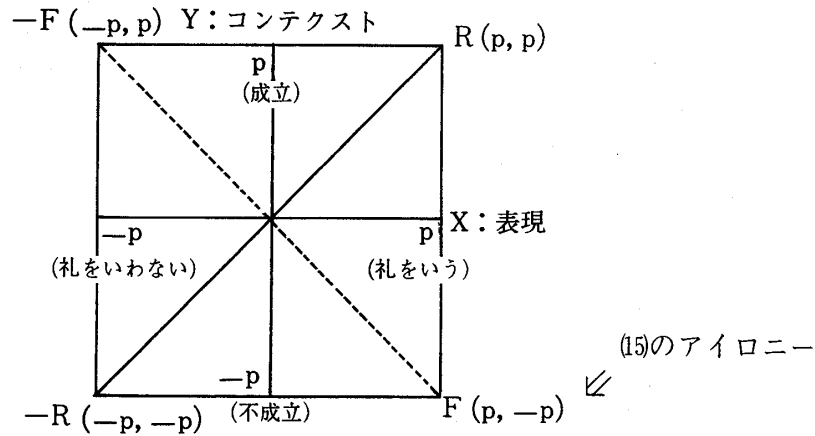
Thanks. [Roy (1978)]

謝礼文によるアイロニーの場合も、説明は疑問文によるアイロニーの場合とほぼ同じである。まずAのアイロニカルな行動をBが認識する段階があり、ついでそのアイロニーを言語化する際は、先行認識にあわせて表現するというものである。まずAの行動に対するBの認識は次のように分析できる。



[図23] (p:手を貸す
-p:手を貸さない)

(15)の情況の場合、常識的にはAが手を貸すのが普通である。この情況がR点である。対極の-R点は、貸してくれないと予想していてその通り貸してくれない場合である。-F点は、貸してくれないだろうと予想していて貸してくれた場合で、意外な喜びを感じずる情況である。そしてF点は、手を貸してくれるだろうと予想していて貸してくれなかった(15)の場合で、Bの期待(先行認識)が見事に裏切られたアイロニーの構造を表わしている。このアイロニーの構造を言語に投影するにあたっては、ルールに従って先行認識(ここでは期待)に合わせて発話すればよい。そこで「手を貸してくれる」(期待)に合わせて発話されたのが、Thanks.である。ところで、実現されなかった先行認識に合わせて発話されたThanks.も、当然偽の構造をもつ。次の図はThanks.のもつアイロニーの構造を分析したものである。



〔図24〕 $\left(\begin{array}{l} p: \text{謝礼文の誠実条件が成立} \Leftrightarrow \text{礼をいう} \\ -p: \text{謝礼文の誠実条件が不成立} \Leftrightarrow \text{礼をいわない} \end{array} \right)$

謝礼文が謝礼文として機能するためには、二つの誠実条件が満たされている必要がある。

①話者が恩恵に与ること、②話者が感謝を感じることを二つである。(15)の状況では、このいずれの条件も満たされてなくて礼を述べたことになり、〔図24〕のF点の状況に一致する。なお、R点は謝礼文の条件が成立している正常の場合、-R点は条件が不成立で、したがって礼も言わない場合、-F点は、条件が成立していても礼を言わない状況である。

3.12. 語義の曖昧性によるアイロニー

(16) 近所にうるさくさわぐ子供がいたりすると、「お宅の哲ちゃんは元気がよろしいですねえ」などという。

(16)のような文脈で用いられた「元気がよい」は、二つの意味で曖昧でありうる。

①元気がよくて健康だ。(本来の文字通りの意味)

②元気がよすぎて悪い。(「他人迷惑な」の婉曲表現；①のアイロニーになりうる)

そして①が良い意味で、②が悪い意味であるので、その意味で①と②は互いに対立関係を生じ、それゆえ(16)のようなコンテキストでは、②の意味の場合、本来の意味のアイロニーとして解釈されうることになる。次の対話で、(イ)はHが「元気がよい」の本来の意味で解釈した場合、(ロ)はHがアイロニーと解釈した場合である。ただしSはあとでこの解釈を打ち消している。

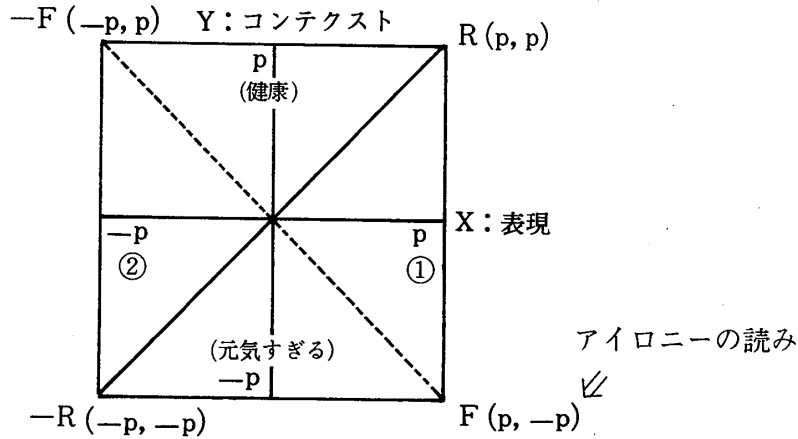
(イ) S「お宅の哲ちゃんは元気がよろしいですねえ。」

H「そうなんです。健康だけが取柄なんです。」

(回) S「お宅の哲ちゃんは元気がよろしいですねえ。」

H「そうなんです。ご迷惑をかけてすみません。やかましいでしょう。」

S「いいえ、そんなつもりで言ったんじゃないんですよ。子供は健康なのが何よりですからねえ。」

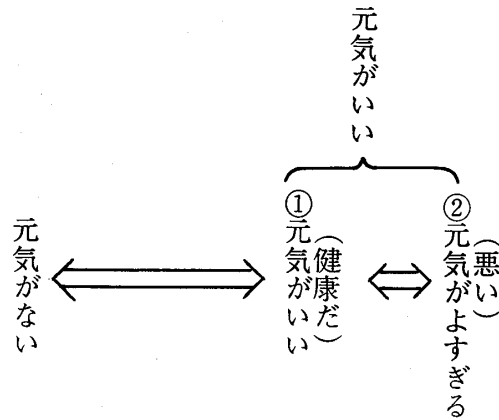


[図25] $\begin{pmatrix} p: \text{健康だ} & \textcircled{1} \\ -p: \text{元気すぎる} & \textcircled{2} \end{pmatrix}$

(イ)のHは、「元気がいい」をR点(p, p)で解釈している。ところが、①と②は表現が同じ「元気がいい」であるので、表現形式からだけでは①なのか②なのか分からない。コンテキストがpか-pかはっきりしていなかったら、(イ)のSの表現は、R, F, -R, -F点の四通りの意味で曖昧になる。もしコンテキストがpか-pかどちらかに決まれば、それぞれ二通りの意味で曖昧ということになる。(回)の最初のSの「元気がいい」も、pのコンテキストか-pのコンテキストかが分からず四通りの読みができるが、Hははっきり-pと解釈している。その上で、Sの言っているのが-R点でもF点でもいいような返事の仕方をしている。これに対し二回目のSは、自分の意味するコンテキストは-pではなくて、pのです、と言い、最初のSの「元気がいい」の意味がR点であることを確認するような言い方で述べている。この種の表現に見え隠れするアイロニーは、なかなか同定しにくいだが、少なくとも理論的には、アイロニーの読みの可能性がどこにあるのかを[図25]で明示的に表わすことができたと思う。

なお、「元気がいい」のように良い意味と悪い意味の二つの意味で曖昧な語句は他にも沢山ある。「熱心な」(①熱心な ②熱心すぎる)；「落ちつきがある」(①落ちつきがある ②のんびりして、むしろじれったい)；「まじめな」(①まじめな ②まじめすぎる)；など。

また「元気がいい」は「元気がない」とも対極関係をなすが、その関係は次に示す通りである。



アイロニーの表現として用いられた「元気がいい」が、②の意味なのか、「元気がない」の意味なのかは、コンテキストに頼らざるをえない。次に類例を一つあげておく。

- ホテルも、J, Kならいいが、京都駅に近いからといって、Mに泊まったりすると、お茶屋などでは軽蔑される。「便利なところにお泊まりですねえ」といわれても、それは、ばかにされているのである。(朝日新聞)

3.13. *always* (「いつも」) を伴うアイロニー

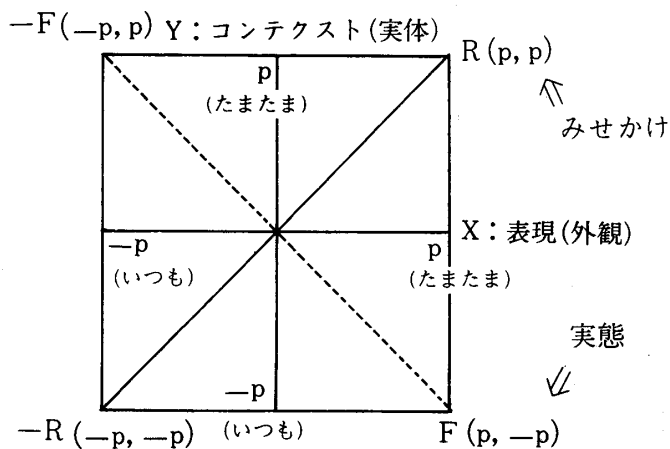
(17) いつも寝坊する人が、

A 「今日は目覚し時計がならなかったの。」

と言ったのに対し

B 「あなたの目覚し時計、いつもこわれているんじゃない?!」

Aの言葉の意味は、「いつもは」目覚し時計がセットされた時刻に鳴って遅れることがないのに、「今日は」目覚し時計が「たまたま」故障していて鳴らず、その結果遅れてしまった、という言い訳である。しかしBは、Aがいつも寝坊して遅れてばかりいることをよく知っている。これは典型的な偽善型アイロニーであるので、詳しい説明は要しないであろう。Aは自分の情況がR点 (p, p) であると言い訳する。しかしBには、それがみせかけであって、実際はいつも寝坊している (Y軸の -p) ことを知っている。Bの認識においては、アイロニーの構造 (F点) がすでに意識されているのに、AはR点のふりをしている。そこでAの偽の存在を言語に投影するために、BはAの実体がY軸の -p であることを指摘する。その結果、AがF点 (p, -p) の存在であることが言語的に示されたことになる。もしこれ



〔図26〕 (p: たまたま故障 ⇔ たまたま寝坊)
 (-p: いつも故障 ⇔ いつも寝坊)

までのルールに従って、Bが相手の外観にあわす言い方をしていたら、Bのセリフは「そうよね、今日はたまたま時計がこわれていたのよね。」とでもなったであろう。ところがここでは相手の外観にあわさず、すでにAが示している外観の上にAの実体-pをつきつける方法によって、AがF点(p, -p)の存在であることを言語的に構成することに成功したのである。

(18) アメリカのある田舎の駅で客(A)が駅員(B)にたずねる。

A: Is the train on time?

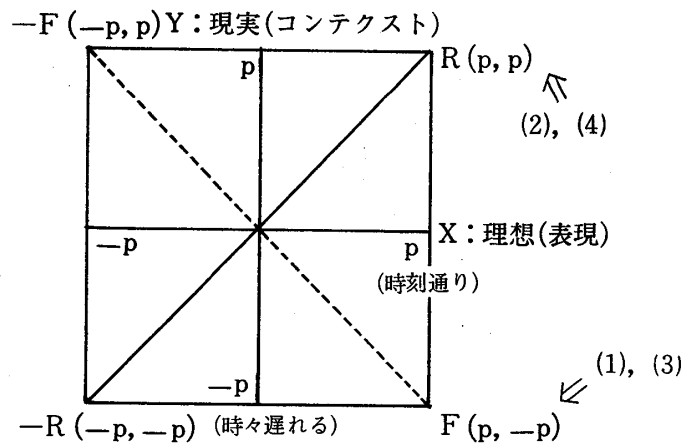
B: Of course our trains are always on time. [Carl Becker 氏による]

この状況では、Aの言葉もBの言葉もアイロニーの解釈が可能である。そこで読みの可能性を考えてみると、次の四つの場合が考えられる。備考欄はそれぞれのケースについての特徴またはコメントである。^⑦

	A	B	備考
(1)	アイロニー	アイロニー	わざわざ駅員には言わない。友人同志の冗談ならOK。
(2)	アイロニー	字句通り	Bはたて前だけを述べる。うそ。
(3)	字句通り	アイロニー	自分の責任ではないといった感じ。
(4)	字句通り	字句通り	実際問題としてアメリカでは考えられない。日本でならOK。

コメントからアイロニーの解釈が社会事情により左右されることがよく分かる。それはさておき、ここで特に議論したいのは、Bのセリフがアイロニーとして解釈される場合である。まず、その心理構造による分析をしたあと、アイロニーの意味の場合、*always*がどのように解釈されるべきか、について論じたく思う。なおAのセリフ、*Is the train on time?*については、疑問文がアイロニーの意味をもつ場合の分析が3.10節ですで行われているため、ここではこれ以上論じない。

Bの現実認識（現実）は、*Our trains are not always on time.* であり、これに対立する先行認識（理想）は、*Our trains are always on time.* である。Bのセリフでは、この先行認識がアイロニーの表現に投影されている。次の[図27]で、R点(p, p)が上の解釈の表の(2), (4)に対応し、F点(p, -p)が(1)と(3)に対応している。



[図27] $\begin{pmatrix} p: \text{always on time} \\ -p: \text{not always on time} \end{pmatrix}$

ここで特に注目しておきたいのは、*Of course our trains are always on time.* がアイロニーとして用いられたときの現実認識の意味についてである。この場合、現実認識は次のaであって、決してbではない。つまりアイロニーの表現の矛盾概念であって、反対概念ではない。

- a. *Of course our trains are not always on time (or sometimes late).*
- b. *Of course our trains are never on time.*

ところが、例えば *He is always kind to me.* がアイロニーとして用いられたときの現実認識は、cというよりかむしろdに近い。つまり、アイロニーの表現の反対概念に近く、矛盾概念ではない。

c. He is *not always kind to me* (or *sometimes kind to me*).

d. He is *always unkind to me*.

このことは日本語についてもいえる。

e. 奴はおれにいつも親切さ！

f. あの男はいつもつきあいのいい奴さ。

g. Chomsky を読むときはいつも楽しい思いをします。

これらの表現がアイロニーとして用いられたときの現実認識は、それぞれ e, f, g の矛盾概念 h, i, j ではなく、むしろそれらの反対概念 k, l, m に近いというべきであろう。

h. 奴はおれには親切でないことがある。

i. あの男はつきあいの悪いときがある。

j. Chomsky を読むときはときどき楽しくない思いをします。

k. 奴はおれにはいつも不親切だ。

l. あの男はいつもつきあいの悪い奴さ。

m. Chomsky を読むときはいつも楽しくない思いをします。

何故こういうことになるかであるが、結論から先にいうと、on time は [-gradable] の概念であるのに対し、kind は [+gradable] の概念である点がまず根本的に異なっている。

n. Of course our trains are always on time.

o. He is always kind to me.

2.3 節で議論したように、[+gradable] の概念の対極概念はその概念の反対概念、すなわちここでは、always unkind ということになる。反対に [-gradable] の概念の対極概念は、その概念の矛盾概念、すなわちこの場合は not always on time (=sometimes late) ということになる。この現象を少し角度を変えてみると、[-gradable] の概念の場合は、述語は出来事を表わし、それゆえ、それを修飾する always は常に頻度を表わす数量詞 (quantifier) として機能している。そしてアイロニーの焦点も、その数量詞としての always の上に置かれている。従ってその対極表現は、not always on time (=sometimes late) ということになる。これに対し、[+gradable] の概念の場合は、述語は性質を表わし、それゆえ、always は性質の程度を表わす強調詞 (intensifier) として機能する。o の例でいえば、アイロニーの焦点は always にはなく、kind の上に置かれている。その結果、always kind の対極表現は、always は強意詞でそのまま残り、焦点の置かれている kind の対極表現が unkind となり、結局、always unkind ということになる。

第 四 章

アイロニー的要素の分析

4.1. 第四章の序

第三章では、はっきりとアイロニーとわかる表現について心理構造図を用いて分析することが目的であったが、この章では、表現にときどき見え隠れするアイロニカルな要素の理論的な正体をつきとめることが目的である。すぐれたアイロニーの理論は、はっきりとアイロニーの表現だとわかる表現はもちろんのこと、少しでもアイロニカルに感じられる要素はすべて、説明できる力を持たねばならない、と第一章で述べてきたが、この章では、本論で提案された心理構造図のモデルが、こうした細かいアイロニカルな要素をどの程度まで説明できるのか、試してみるのがそのねらいである。この章で取り扱うアイロニー的要素は、主として謙遜表現と世辞表現に限られる。ただし、これらの表現は、これらを取り巻く関連表現と密接な関係をもっているため、必要に応じて議論を広げざるをえない。謙遜、世辞に関連する言語事象を整理してみると、次の [図28] のようにまとめることができる。

	低く評価して言う ($Y > X$)	高く評価して言う ($Y \leq X$)
自分のこと について	⊕ 謙遜 ⊖ ひがみ	自 慢
相手のこと について	軽 視	⊕ 世辞 ⊖ アイロニー

[図28] (⊕ 自信のあることについての場合)
(⊖ 自信のないことについての場合)

謙遜表現は、自分の自信のある部分について過少評価して述べる場合と考えられるが、反対に、自分の自信のない部分について過少評価するときは、「ひがみ」の表現になるように思われる。また世辞の表現でも、相手の自信のある要素について言われるときはよいが、相手の自信のない要素について述べると、アイロニーの効果が生じてしまう。4.2, 4.3, 4.4 節ではこうした言語事象について、心理構造図を用いて分析してみたい。4.5節では、「よそよそしさ」と「なれなれしさ」の偽装の構造を、4.6節ではいわゆる「運命の皮肉」の構造について、それぞれ心理構造図を用いて分析する。最後の4.7節では間接発話表現とアイロニーの表現との相違点について、いくつかの点を指摘したいと思う。

4.2. 世辞表現とアイロニー

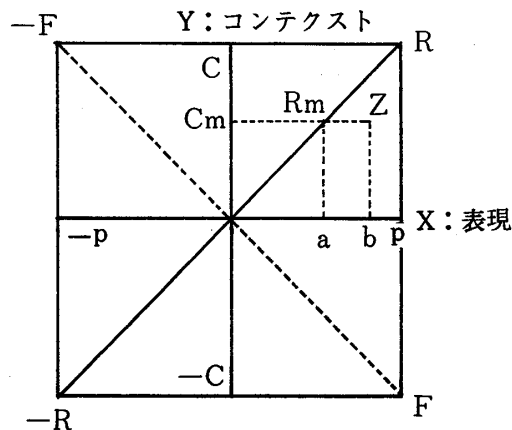
「世辞」を『広辞苑』でひくと、「他人に対してあいそのよいこと」とある。しかしこれだけでは漠然としすぎていて、言語学的に処理できないので、これを日常会話のレベルの発話にできるだけ忠実に、しかも簡潔な形で定義してみると、次のようになる。すなわち世辞とは「相手の喜びそうなことを述べるか、または、それを誇張して述べることにより、相手を良い気分させようとする言語行為」である。もっと正確な定義が必要かもしれないが、この定義であれば、「今日は特におきれいですね」とか、「立派な車をお買いになりましたね」とかいった簡単なお世辞のことばの説明には十分のようである。

さて、この定義の内容を心理構造図に投影する場合、上の定義を分割して、次の二段階を踏むのが適当のようである。

- ① 「相手の喜びそうなことを述べる」領域の設定
- ② ①を「誇張して述べる」領域の設定

①、②の設定のあと、そのいずれかを満たす領域（すなわち論理和の領域）を設定すれば、それが世辞の表現に相当する領域ということになる。

まず①の領域であるが、これは事実のままの表現であるので、 $Y=X$ の実線上に存在することになる。今、 p 点を肯定的評価をあらわす極性表現（例えば「彼女はこの上なくきれいだ」）とすると、実線上の任意点 $R_m(a, C_m)$ の表現 a には、それよりか肯定的評価の低い表現（例えば「彼女はきれいだ」）が相当する。

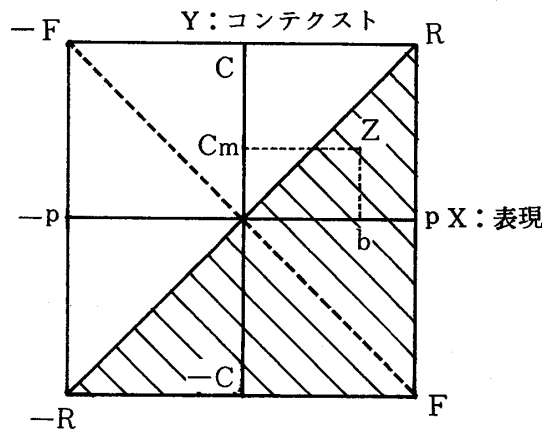


〔図29〕

このような情況設定の中で、①の「相手の喜びそうなことを述べる」領域を考えてみると、一見したところ、肯定的評価の極性表現 p を述べられれば、言われた側は喜びそうに思える。がしかし、個人によって喜ぶ内容が異なるために、そうはならない。述べてほしい

と思っていることは個々人によって異なり、場合によっては p の側よりも $-p$ の側に近いことだっているであろう。ゴルフの練習で「今日のフォームは昨日より少しましですね」というコーチのことばは、 $-p$ の側に近い表現と思われるが、言われた本人にとってはうれしいことばであろう。それゆえ①の領域の設定には、領域特定のための限定すべき条件が見当たらず、従って $Y=X$ 線上のすべてにわたるということにならざるをえない。

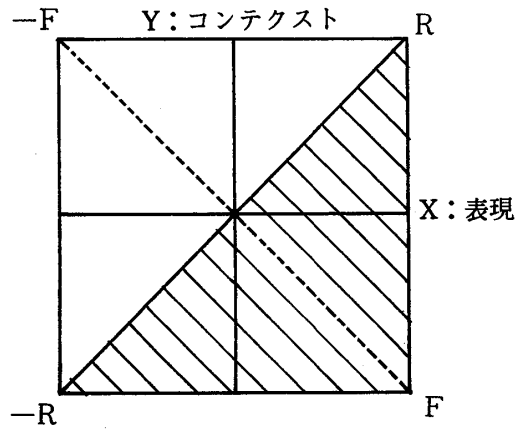
次いで②の領域であるが、実線上の任意の表現 $R_m(a, C_m)$ が誇張表現になるための条件は、使用環境 C_m はそのままにしておいて、表現の評価内容を a から b に変更することである（ただし $a < b$ 。例えば「彼女はきれいだ」を a とすれば、 b は「彼女は大変きれいだ」に相当する）。今この条件を満たす表現 $Z(b, C_m)$ の場合をみてみると、コンテキストの値は変化せず C_m のままであって、表現の評価の値だけが増加している。すなわち Z では、使用した環境に応じた表現より評価の高い表現が用いられ、従って Z は P_m の誇張表現として機能していることになる。以上のことから②の領域を設定するには、 $Y < X$ を満足さず領域を設定すればよいことがわかる。すなわち、任意の事実表現 P_m の誇張表現が分布しうる範囲は、[図30] の斜線部分に相当する。ただし、 $Y=X$ 線上は誇張表現からは除かれるのは言うまでもない。



[図30] $Y < X$ の領域

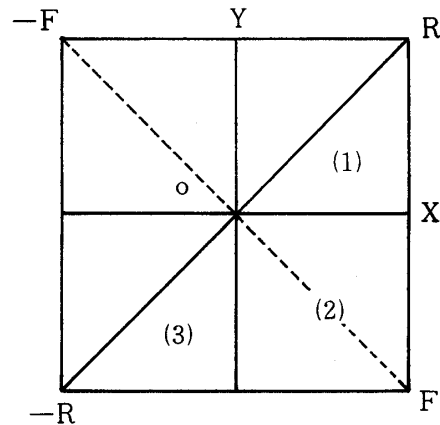
以上の考察により、世辞の表現が分布する領域は、①から $Y=X$ の実線上、と、②から $Y < X$ の領域ということになる。①と②の論理和をとると、お世辞の表現が分布する領域は $Y \leq X$ であらわされる。[図31] でいえば、 $Y=X$ の実線部分を含めた斜線の領域である。

このように設定されたお世辞表現の分布領域は、一見すべての位置で等質の世辞表現に対応するのように見受けられるが、実はそうではない。[図31] の斜線部分は表現とコンテキストの取りうる値によって、次のようにそれぞれ特徴のある三つの領域に区分することができる。そして各領域は [図32] の指定領域に対応する。



〔図31〕 世辞表現の分布領域

- (1) $X > 0, Y > 0$
- (2) $X \geq 0, Y \leq 0$
- (3) $X < 0, Y < 0$



〔図32〕

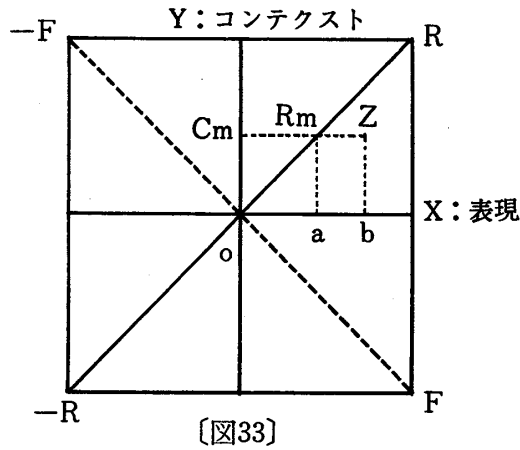
今、Rを肯定的評価表現の極性表現だとすると、それぞれの領域における表現の特徴は、おむね次のように特徴づけられる。

- (1) 肯定的評価の誇張表現
- (2) 実際は否定的であるのに、肯定的に述べられた誇張表現（Fに近づくにつれ、アイロニーの性格を増す）
- (3) 否定的評価の誇張表現（ただしこの場合、誇張の方向はpに向く）

そしてそれぞれの領域に対応する日本語の実例を示すと、

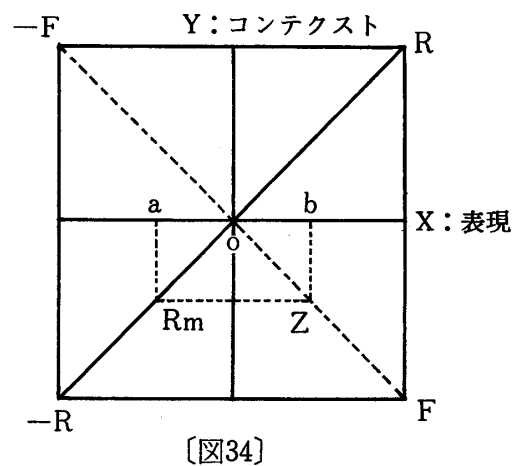
- (1) a. [実質表現]「今日のお料理は味付けがいいね。」
b. [誇張表現]「今日のお料理は味付けがなかなかよくできてるよ。」

これを図示すると、



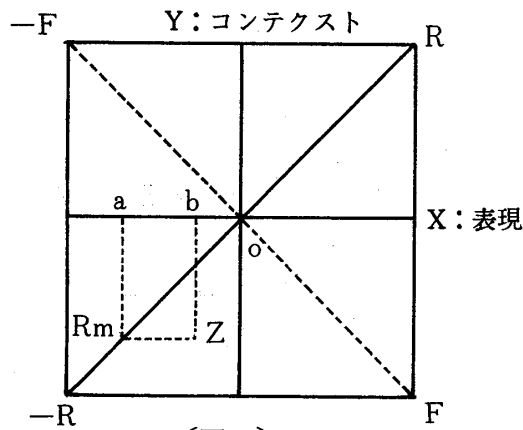
- (2) a. [実質表現] あまり包丁さばきが器用でない人に対して、「まだお慣れでないようですね。」
- b. [誇張表現] あまり包丁さばきが器用でない人に対して、「少し慣れておられるようですね。」

これを図示すると、



- (3) a. [実質表現] ゴルフのコーチのことは「フォームがまだまだだね。」
- b. [誇張表現] ゴルフのコーチのことは「少しゴルフのフォームに似てきたね。」

これを図示すると、



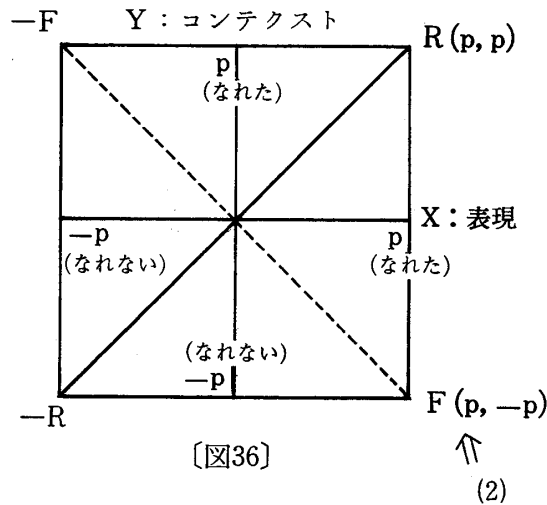
厳密に言うと、いずれの場合も、誇張表現は実質表現に対してほんとうのことを述べていない、という点では偽の関係にある。しかしその程度は、(2)の場合と(1)(3)の場合とは本質的に違っている。(1)、(3)は単なる程度の差の誇張である。しかし(2)の場合は、ZがXの値において「慣れの程度」の肯定の極に向かってRmの誇張になっていることは事実だが、その尺度上の位置関係で、aとbは中心点Oをまたいで、両側の極に分かれている。他方(1)のa、bは、「味付けの程度」の尺度においていずれも肯定の極の側に、また(3)のa、bは、「フォームのゴルフらしさ」の程度においていずれも同じ否定の極の側に位置していて、中心点をまたぐ関係にはない。それゆえ(2)の領域は、他の二領域と違って、話者の言語心理に必然的に「偽」の意識を含むことになる。言い換えれば、(2)の領域のお世辞表現は、本質的にアイロニーの表現となりうる特性を備えているわけである。

この点を今すこし詳しく論ずると、(2)のaとbの概念の対立は正と負の関係であるので、一種の反対概念の関係ととらえることが可能である。それゆえ、この関係をp(なれている)と-p(なれていない)で表記し、単一心理構造図に投影してみると、[図36]のようになる。

(2) a. 「まだお慣れでないようですね。」 ⇒ コンテキスト

b. 「少し慣れておられるようですね。」 ⇒ 表現

-p(実際に慣れていない)を事実として知っていてp(慣れている)と述べたのだから、明らかに偽であり、[図36]は完全なアイロニーの構造を示している。ところがお世辞がアイロニーと決定的に違う点は、お世辞の場合は聞き手の側にpを言ってほしいという言語心理が存在することである。恐らく聞き手の側はFであることを承知のことが多いであろうが、Fと承知の上でpだと言ってもらうことへの期待感を持つところに、また、話す側もその相



手の心理を知った上で敢て偽の表現を用いるところに、お世辞の表現をアイロニーから区別するはっきりした特徴があるように思われる。

ちなみに、pをアイロニーとして発する場合の状況としては、聴き手が前もって自分は包丁に慣れているという口振りや素振りを見せていて、実際にはそうでなかった場合が一例として考えられる。すなわち聴き手に「みせかけ」が存在し、それを皮肉った場合である。

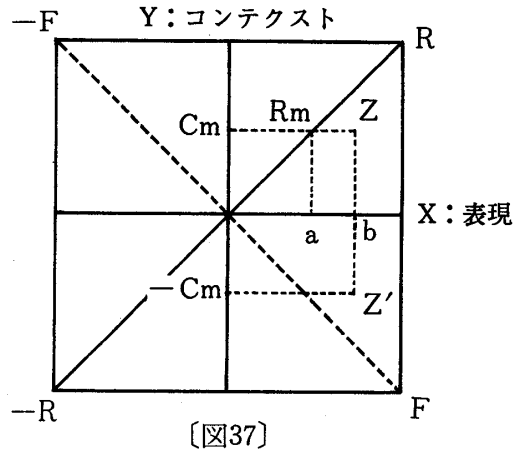
ところが、アイロニーかお世辞かが必ずしもはっきりしない場合もある。それは聴者が不器用で、その上聴者にpへの期待感もみせかけもない場合に、話者が発するケースである。この場合は、話者の内にある聴者の包丁さばきのうまさへの期待感と、現実の不器用さとの対立からくるアイロニーか、あるいは、理想的器用さと現実の不器用さの対立から生ずるアイロニーとも考えることができるが、同時にお世辞とも解釈でき、すこぶる曖昧な状況と考えられる。しかし、意図的に曖昧な言い方をしない限り、たいていは口調で、そのいずれの場合であるかが明瞭であるのが普通である。

以上お世辞表現とアイロニーの関係について、専ら(2)の領域のお世辞に限って論じてきたが、この両者の密接な関係は、実は(2)の領域の表現に限られたものではない。例えば(1)の領域の表現、

(1) b. 「今日のお料理は味付けがなかなかよくできているよ」

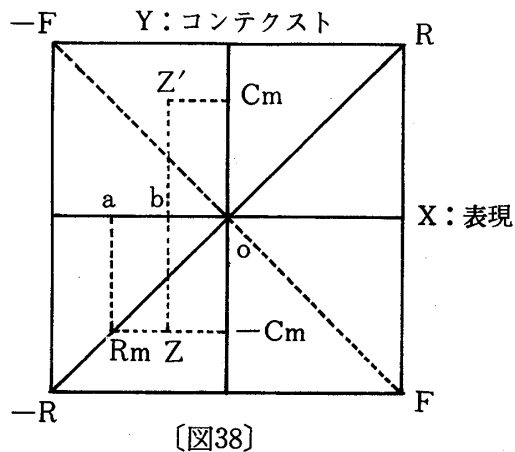
を発した夫が、アイロニーの意図をまったく持たなくても、日頃料理の批判ばかりしている夫のことをつい意識した妻は、これをアイロニーと取らないとも限らないわけである。この場合は夫がZ点 (b, Cm) (誇張表現) と言ったのを、妻がZ' (b, -Cm) ((2)の次元の表現、すなわちアイロニーの表現) と解し、夫の表現に偽の構造の存在を意識した場合であ

る。



このことから一般に(1)の領域の表現 $Z(b, Cm)$ の場合、聴き手に対して $-Cm$ を意識さず状況が満たされれば、聴者の側が $Z'(b, -Cm)$ を意識し、アイロニーの解釈が可能になるといえるであろう。

なお心理構造の理論の観点から類推すれば、(3)の領域の表現 $Z(b, -Cm)$ の場合も、(1)、(2)の場合と同様に、 $+Cm$ を意識さず状況が満たされれば、偽悪型のアイロニー $Z'(b, Cm)$ の解釈が可能になるはずである。



例えば、いつもまずい料理だと夫に不平をいわれていて、自分は料理下手だと思いこんでいる妻に対して、ある日夫が「君の料理はいつもはまずいけど、今日はふだんより少しだけましだよ。」とお世辞をいったとき、妻はそれをお世辞とすると同時に、一方で、ほめてもら

ったととるに違いない。このときの妻の解釈は、夫のことばを「料理下手」の状況-Cmに位置づけるというよりか、むしろ「料理上手」の状況+Cmに位置づけたと解すべきであろう。つまり表現は否定的だが状況が肯定的である、いわゆる偽悪型のアイロニーの表現と解したとすべきであろう。この例などは、いわばお世辞とアイロニーが一体となった言語行為ということができる。

以上お世辞とアイロニーの関係について論じてきたが、最後に話者と聴者との間の解釈の行き違いの可能性を整理しておきたい。論理的には少なくとも次の四つのケースが考えられる。

	話者の意図	聴者の解釈
(1)	世 辞	世 辞
(2)	世 辞	アイロニー
(3)	アイロニー	世 辞
(4)	アイロニー	アイロニー

しかし実際の言語生活においては、上に例をみたように、お世辞とアイロニーが不可分の関係で融合して効果をなしている場合が少なくないことは、注目に値することであろう。なおこの表のアイロニーは、それぞれのケースで偽善型と偽悪型が区別される必要がある。

4.3. 謙遜表現とアイロニー

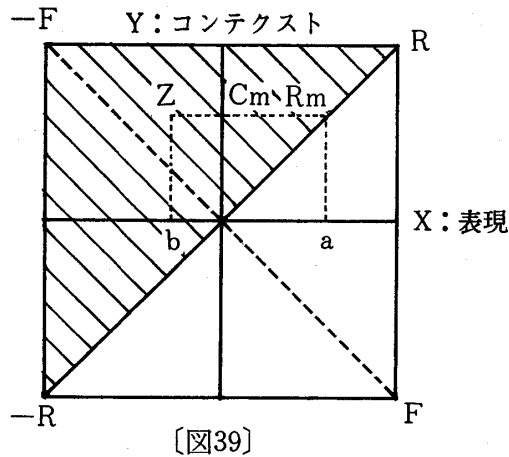
「謙遜」を『広辞苑』でひくと、「へりくだること」とある。「へりくだる」とは、「他をうやまって自分を卑下する」ことである。それゆえ、「謙遜」があてはまる事象は、相手との関係の種々相を含み、広範囲に及ぶことになるが、ここでは言語学的処理にかなう「謙遜して言う」などの場合の謙遜表現に的を絞って話を進めたい。日常の会話において用いられる謙遜表現を、かなり狭く定義してみると、次のようになりそうである。

「他をうやまい自分を卑下する目的で、自分が、自分のことについて実際よりも一段低い価値判断を述べる言語表現のこと。」

ここで「実際」とは、話者の心の中で判断された「実際」であり、また「一段低い価値判断」とは、話者の心の中で判断された判断をさす。それゆえ、これは専ら話者の主観の世界に依存した定義である。

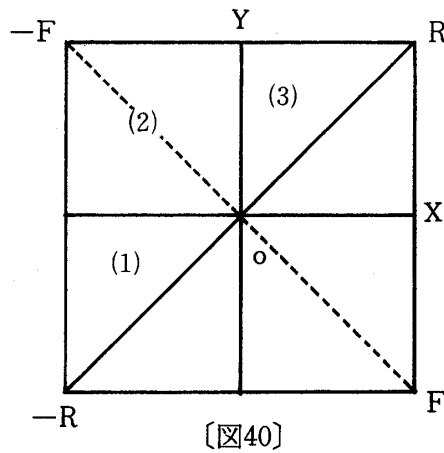
さて、この定義内容をお世辞の場合と同様心理構造図に投影すると、謙遜表現の分布範囲はどうであろうか。結論から先にいうと、「実際よりも一段低い価値判断を述べる」とある

ので、Rを評価尺度の肯定の極とした心理構造図では、 $Y > X$ の領域が謙遜表現に相当すると考えられる。これを斜線で図示すると次のようになる（ただし、 $Y = X$ 線上は除く）。



さてこのように設定された謙遜表現の分布領域は、お世辞表現の場合と同様、それぞれ特徴のある三つの分布領域に区分されうる。

- (1) $X < 0, Y < 0$
- (2) $X \leq 0, Y \geq 0$
- (3) $X > 0, Y > 0$



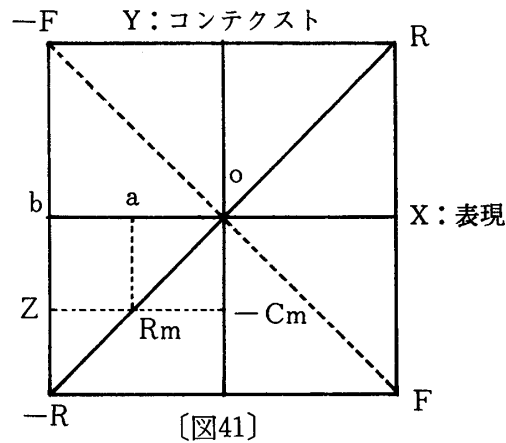
そしてRを評価尺度の肯定の極とするとき、各領域の特徴は次のように記述されうる。

- (1) 否定的評価の謙遜表現
- (2) 実際は肯定的であるのに、表現が否定的な謙遜表現（-Fに近づくとつれ、偽悪型のみせかけの色彩を濃くする）
- (3) 肯定的評価の謙遜表現

また、それぞれの領域に対応する日本語の実例を示すと、次のようになる。

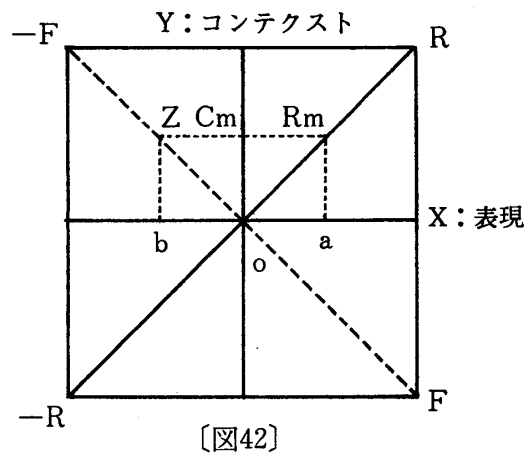
- (1) a. [事実表現] 「私, 今度のテストだめだったわ。」
 b. [謙遜表現] 「私, 今度のテスト全然だめだったわ。」

a, b の関係を図示すると, [図41] のようになる。Z が Rm の謙遜表現である。



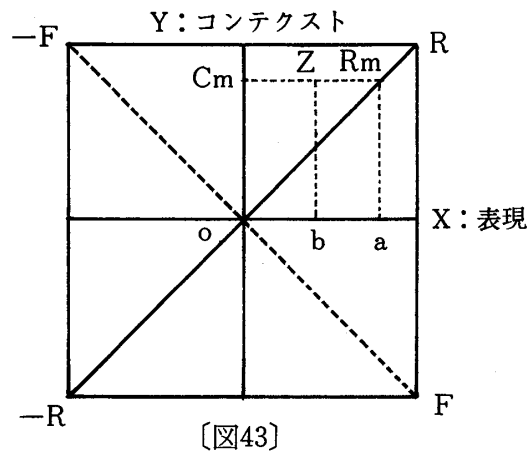
- (2) a. [事実表現] 「今度のテスト合格点は大丈夫よ。」
 b. [謙遜表現] 「今度のテスト合格点はないわ。」

a, b の関係を図示すると, [図42] のようになる。



- (3) a. [事実表現] 「今日のテストよくできたわ。」
 b. [謙遜表現] 「今日のテストまあまああってとこね。」

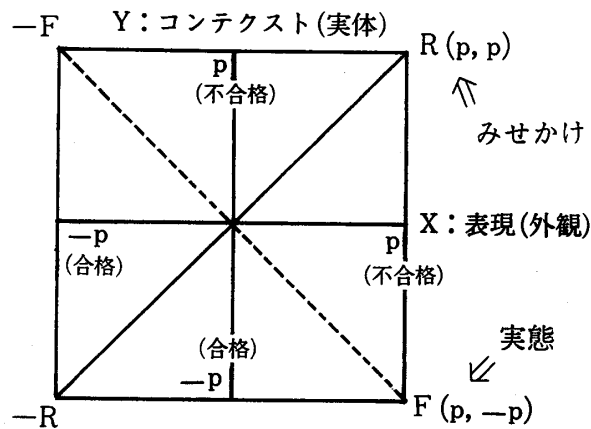
a, b の関係を図示すると, [図43] のようになる。



厳密に言うと、謙遜の表現も、お世辞の場合と同様、本当のことを述べていないという点で、実質表現に対してすべて「偽」の表現である。しかし、その「偽」の在り方の質が、これもお世辞の場合と同様、(1)、(3)の場合と(2)の場合とでは異なる。(1)、(3)の場合は、謙遜表現の「一段低い価値判断」が単なる程度の差であって、 a 、 b の両者が評価尺度の中心点 O をまたがないのに対し、(2)の場合は、実質表現と謙遜表現が、互いに p に向かって程度の差であるには違いないが、両者が評価尺度の中心点をはさんで互いに反対側に位置し、 p と $-p$ という対立関係を作り出している。それゆえ、(2)の謙遜表現は「実際は肯定的」であるのに、「表現が否定的」となり、それゆえ本質的に話者の言語心理の中に、 a と b との間の「偽」の構造を含むことになる。これは、(2)の領域に位置する $Z(b, C_m)$ の座標が、表現値が負($b < 0$)で、環境値($C_m > 0$)が正の値であることから明らかである。

(2)の場合をもう少し詳しく論ずるために、(2)の実例を単一心理構造図に投影して考察してみる。実際には「今度のテストは合格点は大丈夫」と信じていながら(現実認識=実体 $-p$)、一方謙遜表現で、「今度のテストは合格点はないわ」(先行認識=外観 p)というのであるから、心理構造は p を「みせかけ」とする偽善型の構造をなす。ただし[図44]ではみせかけの表現である「不合格」を先行認識(p)の側にとったため、「合格」は $-p$ の極になり、肯定値を p にとる通常の構造と一見逆の関係に位置づけられている。ただし、全体の心理構造の形式は F を含む偽善型ではあるが、内容的には偽善ではなく「偽悪の関係」である点は注意に値する。 $Y > X$ の領域を示した複合心理構造図で、(2)の領域が $-F$ の次元であり、これが $-p$ に「みせかけ」をおいた場合の偽悪型のアイロニーの引き金構造をなしていることから、このことは説明がつく。

以上、(2)の領域の謙遜表現が必然的に偽悪型のみせかけの構造をもっていることを述べ



[図44]

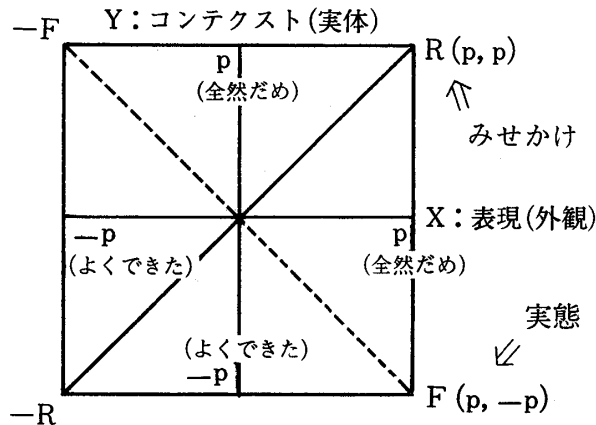
てきた。それゆえ、この領域における謙遜表現は、本質的に①「謙遜」と②「偽悪型のみせかけ」の二つの意味で解釈される可能性をもっていることになる。このことにより、「謙遜」と「偽悪」がいわば裏腹の関係であることが、構造的にも明らかにされたことになるであろう。なお、「偽悪型のみせかけ」と解された場合は、それが聴者による「偽悪に対するアイロニー」の直接の引き金として作用しうることは言うまでもない。

ところで、これまで専ら(2)の領域に限って論じてきたが、(1)の領域の謙遜表現についてはどうであろうか。

- (1) a. [事実表現]「私、今度のテストだめだったわ。」
- b. [謙遜表現]「私、今度のテスト全然だめだったわ。」

事実表現の否定的要素を強めることにより、謙遜表現を作り出している例であるが、話者Aがいつも悪い悪いと言いながらも良い点を取っていることを日頃から知っている聴者Bには、たとえそれがAの本心からの謙遜表現であっても、偽悪表現としてうつる確率が高いであろう。この場合はAが(1)の領域の謙遜表現として発したのに、聴者Bは日頃の経験からAの言葉の中に「偽」を意識し、それを(2)の次元の表現と解釈したのである。これを単一心理構造図に投影すると次図のようになる。Aが謙遜表現でpを述べたのに対し、Bは日頃のAの態度からpは「偽」であると判断し、実態は-pと思い込む。[図45]はBがAの言葉を偽悪ととった場合のBの認識構造を表わしている。BによるAに対する「アイロニーの表現」の引き金となる構造である。以上の考察から、(1)の領域の表現も、①「謙遜」の他に②「偽悪型のみせかけ」として解釈される可能性があることがわかる。

これまで(1)、(2)の領域について、それらの領域の謙遜表現が、いずれの場合も①「謙遜」に加えて②「偽悪型のみせかけ」の解釈が可能であることを見てきた。心理構造の理論



〔図45〕 偽悪ととった場合のBの認識

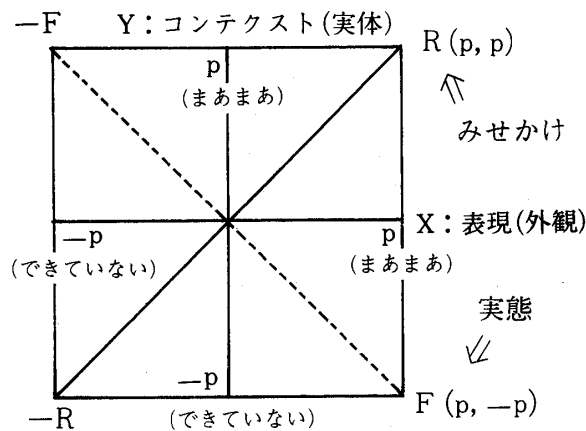
からすれば、(3)の領域に関するも同様の考察が可能のはずであるが、如何なものであろうか。

(3) a. [事実表現]「今日のテストよくできたわ。」

b. [謙遜表現]「今日のテストまあまあってとこね。」

結論から言うと、上記の謙遜表現には、謙遜の他にもう一つの解釈が可能である。例えば、話者Aは謙遜表現のつもりで発話していても、聴者BがAの日頃の偽善的態度から察して、また今度も「みせかけ」の表現にちがいないと思うような場合が考えられる。この場合は、謙遜表現が評価値の高い肯定の次元にあるため、Bの意識には「偽善型のみせかけ」として映ることになる。

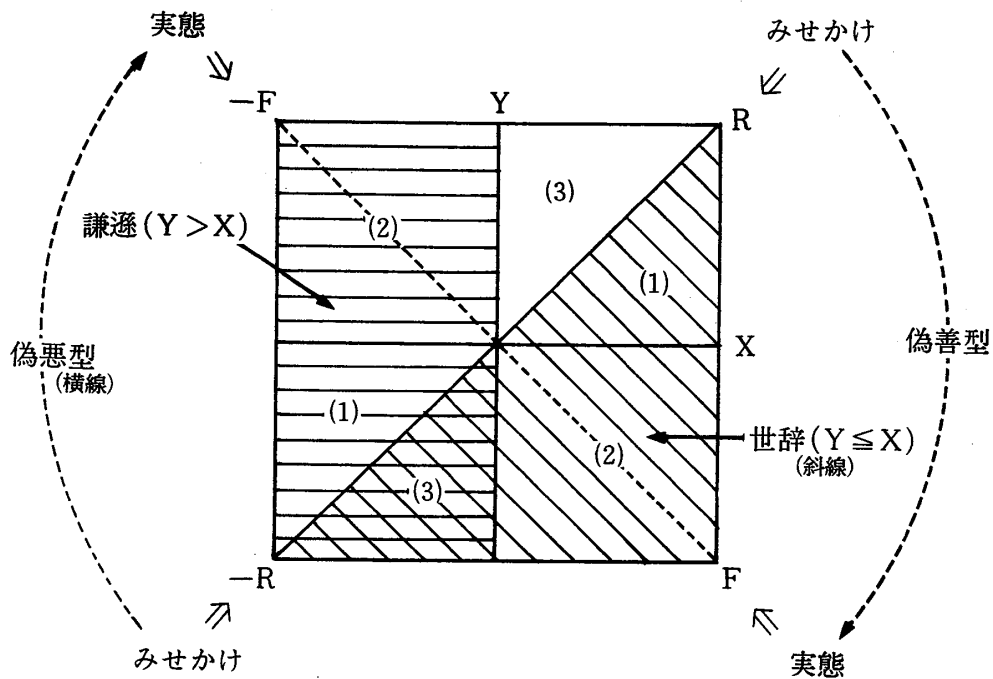
この例の場合、Aは謙遜表現のつもりでpを述べたのであるが、Bは日頃のAの偽善的態



〔図46〕 Aに対する聴者Bの心理構造

度から、Aに対して上図のような認識内容を抱く。

ここで注意すべきは、先に考察した(1)(2)の領域における謙遜表現の解釈の可能性が、①「謙遜」と②「偽悪型みせかけ」であったのに対し、(3)の領域における可能性は、①「謙遜」と②「偽善型みせかけ」であることである。これはお世辞とアイロニーの関係の場合の丁度逆になっている点で、特に注目し値する。お世辞の場合、(1)(2)の領域の表現が、①「お世辞」②「偽善型アイロニー」の二つの解釈が可能であったのに対し、(3)の領域では、①「お世辞」と②「偽悪型アイロニー」の二つの解釈が可能だったからである。この対称的な関係は、謙遜表現 ($Y > X$) と世辞の表現 ($Y \leq X$) の領域分担の違いと、偽善型アイロニー ($X < 0$) と偽悪型アイロニー ($X > 0$) の領域の違いのズレから生ずるものである。次の[図47]は、これらの領域を重ね合わせたものであるが、謙遜領域の(3)と世辞領域の(3)の対称的な特殊性がこれで明示的に表わされたことになる。



[図47] 世辞表現、謙遜表現、偽善型、偽悪型の関係

以上、謙遜表現と「みせかけ」の関係について論じてきたが、最後に話者と聴者間の解釈の行き違いの可能性について整理しておきたい。論理的には少なくとも次の四つのケースが考えられる。なお「みせかけ」は、偽善型と偽悪型が区別される。

	〈話者の意図〉	〈聴者の解釈〉
(1)	謙 遜	謙 遜
(2)	謙 遜	みせかけ
(3)	みせかけ	謙 遜
(4)	みせかけ	みせかけ

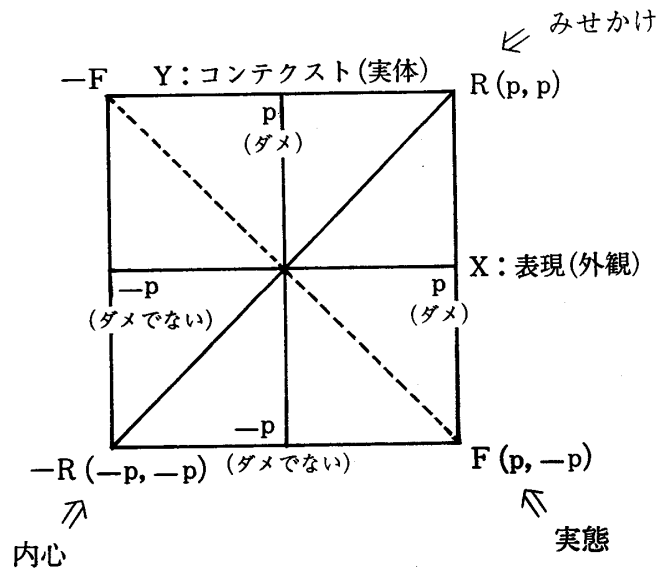
4.4. ひがみ表現とアイロニー

次の対話は、典型的なひがみ表現の例である。

A 「どうせ僕はダメな人間なんだ。」

B 「そんなことは絶対ないよ。」

この状況では、AはBに自分の言葉を否定してもらいたくてこのような言葉を皮肉っぽく発したと解されうる。この場合、Aは内心「俺はダメな人間ではない」と思っているか、または少なくともそう思いたい心境であると考えられる。もしそうだとすると、この種のひがみの表現には、アイロニーの構造が係わってくるように思われるが、実際はどうであろうか。今述べたAの心理構造を図で示してみると、次の〔図48〕のようになる。



〔図48〕 Aの心理構造

—R点がAの内心を表わす。それゆえ実体はY軸の—pである。しかし言葉の上ではAは自分がR点の存在であることを演じている。実体が—pで、外観がpであるので、Aの心理の構造そのものが、F点の構造をもち、アイロニーを形作っていることが明らかになる。これでひがみ表現のもつアイロニー的要素の構造が、心理構造図によって明示的に表わされたこ

とになる。

AはBに自分の言葉を否定してもらいたくてこのような言葉を皮肉っぽく発した、と先に述べた。これは[図48]でいうと、表現pを否定することであるが、同時にそのことはR点のみせかけを否定することを意味し、それはさらにF点の偽の構造をも否定することにつながる。そうしてもらうことによって、Aは「自分がダメな人間ではない」という自らの内心の思い（-R点）を強くし、さらに願わくば自分が-R点の存在であることをBにはっきりと言葉で確認してもらいたかったと考えられる。Bの言葉はまさしくAの願い通りの表現になっている。

次はひがみ表現の類例である。

- Aはあまり美人ではなく、どちらかというとブスの女の子。Aの気にさわることがあったとき、

A 「どうせ私ブスだもん。」

B 「そんなことないよ。かわいいよ。」

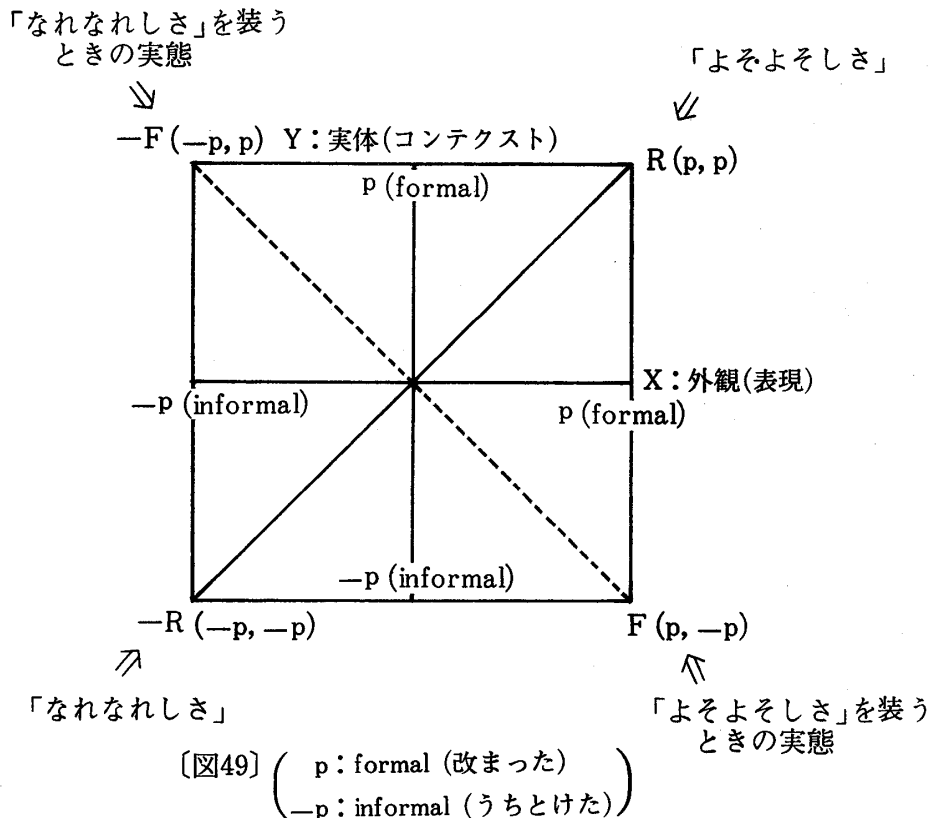
A { a. 「それ皮肉？」
b. 「無理しなくてもいいわよ。」

この例は最初のものとはほぼ同じ構造をもつ。AはBに自分の言葉を否定してもらいたくてこのような言い方をしているが、実際内心どの程度に自分のことを思い込んでいるかによって、Bの「かわいいよ」に対する反応が異なってくるであろう。aの場合は、Aがぶりっ子でないという前提にたてば、Aが自分を認識している程度と、「かわいい」という表現との間に、対照的な対立を生むほどのかなりの距離を認めた反応と解しうる。それに対してbの反応はそれほどではないといえよう。

「ひがむ」を『新選国語辞典』（小学館）で引いてみると、「殊さらに被害者意識でものを見たり、考えたりする」とあったが、本論では言語分析の視点から4.1節で述べたように、「ひがみ」と「謙遜」とを互いに裏腹の関係に位置づけた。すなわち謙遜とは、自分の自信のある側面に関して、内面ではそれを認めてほしいと思いながら、外面では自分を一段と低く評価する言動のことであるが、これに対し「ひがみ」とは、自分の自信のない側面に関して、内面では良い評価を期待しながら、外面では一層自信のない言動をすること、と解した。共にアイロニー的要素があると直感できるが、本論では心理構造図による分析で理論的にそれらの構造を明示的に表わすことができた。これまでの考察では、4.1節で提案した関連諸表現の理解の仕方では問題はなさそうであるが、各表現間の構造上の関連性についての細かい検討は今後の課題である。

4.5. 偽装—「よそよそしさ」と「なれなれしさ」

formal-informal の尺度を軸とする心理構造図を用いると、「よそよそしさ」と「なれなれしさ」の互いに対立した偽装の関係をうまく説明できる。ここで formal とは「改まった、よそよそしい」、informal とは「うちとけた、なれなれしい」の意である。そして「よそよそしさ」を装う場合の例は、夫婦喧嘩で冷戦中の対立関係、また「なれなれしさ」を装う例としては、接客業の人達の態度(卑近な例としてはバーのホステスの態度など)があげられる。



今の世の中では普通、仲の良い夫婦はうちとけていて儀式ばらない。外観(X)も実態(Y)もそうである。 $-R$ 点($-p, -p$)がこの状態を表わしている。しかし、ひとたび夫婦喧嘩をすると、実際はうちとけた儀式ばらない夫婦でも、かなり改まったよそよそしい態度になるのが普通である。この関係を表わすのはR点(p, p)である。本当は儀式ばらない関係($-R$ 点)なのに、改まった、よそよそしい関係(R点)を装うことになる。「なれなれしい」関係が「よそよそしさ」を偽装すると、緊張したムードが生まれ、対立関係が生ずる。すなわち「よそよそしさ」を装う場合とは、 $-R$ 点であったものをR点であるかのごとく装うことによって、F点の偽の構造を作り出し、それによって緊張した対立関係を生ずるケースであるということができよう。

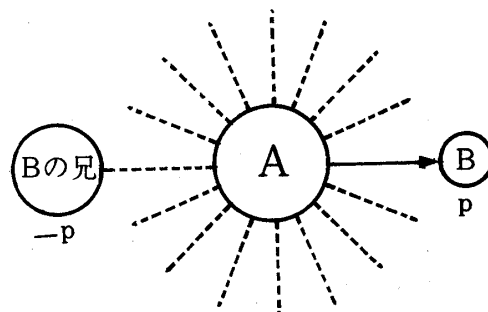
これとちょうど逆の関係が、本来はまったくの他人同志であるのに「なれなれしさ」を装

う場合である。卑近な例は、バーのホステスが客に接する場合を考えるとよい。あるいは、実際は親しくないのに何らかの理由でなれなれしく接する場合は、いずれもこの例と考えられよう。[図49]で説明すると、実際はR点の存在であるが、外観だけは-R点であるかの如く振る舞うのであるから、-F点の偽の構造を作り出す結果となる。「よそよそしい関係」が「なれなれしさ」を偽装すると、普通は緊張したムードが和らぎ、うちとけた関係が生ずる。すなわち、「なれなれしさ」を装う場合とは、R点であったものを-R点であるかの如く装うことによって、-F点の偽の構造を作り出し、それによってうちとけた関係を生ずるケースであるといえることができる。

ところで上の説明では言語的な要素が排除されている。しかしながら、よそよそしい態度やなれなれしい態度は、実際は言語表現を伴うものである。それゆえ[図49]の構造は、そのまま言語表現の「なれなれしさ」や「よそよそしさ」の偽装の説明にもあてはまるといってよい。本来はうちとけた表現を用いるのがあたりまえのコンテキストで、改まった表現を用いると(F点)、それが冗談でない限りは、緊張した対立のムードをひき起こすのが普通である。一般に丁寧な表現が凄味がきかずわけも、このあたりにあるといえる。逆に改まった表現を用いるのが普通のコンテキストでうちとけた表現を用いると(-F)、それが失礼にならない限りは、親しいムードを作り出すことになる。

4.6. 運命の皮肉

大学時代AさんとB君が交際していた、誰がみても二人は将来結婚するようには見えたとする。やがて5年後Aさんが結婚した。ところがその相手はB君ではなく、B君のお兄さんだった。これは大学時代に予想だにされなかったことで、確かに「運命の皮肉」である。しかしAさんの結婚した相手が、二人には何の関係もない、例えばC君だったとしたら、はたして「運命の皮肉」と言うことができるのだろうか。答えは勿論 No. である。® だから運命の皮肉という場合は、単にまわりの人達の思っていた通りにならなかったばかりでなく、そ

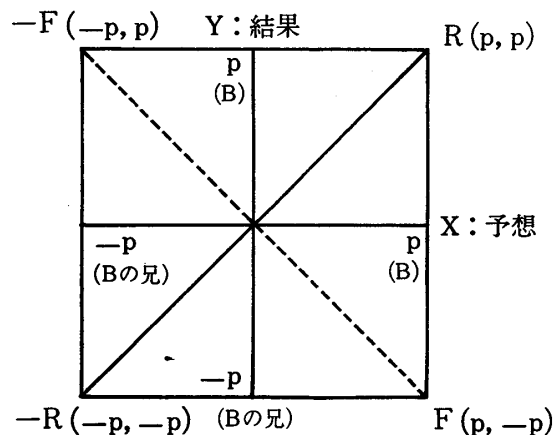


[図50]

の結果がまったく予想だにされなかったことである必要がある。

次にこのことを図式的に考えてみる。一番結婚する可能性が高いと思われたB君の場合を今 p で表わすと、一番結婚する可能性が低いと思われる人 ($-p$) は誰であろうか。恐らく最初からこの人物を同定することはむづかしいであろう。しかし、B君の兄が、一番結婚する可能性が低いと思われるグループの中の一人であったことはまちがいないであろう。

このように見てくると、運命の皮肉も、これまで見てきたアイロニーの構造とまったく同じ構造をしていることが明らかになる。 p の確率が一番高いと予想されていたことが、実はまったく逆の $-p$ であったというのであるから、まさしく心理構造図における偽の構造をなしている。



〔図51〕 運命の皮肉の心理構造図

運命の皮肉というちょっと大げさに聞こえるが、実は日頃日本語で「皮肉なことに」「皮肉である」などに用いられる「皮肉」はすべて〔図51〕の構造をした運命の皮肉のことである。次にいくつかの実例をあげておく。

- (1) 日本人がご多分にもれず、自然破壊に手をかしたことは、彼らの自然愛好癖を思えば、皮肉というほかない。(ライシャワー著・国弘訳『ザ・ジャパニーズ』)
- (2) 学内において強力な地盤を築き上げ、将来は医学部長、学長をも望めるコースを歩んでいた池園教授をつき落とししたのは、自分が手紙を出して帰国させた旧友であった。人生の皮肉というべきか。(『週刊朝日』)
- (3) 自分を売り込もうとして、ベラベラしゃべる人間には、世間は関心を寄せない。既成の「ことば」によるコミュニケーションの曖昧さを拒否し、「ことば」のない寡黙な行動のもつ明瞭さを選んだとき、世界はハッとして、逆に、彼らの意見を聞いてみたくなった。皮肉なものではないか。(赤塚行雄著『教祖の話術』)
- (4) 近畿勢同志のうえ、皮肉にも、二チームしか宿泊していない同宿校の対戦となっ

た。（『朝日新聞』）

4.7. 間接発話とアイロニーの違い

次の文はいずれも疑問文であるが、(a) が要請を表わす間接発話文であり、(b) は3.10節で疑問文によるアイロニーの例として用いられた表現である。いずれの文も「話者が答えを知っていて質問している」という点では同じであるのに、機能がまったく違っているのは何故であろうか。

(a) Can you pass the salt?

(b) Can you handle a circle?

まずおもしろいことに、(a) は間接発話文としてだけ用いられるかというところではなく、状況さえ満たされれば、アイロニーの表現にも用いられうる。同じことが(b)についてもいえる。コンテキストさえ満たされれば、(b) もまた要請文の機能を持ちうるであろう。これらのことから分かることは、疑問文という統語的特徴がアイロニーや要請の意味を作り上げているのではなく、その文が用いられているコンテキストが、これらの疑問文の特定の機能を決定している、ということである。

もう一つ重要なことは、アイロニーと要請とは互いに排他的な関係にあるのではないということである。アイロニーの意味をこめて要請文を発することは容易に考えられることであるからである。さらにまた、アイロニーの意味をこめて謝礼を述べることもできる。4.2, 4.3 節で観察したように、謙遜や世辞表現の中にもアイロニーを読みとることができるのである。こうみえてくると、アイロニーというのは、それ以外の機能とレベルがまったく違って、一段上から言語機能と係わっているのではないか、という疑問が生ずる。さらに第三章の観察で、対話で生ずるアイロニーの場合は、相手の外観に合致することでそのままアイロニーの表現になりうるケースをいくつか観たが、そういった点を考慮すると、アイロニーはすべての伝達機能にわたって自由に係わる力をもった要素、ということになりそうである。

アイロニーという現象のこうした特殊性を説明するためには、アイロニーの本質に立ち返らねばならない。アイロニーとは、第一義的には対象に対する先行認識(p)と現実認識(-p)の間の対照的な偽の関係の認識のことである。それゆえ、その本質的な部分は話者の認識の世界にあるのであって、言語の伝達形式や伝達機能にあるのではない。この点の差異は重要である。アイロニーは「認識の在り方」の問題であり、一方、伝達形式や伝達機能は「伝達の在り方」の問題である。前者は認識そのものであるのに対し、後者は伝達そのものである。

次にアイロニーの言語への係わり方であるが、アイロニーの表現の場合、先行認識(p)が言語化されるという特殊性がある。次々に変わりゆく現実認識(-p)が常に話者の言動の中

心点にあって、それが話者を支配しているのは言うまでもないが、先行認識との差が極端であるときは、先行認識の部分を言語に投影して、現実認識の自己との間のコントラストにより言語的なアイロニーの姿を作り出し、そうすることによって自己のアイロニーの認識を客観化するわけである。これはあくまでも自己の認識の客体化であって、何か言いたいことがあってそれを言語で伝達するという類の言語表現ではない。アイロニーの言語化は、自分の認識の在り方を自分の行動に移すこと、といった方が正しいかもしれない。現実認識が自己の在り方の基本にあり、先行認識はそれとは裏腹の外観として処理する。そのコントラストが、自己の認識したアイロニーの姿そのものである。それゆえアイロニーの言語化は、認識された偽の構造の客観化である。

先行認識(p)の言語化にあたっては、言語形式を選ばない。さらに伝達内容も選ばない。ただし一番重要なことは、自己の現実認識(p)との間に対照的な偽の関係が保たれるという条件が満たされる限りにおいてである。この条件が保たれる限りは、先行認識の投影はどのような言語形式であっても、どのような内容であってもよいということになる。対話の場合、相手の外観にあわすことがアイロニーの投影ルールの基本である、と述べたが、これはすでに相手が話者の現実認識(p)とは対照的な外観(-p)をとり続けていて、上の条件が十分満たされている場合である。それゆえ、相手に合わすことだけで、それがアイロニーの表現であり続けるのである。

以上のように考えてくると、アイロニーがすべての言語表現の上に位置し、そして言語伝達のすべての側面に自由に関係してくる理由が、極めて明瞭な形で説明される。

ここではじめに提出した「(a) (b) いずれの文も話者が答えを知っていて質問しているという点では同じであるのに、機能がまったく違っているのは何故か」という問題に立ち返りたい。まず、いずれの文もアイロニーと間接発話文の両方に機能しうることを、そして、そのどちらであるかは文ではなくてコンテキストが決定する、という点を確認しておかねばならない。次にコンテキストについては、間接発話とアイロニーとはレベルがまったく異なること。すなわち、間接発話の方は専ら表現形式の問題であり、これは間接発話表現の原則に従う。すなわち、要請行為実行のため予備条件である能力があるかないかを聞くことによって、相手の行為実行の意志の有無を確認している場合で、相手に No. を言う権利をまだ残している分だけ丁寧である。一方アイロニーの場合は、話者は相手に、Yes, No で答えることを求めるよりも、むしろこの状況でこの質問を発する行為により、相手についての自己のアイロニーの認識を言語でもって客体化している、と考えるべきであろう。上記の考察から明らかなように、間接発話とアイロニーとはレベルおよび構造がまったく異なるのに、(a) (b) では偶然統語的に一致したため、このような問いかけが生じたのであるが、実際は、両者は本質的に異質の言語現象である。

第 五 章

結 論

本論の目的は、アイロニーの表現を分析することによって、アイロニーの発話と理解のメカニズムを明らかにし、言語の使用理論の一部としてのアイロニーの理論を提案することであった。第一章でアイロニーの言語学的研究を展望したあと、第二章でアイロニーの心理構造モデルを中心とするアイロニーの理論が提案された。この理論は、第三章、第四章で実際に適用され、その有効性が実証された。理論の要点は、第二章の2.8節において16項目にわたって詳説されているので、ここで繰り返す述べることはしない。詳細な点では数多くの課題が残されているが、本論の当初の目的は十分達成されたと思う。本論をしめくくるにあたって、本論の要点・評価・課題等について4項目にわたり、簡潔に整理しておきたい。

第一点は、アイロニーの本質についてである。アイロニーとは、先行認識 (p) と現実認識 (-p) との間の反対関係的な「偽」の構造を意味する。つまりアイロニーとは、ある特殊な認識の在り方をさす。この認識の在り方は、理論的には、X軸(先行認識)とY軸(現実認識)からなる心理構造図(座標)のF点(p, -p)または-F点(-p, p)に同等なものとして位置づけられる。すなわち、アイロニーの構造は、モデル構造としての心理構造図の|F|点の構造に理論的に相当するといえる。このアイロニーの認識が客観化される際は、アイロニーの構造がそのまま話者の言動に投影される。ただしその投影にあたっては、話者の言動が、そのまま認識されたアイロニーの姿の再現であるような形で客観化される。すなわち、先行認識が話者の狭義のアイロニーの表現(p)に投影され、現実認識は地の文の内容(-p)に、アイロニーの認識からうけた話者の主観的反応は言語表現の音調に投影される。こうして話者の言動そのものが「偽」の構造をもつ姿をとり、それはそのまま認識されたアイロニーの姿のコピーとなっている。この意味において、アイロニーの表現とは、アイロニーの認識の「言語における再現」であり、あるいはアイロニーの認識の「言語における上演」である。もっと具体的に言えば、相手の表と裏の偽りの実態を見抜き、それを言葉の次元で演じてみせることである。この場合、相手にしてみれば、自分の実態を劇中劇で見せつけられるようなものである。それゆえ、アイロニーの表現は決してアイロニーの認識の「単なる言語への翻訳」ではない。アイロニーの表現そのものが、アイロニーの認識を客体化さす行為の一部分をなす、という方が正しい。それゆえ、アイロニーの表現は、認識の在り方を演じているのであって、伝えているのではない。このように、アイロニーの構造は、

アイロニーの認識と表現の根底に在る抽象的な構造である。それをモデル化すれば、心理構造図の|F|点の構造で書き表わされうる。この構造は認識の構造と同等であると同時に、それを客体化する際の言動の構造とも同等であり、アイロニーの表現はその一部分を成す。この意味において、アイロニーの構造は認識と言語の接点として機能していると言えよう。

第二点は、アイロニーの認識と表現に共通するモデルとしての心理構造図についてである。結論的に言って、この心理構造図のもつ説明力は多大である。アイロニーの構造が、本質的に、正と負の対極的な概念とその真理値である真と偽とに関係するために、アイロニーの取り扱いはおのづから本論で提案した四極からなる心理構造図のようなモデルにならざるをえなかった。逆に言うと、ここで提案した心理構造図以外の方法でアイロニーのメカニズムを説明できるモデルは、想像することがむつかしいように思われる。その意味において、本論の心理構造図はアイロニーの構造の本質を最もよく表わすモデルであると言ってよい。そして恐らく、筆者自身がまだ気付いていない重要な説明力がこの心理構造図には隠されているような気がするが、これはこれからの課題である。例えば、F点と-F点の関係や差異の細かい点については完全に明らかであるわけではない。このモデルから類推される理論的な側面が、実際にわれわれの認識や言動のどの部分を一番よく説明するものであるか、筆者自身現在検討中である。もしこの心理構造図がアイロニーの構造を最もよく表わしているモデルであるとしたら、このモデルによる今後の分析により、更に多くのアイロニーに関する複雑な事象が説明されることであろう。

第三点は、本論で提案されたアイロニーの理論を言語外のアイロニーの諸現象に適用するその可能性についてである。アイロニーの本質を表わすと思われる心理構造図の|F|の構造は、非言語学的な抽象的な構造である。それゆえ、このモデルは、すでに4.5節や4.6節でみてきたように、非言語的な事象に対してもそのまま適用できるものである。このことから判断して、心理構造図を中心とするこの理論が、言語外のアイロニーの諸現象の分析に拡大適用されうる可能性はきわめて高いと予想される。この点に関しても筆者は今後十分な考察を続けて行きたいと考えている。

第四点は、言語の使用理論の第一歩としての本論の評価についてである。第一章の1.1節で述べたように、本論は、アイロニーの表現を分析することによって、言語の使用理論の一部分を明らかにしようとする試みであった。結果としては、アイロニーの表現のもつ特異性とその認識との関係が明示的に説明され、どのようなメカニズムでアイロニーの表現が発話され、また理解されているかが明らかにされたと思う。これまで言語使用の理論は語用論という漠然とした領域にあって、一方で極めて魅力的ではあるが、他方極めて非体系的な未開発の領域であったと思われる。ヴィットゲンシュタインを引きあいに出すまでもなく、われわれの言語は一見極めて非体系的であるように見えて、実際はコミュニケーションの目的の

ために極めて精巧な規則性のもとに表現があやつられ、われわれの認識・感情がいわば立体的な形で表現に投影されているのである。重要なのは、表現があやつられているそのあやつられ方のルールを引き出そうとする努力である。これはチョムスキーらの言語生成のルールとはまったく違った次元の問題である部分が多いかもしれない。アイロニーの表現の場合、表現の本来の使用法からの逸脱という考え方が重要な意味をもった。そして逸脱の極限に至ってはじめてアイロニーの効果が生ずることが明らかになったが、しかし、これは単に表現の用い方のルールがそうであるということではなく、われわれの認識の仕方と不可分の関係があって必然的にそういうことになっている、ということが判明したのである。

現在語用論の領域で未開発のまま放置されている言語事象の中には、アイロニーの表現のようにわれわれの認識と不可分の関係にあり、かつ、人間言語に普遍的と思われるルールに支配された現象が、恐らく数多く残されていると思われる。伝統的なレトリックとして処理されてきた領域の言語事象、例えばメタファーやメトニミーなどは、人間の認識の在り方との係わりが最も密接な分野であるはずである。重要なのは、これまでの生成文法的な言語理論では、これらの領域の分析に限界があることを早く悟ることであろう。人間の認識の在り方と言語の在り方との関係をじっくり観察することから始めなければ、語用論あるいは言語使用理論の開発はまったく進まないと言えそうである。

なお、本論で提案されたアイロニーの理論と言語の生成理論との関係についてであるが、結論から言って、筆者はこのアイロニーの理論が生成の理論とどのように結びつけられるべきか、まだ考えてはいない。アイロニーの言語現象がどのようなメカニズムの中で動いているかをまず理解することが、筆者の第一の目標であった。本論の記述の中には不十分な解釈や判断が入り、正確でない点多々あろうが、この第一の目標は一応達成されたものと判断している。生成理論との関係の検討は、今後の課題である。

[注]

① Grice (1975)

② Sperber and Wilson (1981), p. 297.

A GENERAL theory of rhetoric should be concerned with basic psychological and interpretative mechanisms which remain invariant from culture to culture.

③ 正確に言うと、この書き方は正しくない。詳しくは、2.8節(3)を参照のこと。

④ (i) b, (i) e の例文は、大江三郎教授の指摘(口頭)による。

⑤ アイロニーの表現とその効果の関係を座標軸で示すという考え方が初めて具体的に検討されたのは、1981年11月、中村芳久氏との議論においてであったが、しかしその構造は現在の心理構造図からはかなり遠いものであった。筆者が関数 $Y=X$ のもつ重要な意味に気付いたのは、1982年5月、阪大の特殊講義でアイロニーを取り扱ったときである。

- ⑥ 以下本論のアイロニーの実例のうち、その出所が明記されていない日本語の実例の多くは、筆者の特殊講義に参加した九州大学、西南大学、大阪大学、島根大学、福岡大学、関西大学の学生諸君により提供されたものである。
- ⑦ コメントは大阪大学フルブライト交換教授 Carl Becker 氏による。
- ⑧ 島根大学米村薫氏の提供による。

[追記]

第三部を執筆するにあたっては、次の方々のご助言とご協力をえた。九州大学の大江三郎教授からは、筆者がアイロニーに関心をもつきっかけとなった講演「Brideshead Revised のアイロニー—文法書に出てこない文法の話—」(1977.11.20)をはじめ、さまざまな機会に、この研究を発展さす上での有益な刺激とご助言をいただいた。Harvard 大学の久野暉教授と British Columbia 大学の曾我松男教授からは、本論を発展さす上で有難いアドバイスをいただいた。MIT の J.R. Ross 教授には、ご多忙の中を意見交換の機会を作っていただき、また貴重な資料を貸していただいた。島根大学の中村芳久講師からの鋭い質問は、筆者の考えを整理する上でいつも有益であった。大阪大学フルブライト交換教授の Carl Becker 氏は、貴重なインフォーマントであると同時に、筆者のよき相談相手であった。また、白川計子、柏本吉章両助手をはじめ、大阪大学大学院生の諸君にも、インフォーマントとしてご協力いただいた。ここに記して感謝の意を表したい。これらの方々のご助言とご協力にも拘らず、本論の不十分な点の責任が筆者にあることは言うまでもない。

参 考 文 献

[欧文参考文献]

- Austin, J. L. (1962) *How To Do Things With Words*. Harvard University Press.
- Bennett, David C. (1970) "Some Observations Concerning the Locative-Directional Distinction." Unpublished ms., University of London.
- Carnap, R. (1964) *Meaning and Necessity* (Fourth Impression). Chicago: The Univ. of Chicago Press.
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. The MIT Press.
- (1966) "The Current Scene in Linguistics: Present Directions." *College English*, 27.
- (1969) "Deep Structure, Surface Structure and Semantic Interpretation." Indiana University Linguistics Club, Bloomington, Indiana.
- Cole, Peter (ed.) (1978) *Syntax and Semantics vol. 9, Pragmatics*. New York: Academic Press.
- (ed.) (1981) *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press.
- Cutler, A. (1974) "On saying what you mean without meaning what you say." *CLS* 10.
- Dong, Quang Phuc (1971) "The Applicability of Transformations to Idioms." *CLS* 7.
- Emonds, Joseph E. (1970) *Root and Structure-Preserving Transformations*. Ph. D. Dissertation, MIT.
- Fillmore, Charles J. (1963) "The Position of Embedding Transformations in a Grammar." *Word* 19.
- (1968a) "The Case for Case," in Bach and Harms, eds., *Universals in Linguistic Theory*. Holt, Rinehart & Winston.
- (1968b) "Types of Lexical Information," in F. Kiefer, ed., *Studies in Syntax and Semantics*. D. Reidel Publishing Company, Dordrecht.
- (1971) "Some Problems for Case Grammar," in *Working Papers in Linguistics*, 10, Ohio State University.
- Fraser, Bruce (1974) *The Verb-Particle Combination in English*. Tokyo: Taishukan Publishing Company.
- Givón, Talmy (1970) "Notes on the Semantic Structure of English Adjectives." *Language* Vol. 46, No. 4.
- (1975) "Negation in Language: Pragmatics, Function, Ontology." *Pragmatics Microfiche* 1: 2.
- Gordon, D., and G. Lakoff (1975) "Conversational Postulates," in Cole, P. and J. L. Morgan, eds., *Syntax and Semantics*, Vol. 3. Academic Press.
- Grice, H. Paul (1975) "Logic and Conversation," in Cole and Morgan, eds., *Syntax and Semantics*, Vol. 3. Academic Press.
- (1978) "Further Notes on Logic and Conversation," in Peter Cole (1978).
- Gruber, Jeffrey (1965) *Studies in Lexical Relations*, M. I. T. Ph. D. Dissertation. Reproduced by I. U. Linguistics Club.
- Hare, R. M. (1970) "Meaning and Speech Acts." *Philosophical Review* 79.
- Harris, Zellig S. (1957) "Co-occurrence and Transformation in Linguistic Structure." *Language* Vol. 33, No. 3.

- Horn, Laurence (1971) "Negative Transportation : Unsafe at any speed?" *CLS* 7.
- (1975) "NEG-Raising Predicates : Toward an Explanation," *CLS* 11.
- Jespersen, O. (1908) "Negation in English and Other Languages," in *Selected Writings of Otto Jespersen*. London : Allen & Unwin, Ltd.
- (1909—1949) *A Modern English Grammar on Historical Principle*. 7 vols., Heidelberg, London, Copenhagen.
- (1924) *Essentials of English Grammar*. London : Allen.
- (1963) *The Philosophy of Grammar* (Ninth Impression). London : George Allen & Unwin Ltd.
- Katz, Jerrold J. (1972) *Semantic Theory*. Harper & Row, Publishers.
- Katz, Jerrold J. & Jerry A. Fodor (1964) "The Structure of a Semantic Theory," in Katz and Fodor, eds., *The Structure of Language*. Prentice-Hall, Inc.
- Kellner, L. (1892) (宮部菊男註 1956) *Historical Outlines of English Syntax*. 研究社.
- Keynes, J. N. (1906) *Studies and Exercises in Formal Logic*. 4th ed., London.
- Kimball, John (1970) "The Semantic Content of Transformations." Unpublished Chapter from M. I. T. Ph. D. Dissertation, *Categories of Meaning*.
- Kiparsky, C. and P. (1971) "Fact." in Steinberg and Jakobovits, eds., *Semantics*. Cambridge University Press.
- Kiteley, Murray (1964) "The Grammars of 'Believe'." *The Journal of Philosophy*, Vol. 73.
- Klima, E. S. (1964) "Negation in English," in Katz and Fodor, eds., *The Structure of Language*. Prentice-Hall, Englewood Cliffs, N. J.
- Kuno, Susumu (1975) "Three Perspectives in the Functional Approach to Syntax." *Papers from the Parasession on Functionalism*, CLS.
- (1976) "Subject, Theme, and the Speaker's Empathy," in Charles N. Li, ed., *Subject and Topic*. Academic Press.
- Lakoff, George (1966) "Stative Adjectives and Verbs in English," in *Mathematical Linguistics and Automatic Translation, Report No. NSF-17*. The Computation Laboratory of Harvard University, Cambridge, Mass.
- (1969) "On Generative Semantics." Indiana University Linguistics Club, Bloomington, Indiana.
- (1970) *Irregularity in Syntax*. New York : Holt, Reinhart, and Winston, Inc.
- Lakoff, Robin (1969) "A Syntactic Argument for Negative Transportation." *CLS* 5.
- Langacker, Ronald W. (1975) "Functional Stratigraphy." *Papers from the Parasession on Functionalism*, CLS.
- Leech, Geoffrey N. (1969) *A Linguistic Guide to English Poetry*. London : Longmans, Green & Co. Ltd.
- Lees, R., and E. S. Klima (1966) *The Grammar of English Nominalization*. The Hague : Mouton & Co.
- Lindholm, J. (1969) "Negative Raising and Sentence Pronominalization." *CLS* 5.
- Longuet-Higgins, Christopher (1976) "...And Out Walked the Cat." *Pragmatics Microfiche I*: 7
- Lyons, John (1977) *Semantics*, 2 vols. London, New York, Melbourne : Cambridge Univ. Press.
- McCawley, James D. (1968) "The Role of Semantics in a Grammar," in Bach and Harms, eds., *Universals in Linguistic Theory*. Holt, Rinehart and Winston, New York.

- Morgan, Jerry L. (1975) "Some Remarks on the Nature of Sentences." *Papers from the Parasession on Functionalism*, CLS.
- Morris, C. (1938) *Foundations of the Theory of Signs*. The University of Chicago Press.
- Nickel, G. (1968) "Complex Verbal Structures in English." *IRAL* Vol. VI-1.
- Osgood, Charles E. (1952) "The Nature and Measurement of Meaning." *Psychological Bulletin*, 1952, 49.
- Osgood, C. E., Suci, G. J., and P. Tannenbaum (1957) *The Measurement of Meaning*. Urbana, Illinois: The Univ. of Illinois Press.
- Partee, Barbara Hall (1971) "On the Requirement that Transformations Preserve Meaning," in Fillmore and Langendoen, eds., *Studies in Linguistic Semantics*. Holt, Rinehart and Winston, New York.
- Pollack, Jay M. (1976) "A Re-analysis of NEG-RAISING in English." *WPIL* 21.
- Poutsma, H. (1904-1926) *A Grammar of Late Modern English*, 5 vols. Groningen.
- Quine, Willard Van Orman (1964) *From a Logical Point of View*. Cambridge: Harvard Univ. Press.
- Quirk, R., and Sidney Greenbaum (1973) *A University Grammar of English*. London: Longman.
- Reichenbach, H. (1947) *Elements of Symbolic Logic*. Macmillan, London and New York.
- Renský, Miroslav (1966) "English Verbo-Nominal Phrases." in Josef Vachek, ed., *Travaux Linguistiques de Prague* Vol. 1. University of Alabama Press.
- Ross, John Robert (1966) "Adjectives as Noun Phrase," in Reibel and Schane, eds., *Modern Studies in English*. Prentice-Hall, Englewood Cliffs, N. J.
- (1967) *Constraints on Variables in Syntax*. M. I. T. Ph. D. Dissertation. Distributed by I. U. Linguistics Club.
- Roy, Alice Myers. (1978) *Irony in Conversation*. Ph. D. Dissertation, The University of Michigan.
- Sadock, J. (1964) *Toward a Linguistic Theory of Speech Acts*. New York: Academic Press.
- Searle, J. R. (1969) *Speech Acts*. New York and London: Cambridge Univ. Press.
- (1975) "Indirect Speech Acts," in Cole and Morgan, eds., *Syntax and Semantics*, Vol. 3. Academic Press.
- (1972) "Chomsky's Revolution in Linguistics," *The New York Review of Books*, XVIII, 12 (June 29, 1972), 16-24.
- (1979) "Metaphor." in Andrew Ortony, ed., *Metaphor and Thought*. Cambridge University Press.
- Seuren, P. A. M. (1974) "Negative's Travels," in P. A. M. Seuren, ed., *Semantic Syntax*. Oxford: OUP.
- Sheintuch, Gloria (1976) "Some Pragmatic Conditions on Application of NEG-movement." *Pragmatics Microfiche* 1: 7.
- Sheintuch, G. and K. Wise (1976) "On the Pragmatic Unity of the Rules of NEG-Raising and NEG-Attraction." *CLS* 12.
- Smith, Gerald Walker (1975) *Hidden Meanings*. Millbrae: Celestial Arts.
- Smith, Steven Bradley (1975) *Meaning and Negation*. The Hague-Paris: Mouton.
- Sperber, Dan, and Deirdre Wilson. (1981) "Irony and the Use-Mention Distinction." in Peter Cole (1981).

- Stratton, Charles R. (1971) "The Pathological Case." *Working Papers in Linguistics*, 10, Ohio State University.
- Urmson, J. O. (1952) "Parenthetical Verbs." *Mind* 61.
- Wierzbicka, Anna (1982) "Why can you *HAVE A DRINK* When you can't **HAVE AN EAT*?" *Language*, Vol. 58, No. 4.
- Wittgenstein, Ludwig (1922) *Tractatus Logico-Philosophicus*. London: Routledge & Kegan Paul.
- (1953) *Philosophical Investigations*. Oxford: Basil Blackwell & Mott.

〔和文参考文献〕

- ドイッチバイン, M. (東田千秋訳) (1958) 『名詞構文と英語』 研究社。
- 服部四郎・沢田允茂・田島節夫 (編) (1968) 『哲学XI—言語』 岩波書店。
- 原口愚常 (1977) 「何を言わないかの言語学—皮肉の解体—」 『英語展望』 No. 58。
- ヘーゲル, G. W. F. (松村一人訳) (1951) 『小論理学 (上)』 岩波文庫。
- 細江逸記 (1947) 『精説英文法汎論』 泰文堂。
- 石橋幸太郎 (1966) 『英文法論』 大修館書店。
- 出隆・栗田賢三 (編) (1968) 『哲学VII—哲学の概念と方法』 岩波書店。
- 今井邦彦・中島平三 (1978) 『現代の英文法—文II』 研究社。
- 河上誓作 (1970) 「臨時的限定形容詞 'D-N-ed' の語法」 『英語青年』 第116巻 第10号
- 喜多史郎 (1954) 『シナリオと口語表現』 研究社。
- 国広哲弥 (1966) 「英語『動詞 目的語』構造の分析」 『島根大学論集 (人文科学)』 第16号。
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』 大修館書店。
- 毛利可信 (1954) 『語順』 (英文法シリーズ) 研究社。
- (1962) 『英語意味論研究』 研究社。
- (1972) 『意味論からみた英文法』 研究社。
- 村田勇三郎 (1982) 『機能英文法』 大修館書店。
- 中島文雄 (1961) 『英文法の体系』 研究社。
- 西山佑司 (1983) 「アイロニーの言語学」 『理想』 1983年2月号。
- 大江三郎 (1977) 「コンテクストと文法(5), (6)」 『英語青年』 1977年6月号及び7月号。
- (1978) 「否定のくり上げ—語用論的説明」 『英語青年』 第124巻 第7号。
- (1980) 「語用論的現象」 『言語』 Vol. 9, No. 12。
- 太田 朗 (1980) 『否定の意味』 大修館書店。
- 大塚高信 (1944) 『英文法論考—批判と実践—』 研究社。
- リチャーズ, I. A. (石橋幸太郎訳) (1961) 『新修辞学原論』 南雲堂。
- 沢田允茂 (1962) 『現代論理学入門』 岩波新書。
- 田中靖政 (1967) 『記号行動論—意味の科学—』 共立出版。
- トマス, オーエン (田中春美・高木道信訳) (1977) 『比喩の研究—言語と文学の接点—』 英潮社。
- 外山滋比古 (1968) 『修辭的殘像』 みすず書房。
- 豊田昌倫 (1974) 「名詞構文の諸相」 『英語文学世界』 第9巻 第5号。
- 植田清次 (編) (1956) 『言語・意味・価値』 早稲田大学出版。
- ヴィットゲンシュタイン, L. (藤本隆志・坂井秀寿訳) (1968) 『論理哲学論考』 法政大学出版。
- ヴァインリヒ, ハラルト (井口省吾訳注) (1973) 『うその言語学』 大修館書店。
- 安井 稔 (1978) 『言外の意味』 研究社。

あとがき

本巻に収録された「文の意味に関する基礎的研究—認識と表現の関連性をめぐって—」は、昭和54年3月大阪大学に学位申請論文として提出された「文の意味に関する基礎的研究」に加筆・修正を加えたものである。大阪大学学位規定第18条第1項によれば、博士の学位を授与された者は学位を授与された日（筆者の場合昭和54年12月20日）から1年以内にその論文を印刷公表しなければならない、とあるので、筆者の場合は、その義務履行が大幅に遅れてしまったことになる。これは偏に筆者の怠慢によるものである。提出当時から、もう少し時間をかけて修正したのち活字にしたいという甘い考えがあったために、以来出版の準備にとりかかる努力を一切怠ってしまっていた。結果的には、いたずらに歳月を重ねたものの、全体として当初考えていたような納得のいく修正は何ら加えられないまま、公表せざるをえない結果に終わってしまった。非力のそしりはまぬがれない。

本巻に収録されたもののうち学位論文のオリジナルに相当する部分は、第一部の全章と第二部の第一、二、四、五章の計9章である。このうち第二部の第一章と第五章については、部分的に加筆・修正されたものがすでに出版された。前者は、「否定表現における婉曲と強調」と題して日本英文学会誌『英文学研究』（第56巻、第2号、54年12月）に掲載され、後者は、「間接的行為指示型発言文とコンテキスト」と題して『毛利可信教授退官記念論文集』（柴原出版、55年4月）に発表された。いずれも、もともと学位論文の一部分であったため、ここに再録した。

今回の出版にあたり新たに加えられた章は、第二部の第三章と第三部の5章、計6章である。このうち第二部の第三章は、すでに九州大学文学部紀要『文学研究』第74輯（52年3月）に「否定文と Discourse Context」と題して発表されたものであるが、本巻に収録されたものの全体的統一の観点から、ぜひ掲載が必要と判断されたため、ここに再録されたものである。第三部は、5章全体で一つのまとまりをなす未発表の論文である。

なお、学位論文のオリジナルに相当する部分のうち、第一部の各章と第二部の第四章については、すでに発表された論文をもとにしたり、それらに加筆・修正が加えられたものであることを付記しておかねばならない。まず第一部の各章のもとになっている論文は、次の通りである。

第一章：

「動詞と動作目的語の関係」、『英語文学世界』第10巻、第13号、(51.2.)

“On the Relation between Single Verb and Frame Verb,” 『言語科学』(九大教養部紀要) 第9号, (48.3.)

第二章:

「特殊な“S + V + O”構文における目的語およびその修飾語の機能について」, *Osaka Literary Review* No. VI. (42.6.)

第三章:

“On the Relation between Verbs of Motion and Path Expressions,” 『英文学研究』(日本英文学会) 第51巻, 第1, 2号合併号. (49.11.)

第四章:

「英語における『形容詞+名詞』構造の分析—内包的特殊化の機能について」, *Cassiopeia* No. 2. (44.1.)

“The Role of Restricting Adjectives in Referential Relation,” 『言語科学』 No. 5. (44.3.)

「‘Red-haired’に類する複合形容詞について」, 『英語英文学論叢』(九大教養部紀要) 第24叢. (49.3.)

第五章:

「Non-restrictive adjunct における非制限性について—意味論的・語用論的立場から」, 『英語英文学論叢』第19叢. (44.3.)

また第二部第四章の第2節は、次の論文を修正・加筆したものである。

「“Locative + Verb + Subject”型文の語用論的側面」, 『文学研究』(九大文学部紀要) 第75輯. (53.3.)

なお、序論の第一節は、次の論文と一部重複することをお断りしておきたい。

Wittgenstein の『言語ゲーム理論』—Chomsky 理論との対比において」, 『村上至孝教授退官記念論文集』英宝社. (49.4.)

おわりに、大阪大学文学部紀要第二十四巻に拙論を収録することを快く承認して下さった大阪大学文学部教授会の各位に対し、厚く御礼を申し述べたい。特に、転入して間もない筆者の執筆希望の申し出を全面的に支持し、この一年間暖かい御配慮と御助言を下された成田義光、藤井治彦両教授に対し、心から感謝の言葉を申し上げたい。

また、学位論文の審査に当たって下さった毛利可信教授、山川鴻三教授、成田義光教授に対しても、御礼の言葉を申し述べたい。先生方は、筆者の拙い論文に多大の時間と労力を費して下さった。貴重な御指摘と御助言は必ず今後の研究に生かして行きたいと思っている。

なお、第三部を除く大半の研究は、筆者が九州大学に在籍した14年間にその基礎が築かれ

たものである。その間暖かい御指導をいただいた大江三郎教授にも、この場をかりて御礼を申し述べたい。筆者がアイロニーに関心を持つようになったのは、九大同窓会館での教授の講演がきっかけであった。

最後に、毛利可信教授に重ねて御礼の言葉を申し述べたい。初めて先生から英語学の手ほどきを受けたのは1963年4月であったが、以来筆者の拙い研究を先生は暖かく見守って下さった。直接御指導いただいたのはわずか5年間であったが、先生の言語観は筆者の考え方の根底に深く染み込んでいる。心をこめて感謝の意を表したい。 (1984年3月)

Some Fundamental Studies on the Semantic and Pragmatic Interpretations of English Expressions

—with Special Reference to the Relationship between Language and Cognition

Seisaku KAWAKAMI

Résumé

The purpose of the present dissertation is to investigate various linguistic phenomena concerning the semantic and pragmatic interpretations of English sentences and utterances with special reference to the relationship between the speaker's cognition and expression.

The present study consists of three parts. Part I and Part II consist of five separate studies each, but Part I is mainly concerned with the semantic interpretation of English sentences, Part II mainly with the pragmatic interpretation of English utterances. Part III is also made up of five chapters, but they constitute a general research on irony as a whole.

The linguistic phenomena taken up in this monograph cover various topics of of semantics and pragmatics, but the viewpoints which are consistent throughout this dissertation boil down to the following three points.

First, every research in this dissertation is closely connected with the semantic and pragmatic interpretations of sentences and utterances. According to Katz-Fodor (1964), the abstract form of a compositional theory of sentential meaning is a function F whose arguments are a sentence S , a grammatical description of S , GS , a semantic interpretation of S , IS (where IS is the set of possible readings of S), and an abstract characterization of a linguistic setting, C .

(1) $F(S, GS, IS, C)$

But the set of possible *utterance* readings of S in a given context are excluded from the values of the function (1). Such utterance readings as irony and indirect directive are supposed to be the values of the following function F_x whose arguments are $F(S, GS, IS, C)$ and an abstract characterization of an extra-linguistic context C_x .

(2) $F_x \{ F(S, GS, IS, C), C_x \}$

The functions of C in (1) and C_x in (2) are different in nature from each other. The former is compositional while the latter is variable according to the nature of the relationship between C_x and F . The most important thing when calculating (2) is to get a correct understanding of the relationship between C_x and F in a given utterance type. Studies in Part I are mainly connected with the function (1); those in Part II and Part III mainly with the function (2).

Second, the pragmatic viewpoint, taking Wittgenstein's theory of language game as its background, is dominant throughout the researches in this dissertation.

Ordinary language seemingly has no systematic rules at all, but it is clear that every utterance in our language is in order as it is, and we can assume that there are many sets of performance rules which are working in subconscious levels of our minds when we use language. What the present writer is interested in is bringing out those performance rules to our conscious world as concisely as possible.

Third, every research in this dissertation attaches much importance to the relationship between linguistic phenomena and the speaker's or hearer's cognitive world. By cognition is meant a wide range of cognitive content, from unconscious cognitions like knowledge systems in our brains, to conscious cognitions like particular information in a given situation. Part I is mainly concerned with unconscious cognitions like knowledge systems; Part II mainly with particular information in given situations. Part III, 'the structure of irony,' is a study of the cognitive disparity between prior beliefs and present ones concerning the understanding of given situations.

Part I, Semantic Studies, consists of the following five separate studies.

Chapter One : The Relation between Verbs and Verbal Objects

(a) John sighed.

(b) John gave a sigh.

The frame verb *gave a sigh* in (b) expresses one actional concept with two elements, that is, a verb and a verbal object. If we call the (a)-type a 'single-eyed' expression, the (b)-type can be called a 'double-eyed' expression which brings about three-dimensional stylistic effects that cannot be produced by the single-eyed expression.

The frame verb construction of the (b)-type necessarily includes all types of cognate object construction because of its possible duplication of information between verb and verbal object.

Chapter Two : The Relation between Frame Verbs and Adnominal Modifiers

The psychological structure of a single verb is set up as a model structure theoretically common to both the (a)-type construction and the (b)-type, and this psychological structure is proposed as a psychological primitive structure of the frame verb construction.

Three elements in the frame verb, that is, verbs, verbal nouns, and their adnominal modifiers, are variables whose functional roles vary with the shift of their information value. The increase of verbs' information value varies directly with the increase of adnominal modifiers' and the decrease of verbal nouns' information values.

Chapter Three : The Relation between Verbs of Motion and Path Expressions

The purpose of this chapter is to look at the grammatical behaviour of path expressions in some detail and to investigate the inherent relationships between verbs of motion and path expressions. Three of the important observations are as

follows :

- (1) There are three types of path expressions : Pn-type, Ps-type and Ps·Pn-type.
- (2) Candidates for path points are So, Pn and G. They are all spatially included in the space specified by Ps.
- (3) There is no relation of temporal priority between Ps and the path points ; it exists only among the path points.

Chapter Four : The Function of Intensional Specification in Adjective+Noun Constructions

Adjective+Noun combinations of intensional specification can be defined as S(I)-N combinations. The modificational structure of S(I)-N combinations is well explained by the internal structure of X-Y·ed+Z, where X-Y·ed is a nonce compound adjective with a nominal element Y. This chapter is an attempt to make clear the correspondence between our empirical knowledge and linguistic formulae.

Chapter Five : Non-restrictive Adjuncts—from a Semantical and Pragmatical Viewpoint

There are at least two types of non-restrictive adjuncts : one, the adjuncts which belong to the speaker's cognitive meaning category and whose non-restrictive relations with head-words are irrelevant to his emotive elements (e. g. *white* snow) ; the other, the adjuncts which belong to the speaker's representative meaning category and whose non-restrictive relations with head-words are closely related with his emotive elements (e. g. The *fair* Ophelia!). Both types, however, have in common the fundamental feature that their non-restrictivity results from the duplicate relations of intensional meanings between adjuncts and head-words.

Part II, Pragmatic Studies, consists of the following five researches :

Chapter One : Effects of Euphemism and Emphasis in Double Negative Expressions

The probable pragmatic effect of two negative elements occurring consecutively in one sentence is either an euphemism or emphasis of what the speaker really intends to say. An attempt is made with the aid of symbolic logic to explain what semantic mechanisms of negation lead to the effects of euphemism or emphasis.

Chapter Two : So-called 'NEG-Raising' Phenomena

The so-called 'NEG-Raising' phenomena can be structurally resolved into two separate linguistic facts. One is the subjective qualification of I-say-so components by NEG-Raising predicates (e. g. I assert that $\sim p \rightarrow$ I think that $\sim p$). The other is the pragmatic difference between negative assertion ($[\sim p]$) and denial ($\sim[p]$) ; the latter corresponds to the NEG-Raised structure, the former to the un-raised version.

Chapter Three : Negative Sentences and Discourse Contexts

Two concepts, 'Negation' and 'Negative sentence,' cannot be properly treated without recognizing the negated objects. Therefore, linguistic phenomena concerning negation cannot be interpreted properly when separated from their discourse contexts. Semantic analyses which do not consider discourse contexts have their

limitations when treating negative utterances.

Chapter Four : 'Locative+Verb+Subject' Constructions

Presentational sentences function most appropriately when describing unexpected appearances of objects or occurrences of events, and their descriptions usually have dramatic effects. The word order of these constructions reflects our recognition of unexpected objects coming into view.

Chapter Five : Indirect Directives and Contexts

Searle's four principles of indirect speech acts are insufficient to explain minute illocutionary forces of indirect directives whose values vary with contextual elements. Functional relations between indirect directives and their contextual variables are discussed with special reference to 'You' utterances and 'Why don't you~?' constructions.

Part III, the Structure of Irony, consists of five chapters which constitute a general study on irony as a whole.

Chapter One : Linguistic Studies on Irony

Traditional definitions of irony, Grice (1975, 1979), Searle(1979) and Sperber and Wilson (1981) are discussed. Linguistic phenomena of irony have been treated as problems of linguistic formulae. The essence of irony, however, cannot be explained sufficiently without cognitive and psychological points of view.

Chapter Two : The Structure of Irony

Irony can be defined as the contrary disparity of recognition between prior beliefs and present ones concerning the understanding of given situations. When recognitions of irony are projected on linguistic expressions, prior beliefs are realized as ironical expressions.

The structure of irony can be most effectively explained by the psychological structure given in Figure 1 (p. 219). This structure functions as a psycholinguistic model which can explain mechanisms of ironical recognitions and expressions. Points F and -F in Figure 1 stand for two centers of the structures of irony. When a recognition or utterance in a given situation can be translated into either of these structures, the recognition or utterance is ironical. Ironical expressions are not indirect speech acts, but are objective and linguistic realizations of subjective and non-linguistic prior beliefs which are contrary to present ones.

Chapter Three : Analyses of Ironical Expressions

The theory of irony proposed in Chapter Two is applied to thirteen types of ironical expressions to show its explanatory effectiveness.

Chapter Four : Analyses of Ironical Elements

Ironical elements lurking in expressions of modesty and compliments are theoretically explained by projecting them on their psychological structures.

Chapter Five is Conclusions of Part III.